
コカミ

一次関数

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「力ミ

【Zコード】

Z6275D

【作者名】

一次関数

【あらすじ】

知らないおっさんに変な液でドロドロにされる夢を見た中学生、大平アツシ。彼は一体何者だったのか。その真実が冒頭でいきなり暴露される伏線なんてあつたもんじゃないギャグコメディー。月一ペースで更新しています。

□カ三 序章（前書き）

セリフだらけのつたない文ですが、笑っていただければ幸いです。

「カミ」序章

「何いれ？ 体、ドロドロして気持ち悪い……」

あなたは神や悪魔なんかを信じるか？

僕はそういうのをまったく信じない。そんなのを認めてしまったら、運命が存在することになることになるからだ。全てが運命に動かされているのなら、僕らの努力は全て無駄になってしまう。

僕の名前は大平敦(おおひら あつし)。某有名私立中学校に通っている。普通の授業を受け、母はいながそれなりに普通の生活を送っている。ビジュアルもいたつて普通である。

ウチの親父は神社の神主をしていて、僕の学費を払うために毎日臭い汗ができるほど頑張っている。メタボリック氣味な体に、少し薄くなつた頭。ただ声は高い。神様は信じないが、親父は嫌いじゃない。

今日は僕が中学生になつてから1年。明日からは2年生になる。春休み最後の日。

その日は嫌な夢を見た。20代後半の知らないおっさんになつた。

全身ドロドロになつたといいで田覓ましに救われた。8時、明日から学校もある。あまり遅くに起きるのもどうかと思う。開かない目

を水で無理やりこじ開けた。田の前の鏡には、真っ直ぐに降りたしやれつ氣のない髪形の僕が映っていた。髪の毛が真っ直ぐすぎるのが僕の悩みの一つだ。親父が朝食を作ってくれているようだ。所々

に煙草の焼け跡がある畳に腰をおろす。今日の朝食は納豆と味噌汁だ。

納豆をかき混ぜながらふと考えた。今日もこつもと同じ普通の一日だ。親父と僕と20代後半の知らぬおつさんと3人でちやぶ台を囲む、いつもと同じ……。

「だ、誰だあんた！」

推定175センチの体、少し茶色がかり、所々はねている黒髪。ブームのジャージを装着中。まさに謎のおつさんである。そのおつさんは納豆をかき混ぜながら答えた。

「え、何？ お父さんから聞いてないの？」

親父は男と田を合わせて軽くうなずくと話し始めた。

「すまんすまん。昨日のついでに話そつと思つてたんだけどな。この人は今日からうちに居候することになつた神田林次郎丸さんだ」

「なんだそんな大事なこと言わなかつたんだよ！ それにあなたも居候する身でしょ！ なんで僕に挨拶もなしにナチュラルに納豆かき混ぜてるんですか…」

神田林という人物はまだ納豆をかきませ続けている。

「次郎丸でいいよ。これから兄弟みたいなもんなんだから」

「いひ、お前神田林さんに失礼だろ… 謝りなさい…」

「ちよ、どうちかって言つたら常識無いのやつちじやん！ なんで
いつもの方が患者みたいになつてんのさ」

次郎丸（と呼ぶことにしよう）は少し微笑んで言つた。改めて見ると、そこまでおっさん、という感じではなかつた。ブーマのジャージがそう思わせたのだろうか。決して汚らしくない。特に美形というわけではないけれど、何だか芸能人のようなオーラを感じる。

「いいですよ、お父さん。」こう激しいツッコミは一家に一人必要ですって」

親父は息を切らしていた。氣を落ち着けているようだ。

「いやあ、すいませんね、神田林さん。でもね、実は私も朝からこんなに激しいツッコミができる息子は血慢なんですよ」

まったく嬉しくないお世辞ありがどつ。なんとなく自体は呑み込めてきたがどうしても一つふに落ちない点がある。

「親父、この人って一体誰なの？」

親父は2、3秒考え込んだ。

「大きく言えば……神？」

僕の生活から普通が消え去つた瞬間だった。

「ちよ、親父何言つてるんだよ、神？」

親父は少し自慢げな顔をした。

「よし、簡単に説明するからよく聞け。お前はいつも神なんていないと言つてるだろ？ でもな、実際は結構アブノーマルに神つて存在するんだよ。うちの神社は恵比寿様を祭つてるのは知つているな？」

一度『お父さんの仕事』という題で作文を書いたときに聞いた覚えがある。

「ああ、確かにそうだつたつけ」

「ここの人は、次に恵比寿様を襲名する候補の一人なんだ。神様の一つ下の位。小神こがみなんだ。聞いたこと無いだろうけどな」

僕は次郎丸を数秒間見つめた。親父、と呼びかけて続けた。

「洗脳されてない？」

「お前はお父さんが洗脳なんてされると思つてているのか？ お父さんは意思強いぞ。心のガード堅いぞ」

次郎丸は納豆を一口食べると唇に糸が引いたままで話し始めた。

「神になるには人間界で生活をしなけりやならない。一人の人間と契約を交わして、そいつと24時間行動を共にしながらな。だから俺はついでにこの家に居候させもらうことにした」

神の存在は信じたくないが、親父が嘘をついているとも思えない。本当にこいつは神・いや、小神なのであるつか。

「まだいまいち信じられないんだけど……。神なら何か人間にできることをやってみてよ」

次郎丸はまかせろ、と言つと立ち上がつた。

「お父さん、ちょっとこっち来てください」

親父は不思議そうな顔をして次郎丸に近寄つた。

「いぐれ。今からお前の父親をロリコンにする」

「え？ おい、何いつてんだアンタ！－」

次郎丸は僕が今まで聞いたことのない様な何かをしゃべりだした。

「おい、待て！ もし僕が知らないだけで元からロリコンだつたらどうするんだ！ 証明にならないって！」

親父は今までに見たこともないような笑顔を見せた。

「安心しろ、私は母さん一筋だ」

「なんでそんなに余裕なんだよー。今からロリコンにされるんだぞ！ わかつてんのか！」

親父の体がセロファンをかぶせた電球をつけたときのような淡い光を放つた。

……親父はどうなつたのであらつか？

「アツシ……」

親父は流れる小川のよつた声で言った。

「今度うちの巫女のバイトに小学生を集めよつと思つてゐるんだが……」

「親父いいいい……！」

親父は確かにロリコンになつてしまつたようだ。僕は次郎丸に言った。

「わかつた、信用する。親父を元にもどしてくれ」

「いや、小学生の巫女つてちよつと氣になるからしばりへいのままでしないか？」

「いやあんたもロリコンかよー。」

次郎丸を説得する」と20分。彼はよつやく親父を元にもどした。

「ふう。父さんあやつて母さんを裏切るとこだつたよ

母さんが死んでから3年。なおも彼女を愛し続ける父親というのは美しいものだ。

さて、次郎丸は本当に小神のよつたがなぜうちに居候することにしたのだろうか？彼は契約した人間と24時間行動を共にしなければならないようだが。

僕は次郎丸を見つめて言った。

「せういえば、一体誰と契約するんですか？」

「え？ もうしてるけど」

予想外の答えた。もう契約を済ましてはいるのなら、それはこの家の
人間ということになる。

……妙な記憶が蘇る。

「次郎丸さん、契約つてどうやるんですか？」

「結構大変でな、神が自分の力で作り出したローションでその相手
をドロドロにするんだ」

僕の今日見た夢は……。次郎丸は笑顔で言った。

「これからよろしくな、アッシ」

契約されていたのは僕だったのか！

「ちょ、なんてことしてるんですか！ 何であんたは初対面で話を
したこともない中学生をローションでドロドロにしてるんですか！」

次郎丸は大丈夫だと言った。

「24時間行動をともにするといつてもお前も中学生だし色々とほ
ら、あるだろ？ 寝ると起きは違つ部屋で寝るからで」

「違う… そんな所を心配してんじやない！ 24時間行動を共
にするってところです！ 明日から学校始まるんですよ！ どうする

んですか！」

次郎丸はまた大丈夫だと言つた。

「その辺はほら、俺小神だからなんとなるつて」

どこからそんな自信がわいてくるのかはわからないが親父をロリコンにした男だ。学校もある謎の言語でどうにかするのかもしない。とにかく今日一日をどうにかしよう。これからこの男と一緒に生活しなければいけないようだし。

次郎丸は朝食を食べ終わるとまっすぐトイレに向かつた。

「親父、なんであの人は親父と契約しなかつたんだ？」

「いや、何言つてるんだお前。お父さんが24時間も神田林さんと一緒にいてみる。お父さんは未亡人なわけだし、ついに男に手を出したと思われるじゃないか。だから断つたんだ」

なぜ親父には拒否権があつて僕にはないのかは謎だが、契約されてしまつてからウダウダ言つても仕方がない。僕は残つた味噌汁を飲み干すと自分の部屋に向かつた。

僕の部屋は2階にある。うちの階段はかなり急で今までに僕は3回落ちたことがある。今ではバルトーク、弦楽四重奏のテンポぐらいで上ることができる。（今日テレビでやつていたのをちょっと使ってみたかっただけだ）

僕は携帯を取り出し、電話帳から一人の男を素早く探し出した。^瀬_せ田守は僕の一番の友達だ。^{たまむら}

僕はメールが嫌いでつねに用は電話で済ませる。着信音が8回鳴つた。

「もしもしー、アツシ？ 何だよ、こんな朝早く！」

彼は今まで寝ていたようだ。声がかすれている。

「マモル、今日遊ぼうって言つてたのキヤンセルさせてくれる？」

「じつしたんだよ、お前がドタキャンなんて珍しいな

「ちょっと家に大事なお客さんが来てるんだ」

小神に契約させられて今後のことを考えたいからなんて口が裂けても言えない。

「まあいいけど。じゃあ今日ほかの子と遊ぶよ」

「いみんな、マモル」

電源ボタンを押し、電話を切つた。さて、これからどうしたらいいのか。とりあえずだらしない格好のままなので着替えることにした。パジャマ代わりにしているスウェットを脱ぎ、ジーパンにTシャツ、まだ肌寒いのでそこに白いパークを重ねた。するとノックもなしにドアが開いた。

「アツシ、俺下着忘れたんだけど貸してくれない？」

「ちよっと、ノックぐらいして下をこよ

次郎丸は首をかしげた。

「なんだよ、男同士なんだから見られて困る」ともねえだろ。つい
うか下着貸してくんない?」

「……いやです」

「なんだ、お前も大人ぶつてる割にはまだまだ思春期真っ最中だな」

今田念つたばかりの男にそんなこと言われたくもない。

「次郎丸さん、これからどうするんですか?」

「え? 何が」

僕は手まねきのジースチャーをして次郎丸を床に座らせた。

「明日の学校もそつだし、ウチで生活することもです」

次郎丸は首を縦に二回ふった。

「いやいや、それもそつなんだけど、パンツ貸してくんない?」

「あんた今パンツしか頭にないのか」

「いやいや大丈夫。昼飯のことも考えてる」

「何が大丈夫なんだよー。ていつか今さつき朝食食べたばっかじやん! 気早いよ!」

まったくこの人は。今は何を言つても無駄なよつだ。僕はタンスから少し大きめのパンツを取り出した。

「LJの前サイズ間違えて買ったやつありますから、それはいて下さい。もう話はいいです」

次郎丸はパンツを受け取ると、口元をわずかににゅるめた。

「おお、悪いな。まあ今日は心配するな。お前が外に出ない限りは俺は外に出ないし。」

なるほど、それなら安心だ。今日は親戚が来たとでも思つて気楽に過ごう。本当に大変なのは明日の始業式からなのだから。

その日は天気用図記号では と表わされるような快晴であった。今年度から新一年生になるわけだがどうも僕には先輩意識が持ちきれないらしい。普段学校に行くときよりも10分遅く起きた。すぐに学ランに着替え食パンを牛乳で流し込む。軽いカバンを持ち靴紐を結んだ。

「じゃあ昼には帰つてくれるから」

親父は神社のはき掃除をしていた。

「忘れ物無いか?」

「大丈夫だよ」

僕はなぜかダークグレーの背広を着ている次郎丸と家を出る。56段ある石階段を降りながら僕と契約した小神は言つた。

「まあ今日は学校初日なわけだし、キッチンと正装しないとな」

確かにあまり汚い格好で校門と一緒にぐるぐるしてほしくない。

「でもホントに今日はどうするんですか？ 正装してくれるのほりがたいですけど」

「まあ楽しみにしてけ、驚かないよう気をつけろよ」

何か驚くようなことをしようとしているのかこの男は。昨日から思つていたがここにはまったく腹が読めない。今何を考えているのだろうか。

校門前には生徒たちがパラパラと集まり始めている。入学式は明日なのでいつもより生徒が少ない。

「じゃあ俺ちょっと別行動とるから」

「え？ 僕と24時間一緒にいるんじゃないんですか？」

「半径200メートル以内なら平気なんだよ。多分な

「いやいや、憶測じゃないですか。それでなんかあつたらどうあるんですか」

次郎丸は僕の言葉を無視してビルへ行ってしまった。一体何をしようといつのだ。

次郎丸と別れるとマモルが僕の方へと走ってきた。

「おはよー、アツシ。さつきの人誰？」

「え？ いや、別になんでもないよ」

我知らずを通してしまつた。勢いあまつて彼が小神であると言つてしまいそうだつたからだ。

「あ～そり～ならいいんだけど。ていつか今年も同じクラスなの知つてる?」

「何言つてんだよ、この学校3年間クラス変わらないんだぞ?」

「え、マジで! 全然知らなかつたよ」

相変わらずの天然だ。この男が将来プロ野球選手になるとはこのときは思いもしなかつた。それはもっと未来の話。

体育館には生徒が並んでいた。これから始業式だ。僕ら2年4組は右から4列目。

その列の後ろから数えて7番目に僕がいる。マイクテストが体育館中に響き渡る。

「あ～、ただいまマイクテスト中。テスト中。お前ら、静かにしろ」

」

少し眠そうな先生の言葉。壇上にマイクを持った校長が上がつた。誰も真剣に聞かないことは分かつているのに長く話す校長も大変だ。いや、真剣に聞いていないことすらわかっていないのか?どちらにせよ生徒たちは疲れる。

「え～これから、新任の先生の紹介をしたいと思います」

今年は5人の新教師がやってくるそうだ。となりの女子の会話から

抜粋。

「えへ、一人目は……」

その時体育館のスピーカから謎の声が響きだした。その謎の声に周りの生徒はもちろん先生たちも何が起こっているのかわからないようだった。ただひとり僕を残して。

「これ……次郎丸の変な呪文……」

謎の言葉が聞こえなくなると、館内の空氣に不思議な一体感が生まれた。奴は何をしたのだろう。

「えへ 一人目は、神田林次郎丸先生です」

「な、何!? 次郎丸だと! まさか、さつきの言葉はこのために……！」

「えへ さきほどじ紹介いただきました、神田林 次郎丸です。これから2年生の保健体育を教えていくことになります。よろしくお願ひします」

そしてなぜよりによつて保健体育なんだ!! 趣味か! 趣味なんか!?

次郎丸の衝撃的すぎる登場に僕は残りの先生の紹介をまったく聞いていなかつた。

彼は確かに僕を驚かせた。有言実行。

これからどうするのかと思つたら教師になるとは。やはりあいつの腹は読めない。というか、読めてたまるか。

始業式が終わるとすぐ教室へ戻った。教室はワッククスがかけられていて不自然に光り輝いている。僕の席は廊下側の前から三番目だった。僕の席から一列飛ばしたその先にいるのは大野由利おおのゆりである。白い肌と長い黒髪の対比が妙に美しく見えた。後ろの席からマモルが蚊にでも話しかけるような小さな声で言つた。

「アツシ残念だつたな。コリちゃんと隣になれなくて」

「うるせー」

その時、教室の引き戸が音を立て開いた。担任の最中先生もなかだ。

「はい、みんな久しぶりだな。今年度からはな、前の副担任の大前田山先生が異動になつたから、みんな始業式で見たと思うが神田林先生がこのクラスの副担任になる」

そうなのだ。あのあとまた謎の言葉を次郎丸が放ち、なぜかつちのクラスの副担任となつたのだ。

「じゃ、神田林先生、お願ひします」

次郎丸は教室へはいつてくるとチョークを取り黒板にお世辞にもきれいとはいえない字で神田林 次郎丸と書いた。

「えーはじめまして。神田林次郎丸です。握力66キロあります。保健体育を教えていきますが、体育の方よりは保健の方をバッカラップしたいと考えていますのでよろしく」

よくわからない自己紹介をしたあと、お調子者の木田が手を上げた。

「神田林先生」。なんで名前のところに　が描いてあるんですか？」

「俺は保健だけでなく、つのだ　ひろもバックアップしてるからだ」

「こいつは本当に大丈夫なんだろうか。早くも「あいつ馬鹿じゃね？」
といふ空気が流れている。

「家はそこの大平君のところに居候させてもらってます。なんか先生
に用がある人は大平君とこに来い」

クラスの人間から一瞬すごい量の視線が飛んできた。勘弁してくれ。
マモルが言った。

「あの人朝お前といった人じゃねえの？」

一緒に住んでいるとまで言われて嘘はつけない。

「ああ。そう。あの人昨日からつちに居候してるんだ」

「なんだよ、それ。なんか漫画みたいだな」

「相手はネコ型ロボットでもかわいい女の子でもないけどな」

その時、自分の話をしようと最中先生は次郎丸を軽く押しのけて教卓の前を奪った。次郎丸は一瞬不服そうな顔をし、なぜか体制を低くした。そのまま最中先生の腹部に鋭い蹴り！最中先生は格好悪い声を出し、窓側の壁に張り付いた。

「ちょ、何やつてんですか次郎丸さん！　先生泡ふいてるじゃない

ですかー。」

「いや、だつて話してゐるのに急に押されたからムカつこむかつて」「だから後ひ回し蹴りはないでしょー。」

「……あ～わかつたよー。」

次郎丸はまづやつした顔で言つと、例の謎の言葉を発した。何回も聞いているがいまだにまづく聞き取れない。最中先生の腕がぴくりと動く。

「あれ？ 私は何を……？」

「最中先生低血圧じゃないですかー？ 急にバタンですもん」

「あ～そつなのか。おかしいなあ、この前医者に高血圧だつて怒られたんだけどなあ」

いいのか、それで？ 次郎丸。本当に小神といつのは何でもありで、このあとも三回ほど謎の言葉が放たれた。そのたびに教室の空気はこうこうと変わる。なかなか厄介な男だが、僕は最強の味方を手に入れたといつてもいいかもしねない。

たくさんのプリントが配られた。内容は全て親向けで僕らが読むようなものではない。これから予算の使い方など、知ったことではない。時間は午前11時20分。もうそろそろ終業のベルが鳴るころだ。そう考えていると、ちょうど聞きなれた電子音が響いた。

「よし、じゃあみんなまた明日から頑張りつな。委員長」

「スタンダップブリーズ。礼」

さよなら、とは到底聞こえない次郎丸の謎の言葉のようないいさつがされた。

僕は気合を入れた。そして一人の少女に歩み寄った。

「ユ、ユウちゃん」

「あ、アツシ君、久しぶりだね」

はあはあはあ、まずい、息が荒くなつてきている。息臭いとか思われたら終わりだ。

「う、うん。あのさ、今日一緒に帰ら……」

その時であった。

「おい、アツシ、帰るぞ！　早くしないといとも始まるぞ！」

次郎丸！？　なぜこんな時！？

「アツシ君いいの？　呼んでるけど」

「え？　いやいいんだよ、あいつは。それより」

「アツシ、聞いてんのかお前！　早くしないとばらすぞ、あれのこと！？」

あれのこと？　一体何を言つてるんだ？　何を知つてこなうる

だ、あいつは！

「アツシの机の右下の引き出しに入ってるノートにはーーー！」

「次郎丸さん――！　帰ろうか――！」

僕は仕方なくヨリちゃんに手を振った。なぜあいつがあれの事を知つてるんだ。周りからあれつてなんだろうといつ空気が漂つているのを感じる。まったくこいつは。

「次郎丸さん、なんで知ってるんですか？」あれのこと

「なんであつて、一昨日の晩ローチ三 ハドーロードからゐてお
あつてたら見つけたんだよ」

「あんたは僕をローションまみれにするだけではなくそんなこともしてたんですかー！」

なんて大人だ。僕はあまりにむなしい気分になり早足で家に帰った。途中何人かにバイバイと言われた気がしたが、あまり覚えていない。いつもの石階段をのぼり、家の引き戸を引いた。靴を乱暴に脱ぎ捨て、リビングに行くと親父がビリー・ズブートキャンプ応用プログラムをしていた。

「親父昼間から何やつてんだよ」

「ちょっと黙つてろ！ カウント聞こえないだろーー。」

「お父さん元気だな、ピコーズブートキャンプなんてあの感じやあなかなか出来ねえよ」「

親父は息を切らしながら言った。

「ていうかこれビリー休みすぎじゃないか？……ほら！　まだぞ！　絶対お父さんの方が頑張ってるね！」

「何言つてんだよ親父、ビリーも頑張ってんだよ」

次郎丸はいつの間にかジャージを着ている。

「ちよ、いつ着替えたんですか」

次郎丸は僕の言葉を無視して親父と一緒にブートキャンプに入隊した。

「お父さん、これ結構きついな！」

「次郎丸さん、いいともはいいんですか？　僕はそのために秘密をばらされそうなつたつて言うのに」

次郎丸は畠を見開いた。思い出したようだ。

「お父さん！　そんなんやつてる場合じゃねえよ！　いいとも！　いいとも始まるつて！」

「えつ、だつてもうすぐ終わる……ああ！　なんで電源切るのー！」

次郎丸はお昼休みにウキウキでワッティング始めた。こいつは居候ではあるがうちは神社で神様は大事にするわけで。お互い均衡と抑制をはかっている。いや、どちらかと言えばこちらが負けているか。

次郎丸はジャージ姿のままでいいともを見ている。親父はその辺で自分の想像力をフルに生かしたバーチャルブートキャンプの真っ最中である。僕は昼食までの間少し勉強することにした。休み明けテストがあるからだ。僕はいつも急な階段を上った。部屋の中は少しちらかっていた。僕は椅子に座り机の上のものを簡単に片づけ、社会のワークを開いた。社会は得意科目ではあるが、そのためにつも後に回しがちである。ワークを3ページほど進むと親父が部屋をノックしてきた。

「アツシー、入って大丈夫か？」

「うん、別にいいけど」

「本当か？ 気とか使わなくていいんだぞ。本当はお父さん臭いから入つてくんなどか思つてるんじゃないのか？ いや、それならそれでいいんだ。お父さんも嫌がるお前に無理やりビリビリしようといつ気はないから」

「親父、それ加害妄想だよ。自分の想像だけで話進めるのやめてよ」

「そうだよな、やっぱりお父さんそういうところが駄目なんだよな。こんななんじゃお前の父だと胸を張つて言えないな。すまんなあ～こんなダメ親父で」

「もついいから部屋はいるのなら入つてよ。なんか僕が悪いことしてる気分だよ」

ドアがゆっくりと開き、なぜかカメラを持っている親父は言った。

「アツシー、この辺の小学校で女子児童が多いのはどこかなあ？」

「次郎丸さん！！ あんたまた親父をロリコンにしたのか！！！」

次郎丸の笑いを含んだ声がリビングから聞こえてきた。

「今度はとにかく自分を嫌いなロリコンにしてみたんだー。どうだ？」

「どうでもいいもねえよー なんか前より犯罪者に近くなつたんだけ
ビーー！」

「……成功だな」

「何がどう成功なんだよー 大失敗だよー セリセと元に戻せよー！」

次郎丸は笑いを含んだ声から怒り声になつた。

「じゃあ何だよー お前は何コソだつたら許してくれるんだよー！」

「なんで逆ギレ！？ しかも選択肢にコンプレックス抱えてないの
ないのかよー！」

「わかつたよ！ 連れてこい！ 元に戻すからーー！」

僕は親父の手を引いた。僕は素早く階段を降りる。

「ちょ、アツシ、怖い！ この階段急なんだからー お父さん慣れ
てないんだからー！」

僕は何度か親父が足を踏み外しているのを無視してそのまま歩き出す。つた。

「次郎丸さん！ なんで親父をこんな風にしちゃうんですか！」

階段を引きずられアザだらけの親父を差し出した。

「いや、お前もなんでこんな風にしてるんだよ。結構お前もめちゃくちゃだよ？」

次郎丸はいつもの謎の言葉を発した。なんとなく音が聞き取れるようになってきた。ベーコンといつも言葉を連続して言っている感じだ。親父はやわらかな光を放った。

「親父、大丈夫か？」

「ちゅ……やつきから聞いてたら。一番の被害者はこっちだということを忘れてないか？」

僕はタンスのある救急箱を背伸びしてとつた。中から湿布を取り出しました。救急箱をタンスの上に戻す。

「親父、湿布貼るかうつ伏せになつて」

素直にうつ伏せになつた親父の服をずらし、湿布を3枚貼つた。親父はゆっくり立ち上がり台所へ向かった。

「今から昼飯作るから、もうあんまりつべしないでくれよ。神田林さんも」

つるやくなるのは次郎丸のせいなんだが、そこは何も言わず昼食を待つことにした。そういえばさつきからお腹が鳴っている。今日の昼食は一体何だらうか？

気がつけばもう一時を回っている。さて、今日の昼食は……。
なんだこれは？言葉では非常に表わしづらいのだが、黒いスープの
ようなものに、肉……のような物が入っている。匂いは非常に悪い。
親父は何を作ったのか。

「親父……何これ？」

親父は白慢げに鼻を鳴らした。

「まあ食つてみる。絶対おいしいから」

そこまで言つたのならきっとおいしいのである。見た目はかなり悪
いが。僕ははしで軽くその黒い何かに触れた。ぶよぶよしている。
おそらく肉だ。器を両手で支え、スープをゆっくりと口へ運んだ。
……まずくはない。想像していた味よりは随分ましだ。

「親父、これ何なの？」

親父は少し間を置いてを涼しい声で言った。

「デイヌグアンだ」

「デイヌ……44歳にもなつて何をわけのわからなうことと言つて
いるのだ。ウチの親父は。

「知らないか？知らないだらう

親父はさつきよりも更に間を置いた。

「これはな、豚の……」

次郎丸が割つて入つた。

「豚の臓物を豚の血で煮込んだやつだよな？」

「おお、よく知つてますね！」

次郎丸は少し微笑んだ。ほめられたのがうれしいんだ。わかりやすい男。

「ま、一応神候補の一人だからな」

この会話で料理の正体が判明した。ディヌグアン。普段食事を残すことはないが、今日は特別だ。こんなどこかの儀式でしか食べないような昼食があつてたまるか。ここは日本だ。

昼食を食べながら（白ご飯のみ）考えていた。一昨日からこの家にやつてきた20代後半の男は一体何をするためにここに来たのだろうか。神になるためとは言っていたが具体的に何をするのかは全く知らされていない。どこぞやの政治家じやないんだから、きちんとマニフェストを立ててもらわないと。

次郎丸が何をするのか、それを知ったのはもつ少し後の話だ。

第1章 球技大会だ

次郎丸がうちに住み着いてから、早くも2週間が過ぎようとしている。最初の頃は何かとドタバタしていたが、最近は次郎丸も落ち着きを見せてている。あの謎の言葉もここ数日聞いていない。（僕は謎の言葉を勝手にベーコンの歌と呼んでいる）

今日も僕は次期神候補の男と家を出た。

「ん？ アツシ何で体操服なんだよ」

次郎丸は最近学校にも慣れ、今ではジャージで出勤している。ママの赤いラインが入ったやつだ。

「次郎丸さん、あんた保健体育の教師なんだから覚えといて下さい。今日は球技大会の日じゃないですか」

そうなのだ。今日は年2回の学年行事、球技大会があるので。

「あ～なんか他の先生も言ってたな。また、めんどくさい季節になつたつて」

「ちょっと、教師の裏側をそんな赤裸々に語らないでくださいよ」

次郎丸はこぶしをポキポキと鳴らした。まるでジャイアンだ。

「はっは。腕が鳴るな、おい。モンスターボール大会だっけか？」

「何ですかそれ、みんなでゲームボーイ持ち寄って通信対戦するんじゃないですから。ドッヂボールですよ」

「じゃあま、同じクラスなんだし頑張ろっぜ」、「ゴールデンボール大

会」

「あんた思春期がみんな下ネタ好きだと思つてませんか？」

校門の前にマモルが立っていた。僕を待っていたのだ。マモルは運動神経がいいので、こういう行事では特にテンションが上がる。あいつは昔からそうである。僕を見つけるなり100mを12秒台で走る俊足でこちらへやってきた。

「おはよー、アッシ！ おはよーいじやこます、神田林先生！」

朝っぱらからよく走る元気があるものだ。僕は朝っぱらからよくつこむ元気があるけれど。僕は言った。

「おはよー、マモル。えらく氣合に入ってるな

マモルは全力で走ってきたが息一つ切らしていない。

「ああ。去年は、1組の尺沢にバレーでやられたからな。今日リベンジだ」

「尺沢……。確か中学2年生にして身長190cmの大男だ。次郎丸が腕を組んだまま言った。

「あの俺だけでかい冷蔵庫みたいな奴か。あいつ保健の授業だけ無駄にテンション高いから嫌いなんだよな」

人を嫌いになる理由がこのように簡単にいいのだろうか？ 哀れな

尺沢。

「だつたら頑張つて1組に勝ちましちよ、次郎丸さん」

なんといつても今日は2年生最初のイベントである。ビリセなら勝ちたいものだ。

午前9時、体育委員長による開会式である。体育委員長は列の中から体を小さくして出でてきた。壇上にゆつたり上がる体育委員長は、僕が人生の内で見たこともないような垂れ目であった。

「え、今年から僕たちも2年生です。ドッヂボールなんてやつてられないよと思つている人たちもいるでしょう。ですが、学校側も僕たち生徒の楽しみとしてこんなやつてもやらなくてもいいような行事をして下さっています。本当言つと僕はこんなことやるくらいなら勉強した方がいいと思つてるんですが、まあ先生たちがやるというので、こんなことに反発して内申下げられても困るので、しかたなくこいつしています。では皆さん、今日は有意義な大会にしましよう。」

周りのテンションをとことん奪い去つたこの体育委員長はこのあと体育倉庫で次郎丸にマスクミが喜びそうな制裁をくわえられるわけだが、僕には関係のないことだ。今日はきつちり楽しもうと思つ。

僕たちのクラスは1試合目である。2年生全7クラスでトーナメント方式だ。男女別トーナメントなのでユリちゃんの姿を見ることはできない。ちつ。1組は去年の2回の球技大会で共に優勝しているため、シード権が与えられている。尺沢とは決勝で相対するになる。まるで少年漫画のような展開だ。その主人公はマモルといつたところか。

マモルは少し声を張つて言った。

「よし、今日は勝とう、みんな！」

うん。青春である。みんなこいつのを待ち望んでいるのだ。

「よし、お前ら。今日は担任と副担任も一緒に参加するんだ。相手がおっさんだらうとおばはんだらうとガンガン当てに行けよ。正直うちの担任は役に立たねえ。その分俺が2倍あてるから。自分がヒーローにならうとか思ってんじゃねえぞ。ボールとつたら俺がマモルに渡せ」

次郎丸のこの言葉にクラスの人間は一瞬初めて死神を見た夜神総一郎のような顔をした。普通の副担任ならこんなことは言わない。だが、みんな何故かそれなりに納得しているのはこの男の言葉に何らかの特別な力を感じるからだらう。（実際マモルか次郎丸が投げた方が確実だ）

初戦の相手は7組である。メンツを見る限り特別強そなのはいい。なんとかなりそうだ。

4組ＶＳ7組

開会式から15分後。ゲーム開始の笛が鳴った。ジャンプボールにより、最初は7組のボールからスタートだ。最初ボールは紙飛行機のようにゆるやかに宙を何度も通り過ぎた。外野と内野がパスを繰り返す。

「おひー！ 勝負しき7組！ ビビッてんのか！」

次郎丸の汚いヤジが飛んだその時であった。外野からまつすぐ次郎

丸めがけてボールが投げられた。鋭いキレのある球だ。

「あ、次郎丸さん！」

思わず声が出ていた。次郎丸は少し右側にステップを踏みボールの正面に立つと胸のあたりでしつかりとボールをキャッチした。

「はつはつは！ 中学生がなめてんじゃねえぞ！」

「」の人に心配は無用のようだ。

「覚悟しろよ、『』のゆとり世代！」

次郎丸は今度は前にステップを踏んだ。鞭のようにしなる右腕。踏み込む左足。本気の顔。小神という名の発射台から一発の弾丸が放たれた。いや、弾丸なんて言葉は似合わない。あれは波動砲だ。

「ぐはっ！…！」

鈍い音とともに一人の男子生徒が倒れこんだ。

「よつしゃーー！」

次郎丸のテンションとはまつたく逆の静かで不気味な空気が流れた。7組の担任、乙女埼先生（おとめさき）がおびえている。そりやそうである。球技大会が始まつて最初にやられた人間が腹部をおさえ、白目をむいているのだから。

「次郎丸さん……」

僕は言った。次郎丸は少年のよつなつぶらな瞳で返す。

「ん、何?」

「ベーハンの歌をお願いします。記憶の改ざんとあの子の治療です」

次郎丸は首をかしげた。

「馬鹿野郎、お前小神をなんだと思つてんだよ。そんなこと出来るわけねえだろーーー！」

「ええええええ」

何だこいつ、ホント役に立たないな。

「今まで散々やつてきたじゃないですか！」

「あれとこれとはまたケースが違う」

「今回はどういうケースなんですか？」

次郎丸はしばらく沈黙したあとこうつ言った。

「今回はこの後のドッヂボールに体力を温存するケースぎゅうじゅう

「...」

『氣づくと僕は彼に渾身の右ストレートを放っていた』

「わかつてやせこ」

「いや、あの～そつすよね！　体力とか言つてらんないっすよね！」

次郎丸はベースの歌を始めた。今日はいつもより少し長い。7組の少年Aは何事のなかつたように立ち上がり、彼が静かに外野に出ると周りの不気味な空気が先ほどの明るい空気に変わった。僕は次郎丸に耳打ちで力を抑えるように伝えた。そしてもうひとつ、マモルを主体に攻撃を組み立てる事だ。それなら全て安心である。

しかし、それでも我が4組は強かつた。圧倒的である。7組を3分で全滅させてしまった。次の対戦相手は何組になるだろうか？

校内学年別球技大会もいよいよ中盤である。我らが4組は後々大物になつていくマモルと、内臓をぶちまけるような強烈波動砲の次郎丸の活躍により1回戦を軽々突破したわけである。
そして、この物語の語り手である僕、大平アツシは狙われもせず、ボールに触りもせず、体育館内に漂う空気のようだ。エアーマンと呼んでくれ。2回戦位はもう少し活躍したいものである。

さて、気になる他のクラスの結果であるが、なぜかライバルとこちらが勝手に認識している1組はシードなので関係ない。その1組と当たるのは5組との激戦を勝ち抜いた3組である。そして、このクラスが僕たちと対戦することになる2組だ。テンションだけ高い6組を倒し勝ちあがってきたのだ。

次郎丸とマモルはすでに1組しか眼中にないようだ。さつきも一人で1組の偵察を行つていた。1組は試合もしないのに何の偵察に行つたのかと聞いたら、

「考えてみるよ、もしもお前がパーティシェーだとするだろ？ 近くにライバルパーティシェーが店を開くことになつたら、つい見ちまうだろ、その建設予定地。それと一緒にだ」

よくわからない例えで丸めこまれてしまった。不覚。

10分間の休憩の後、ついに2回戦が始まった。僕らは2試合目なのでまずは1組の試合を観察である。僕たちは体育館のステージの端に座った。

「次郎丸さん、いよいよ1組の試合ですね」

次郎丸は思ったほどテンションが上がっていないうつだ。ジャージのファスナーを全開にして歯磨きをしている。

「ちよ、どこで歯磨いてるんですか！ …… ああほり歯磨き粉が落ちますって……汚な！」

「お前なあ、誰だつて唾液は出てるんだよ。人のもんだけ汚いみたいに言ってんじゃねえぞ。じゃあなにか？ お前の唾液は聖水だと、そう言いたいのか？」

「いや、聖水だともっと汚いもの想像しますから」

僕たちがいつもの調子で話をしている間に1組の試合が始まつた。1組は強かつた。小回りの利く、ねずほい鼠矛。下手投げのトリックープレイヤー、鳥栗。とりくりそしてなにより尺沢の長身から放たれるボールは9分9厘相手を倒す。

試合は先ほどの僕たちと同じように3分ほどで終了した。試合後の

尺沢に次郎丸は歩み寄る。尺沢が首をかしきるジェスチャーをする
次郎丸に気付き、言った。

「え？ なんすか、神田林先生」

「おい、 ようやく！」まで来たみたいだな

「え、と……はい？」

正しい反応である。

「1組とかホント1分、いや2分……5分で片づけてやるよーーー。」

最終的には最初の提案の5倍の時間になってしまったわけのわからない次郎丸の言葉に尺沢はこう返した。

「あ！ えつと……ふ、まずはあなた達が決勝にこれるか、 ですかね」

なんてノリがいいんだ、 尺沢。ここで変な反応をしていたら次郎丸にパソコンにでもされていたんではないだろうか。
次郎丸が口から大量の歯磨き粉を飛ばしながら言った。

「マモル！」

「何ですか？ 神田林先生！」

「あいつらチヨケンチヨケンにしてやるわゼー。」

「次郎丸さん、 ケチヨンケチヨンです。ていうかその擬音 자체ドラ

えもんの中でしか聞いたこと無いこんですナビ

マモルが言った。

「はい、先生！ ロンロンランしてやつまじょー！」

「マモル！ なんだよ、何をどう間違えたらロンロンランとこ
う擬態語が生まれるんだよ！ ていうかもうパンダだよそれ！ そ
して、わざから何で何気に仲いいんだよあんたら！」

それで、いよいよ1組と対戦するような雰囲気が今から僕たちは2
回戦を控えている。まずは2組を倒さないといけない。

2組は1組ほどではないもののなかなかの人材がそろっている。
僕達が準備運動代わりにバスケットボールで遊んでいると、2組の
委員長がやってきた。

「ちょっと4組さあ、俺たけと試合もしてないのに1組で勝つ宣言
とかウザいんですけどー！」

マモルが3ポイントラインからショートを決めて言った。

「「めんな。でも目標は高い方がいいだろ？」

2回戦の始まりだ。

4組ＶＳ2組

ボールはこちら側からだ。まずはマモルの速球に驚いてもらおう。
試合開始の笛が鳴った。マモルは2、3歩走り込みスナップを利か

せたいい球を投げた。僕たちは相手クラスの文科系だけを先に倒す作戦を企てていた。そのボールは狙いどおり美術部の男子にあたつた。マモルは大きくガツッポーズをして次の相手のボールに備えた。次郎丸が叫んだ。

「馬鹿、マモル！ 投げるときはテンポが大事だつて言つてんだろうが！ アーン、ジヨーン、ファンだ。アーン、ジヨーン、ファンのテンポだ！」

「はい、先生！」

「ちょっと、それ！ 普通チャ・シユーメンとかでしょ！ 何で韓国のおースなんですか！」

僕たちの会話を切り裂くように相手のボールが投げられた。僕のところだ！ スピードはマモル程ではない。だがそれでも僕を倒すには十分なスピードだ。僕は足を踏ん張り、両手を前に出した。1回戦での空気感をなくすためだ。

「ぶはっ！－」

顔面直撃。新しい四字熟語にどうでしょか？ 所々から顔面セーフの声が上がっている。

「馬鹿野郎！ 顔面セーフなんてあるか！ 戰場じゃあな、顔面やられるつことは死ぬつことなんだよ！ んな甘い」と言つてられるか！

次郎丸である。確かに顔面だから大丈夫というルールは僕も前々からおかしいと思っていたが、この男は中学校で何を教えようとして

いるのだ。戦場の心構えを伝えてビリジョウといつのだ。

「アツシ！ お前は外野から奴らを攻め立ててやれ！ 今お前に出来ることをするんだ！」

僕に出来ること……。次郎丸とマモルにボールを回すことぐらいだ。役立たず。僕は痛みが残る顔をさすりながら外野に出た。外野に出ると急にさっきまでの熱くなっていたものが落ち着いてくる。こうして自分のクラスを客観視していると次郎丸の元気の良さに気付く。

「馬鹿野郎！ だからチャーン、ドーン、ゴン！ だつて言つてんだろ！！」

ウチのクラスはなかなかおもしろいクラスなのかもしれない。次郎丸がいるのもそうだが、何よりもみんなが楽しそうだ。いつの間にか2組の内野は1人になっていた。あの委員長だ。そしてボールは次郎丸が持っている。僕はあきらかに決まったスポーツ番組が好きではない。これがテレビなら僕はすでにチャンネルを変えているだろう。

僕らは決勝へと駒を進めた。

「よいよ決勝、と言いたいところだが決勝は午後からである。僕らは今給食中だ。次郎丸が牛乳を一気飲みしてから言った。

「おい、あんま食うなよ。腹六分くらいだぞ。ドッヂボールの最中に腹痛くなつても知らねーぞ。」

女子生徒が言った。

「先生一、木田君がバカ食いしてまーす。それにお箸を変えたから

だと思ひますがチラチラそれを見せてをひみつと血塊げになつてま
一す

次郎丸は自分の持つていた割り箸を持ったまま木田に近づき下からにらみあげた。

「す、すんません神田林先生。俺めちゃくちゃお腹減つて。いや、でもお箸は違いますよ！ 確かにこれは新しいお箸ですけど、そんな見せつけたりしてませんからね！ もしあの女子が見せつけてるつて思つてるなんならそれはきっと羨ましいんですよ！ 俺のお箸が！ なんてつたつてNEWお箸ですから！ いやーいいでしょ、これ？ こひら辺のデザインとかもつたまらんでしょう？」

いやいや、最終的に見せつけるぞ木田。それこの前ジャスコで売つてたやつだろ、チェック済みだよ。あと次郎丸！ ちょっと羨ましそうにお箸を見るんじやない！ 今度買ってやるから。その時、一人の男子生徒が次郎丸に言った。

「先生、なんでそんなに優勝にこだわるんですか？」

そういうれば疑問である。次郎丸は朝から無駄にテンションが高かつた。マモルのテンションに合わせたとか、そんなことではないだろう。あいつは周りの空氣に合わせてくれるような奴ではない。流行語でいえばＫＹＹといつやつだ。次郎丸は自分の席に戻り給食を一口食べていった。

「いやな、俺1組の茶倉先生と賭けしてんだよね。球技大会でどっちが優勝するか。負けた方は5000円つてルールで」

「あんた何、学年行事を賭博に利用してるんですか！」

マモルも続いて言った。

「ちょっと先生！　俺らの友情は5000円で育まれたものだつたんですか！？」

次郎丸は割り箸を皿の上に置き、微笑を浮かべた。

「何言つてんだマモル。俺たちの友情は永遠だ」

「せ……先生……」

「…………いやいやいやいや、おかしいよ！　そんな金ハチックな展開じやないよ！　何よりその人僕らを利用して賭博してんだよ！？　そこつっこむつよ！」

僕の言葉を機に教室中の至る所から罵声が飛び始めた。そして次郎丸はボソボソと何かをつぶやき始める。……ベーコンか！！

「ちょ、次郎丸さん！　ずるいですよー。それはダメですって！
ベーコンは反則！」

いつも淡い光が教室をやさしく包み込んだ。

さあ、みんなの元気が無理やり戻されたところで、いよいよ決勝である。小神は何でもありなのだ。

僕達が体育館に向かうと、すでに2組と3組の3位決定戦が行われているところだった。見ている限りさほど面白い試合でもない。当てでは当たらぬ、無駄に長い試合だった。運動靴を床にこすった時の高い嫌な音が響いている。僕たちは先ほどと同じようにステ

一ジの端に座つた。マモルが少し興奮気味に言つた。

「あへ、いよいよだな、決勝！」

自分達がベーハンの歌で踊らされていることも知らずにとても楽しそうな顔をしている。まあ教師の勝手にいらだちながらドッヂボーリをするのも御免こいつむるが。

ところで、なぜ次郎丸は最初からベーハンの歌で優勝しようとは思わなかつたのだろうか。僕が小神ならまずやつする。その質問を直接次郎丸に聞いてみることにした。

「なんでインチキしないかつて？ そんなん決まつてゐるだろ。おもしろくないからだよ。もし負けたつてそこでインチキすりや500円払わなくて済むしな」

うへん経済的な小神である。勝つたら5000円。負けても損害なし。そんな割のいいギャンブル聞いたことがない。こいつはただ暇を持て余していただけなのだ。無邪気なものである。

さて、そういうしている間に2組が3位になつていた。3位であつてもうれしいのだろう。ガツツポーズをしていたり、万歳をしていたり、そんなの関係ねえをしていたり。

次はいよいよ僕たちの決勝である。最初に次は決勝である、と言つてからどれくらい引き延ばしたのかはわからないがいよいよなのである。ついにジャンプボール、という時に急に次郎丸がこんな提案をしてきた。

「待て！ せつかくの決勝だぞ。普通にドッヂボールやつたつてつまんねえだらうが。ここはひとつ特別ルールを付け加えねえか？」

「何ですか？ その特別ルールって」

次郎丸は自慢げに笑い言った。

「このドッヂボールのボールを重いバスケットボールに変えた殺人ドッヂだ！！」

「……いやいや、殺人って言っちゃってるじゃないですか！ 殺す気なんですか！？ 殺される気なんですか！？」

「いける！ お前らの力を俺は信じてる」

「見誤つてます！ 僕らのこと見誤つてます！ それはやめましょう！ 僕らの14年間の人生にここでピリオドを打たないためにも！」

次郎丸は非常に不服そうな顔をしている。そして何かをつぶやき始める。

「だからベーコンはざるこつてえええ！！

殺人ドッヂボールの始まりである。

主催の体育委員会の一人が大声で言った。

「決勝です！ 時間無制限！ 死んだら負け！！」

4組ＶＳ1組

「それはさすがにまずいです！　血いでたら負けにしまじょー！」

僕は負けじと大声で言つた。

「じゃあそれで！」

体育委員が肺胞がつぶれるんじゃないかといつ勢いで笛を吹いた。ジャンプボールは尺沢の長身で奪われてしまった。当たれば「痛え！」では済まない命がけのドッヂボールがついに始まったのだ！

尺沢はバスケットボールをその場でダンダンとつき始めた。背が高いのでドッヂボールよりもずいぶん似合っている。次郎丸はおら、来い！と挑発をきました。いいのか？当たつたらタダじゃすまないぞ。

尺沢はステップを踏まずその場でボールを投げた。といつよりは、高い位置からたたきつけたと言つた方が正しいだろう。ボールは一人の男子生徒の顔面をとらえた。木田である。一瞬赤い水滴が見えた気がしたのは気のせいか。

「木田ああああ……！」

僕は木田のもとへ駆け寄つた。

「次郎丸さん！　木田がなんかエグいことに……ていうかこれ木田！？」

「安心しろ！　それはもはや木田ではない！　虐殺の神・木田だ！」

「どに安心できる要素が！？　イコール木田じゃないですか！？　なんだよそのダサい座右の銘！」

最中先生も虚殺の神のもとへ歩み寄った。

「おい、元・木田！ 保健室行くか？ 元・木田！」

「先生もやめてください！ 木田は木田以外の何者でもありません
！！」

ボールを奪い取つた次郎丸は僕らに向かつて大声で言つた。

「お前ら！ 負けた人間がされて一番つらいことは何だと思つ！？
それはなあ、情けをかけられることなんだよ！ もうそいつにか
まうな！ 僕たちはただそいつのために戦うことしかできねえんだ
よ！！」

そうか、木田のことをなんと言つても、もうどうにもならないのだ。
僕は戦う。これはもう次郎丸の5000円のためとかではない。木
田の弔い合戦なのだ！ 戦争なのだ！

「次郎丸さん、ボール、僕に投げさせてください」

次郎丸はしばらく僕の目を見た。そしてボールをゆっくり僕にパス
した。僕の胸にズッシリとした殺人ボールがある。今日一日で初めて
ボールを投げる僕は少し緊張していた。心臓の鼓動がやけに大き
く聞こえる。僕はマモルの姿を思い出した。あの動きを形態模写し
ようと思つたのだ。できるだけマモルに近い動きをした。そして僕
はボールを投げた。肘が壊れた。

「あ！ お前何やつてんだよ！ 糞ボールじゃねえか！」

「つまおおおお…… 次郎丸さん！ これ投げるのもキツイです！」

そうなのだ。このドッヂボールは重いバスケットボールを使用しているため、肘に急激な負担がかかるのである。

試合が始まり5分が過ぎた。体育館の床に伸びている赤い液体はなんか最近異常気象だからということを理由にしてしまおうと思う。もしくはトマトジュースを飲みすぎたのだ。そうであつてくれ。こちらの生き残りは5人。僕、次郎丸、マモル、最中先生、留学生のモロミン君である。対して1組は6人。尺沢とそれ以外の元気な5人である。前に話していたアンダースローの男やらは早々にグッドナイト。現実はこんなものだ。

さあ、ドッヂボールもいよいよ終盤である。

ボールはこちら側にある。ここで一人倒せばお互いいーインである。モロミン君があまりに興奮してそっちの方の言語で何かを叫んでいる。「つむさい。次郎丸が言った。

「おい、モロミン！ 体育館でギャー、ギャー叫んでんじゃねえぞ！ 何言つてんだ！？」

モロミン君は声がマンガの外国人のようなきれいすぎる片言である。片言にきれいも何もないだろうが、あまりにすばらしい片言なのだ。

「先生、今ワタシは母の名前を連呼してマシタ」

なんと外国らしいテンションの上げ方だ。きっと死に際も母の名前を叫びながら死ぬのだろう。

「マザコンか、てめえは…マモル、気にしないでさつさと投げちま

え！」

マモルははい、と返事をするといつもきれいなフォームでボールを投げた。球は見事に一人の生徒をとらえた。そしてなんと運のいいことにそのボールは4組の外野の元へ転がった。だが、外野に立っているものはいなかつた。最初のルールを確認してほしいが、このドッヂボールは「血が出たら負け」なので血が出るまで内野で闘わなくてはならない。何度も何度もしつこく当てられ本当に危なくなつたので自ら鼻に指を入れ鼻血を出しリタイアした者もいた。惨劇。先ほどのマモルのボールは誰も取ることができず、結局1組側のボールになってしまった。尺沢はボールをモロミン君に向かつて投げた。モロミン君は吐血した。いや、噴血と言つた方が正しいか。

「おおおおおう…… パパ…………！」

あ、そこは父親なんだ。

これで先ほどと同じ状況になつてしまつた。こちらが人数で一人分負けている。いつたいどうしたものだろう。次郎丸はボールを片手で拾つた。

「見とけ。これで逆転してやる」

次郎丸はそう言つた。何だらう。この安心感は。何だらう。それと並行する恐怖感は。だが、僕は止めなかつた。今回はそれでいい気がしたのだ。僕は、はいと返事をした。

次郎丸は自陣の中ほどから助走をつけた。放たれたボールはこちらの見る限りなんら変哲のないただのボールである。……いや、違う。回転がかかつていて。今まで見たことのない回転である。そのボ-

ルはまず一人の男子生徒の顔面をとらえた。そのボールはそのまま勢いよく床に落ち、そのままの勢いで跳ね上がった。そのボールはもう一人の男子生徒の鼻を突き上げ鼻血を出させた！僕はあまりに興奮した。

「ダブルアウト！！」

「見たかこの野郎！！ 次郎丸特製、スーパー・ボールボール！！」

名前はダサいが確かにすごいボールである。この殺人ドッヂならではの魔球だ。このスーパー・ボールボールで一気に風はこちらに向いた……と思っていた。

尺沢はそのボールを素早く処理すると、なんと次郎丸に対してもボールを投げたのだ。これ位なら次郎丸はやられないはずだつた。あの男がいなければ。次郎丸の隣にいた最中先生は捨てられたチワワのようにオロオロしていたのだ。次郎丸はボールを受けようとボール側に身を寄せていた。そこにオロオロ最中先生の大きな尻がヒット。体勢を崩した次郎丸の目の前には渋い柿色が広がっていたことだろう。次郎丸は口を切つた。

僕は目を疑つた。あの次郎丸がやられた。その事実が信じられなかつたのだ。

「おおおい、こら最中！！ 何お前！？ あせつてその場で暴れてんじゃねえよ！！ 僕外野になっちゃつたよ！？ 頼みの綱外に放り出されちゃつたよ！？ とりあえずお前も死ねええ！！」

最中先生リタイアである。その後マモルが相手を一人倒したが、まだ尺沢がいる。一度整理しておぐが、この時点で2対2。こちらの生き残りが僕とマモル。相手は尺沢ともう一人少し小太りな男。た

しか山枚やままいとかいうやつだ。戦力的に負け、精神的にも次郎丸がやられたショックは大きい。こちらに不利な状況である。こちらにボルがあるうちに僕は靴を履きなおした。そしてマモルの耳元でささやいた。

「どうする？ 尺沢のほうを先に狙うか？」

マモルは少し唸った。よし、と一声あげて僕の耳元へ。

「尺沢は最後だ。山枚を先に倒そう。そっちの方がヒーローっぽいだろ？」

「……任せるよ」

僕はマモルの意見を曲げる気はなかつた。ただ考験なしに投げるのをやめさせたかったのだ。僕は体の前に体重を乗せてマモルの投球を待つた。

マモルは投げた。なぜバスケットボールでんな速球が放れるのか僕には理解ができない。その速球を顔面で受ける山枚。ドカベンだつてそんな勇気はないだろう。マモルは確実に山枚をしとめた！ 相手はあと一人。尺沢である。尺沢は隣で横たわっている山枚を無視し、ボールを拾つた。外野から次郎丸が叫んだ。

「よっしゃ！ よくやつたマモル！ ほんとお前はできる子だな！

！」

少し静かにできないものだらうか。今マモルは尺沢と真剣勝負をしているのだ。

「ありがとうございます、先生！」

その律儀なマモルのあいさつをやつは見逃さなかつた。尺沢は伸ばしきつたゴムを弾くように腕を振つた。僕は考えた。「ここでマモルがやられたとき自分があの冷蔵庫のよつたやつに勝てるのかを。その間、ゼロコント一秒。気がつくと僕はマモルの盾になつていた。

「おい、アツシー！」

マモルが言つた。僕は自分の口が切れていることを確認し、そして言つた。

「僕はドカベンより勇氣があるみたいだよ」

僕は外野に一人で歩いて行つた。マモルに頑張れ、と言そえて。マモルの目が変わつたのがわかつた。僕は次郎丸の隣に座つた。

「次郎丸さん。結局僕誰も当ててないんですね」

次郎丸は親指で自分の口から出た血を拭つて言つた。

「……なんかわつきのドカベンがどうとかいうの……くさかつたぞ」

「言わぬでぐださい。今になつて後悔してるんですから」

僕は次郎丸と2人でマモルと尺沢の1対1の決戦を見守つた。それほどんなどんなスポーツ中継より面白い。きつといい視聴率がとれる。僕たちはマモルの笑顔をただ待つことにした。

「皆さん、今日の球技大会は楽しむことができましたか？ 僕は最初のほうで負けてしまったので正直つまらなかつたです。あ、いや、

神田林先生は素晴らしいでした。先生、もう特別実習は結構です。
え～優勝は4組という自分のには意外な結果で1組に賭けてた10
00円がパーになってしまってもう踏んだり蹴ったりで、……てい
うかりアルに踏んだり蹴ったりされて……あ、いや、「冗談です……。
え～とにかく今日の喜びを忘れず、またみなさん勉強にスポーツに
頑張ってください。これで終わります」

あいつの笑顔はどんなやつより爽やかだつた。

第2章 料理だ

暗闇の中、一つの光が見えた。

「田代めよ……勇者よ……」

何だ？ 誰の声だ。

「魔王の復活だ。奴はパワーストーンの力で全ての人間をパワープロ
くんのキャラみたいな体系にしようとしている」

……それは嫌だな。

「お前の力が必要だ。お前のその魔道粉碎の力が必要なのだ」

「マドウフンサイ？ 僕にそんな力はない……」

「…………んだよ、ノリ悪いなあ。とりあえずイエスで答へとけよ」

……は？

「お前は勇者で、俺はそれを導く賢者って設定なんだよ」

はあ……イエス。

「…………なんか興味ない感じだな。いつか気分悪くなんだけど」

じゃあどうしようと？

「お前の耳たぶを生贅に捧げる」

え？ ちょ、うわあああああ…！」

田が覚めた。僕は右手を耳にあてパンの生地にピッタリの固さの部分があるかどうかを確かめた。立派な福耳。助かった。そう思った直後、僕は今の状況があつてはならない状況である」とを感じた。僕は布団に入っている。そして隣に小神である神田林次郎丸がたまに呼吸を止めながらいびきをかけていた。

「ちょ、次郎丸さん！ 何僕の隣で寝てるんですか…！」

次郎丸は一瞬白目をむいた。そして上体を起こし首を鳴らす。普段より少し高い声で言った。

「……おはよー、アッシ君」

「なんで君付けなんですか。怖いですよ。ていうか声気持ち悪いんですけど」

「なんだよ、そんな言葉の悪いツツコミがあるかよ。アンタツチャブルのツツコミだつてもうけよつと優しいだろつが」

「あんな無理して高い声出してテンション上がったときの松本人志みたいでしたよ」

次郎丸は急に静かになった。ちょうどビバグツたファミコンの様である。

「……なんで黙ってるんですか？」

バグもカセットに息を吹きかければ直るのだ。

「いや、それは気持ち悪いと言われても仕方ないなと思つてよ」

まったく変なところだけ素直な男である。僕は起きたばかりで動かない頭をフルに回転させた。なぜこいつがここにいるのか。そしてあの起こし方。僕は何かがあると踏んだ。

「何が目的ですか？」

「目的？……いやいや、俺はただお前の寝顔が見たくてな」

「彼女が、あんたは！」

次郎丸はわかつたよ、と言い、僕の目を見ながら語り始めた。

「今日はな！ 田曜日だ！」

そんなことわかってる。だからどうしていつといつのだ。

「俺も今日は仕事無いし、どこかへ遊びに行きたいわけだ！」

「はあ……じゃあダイソーでも行きますか？」

「いや、そうじゃない！ 僕は遊びに行きたいには行きたいがなんかダルい！」

さつきから何を言つてるんだこいつは。結局何が言いたいのかさっぱりわからない。遊びたいのにダルい？ なんだか段々腹が立つて

きた。

「そこ」で俺は本日料理に挑戦することになりました！』

「なりましたってだれに決められたんですか」

次郎丸の目に光が差している。『いつがこうなるといつも口クなことがない。次郎丸は目線を僕から携帯電話へと向けた。

「友達を呼びたまえ、アッシ君！」

「何ですか？」

次郎丸は両手を広げて言った。言葉を強調させたいんだろう。

「料理に判定員は不可欠だ。よくやつてるだろ？ 最近

正直言つて不服はあるが』『いつが一度言いだすと絶対にあきらめない』ことを僕は知っている。反発しても効果がない。僕は溜め息をはき、電話を手に取った。

「じゃあ何人か声かけますから、待つてて下さー」

「おうー よろしくなー！」

さつきから感じていたが今日の次郎丸はやけにテンションが高い。いつもなら朝起きた時は目が死んでおり、招き猫のような顔をしている。だが今日の次郎丸は電池を新しいものに変えたミニ四駆のように心が走り回っている。

僕は携帯電話を取り、電話帳のボタンを押した。

僕は自分の携帯の電話帳をあ行から順番におくつた。や行で指が止まる。「コリちゃん」と表示された画面を見ながら僕は考えた。呼んでみるか、と。アドレスは知っているものの、まだ彼女にメールを打ったことはない。それに次郎丸の勝手に付き合わせるのはどうかと思う。いや、それでも。

僕はできるだけ紳士を気取ってメールを打つた。緊張しすぎて内容は覚えていない。

僕が今年のうちで最高の心拍数を記録した後、マモルと木田にもメールを送った。男3人に女が1人というのはかわいそうなので、僕は他にも誰か女の子を誘うことにしてしまった。しばらく画面を眺め、僕は磯野鮎を誘うことにした。

こいつとは小学校の時からの腐れ縁。男子に交じって缶けりとかしてたタイプ。今では随分女の子に戻っている。決してサエさん一家の一員ではない。オリジナルの磯野である。

僕はその5人にメールを打ち終えると、1階に降りて朝食をとることにした。親父がパンツにシャツという不細工な姿で食パンをかじっていた。

「お、アツシおはよう。食パン焼いて食ってくれ」

「あ、今日は朝パンなんだ」

親父はパンを左手に持ち替え牛乳を飲んだ。

「ああ、味噌汁作らうかと思つたら神田林さんがダメだつて言つから

「なんか今日ご飯作りたいんだつて。いつもの気まぐれで」

僕はその場を軽く見まわした。

「で、その次郎丸さんは？」

親父はパンの粉がついた人差し指で台所を差した。料理の練習でもしてるんだろうか。僕は食パンを取りに台所へと足を運んだ。紫がかつた炎が見えた。

「うおおおおー！ 次郎丸さん何やつてんですかー！」

フライパンから火柱をたてながら次郎丸は言った。

「え？ フランベだけど」

「ちょっと、次郎丸さん！ フランベは料理歴が1日にもみたない者がするテクニックじゃないですよーー！」

「いや、でも納豆のにおいをこれで消せるんじゃないかと思つて。どう？ すごいアイデアじやね？」

「納豆をフランベー？ そんなこと息子の納豆嫌いを直すために奮闘する料理好きのフランス人でもやつませんよーー！」

次郎丸はそうか、と言つて燃えたぎるフライパンを眺めてまた僕のほうを見た。

「なあ、アツシ。炎の勢いが増す一方で全然消える気しないんだけど」

「消化器持つて」おおおおいー！」

鎮火。

僕たちは3人でちゃぶ台を囲む形に座った。親父が言った。

「いやあ、お父さんまさか昔の彼女に買わされた一本60万の消化器が役に立つ時が来るなんて思いもしなかったなあ」

「ちよっと親父、そんな消したくても消せない過去を息子の前で堂々と暴露しないでくれる?」

次郎丸が悪びれない態度で言った。

「お、消せない過去の失敗でボヤを消したってことだな、お父さん

「全然うまくないですよ。ていうかもうちよっと反省して下せー」

親父が部屋の隅で体を震わせている。

「おい、親父! 何こいつそりウケてるんだよーー!」

現在午前9時30分。みんなが来るまでにまだ2時間はある。今から断つても遅くはないんじゃないだろうか。

「次郎丸さん。今日の料理作るって言つてたの、もうやめませんか?

?」

「何言つてんだよ、お前。何が不服なんだよ。どの辺が不服なんだよ。」

僕は崩していた足を正座に組みなおした。

「朝っぱらからボヤ騒ぎ起こして何が不服なのか僕に聞く方がおかしくないですか?」「?

次郎丸も正座になつた。

「大丈夫だ、フランベはもうやらない。俺もさすがにちよつとビビッタリしたからな。あれは」

……信用ならん。フランベをやらないなら他のことで何かやらかすに決まつている。

「ダメです。もう今日は中止にします」

「机の右下の引き出し」

「……さあ、みんなが来る前に準備でもしつきましょうか! 次郎丸さん!…」

本田は良い料理田和である。

僕は次郎丸とともに消火器から出た化学物質を片づけることにした。今回は次郎丸も素直に従つてゐる。もとはと言えばこの男の責任なわけだが。

消火器の後片付けなど初めての経験である。何から片付ければいいのかさっぱりわからない。僕たちはとりあえずあの粉っぽいのを勝手口から外にはき出し、雑巾で拭いた。掃除に1時間も要してしまつた。みんなが来るまであと1時間しかない。僕は次郎丸と話し合つことに。

「次郎丸さん、もう料理をする」とに關して否定はしません。でも僕が思うと、次郎丸さんの料理の腕前は金魚のフンです」

「やつぱお前つて口悪いよな」

僕はコホンと間を置いた。

「ヤツ」で、次郎丸さん、今日作る料理は僕も手伝いましょう。僕こう見えて料理出来るんですね」

「……嫌だよ」

何故だ。何故「ヤツ」から差し伸べた手をそんなに乱暴に扱うできてしまつんだ。

「何ですか！　僕も久しぶりに料理したいんですけど

「何でつて、お前よう。俺知つてんだよ？　お前がユリのこと好きなの」

何故知つている、今何の関係がある、そして何故呼び捨てだこの糞小神！？」

「料理が出来るつてことアピールしたいんだろ？　そんなんだろ？」

俺はそういうお前の浅はかな考えにいら立ちを覚えたんだ

確かに多少そんな考えはあった。いや、ていうかそれしか頭になかった。ああ、そうさ！　僕はアピールしたかったさ！　今回のイベントであわよくばこれから遊ぶ時に誘つていこうみたいな考えがあ

つたさ！

「……べ、別にいいじゃないですか！ 僕にもチャンス^トセ^ーよ。」

「あのなあ、俺は小神なんだよ。そういうことは恋のキューピッドにでも頼めって話だよ」

ここまでハッキリ言わると何も言い返せないのは僕の弱さなんだろうか。それにもしかしたら神様の世界ではこういうストレスがあるのかもしれない。初詣で彼女ほしいです、とかって頼むなよ！ キューピッドにでも頼めよ！ みたいな。

僕が神様の世界などという不思議なものについての考えを深めていると、携帯から流れる着信音¹。朝送ったメールの返信だ。

「あれ？ お前がメールなんてめずらしいな」

「朝早くだし、ココちゃんに電話するレベルまで僕はまだ達していないせんからもうみんなメールにしようかと思つたんですよ」

いつの間にかココちゃんのことをこんなにアブノーマルに口に出せるようになっていた。この男と話しているとどうでもよくなっていく。

メールは磯野アユからであった。内容はこうだ。暇だからもう行くね、と。

「……次郎丸さん！ 急いで着替えましょーー これ一番パジャマ姿見られたくない奴がやつてきますよーー」

「お前誰呼んだんだよ」

僕は何も言わず携帯の画面を見せた。

「磯野アコ……3組の奴か！あのいい脚の！」

「次郎丸さん！ またちょっと口リコンの片鱗が見え隠れしますよ」

僕たちは急いで着替えることにした。僕は2階の部屋へと走った。めんどり臭いので適當なものにしようかと思ったが、ゴリちゃんが来ることを思い出し、できる限り自然、かつなかなかのファッショセンスであるうものを選んだ。次郎丸は相変わらずジャージである。今日はアディダス。僕たちの準備が万端になつた瞬間であった。家に昔ながらのブーというタイプの呼び鈴がなつた。

昔から聞きなれたおじやまします、という声が聞こえた。僕は一人で玄関へ向かい、戸を引いた。

「来たぞ、アシシ」

「ウチに来てからの第一声ぐらにもうちょっと清楚にできないのか？」

アコはまるで男のような格好をしていた。ジーパンにTシャツ、その上にベスト。色の基調は黒だ。この前マモルもこんな格好していったように思つ。遅れて次郎丸が玄関にやつてきた。

「おお、アコ来たか」

アコは次郎丸に対しては妙に丁寧だった。

「おはよひざれこます、神田林先生」

アコはこちらの都合など無視してやつて来たが、他の3人が来るまではまだ時間がある。暇だからと言ってウチで何をしようというのだ、この女は。とりあえず僕はアコを居間に案内した。アコは元気に言った。

「みんなはまだ？」

僕はアコに座布団を手渡し言った。

「自分が早く来ただけだろ？なんで、みんな遅いよね？みたいな空気作つてんの」

「ちょ、失礼な、私のこと空氣製造機のみたに言わないでよ

「どんな製造機だよ。そんなもんNASAでも作れないよ」

僕たちの会話を聞いて親父が居間にやつてきた。

「お、やっぱリアコちゃんか。この独特的の会話聞くのも懐かしいなあ」

「あ、おじさん。おはよひざれこます」

親父がアコと昔話を始めたので、僕は次郎丸のいる台所に向かった。次郎丸は椅子に座り、料理本を読んでいた。

「眞面目に料理する気になつたんですか？」

次郎丸は本から田を離さないまま返した。

「なあ、アツシ。料理で大事なものはなんだと思ひへ.

「え？ そうですね……」

あまりにシンプルな質問ほど答えにくいものはない。僕はいくつも浮かんでくる答えの中から一つを絞り込んだ。

「料理の腕……ですかね？」

「そう！ そして今のoreにはそれがないわけだ！ じゃあどうする？」

何も言えなかつた。正直僕にはそれがわからない。

「アツシ、それはな……愛なんだよ」

「愛……ですか」

「せうだ。大体料理は『料理の腕』×『愛』で完成するんだよ

その方程式だと次郎丸の料理の腕はゼロだから出来る料理は全部ゼロなんじやないだろ？

「つーことはだ！ 愛が50なら俺の料理は100になるつてわけだ！」

「あ、2はあると思つてゐんですか」

「え? 何が?」

「いえ、じつちの話です」

次郎丸は更に語調を強めて言つた。

「だが今現在俺の愛は50に達していない」

だからビリした。聞いているじつらが馬鹿らしくなつてくれる。

「愛をくれー アッシーー」

無理難題である。僕に何を求めているんだ。

「戻つていいですか?」

「お前なあ、やつせから俺がどんだけ暇してると思つてるんだ」

次郎丸は適度に遊んでやらねば機嫌が悪くなる、デリケートなつせぎみたいな神様なのだ。

「わかりましたよ。じゃあアコと親父4人でゲームでもやりましょ
う」

「ストリートファイターは無しな! オ前あれ強すぎなんだよ!」

「次郎丸さんがダルシムでヨガファイサーしかしないからじゃないですか。僕のチュンリーには到底かないませんよ」

僕と次郎丸は居間に向かった。親父がアユにアルバムを見せている。

「お、ほらアッシー これ見てみ！ お父さん若くね？ これふつ
わふわじゃね？」

アユが笑って言つた。

「おじさん、もう過去には戻れないんだよ。そりそり現実見たら？」

僕はテレビの下の台に入っている任天堂の某ゲーム機器を取り出した。

「赤い帽子のヒゲ男が車でレースするやつやつますか？ みんなで

僕たちはみんなが来るまでゲームをすることにした。アユはこういうゲームが得意だ。昔からよく遊んでたから知っている。なんだかこいつやって親父やアユとゲームをすると小学生の頃を思い出す。アユが6回目に1位になつたときである。またもや鳴り響くチャイム。いよいよ料理の始まりである。

僕は玄関に向いアユが来た時と同じようにもてなした。3人のこnihisnにはというあいさつが重なつて男女混声合唱のように聞こえる。いや、それは言い過ぎか。

僕は気持ちを切り替えた。今日はコリちゃんとの初お遊びなのだから、気合の入れ方が違う。木田が靴を脱ぎながら言つた。

「今日は先生が料理してくれるんだろう？ もう朝からアーティグリア
しか食べてないからお腹ペコペコなんだよねえ」

「朝からドリ」アツて、お前なかなか果敢な胃袋持つてんないなあ

次郎丸が洗った手をズボンで拭いちゃダメだつていつも言つて言つた。

「次郎丸さん、ズボンで拭いちゃダメだつていつも言つてるじゃないですか」

ユリちゃんがいい感じに微笑んでいる。ウチの家に好感を持つてくれたようだ。いつそ、休みの日に巫女のバイトにでも来てくれないだろうか。そんな叶いもしない理想を頭の隅にステイさせと、僕はみんなを居間に連れて行つた。ウチの居間でまるで自分の家であるかのように過ごして、普段見たこともないくつろぎ様を見せたアコが言つた。

「おお、諸君。じきげんよ！」

マモルは少し笑つて返した。

「いつもテンション高いな、アコ」

「これだけが私の面倒できるといだよ」

みんな楽しそうに会話する中、一人ユリちゃんだけがあまりしゃべっていない。慣れない環境に戸惑つているのだろうか。僕は彼女の隣に行つた。

「…………めん。あんまり楽しくなかつたかな…………」

彼女はほつとした様子だった。そして天使のような笑顔を僕に向けた。

「ううん。みんな元気だからちゅうと圧倒されてただけ。楽しいよ」
ナイス笑顔だ。確かにこのメンバーは個性的なやつばかり。最近次郎丸という個性的すぎる男とばかり一緒にいるから、感覚がマヒしているのかもしない。コリちゃんはいたって普通の女の子である。

「やつか。ならいいんだけど」

これほどホストクラブで修行したいと思つたことはない。もう少し
うまい言い回しはないものだらうか。次郎丸が居間のふすまを開き、
言った。

「よつしゃ。今から作つてやるから、お前ら期待して待つとけよ」

みんな楽しそうな顔をしている、僕ひとりを残して。僕は今朝のボ
ヤ騒ぎをリアルタイムで体験しているのだ。期待のしようがない。

次郎丸が料理を作り終えるまで時間がある。せつかくコリちゃんを
呼んだのに、ただ圧倒されっぱなしでは楽しも半減してしまうだ
らう。僕はとにかく会話をしようと思った。

「コリちゃんて普段の日曜日なんかは何してるの？」

「私？ 私は……友達と料理したり、妹の面倒見てたりしててるかな

それはそれは、さわかわいらしい妹なんだらうな。

「妹がいるんだ。コリちゃんに似てるの？」

「顔はね。性格が全然似てないの」

アコが座布団を木田にぶつけて言った。

「あ、あれ？ イモリとヤモリみたいな感じ？」

「何で例えがは虫類？失礼だよ」

「ちょ、何で座布団を投げたの？そしてなぜ何事もなかつたよつにしてんの？」

木田のそれをやかな反論。その時、台所から大きな声が。

「アツシ！－ 味の素どこだ！ 味の素！」

「ちよ、待つててください！ 今行きますから」

結局僕は手伝う羽目になりそうだ。一体何を作ってるんだろうか。

僕は台所で不思議な光景を見た。次郎丸が鍋をかき回している。その鍋にはネズミ色に近い茶色の液体。

「次郎丸さん……何を作っているんですか？」

僕はいやな予感がしていた。

「え？ 何つてこれ、『ちよぼ汁』に決まつてんだろ？」

僕の直感は正しかった。

「なんでものを作ってるんですか！ ちよぼ汁と言えば、兵庫県淡路島の郷土料理で毎年1月に一度だけ給食に出され、あらゆる生徒から反感を買い、最近ではある情報番組のロケで淡路島が紹介されたときに某お笑い芸人がそれを食べコメントに困り、スタジオにそれが運ばれた際にはコメンテーター全員を黙らせてしまった伝説の安産祈願のお吸い物じゃないですか！！」

「やけに詳しいな、お前」

「常識です」

次郎丸は鍋の中のにおいをかいだ。

「よくこんな臭いのもん作るよな」

僕は次郎丸の言葉を無視して言った。

「次郎丸さん、あなたが何を作ろうと勝手ですけど、僕たちがそれを食べた時の顔を想像するようにしてください。そうすれば少しはマシな物ができるんじゃないですか？」

次郎丸は考え込んだ。そして彼は言った。

「あれか……塩じやけとか」

「そうです、いい感じですよ！ その調子です！ ほら、ほかに何がありますか？」

次郎丸は再び考え込んだ。

「ベーコン？」

「え？ 何で？ 何でベーコン？」

「……コンベーコンベーコンベーコン……」

みなさんはくれぐれもこの様なセリフを言わないうにしたいだけ
きたい。

「……いこじやないですか、ちよぼ汁！ わそくみんなで食べま
しゃう……」

居間に次郎丸の料理その1が運ばれた。異様な匂いに審査員一同
みけんにしわをよせている。アコが小声で言った。

「ねえ、アッシ。なんで淡路島名物のちよぼ汁がでてくるの？ 誰
も出産予定はないよ？」

僕はわからなかつた。さつき台所に行つた時何故、彼を止めなかつ
たのか。何故、逆にちよぼ汁に対してもう1度を上げていたのか。

「……次郎丸さんに聞いてくれよ」

なぜか自信ありげな顔をした次郎丸は言った。

「あ、どんどん食え。淡路島名物の……」

マモルが言った。

「ちよぼ汁ですよね？」

「あ、よく知つてんな」

「常識ですよ、先生」

木田は愛をう笑いをえしていない。そんな木田を見て次郎丸は言った。

「ほら、木田！　お前朝からドリアしか食つてねえって言つてただろ？　どうした？　腹減つてんじやないのか？」

木田は一瞬怯えた表情を見せた。

「い、いや。ほら、よく考えたら僕の胃袋そんな活発じゃなかつたていうか、朝からドリアなんて食べたら元気が出でないって言つか」「それなら尚更食べないとな。ちよぼ汁は体にいいぞ」

その後の居間の空氣は最悪であった。涙目にながらちよぼ汁をする木田。昔小学校で5時間目までトマトを食べるやつがいる中で授業をしたことがないだろうか、それを思い出してほし。まさにその状態である。

僕はみんなが食べたちよぼ汁の器を一人で洗つた。次郎丸に後片付けをしると言つたら、私の辞書に後片付けという文字は無い、とかいう冬将軍の語源になつた偉人みたいなことを言いだしたからだ。居間にはついさつき人を殺したんじやないかという殺伐とした空気が流れている。みんなの顔にはそろつて帰りたいと書いてあるのだ。そんなわかりやすい空氣すら読めないウチの小神は僕のすぐ隣で料理その2に全力を注いでいた。1ヶ月1万円生活の濱口優でも乗り

移つているよ^ううな元氣のよ。

「次郎丸さん、次は何作つてゐんですか？ もつ僕の中では雑誌、小学5年生のコイツには勝てるランキング1位の濱口優と同等の扱いですよ」

「馬鹿言え、俺に勝てる奴は少なくともこの世にまつねえよ」

「あんたはグラッ ラーバキですか」

次郎丸は何かを炒めているようだ。僕は手拭き、居間に戻った。とにかくみんなを元氣づけなければ。

「みんな……あの……」めんなさい、こうこう

僕はみんなから怒られるような氣でいたが、意外とみんな僕のことを慈悲の目で見てくれている。僕も被害者であることはわかつてくれているようだ。いい友達。

次郎丸は居間の引き戸を勢い良く開いた。その左手にはおぼんが。

「よし、作つてきたぞ、ほらー、味噌汁！」

彼の言つ味噌汁といふそれは青い。匂いは悪くないが、青色といふのはどうしてこんなに食欲を無くさせるのだろう？ 今にも先程食べたちょうど汁を吐き出してしまいそうだ。

「へえー、次郎丸さんの地元じゃあ味噌汁は青いんですね……。ていうかさつき何か炒めてたじやないです、何だつたんですか？ あれは何だつたんですか？ ていうか2品続けて汁物つておかしい

でしょ……」

僕は不満を簡潔に100文字以内でまとめた。次郎丸は訳がわからないといった顔を見せていく。訳がわからないのはこっちの方だといつの間に。マモルは僕に続けて言った。

「先生！ こんなに鮮やかな青を一体どんな食材から引き出したんですか？ 青と書つのは色の三原色の一つ、他の色を混ぜて出来るものではないはずです！」

「マモル、もつと他に気になることがあるはずだろ！ そんな真の赤を求めていた有名画家みたいなこと書つてるときじゃないだろ！」

次郎丸は言った。

「……これが本当の青汁ってやつだな」

「つまくなえよ、下手すぎるよー。近所のおじさんだってもう少し良い返しますよー！」

青味噌汁を眺めていたアコが何かに気付いた。いきなり胸を張り、言つた。

「先生！ 本当に料理の腕がまだまだ青いね～」

「お前もつまくなえよー。なんだよ、ちょっと期待しちゃったよー。何があるのかと思つちゃった僕が悪いんだよー！」

次郎丸はしばらく黙つていた。少しだけ考え込むような顔をしてから真面目な顔になつた。

「アツシ……お前すげえな。思春期の割にまわりの田も気にしねえで。ちょっと尊敬するな」

その言葉で、僕は気付いた。少し前から周りを見ていなかつたことを。僕は気付いた。今のこの状況、僕はかなりの変人であると。僕は気付いた。僕の背中でコリちゃんが今まで見たこともない悲しい顔でうつむいているのを。僕は気付いた。絶対おかしな子だと思われてるよ……

「コ、コリちゃん？　え、ちょ……違うんだよ。いつもはほら、もつとこうダンディズムとかすごいから。もう溢れ出してるから」

「……」

彼女は長い間を置いた。それはもう息が止まるんじゃないかという長さであった。

「…………うん…………大丈夫…………」

僕は田の前が真っ白になつた。もう何も考へられない、死のう。僕が身を投げることを決意したとき、木田が言つた。

「えつと……みんなもつ……帰らない？」

そうだね、そうだな、そつしょつ、元氣出せつて。僕の心に深く深く突き刺さる言葉という名のモリ。

僕は彼らを玄関で見送つた。最後のコリちゃんの背中を見届け、僕は居間に一人戻つた。親父が僕に話しかけよつか、かけまいを迷つていろいろのがよくわかる。

「いいのかよ？」

次郎丸だった。僕は畠を眺めていた。

「何がですか？」

次郎丸は僕の額をつかみ無理やり自分と対面させた。

「俺はお前がこんなにモロイお子様だとは知らなかつたなあ」

「そりや、僕と次郎丸さんはまだ会つて1ヶ月なんですから」

次郎丸の目につかない光が見えた。

「お前はどうしたい？ 何がしたい？ 僕にはお前がただ自分の考
える最悪の状況から目をそむけてるようになしか見えないんだけどな」

僕は語調を強くした。

「じゃあどうすればいいんですか！ イメージつて作るのは難しい
のに、壊れるのは一瞬なんですよ！」

「お前は自分自身にそんなに自信がねえのか？ お前そのものを認
めさせるよ。きれいに飾り付けたイメージに意味なんかねえんだ。
下ばつか向いてんじやねえ。畠の節数える職人かテマーは。ただ前
だけ向いて、歩けばいい。よそ見してたら電柱に頭打つぞコノヤロ

ー」

僕は半泣きそうな声で言った。

「でも……でもどうせ玉砕されるに決まつてますよ」

「悔いの前に恥の一つでもかいてみろ。お前は自分が恥かくのと、このままおせりばとじがいいんだ?」

僕は何も言わなかつた。次郎丸が続けた。

「そりや、ユリはウチ来るの初めてだよなあ。他の奴とは方向違うし、ちゃんと帰れんのかなあオイ。俺この前ファックスに挟まれた小指が痛くて動けねえや」

僕は次郎丸の腕を振り払い、急いで玄関に向かつた。

僕は前を向くことに決めたんだ。

僕はサンダルを履いて石階段を駆け降りる。5月の温かい風が僕の心を落ち着けることはなかつた。通りに出た時サンダルで出できたことを後悔したが、僕はそれを気にせずに小走りでユリちゃんの帰路をたどつた。

その時である。僕の背後ににつらそうに呼吸する男が一人。

「はあっ忘れてた! 忘れてた! 僕お前と一緒にいなきや、はあ
つ」

次郎丸である。全力で走ってきたのだろう。煙草でほとんど使い物にならない彼の肺が悲鳴をあげている。

「ちょっと次郎丸さん! もう今までの雰囲気がぶち壊しじゃないですか! 帰つて下さい!」

「無茶言つなよ！ 僕だつて帰りたいよ！ でもなあ、世間にほど
うにもならないことつてあるんだよ！ 消費税の値上がりしかり、
モー娘の人気低迷しかり！」

次郎丸は社会派キャラクターである。そのまま彼は続けた。

「ていうか今思つたけど、何でユリはお前の家知らないのにお前は
ユリの家知つてんだよ！ ストーキングか？ ストーキングしてた
のかー？」

「誰がストーカーですか！ ただ僕は恋に對して不器用なだけです
！」

「否定するのそこかよ！ ストーキングはしてんのかよ！ ただの犯
罪者じゃねーか、お前！ ていつか何でさつきから全力で走つてる
の！？ さつきまでの余裕の小走りは何処へ！？」

「知りませんよ！ なんか次郎丸さん走つてきたからそのままのノ
リなんじやないですか！」

僕らが内輪もめをしているときである。目測で50メートル程先に
ユリちゃんの姿をとらえた。彼女はあたりを見回していく。やはり
迷つてているようだ。次郎丸が言った。

「よしつー！ 僕このままどつか隠れるからつまうことやれよ！ 馬
鹿なことしたら電氣アンマするからな！」

次郎丸は近くの家にダイブした。僕は電氣アンマに怯えながら彼女
に呼びかけた。

「コ、ココちゃんー！」

彼女が一ひきに振り向いた。黒い長髪がなびき、どんな芸術作品よりも美しく見えた。

「あれ？ アッシ君？」

「ココちゃん、あの、わはは」

僕が言いかけた時であつた。彼女は優しく微笑みこいつ言つた。

「わはは楽しかったよ」

今まで見たことのない笑顔だつた。僕は少し彼女に見とれた。

「え……本当……？」

「うん。何かアッシ君で学校じゃもつと落ち着いた感じだから新鮮だつたし」

「え？ ジゃあ何であんな悲しそうな顔を？」

彼女は口に手を当てて小さな声で笑つた。

「あの味噌汁がすごい味だつたから、ちょっとビックリして

全では僕の取り越し苦労だつたらしく、そのあとも僕は彼女と一人でおしゃべりをした。こんなこと前ならありえない光景である。気がつけばすでに彼女の自宅前。ココちゃんが言つた。

「せういえば今日アツシ君のとこで食べるからって言ったから何も
ないんだ。結局ほとんど食べてないのに」

僕は一つの提案をした。

「…、じゃあ僕が何か作るよ」

「え？ アツシ君料理出来るの？」

僕はうん、と言つてうなずいた。

彼女の家はマンションの3階。ドアを開けると、きれいに並べられた靴が目に留まる。僕は早速キッチンに案内してもらつた。冷蔵庫に卵があることを確認して、待つてと言つた。

何が今日といつ田をこんなにも素晴らしいものに変えたのだろう。
僕はユリちゃんと初めてこんなにしゃべり、始めて家に訪問し、始めて料理を披露する。あらゆることが初めてづくしだ。

「はい、オムライス

僕はユリちゃんがオムライス好きであることを調査済みである。決して知りたくて知ったわけではない。たまたまである。

「……おいしいね、これ！ アツシ君将来シェフになると良いよ

「親戚の人にも言われるよ、それ

今日のオムライスは格別のはずだ。何せ、次郎丸がこいつ言つていた

のだから。

料理は腕と愛情だ。料理はやはり愛情で決まるようだ。少なからず僕はそれで一人の女性を笑顔にできた。

僕がユリちゃんの家から出ると、玄関先の塀にもたれかかり、腕を組んだ次郎丸が僕を待っていた。

「どうだった？ 電気アンマは必要ないか？」

僕は抑えきれない笑顔で言つた。

「はい」

「じゃあまあ、家帰つたらまた俺の料理食つてもうつから」

僕の笑顔が苦笑いに変わる。恐る恐る聞いてみた。

「今度は何作るんですか？」

「そうだなあ」

次郎丸は続けた。

「お前にオムライスでも教えてもらおつかな」

「……覗きましたね？」

次郎丸は嫌な笑顔だった。ただその笑顔には好感が持てたんだ。不思議な話。

本日は良い料理日和である。

第3章 肉まんだ

田覚ましが鳴った。僕はそれを止めてもう一度寝た。

「遅刻！ 次郎丸さん、起きて下さいー もつ時間やばいです！」

僕は次郎丸の部屋にあがりこんで言った。実は今日親父が出かけていて、僕と次郎丸の二人だけなのだ。彼を起こすのは僕の日課である。

「お前朝から騒いでんじやねーよ。とりあえず『今日の ンゴ』見るから」

「何か嫌なところに 入れないで下さい！ ていつかそれもう時間的に終わってます！」

次郎丸は6本の腕で頭をかいて遠くを見つめる。しばらくして頭が動きだしたのか、あわてた様子で言った。

「それ、やばくね！？」

僕と次郎丸さんは慌てて朝ごはんを食べる。

「ちょっと次郎丸さん、何ずっと納豆かき回してるんですか！ 早くしてくださいー！」

次郎丸は4本の腕で納豆を支え、残り2本の腕で納豆をかきまぜている。

「無理だつて！ 僕100回以上かき回すの日課だよー？ 日課は急にやめれない！！」

「何その、車は急には止まれないみたいな言い方！？ とにかく急いで！！」

次郎丸は納豆を支えている方の手を一本動かして、テレビの電源を入れた。画面右上に「：00」と出ている。

「アツシ！ これ見てみ！ まだ余裕っぽいぞ！ 間違つていたのは俺たちのほうかもしれないぞ！」

僕はテレビ画面、そして携帯電話を確認した。ビビリもひょりびつ時をお知らせしている。

「な、何だ。田覚ましがくるつたんだ」

「お前、ピックりさせんじゃねえよつ！ 何かガラにもなく早起きしちやつたよ」

次郎丸が3本の腕で僕をこづいた。……あれ？ 何かさつさからところどころおかしくないか？

「次郎丸さん、なんか今日不自然じゃないですか？」

「何だお前、守護霊が見えますとか言つんじゃねえだらうな？」

「いや、その……なんて言つか。腕……多くないですか？」

次郎丸は自分の腕を確認する。6本の立派な腕だ。

「えええええ！ 何これ、腕6本あるんですけど！？ 成長期！？」

「いやいや、違いますよ！ そんな神秘的な成長なかなかお目にかかりませんよ！ ていうかありえないですよ！」

次郎丸は頭を抱えた。もちろん腕6本で。

「おーおい、どうすんだよ…。こんなもんアシュラマンになるか、帽子をかけとくあれになるしか道がねえじゃねえか…」

「大丈夫ですよ！ 次郎丸さんの目の前に広がる道は無限大です！」

「つるせえー 慰めはいらねえよおおおおーー！」

次郎丸は僕の両腕、両足、腹をつかみ、そのまま空中へと舞い上がった。とおーー、というかけ声と共に地面に急降下。その衝撃が僕に襲いかかる。

「アシュラバスターーーー！」

「いだだだだだ！ こかつ、股関節が……あああ！ 僕が僕じやなくなる！ 何か得体の知れないものになるーー！」

次郎丸ははつとした様子で僕を降ろすと、慌てたそぶりで言った。

「……あ、すまねえアツシ。…あれ、お前アツシか？ そんなあらゆる関節がはずれ切つてる奴見た事ねえよ」

「いいから…早く助…けて…」

僕はベーコンの歌に救われた。

「考えてみましょ、何で「うう」とになってしまったのか」

僕は次郎丸と居間に座つて話し合つことにした。幸い学校まで時間もある。次郎丸が言った。

「俺は別にこのままでもいいけどな。これから悪魔超人として生きていいくから」

「何言つてるんですか。学校にも行かなきゃいけないんですから。そのままはちょっとまずいですよ」

僕達は次郎丸アシュラマン化現象について検討することにした。ちやぶ台を出し、そこに向かい合つて座る。

「次郎丸さん、昨日の夜の間何をしたかわかりますか？」

次郎丸は腕を組もつとしたが、6本腕でじりやつて腕を組むのかわからず諦めた。

「昨日は……夜中に起きて冷凍肉まん食つたな。……！　これが最近話題の農薬の効果か！」

「いや、それは違います。農薬一つで腕が6本になれば、逆に中国を尊敬します」

次郎丸は目をつぶつて首をかしげた。みけんのしわが深く悩んでいることを感じさせる。次郎丸は何かに気付いたのか、目を大きく開

けた。

「……肉まんの精?」

……今聞こえたのは何だろうか? 肉まんの精とか何とか。生き方に疑問もあるんだろうか? 相談なら乗るぞ。

「間違いねえよ! 肉まんの精だ!」

「何言つてんですか、次郎丸さん」

次郎丸は語り始めた。

「あのなあ……ちょっとこの後の文章読んでくれ

「面倒くさがらないで下さこよ」

午前2時、俺は小腹がすいていた。もうなんか寝ようか、食べようか心中で葛藤している。そんな俺を尿意が決心させ、俺はトイレに駆け込み小便をした。

急いでいたので気がつかなかつたが、俺は便座を上げずに小便をしていた。いつもより小便の有効範囲が狭まつた分、俺を今までに経験したことのないような緊張感が襲つたんだ。便座カバーが小便で濡れてしまえば、まず確実に俺は怒られてしまう。何としてもそれだけは避けたかった。

小便の勢いが弱まつた時が勝負だ。段々と弱くなつていく小便に体のリズムを合わせ、腰を出していく。そして、最後に尿道に残つた小便を出す瞬間、素早く腰を引く。これしかない。まさにインポッシブル。もし成功したならば、それは神業と呼ばれるだろう。いや、

第一俺は神だ。成功しないわけがない。いくぞ！

「あ……」

俺は何も気にせずトイレから出た。誰にでも失敗はある。その失敗を通じて、人はまた強くなるのだと言つことを俺は知つていてるからだ。

俺は台所でしばらく模索した。迷つた挙句、俺は冷凍肉まんを選択した。少量の水をかける。白い肉まんを流れる水は、さながら天使の涙。ラップをし、電子レンジをセットした。俺はしばらく椅子に座つて待つことにした。その時、俺はうたた寝をしてしまつたんだ。それが悲劇の始まりだつたのかもしれない。

目を覚ますと、1時間が経過していた。俺は慌てて肉まんを見に行つた。冷え切つた肉まんのラップをはがす。それと同時にその肉まんが光り出したんだ。俺は訳のわからないまま光る肉まんを放り投げた。すると、その肉まんから一人の少女が現れた。恐らく年齢は10代半ば。目は淡いブルー、髪型はショートカット。大きめの黒い長そでのシャツの上に半袖の白いパークを重ね、膝の少し下位の長さのズボンを履いている。肉まんのようなもちつとした肌、きれいというよりはかわいい系だ。

「あなた、私を見捨てたわね」

その少女は言つた。俺はとうに彼女が肉まんの精であることを悟つた。

「寝てたんだよ、仕方ねえだろ？」

「そんなのいい訳じやない！ 男つていつもそう！ 自分が困れば

「うだつた、ああだつたつて！」

「な、お前何だその言い方！」

その女はぽい、と後ろを向いた。

「あ、逆ギレするんだ？ もうあなたなんて知らないー。」

「あ、ちょ…。んん…。かつたよ」

「え？ 何？」

「悪かったよ。俺が悪かった、謝るよ」

その女はとたんに笑顔になつた。すると急にその場で泣き出した。

「ありがとう…私今まで色んな男に会つてきたけど、あなたみた
いに素直に私を受け入れてくれる人なんていなかつた…」

「肉まんの精…」

何と声をかけたらいいか、俺には分からなかつた。

「お礼にあなたの願いを一つかなえてあげる」

正直俺は信用していなかつた。こいつが別れの口実を作つているんだ
と、そう思つた。しょせん俺と肉まんは交わつてはいけない存在。
禁断の恋。俺は適当に子供のころの夢を言った。

「悪魔超人に…なりてえ」

いつの間にか俺の目にも涙があふれていた。

「本当に……そんなのでいいの？」

「ああ……ああ……」

俺は泣いていたことを悟られないために必死に声を殺した。俺達はそのまま抱き合つた。

「といつひとがあつたんだ」

「あんた夜中に何昼夜ドラみたいな」としてゐる！？ それが事実なら確実に原因それだよ！ あんた悪魔超人にされたんだよ！！ ていうか最初のトイレのくだり丸々いらぬいよ！ 後、便座力カバー何とかしろ！ 今頃すっかり臭くなつてるから！」

鮮やかな無視。

次郎丸は納豆を食べながら鼻をほじり、耳かきで耳掃除までしている。存外不便でなさそうだ。むしろ使いこなしている。横着の象徴。

「とにかくです、多分それを戻すにはその肉まんの精を探すしかないと思つんですね」

次郎丸は何とも言えない表情で言った。

「いやでもお前、何か自分から悪魔超人してくれ、つづといて今更元に戻してくれとは言いづらいだろ。それに何か照れくさいし」

「そりや夜中に抱き合つた見ず知らずの人（の姿の肉まん）に出会つて照れるなと言つ方が大変だと思いますけど」

とにもかくにも、僕らはその肉まんの精を探すこととした。一番怪しいと感じている場所は冷蔵庫の中。冷凍部屋にはまだ冷凍肉まんが入つている。次郎丸はやっぱやめとかね？と普段よりかなり内向的になつていて、僕は冷凍部屋の取っ手を掴み、言つた。

「ちゃんとケジメはつけなきゃいけませんよ。まだお別れが言えてないんですよね？」

「いや、確かにそうだけどよお。ていつかストーキング野郎に言われたくないんだけど」

僕は問答無用で冷凍部屋を開けた。中には、そのわずかなスペースに体を無理やりねじ込んで、震えている少女がじちらを睨んでいた。「うわあっ！ 何この人！ 確かにかわいいけど！」

次郎丸の話に聞いていたように、確かにきれいな少女ではある。少女はグロテスクに冷凍部屋から這い出た。少女は僕に向かつて言った。

「今の発言、告白と捉えるべき？ でも私には心に決めた人がいるの」

「いえ、違います」

僕は彼女の言葉から間を空けず否定した。そして肝心の次郎丸はと言つといつも大きな態度のくせして困惑している。少女はそんな次

郎丸に気が付いたようだ。

「あ……あなた……」

僕は次郎丸の話すタイミングを作るために言った。

「次郎丸さんから話があるらしいです」

次郎丸は小さく深呼吸した。

「……あの～あれだ。俺確かに悪魔超人になりたいって言つたなんだけ
どさあ。その…やっぱ元に戻してくんねえか？」

「無理」

「これで一件落ちや…え？ 今ここの子なんて言つた？

「あの、すいません。今無理つて…」

「ええ、無理」

続く沈黙。僕らはひとまず居間に移動した。

ちゃぶ台を囲み座る3人。僕と次郎丸、そして肉まんの精である。
僕はひとまず状況を整理することにした。

「え～と、2人は仲が良いみたいですが、お互いのことまだ知ら
ないんですよね？」

少女がうなずいた。

「じゃあ、最初に自己紹介をしましょう。僕はこの神社の息子で、大平アツシっていいます」

「俺は、神田林次郎丸。神様だ」

少女は次郎丸の神様といつ言葉にほんの少し驚いた様子だ。だが、すぐ平静を取り戻し、言う。

「中万華あたりまんかです。肉まんの精霊を少々」

中万華……並べ替えたら中華万か。ちゅうかまんわかりやすいネーミング。すっかりお見合いのような雰囲気になってしまい、僕は「後は若いお二人に任せて」みたいな事を言って出ていきたい気分だ。そんなことを考えていると、次郎丸が言った。

「おい、アツシ。ちょっと一緒に来てくれ」

立ち上がる次郎丸。僕は何が何だかわからないままついて行く。居間のふすまを閉め、僕達は台所の隅へ。

「何ですか次郎丸さん。出て行くなら僕一人で出て行きましたけど

次郎丸は鋭い目つきで僕に言った。

「困った……」

「何が困ったなんだ？ 何か問題でもあるのだろうか。
「さつきあいつ、心に決めた人がいるって言ってただろ」

「はい、次郎丸さんのことじょうづね」

次郎丸の田の色が変わる。

「それが困るって言つてんだよーーー！」

「何ですか？ 次郎丸さんも回想シーンではまんざらでもない感じだったじゃないですか」

だからなあ、と言つて次郎丸は続けた。

「俺にその気はねえんだよ」

「はい？」

「だから、俺が抱いたっていうのはあれ、なんかあいつが泣いていたから慰めの意味を込めてのハグだったわけだ。だから俺は別にあいつのこと好きでも何でもないんだよ」

次郎丸がそんな歐米風な理由での少女、中万華をハグしたとは思わなかつた。てっきり口リコンの衝動が抑えられなくなつたのだと。「あれ？ でもさつき回想の時、禁断の恋とかなんとか言つてたじゃないですか」

「いや、なんか話してゐうちにテンション上がっちゃつて」

呆れた小神である。つまり彼女を誤解をせてしまつてゐるからどうにかしてくれ、と言つてゐるわけだ。と言わても、僕自身恋愛経験は薄い。正直どうしていいかわからない。

「と、とつあえず戻りましょ。あんまり長いと不自然に思われます」

僕達は愛そう笑いをしながら居間に戻る。定位置へと座り、先ほどと同じフォーメーションに。

「ずいぶん長かったね。えっと……次郎丸さん」

頬を赤らめて『る中万華を見て明らかに冷や汗ダラダラの次郎丸。軽率な行動は控よつとつぐづく思わされる。

「わ、悪いな……マン……マンカ」

「……初めて名前で呼んでくれたね……でもそれじゃダメ。メス豚つて呼んで」

いやいやいやいや、この子もかなり変わった子であることが判明。僕の周りにまともな奴はないのか。あ、ユリちゃんはすごいまとも。何ていうか聖母的な……何を考えてるんだ僕は。今はこっちだ。

「あの……マンカさん。さつき次郎丸さんを元に戻すのは無理つて言つてしましましたけど……」

「お前は何で名前で呼んでんだよ。キモイんだよ」

なにこの子。扱いが天と地の差なんですけど。何か怖い。かつあげされそう。次郎丸がそんな僕をフオロードした。

「いや、あの~マンカ。そいつ良い奴だから。話くらい聞いてやつ

てくれよ

何だか今日はすゞく次郎丸が頬もしく見える。背中が大きい。

「次郎丸さんがそういうなら。……私が叶えた次郎丸さんの願い、悪魔超人にしてほしいは、今日の午前4時に実行されました。私たち精靈は一日に一つだけ願いを叶えることができるんです。ですが正確には、叶えると言うわけでなく、一日だけ魔力を貸し与えると「ことなんです。次郎丸さんは昨日確かにこの契約を交わしたので、今日午前4時から24時間は悪魔超人になるという魔力が貸し与えられている状態なんです。貸し与えた魔力を途中で引き出すことはできません。だから明日の午前4時まで、次郎丸さんはそのままでです。」

長台詞で少しわかりづらいが、簡単にいえば今日一日次郎丸が元に戻ることはないということか。だが、逆に変に戻る方法を教えられて、面倒事に巻き込まれるよりは、戻る方法が無いとはつきり言われた方が諦めがつく。もう6本腕の件は諦めよう。今はこの少女だ。

ここまで分かる事は、中万華が次郎丸のことを本氣で愛しているということだ。次郎丸のアシュラマン化現象は明日には直るらしいので、深く考えなくても大丈夫だ。2年4組なら今日一日ぐらい次郎丸がアシュラマンでも何とも思わないだろう。

これからどのようにして次郎丸にその気がないことを伝えればいいんだろうか。普段の登校時間まであと30分。出来ればそれまでに解決したい。僕は中万華に向かつて言った。

「あの～マンカさん。もう次郎丸さんが元に戻ることに関しては諦めます。でも…ひとつだけ言わなくちゃいけないことがあります」

次郎丸のつばを飲む音が聞こえた。

「ん? 何なの、少年A」

「いつにとつて次郎丸以外の人間はエキストラでしかないらしい。僕は次郎丸を肘でこづく。それと同時に次郎丸の目の焦点がブレだした。

「あのなあ、マンガ。そのへあれだよ。俺なあ、お前のこと別に…好きじやない…んだ」

言つた! 案外簡単に言った! 次郎丸の快挙である。中万華がそれを聞いて、一瞬生氣を失つたように感じた。だが次の瞬間にはまた頬を赤く染めた。…え? 何で?

「またそんな冷たい態度とつて。昨日の熱い夜のあなたはどこに行つたのかしら?」

僕は次郎丸に目で訴えた。

(次郎丸さん! 何ですか、この感じ! 昨日はお互ハグしあつただけじゃないんですか!?)

(え? いや多分あれは夢だと思うんだけど…。あれ? マジで? だってでもあれはあれだつたし…。いやでも…あれ?)

馬鹿小神! あれほど女には氣をつけろと僕には言つてゐるくせに。次郎丸が言つた。

「アツシ…これはもう仕方ねえよ

まさか次郎丸は…！」

「マンカ、俺が責任をとろう。俺も男だ、ケジメはつけてやる」別れのケジメをつけるはずが、違うケジメをつけてしまった。何といふことだ。次郎丸が結婚してしまう勢いだ。僕は言った。

「ちょ、ちょっと待つて下さい！ 考えてみましょーよ！ 一夜限りの関係だって世の中にはあるわけだし…それにちょっと年の差が気になりませんか？」

次郎丸は少し若くも見えるが人間年齢で20代後半であることは間違いない。この少女、中万華は僕と同じ年くらいに見える。次郎丸が言つた。

「俺は478歳だけど。人間でいうと16歳くらい」

「私は284歳。人間でいうと16歳くらい」

あらまあ、ずいぶんと長生きなのね。

「ほり、11歳差ですよー。これはきついんじゃないですか！？」

目の色を変えた中万華が言つた。

「愛に年の差は関係ねえだろ、このカス。お前は一生女の尻追いかけてろよ」

「な、何こいつ！ いい加減ムカついてきたよ！ 次郎丸さん、や

めた方がいいですって！！」

次郎丸は腕を組んでいる。組み方を編み出したようだ。

「いや、でも責任は責任だしな」

中万華は次郎丸の真ん中の腕に飛びついた。

「じゃあ早速婚約の手続きを！ …と言いたいところなんだけど…」

「ん？ わざ今までの押せ押せの感じがどこかに消えてしまった。

「私…今借金とうに追われてるの…」

今まで反対してきたがこれはすこし事情が変わった。

「私の父がすごい遊び人でね、毎日毎日ギャンブルギャンブル。拳銃家の貯金を全て使い果たした上に、借金まで作って家を出て行った。私はその借金を肩代わりして、今まで返済してきたの。夜の仕事だつてやつたわ。でも…どうしても残り50万が払えなくて…」

中万華は非常につらい人生を送っているようだ。僕は言った。

「次郎丸さん、何とかならないんですか？」

次郎丸は中万華見つめるだけで何も返さなかつた。

「ちょっと次郎丸さん」

「え？ ああ、何だ？」

次郎丸は意図的に無視をすることははあるが、このよつなことは今まで無かつた。それほど動搖しているところだらうか。僕はもう一度同じ質問をした。

「どうにか…ねえ。俺の有り金全部はたきやあ、準備できねえ額じやねえよ」

「じゃあ2人はもう結婚するんだし、出してあげればいいんじゃないですか？ どうせ次郎丸さん、ここに居候してて光熱費等一切払つてないんですから」

「お前今こじでそれ言つ?..」

中万華は花のような笑顔を見せた。

「良いんですね！ 次郎丸さん」

次郎丸は、ああ任せとけと返した。今日の次郎丸は本当に頼もしい。僕と次郎丸は中万華を家に残し、家を出た。後ろからマモルが追いかけてきた。

「おはようアツシ！ おはようございます先せ… って先生！ 腕多いんですけど！ アシユラマンみたいになつてますよー？」

次郎丸は答えた。

「マモル、もうそのぐだり朝のつむこ一通りやつたから」

「え！ マジですか！ 「めんなれー」

謝る必要はないぞマモル。それが普通の反応なのだから。校門を抜けると辺りの生徒から大量の視線が。アコとココちゃんがこちらへやって来た。アコが言った。

「先生、どうしたんですか！？ イメチヨンですか？ ロスプレーですか？」

次郎丸はどうにからともなく『1・5』と書かれた手持ち看板を出し言つた。

「バージョンアップだ」

「あ～、なるほど。バージョンアップですか」

今ど辺に納得できるポイントがあつたんだ。1・5か。1・5に納得したのか。コリちゃんも言つ。

「格好良いですよ、先生」

仮面ライダー「」を優しく見守る保母さんのような一言。またその微笑みがたまらない。僕の笑顔が気持ち悪いものに変わる。更にそこへ木田がやって来た。

「先生！ 何か今日アシュラマンみたいですね！」

「だから！ 一通りやつたって言つてんだろおおおおーーー！」

木田の両腕、両足、腰を掴む次郎丸。これは今朝のあれだ。

「アシュラバスター！！」

「それをおもむかせ——」

哀れな木田。白眼を向いて、口から変な色の液が出ている。ヨリち
ゃんがものすごく怯えているんだが。ベーコンの歌で素早く治す次
郎丸。このパターンが定番化してきた気がする。

その日の朝のうちに騒がれたものの、昼休みを過ぎる頃には誰も次郎丸の腕に関する何か言う者はいなくなっていた。（朝のうちに質問してきた者に片っ端からアシュラバスターをかけたので、誰も言えなくなつたと言うのが正しい）

時はすでに放課後。僕は次郎丸と一緒に下校した。

「何か今日の次郎丸さんの授業普通でしたね。どうしたんですか?」

僕が次郎丸に質問した。次郎丸は眠たげな眼で言った。

「……そうか？ 別に一緒に緒だろ」

不自然だ。今日の次郎丸はとにかく不自然だ。何と言うか、**霸気が**ない。今朝家を出てからだ。不自然でしようがない。

神社の石階段を上ろうとしたとき、次郎丸が僕の肩をつかんだ。

「何ですか、次郎丸さん」

次郎丸が封筒を僕に手渡して言った。

「ううにさつさづりしてた50万が入ってる。これをおいつに渡してくれ」

「え？ 次郎丸さんから渡せばいいじゃないですか」

次郎丸は早く行け、と言つて僕の背中を押した。僕は仕方なく一人で石階段を上つた。玄関から中万華の名前を呼びながら入る。彼女は居間でテレビもつけずに座つていた。

「マンカさん、これ次郎丸さんが渡しとけって

僕は封筒を手渡した。彼女が言つた。

「彼は？」

「なんかよく分かんないんですけど、石階段の下に

彼女はそう、と言つと玄関へと向かつた。僕は訳がわからないま
その場につつ立つっていた。

中万華は靴をはき、素早く玄関から飛び出した。石階段を確認す
ると、まっすぐそちらへ向かつた。石階段の下には神田林次郎丸が
立つてゐる。彼女はゆっくりと石階段を降りた。次郎丸の横を通り
過ぎようかといつといひで足を止めた。

「気付いてたんですよ？」

中万華が言つた。次郎丸は达尔そうに頭をかいでいる。

「……何のことだ？」

「とぼけないでよ。私だってこんなことするの初めてじゃない。あなたの反応は・・気付いた人間の反応だつた。私が・・・詐欺師だつて」

次郎丸は何も言わなかつた。中万華は携帯電話を取り出し、次郎丸に渡した。

「通報……して。警察じや駄目よ。精靈委員会に」

「何言つてんだ？　お前はまだ何も盗んじやいねえだろ？」

「今まさに盗むところ。現行犯よ」

次郎丸は小さくため息をついた。彼は言つた。

「……人を疑うのに理由は要るぜ？　でもな、信じるのに理由は要らねえだろ？」

「え？　あなた何言つて……」

次郎丸は自分の携帯を取り出すと、彼女の携帯と赤外線通信で番号を交換した。そしてその携帯を彼女に返す。

「俺はお前がただの女だと思つてる。詐欺師でもねえ、俺の嫁でもねえ。ただお互いの勘違いだつたつて思つてんだ。で、今からは……」

「……」

次郎丸は自分の携帯に登録された中万華の番号を彼女に見せた。

「普通の知り合いだ。俺は普通の知り合いにそんな大金貸せねえ。
だから返してくれ」

中万華は無言で封筒を返した。

「本当に……許してくれるの?」のまま、友達でいてくれるの?」

「何を許すんだ? お前は何もしかやいない。ただ勘違いしてただけだ。まあ、何か謝りてえことがあるんならさつきの番号に連絡しろ。いつでも時間作つてやるよ、メス豚」

その場で泣きだした中万華に、次郎丸は気付かないふりをして石階段を上った。

僕は帰ってきた次郎丸に言った。

「あれ? マンカさんはどうしたんですか? それにその封筒……」

次郎丸は小さな笑顔で言った。

「お互い勘違いだつたのがわかつたんだ。だからあいつは俺に金を返して、どつか行つちました」

「ああ、何だ勘違いだつたんですか。良かつたですね」

「……ああ、良かつた」

そう言って立ち去る次郎丸の背中には、しわだらけの赤いプーマのプリントがあった。

翌日。僕は目覚ましを止めてもう一度寝た。

「遅刻！！ 次郎丸さん！ 起きてトセー！」

「何だよウソセーなあ。朝くらい静かにできねえのかよ」

ところが次郎丸の姿は人ですらない、バネであった。

「次郎丸さん！ 今度はスプリングマンになつてしまふよ……」

「え？ マジで？」

僕たちは冷蔵庫に向かつた。冷凍部屋を開けると、そこには淡いブルーの目を持つ少女が関節を変な方向に曲げて入っていた。

「何やつてんですか！ 昨日のは勘違いだつたんでしょ……」

少女はグロテスクに冷蔵庫から這い出で言つた。

「勘違いは勘違いだけど、私が次郎丸さんを愛していぬことに変わりはないの」

「おいおいふざけんなよ、メス豚。お前までストーキングか、おい」

「違ひわ、ここに住むことにしたの」

僕は耳を疑つた。

「はー？ 何言つてんですかあんた！！」

「そーだよ、メス豚。帰りやがれ、このカス」

彼女は頬を赤く染めた。

「ふふふ、もっと罵りなさい。それが私の力になる！」

こうして僕の家に、また変な家族が一人。神様と肉まんの精が家に住み着いてるのは、世界中探し回つてもここしかないだろう。

その日の中万華の笑顔は、昨日よりも晴れ晴れとしていた。

第4章 林間学校だ

鮮やかに光り輝く緑の屋根。耳を澄ませばピーヒョロロ。都会に疲れた僕らの体を優しい風が静かに癒してくれる。

「なあ、おーい。山歩きとかめちゃくちゃだるいんだけど。参加しなきゃだめなのこれ? ロープウェイあんだろ? 歩くぐらいで自然と戯れられたらそりや、楽なもんだよ。あのロビンフッドですらなあ、山と友達になるのはこれ、大変だつたらしきぞ?」

先ほどまでの安らかな気持けをどうしてくれる。

「ちよつと次郎丸さん! せつかく林間学校来たんですからもつとこう、いい雰囲気を作りましょうよ。それじゃクラッシャーじゃないですか。雰囲気クラッシャーじゃないですか」

僕らは現在、林間学校にやつてきている。2年生1学期の最大イベントだ。中万華を家に残すのは非常に苦労した。次郎丸が、

「放置プレイだと思え」

と言つと、何とも簡単に静かになつたが。普段のメンバーはもちらん一緒にいる。今は組ごとに列をなして山を歩いていくところだ。

「だつてよお、ここの林間学校、なんか旅館泊まるらしくじやねえか。どんな情操教育だよ。普通はほら、林間学校専用のキャビンとかあんだけ? 何考えてんのこの学校」

次郎丸の言い分にも一理ある。とこづか、結構正しことを言つ

ている。この中学校は私立のため、所々におかしな点があるのだ。
(私立という設定はこういうところに役に立つ)

僕は次郎丸の言葉に何も返さず、そのまま足を動かした。しばらく歩いていているとまたまた自然の癒し。まるで心を撫でられているようだ。鳥のさえずり、草木のざわめき、しづかなエンジン音。・・・

ん?

「こんな時のためにこれ持つてきといて正解だな。ベストアンサーだな」

そこには優雅にセグウェイを乗りこなす次郎丸が。

「何やつてんですか! ていうかそれ何か前に小泉元首相が乗つてた変な乗り物じゃないですか!」

次郎丸は格好をつけてセグウェイから降り、それを担いで言った。

「変とはなんだお前! 見てみ、すげえ軽いよ? これすげえ軽いよ? 最近のガキは『デザインに凝りすぎなんだよ。機能美って言葉を知らねえのか?』

「とりあえずもう乗らないで下さい。なんか真面目に歩いつてるのがバカらしくなつてきます」

次郎丸はわかつたとつて、セグウェイを片手で担ぐ。彼はそのままそれを振りかぶった。

「え、何? 何でこっちを向くんですか? 嫌だ、ちょっと待つて、理由がわからない! そのまさかり投法をやめ……ぶふつ! …」

頭の中でおかしな音がした。世界で一番早い音。次郎丸は静かにベーロンの歌を唱えた。次郎丸は林間学校というイベントでテンションがおかしいようだ。

多少乱れてきた列の中で、一人の男が僕のもとへやつてきた。木田である。

「アッシ、ちょっとといいか？」

「いつとのシーショットは珍しい。大体いつもは間にマモルがいる。どうしたんだよ」

僕は足を止めずに言った。木田がほくそ笑んでいる。何かまたいることでも考へてるんじゃないだろうか。

「あのせ、一一時頃に俺の部屋に来てほしいんだ」

「一一時と言えば、就寝時間の30分後である。

「何するんだよ、そんな時間に」

「いいから来いって、他の奴もみんな来るから

不安が残るまま僕は承諾した。どうせ一人で部屋に居てもつまらない。

午後3時、2時間の登山を終え、ようやく旅館に到着である。その名は語素露離宿。

「『スローリ宿』ですか」

最中先生がやつて来て言った。

「ロシアを離れた人も素の自分で語れる宿、といふ意味だそ�だ」「いや、なんかもう意味わからないんですけど。単なる趣味でつけたけど、後々適当に意味つけ足しました感全開なんですけど」

「ゴスロリ宿の自動ドアが開くとそこには普通の和服美人が立つていた。年齢は重ねてる方なんだろうが、とても美しく、何よりエレガントである。」

「ようこそおいで下さいました。私、当旅館の女将、座右の銘は壁があるならぶち壊せ、山田清美と申します」

「いや、振り仮名おかしいです」

僕が初対面の相手につつこむのは2度目である。1度目はもぢろん次郎丸。後ろの方から木田が乗り出してきた。

「あのー俺も座右の銘あるんです！虚殺の神って言つんです！」

「ではお部屋のまつを確認させていただきます」

ナイスすかし芸。この女将はなかなかの強者だ。

僕は簡単にロビーを見渡した。そこと広く、中央に四つのソファーが向かい合つように並んでいる。そこには一般宿泊客の姿が見えた。どうやら今日ここに泊まるのは僕たちだけではないらしい。何

やら大きな声で話をしている。

「だから我々の祖国、ロシアは最高なんだよー日本もいいけど、やっぱロシアだねー！」

いや、本当に語素露離ガスロフ！？後付けじゃなくマジで語素露離！？

僕はマモル、モロミン君と同室である。よくこんな数の部屋がとれたものだ。どこにそんな財源があるのか。

部屋に荷物を置くと肩からどっと力が抜ける。

「今日はこれからどうすんの？」

さわやかな汗が非常によく似合つマモルだ。何故か人より荷物がない。モロミン君が答えた。

「コレから」飯の時間テスよ

夕食は和食だそうだ。僕たちは順番にトイレに入つて夕食の準備をすることにした。トイレのドア越しにマモルが言った。

「なあ、アツシー」のトライレンなんかエチケット機能ついてるよー小川の音がするー」

「よかつたな」

その時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。僕らの部屋だ。

「おーい、タイムボカンシリーズ3人組。もつ夕食だぞー」

次郎丸である。ていうか、誰がドロンジヨだ。

「あ、はー。もつすぐ行きます」

「なんか今回の林間学校、俺の影薄い氣がするんだけど」

「知りませんよ」

食堂は上の階である。古じタイプなのか、エレベーターの横にPA^ペカードの自販機があった。興味があるとかそういうわけではない。そういうわけではない。

食堂にはすでにほとんどの生徒が集まっていた。座敷にきれいに並べられたお料理。この前の次郎丸のものとは大違った。その次郎丸はといふと、その辺を歩き回つてあらゆる人物にエビの天ぷらをねだつている。子供か。

僕は出来るだけユリちゃんの近くへ。断じてストーカーではない。恋に目覚めた中学生なんてこんなものである。その僕の隣には例の小神が。

「ちょ、俺今刺身とかの気分じゃないんだけど。すいません！チャーハン下さい！！今日チャーハンの気分なんだよね！！」

「どこのワガママ王様ですか。無理難題を人に押し付けないでください」

厨房のほうから一人のお年を召した女性がやってきた。

「うめんな、お兄ちゃん。今、カイエンペッパー切らしててね」

「カイエンペツパート、あなたもどんだけ本格的なチャーハン作るつもりしてるんですか！いいですよ、そんなに頑張つて要求に答えて下せらなくても！」

次郎丸が優しい笑顔で言った。

「おばちゃん、ありがとな」

頬を赤らめ、恥ずかしそうにうつむくおばちゃん。

「えー何、この感じ！？一人の間に何があつたの！？」

そこにエビの天ぷらを大量に持つたマモルがやつてきた。

「先生ーほり、こんなにもらえましたよエビ天！！」

次郎丸は目を輝かせた。シャイニング・アイ。

「お、よくやつたなマモルー。やつぱり『エビつて癌になるらしいよ
作戦』は完璧だな！」

「ちよつとそれー！作戦名だけでその全容が見えてきましたよー！
確実に嘘でしょー！詐欺でしょー！」

次郎丸は小さなため息をついた。

「本当に……そう思つか？」

「え？ちよつ…あ！危ねえー！危つくエビ天を捧げてしまつと
こうだつたよー！何だよ、こいつー無駄に誘導うまいよー！」

結局夕食はほとんど口に出来なかつた。

僕は一人部屋に戻ることにした。結局コリちゃんとは全く話をしないなが大丈夫。林間学校は一日ではない。これから彼女との時間を使う存分楽しめばいい。ふふふふふ。いけない、笑いがこらえられない。

部屋は思った以上に散らかっている。中学生男子の爆撃跡なのだから納得である。

僕はしばらくテレビでも見て一人を待つことにした。

16インチの画面。上部にはP A Yカードを入れる家では到底お目にかかることのない機器がある。何度も言うが興味があるとかそういうわけではない。現在他の生徒が食事中で、エレベーター前まで誰かと出会う確率が非常に低いなんてことに気付いてもいない。僕は自分の荷物の中から財布を取り出した。が、僕に野口英世を持つて廊下を走る勇気はない。まして、帰りは野口英世がP A Yカードに代わっているのだから、僕の小さな度胸で耐えられるはずもない。

「やめとこう。うん、やめとこう

僕は声を出して欲望が度胸に勝利してしまったのを抑えた。理性とうやつに仲介に入つてもらつたのだ。

「何をやめとくの?」

僕は心臓が爆発しそうになつた。2メートルほどすじいスピードで後ずさりする。

「マ、マモルか。驚かないでくれよ…」

僕は息を整えた。

「つたく、ビックリしそぎだよ、アッシ。でも財布なんか見て何してたの？」

マモルがこうこうとこうとい奴で助かった。これが木田だったら学校中に過剰に装飾された噂が広まっていただろう。

「いや、あの～ほら。家へのお土産とか、明日買おつかな～って

「あ～そりゃ。俺はつきりPAYカードでも買うのかと」

イエス、コーラライト。見事な推理にかなり驚きだが、マモルがPAYカードの存在を知つていしたことの方が驚きである。普段のキャラに惑わされてはいけない。男は皆こんなものである。マモルが言つた。

「PAYカード買つたらこのスーパーファミコン出来るんだよな

疑つてすまなかつた、マモル。本当にお前は純粋でいい子だ。

「マモルが僕の友達で良かつたよ」

「何言つてんの？」

そんな会話をしていると、モロミン君が部屋に戻ってきた。

「二人とも見つめアツテ何してるデスカ？ハツ！！まさか一人はアツテはならナイ関係！？マ

マー！私ハまた一つ大人の階段ヲ上ったよおおお！」

「今すぐ降りろ！違う！まったくもって誤解だ！！！」

マモルは首をかしげている。多分あつてはならない関係の意味が分かつていないんだろう。純真無垢とはまさにこのことである。僕は興奮気味に言った。

「僕らは断じてあつてはならない関係じゃない！今だつて僕はP.A.Y.C.A・・あ」

「ママー！私はマターツ友人の秘密を知つてシマッタよおおおー。つい興奮して自由してしまつた探偵漫画の悪役つてこいつ氣分なんだろうか。

「違う！今のはまた何か違う！遂一で母親に報告するのをやめろー！」

「ママー！私の友人ハ学校のイイヅケに聞いてスーザンミヤコツしてるよおおー！」

「心が汚れてるの僕だけだったよーお前向も悪くなかったよー！どんづん報告してくれー！」

ではさつきのあつてはならない関係とは一体何だつたんだろうか。なんか学校に黙つて携帯持つてきてる共犯とか、そんなことを言い

たかったんだろ？いや、違うか。謎は謎を呼ぶ。

モロミン君は落ち着きを取り戻し、僕らは三人で自由時間を過ごす。いつも時のトランプは楽しいものだ。

午後9時、僕らは、お泊りの定番である大浴場へ向かった。これより20分間は4組の入浴タイムである。右手には下着と着替え、左手にはダイソーで揃えた入浴セット。

エレベーターで木田たちと一緒にになった。木田と同室である具府君と歯岸君が仲良さげにおしゃべりをしている。木田が言った。

「俺もみんなと同室が良かったよ。こいつらガンダムの話しかしないんだ。いい加減俺のWだけの知識じゃ追いつかなくなってきたさ。しかもこいつらの今欲しいものなんだと思つ？」

僕はしばらぐ唸つて言った。

「でっかいプラモとか？」

「違うよ。あいつらに言わせればそれは素人の考え方なんだ。あいつらは集めたものをきれいに保管できる大きな倉庫が欲しいんだつて」

僕らの話に具府が入ってきた。

「グフグフ、みんなもそう思つだろ？僕の作った『アッガイの橋』のジオラマを保管するにはそれぐらいの巨大設備が必要だと思うんだよ～」

僕らは無視した。

思春期である中学2年生の同時入浴。これっていかがなものだろ
う。みんな何と言つたか、成長途中なのだから。作者は嫌だそうだ。
僕らはお互い氣を使って周りを見ないよつて服を脱ぎ、タオルを腰
に巻いた。

4組男子、総勢18名の入浴である。全員が自分のシャワー台を決
め、体を洗い出した頃であつた。

おもむろに开く戸。そこには腰にタオルを巻いていない次郎丸の姿
があつた。僕は頭の中を駆け巡るクエスチョンマークに従い言つた。

「え？ 何で次郎丸さんが？ ていつか次郎丸さん、僕らも思春期なん
ですから少しば股間のほうに氣をまわしてくれると嬉しいんですが」
次郎丸は無視して言つた。

「お前らちゅうひとシャワー止めて静かにしてみる」

更に速度を増すクエスチョンマーク。僕らは言われたとおりにした。
すると！

「や、聞こえるー。」

木田が言つた。確かにこれは…女子の話声である。え？ これマジで？

「次郎丸さん、これはどーから…？」

次郎丸は壁の上部を指差した。そこにはなんとパラダイスへの入口
が。木田が言つた。

「先生！ あれはまさか、漫画とかではなく見るけど、実際ではなか
なか存在しないあれですか！？」

「そうだ、俺も意味も名前もわからぬ一けど、あれだ」

男子は奮起した。「これは行くしかあるまい的な空気が作られる。マモルが僕に言った。

「アツシ、みんな何をあんなに楽しんでんだ？」

清廉潔白。

「何があの・・お約束をしようとしてるんだよ

次郎丸は僕ら18人を6人ずつ、ABCの3つの班に分けた。僕は上空担当のB班。

「皆の者! 今まさに戦いの火ぶたが切つて落とされた! お前たちの欲するものは何だ、木田! !

次郎丸の問いかけに木田は休めの体制で答えた。

「女子のあられもない姿であります、軍曹! !

「違う! もっと具体的に答えろ! !

明らかに木田の顔が青くなつた。少し悩んで吹っ切れたのか、彼は言った。

「吉川さんの裸であります! !」

お前吉川さんが好きだったのか。そうか、でも僕もあそこを登りき

ればユリちゃんの……。これはまずくないか？僕が成功する時はそれすなわち他何名かも成功するということだ。もしそうなればユリちゃんの体がそいつらにも見られてしまつ。

……どうする。僕は正直言つて見たい。だが、他の男子にユリちゃんの姿を晒すのはなんかとんでもなく嫌である。僕は言つた。

「あの～軍曹。これ本当にやるんですか。女子かわいそうじやないですか？」

「甘えたことを言つたな、大平一等兵！お前は何のために林間学校へやつて来た！？カヌー体験か！？乳しほり体験か！？否！そんなきれいごとは通じない！お前はこの林間学校に参加した

時点ですでに同志とみなされた！次にその様な弱気の発言をしてみろ！それは反逆とみなす！いいか！」

僕はあっけにとられた。

「あ……サー、イエッサー」

これは参加しなければ殺される。僕の危機察知能力が脳に直接教えてくれた。僕はマモルと共に非暴力を訴えたい。一応参加はするが、その中で訴えていこう。そうだ、僕には訴える術があるではないか。ツツ「ミミ」という僕の専売特許が。今宣言しよう。ツツ「ミミで世界は救われると。まず手始めにこの紛争を止めてやる。

水中担当A班、上空担当B班、参謀（場合によつて上空）担当C班。これが僕らの隊団である。次郎丸はC班、木田はA班、先ほども言ったように僕とマモルはB班である。水中担当はお湯の共有のために湯船の内側に開いている最もリスクの低い共有口から、僕ら

B班は、先ほど次郎丸が指さしていたあそこから攻めるのだ。次郎丸達C班はその指揮をとる。次郎丸が言った。

「よし、まずはA班とB班同時に行くぞ。両班共に一人ずつ有志を出せ」

僕は最初は行かなかつた。一度田といつのは何かしらの問題で失敗するものだ。ここは心配することはないだろ？

「A班、やはり水中からは、肉眼で捉えることができません」

予想通りだ。僕たち素人に、完璧な風呂覗きが出来るわけがない。B班の男子生徒が小声で言つた。

「軍曹、女子の姿を確認しました。ただ、湯気が多く、非常に見づらいで……ちょっと見えましたあ！？」

あれ！？なんか成功しちやつてるよ！しかもバレていない、パーfectだ。え、ちょっと待つて！普通漫画とかだと結局成功しなくて・・みたいな感じじゃないか！何うまいこと覗けてるの！？

「よし、そのまま湯気が晴れるまで待機しろ。アッシ・・あ、大平一等兵ちよつと来い」

僕の目を見て素っ裸の神様は言つた。

「俺を肩車しろ」

「無理です」

僕に次郎丸を肩車できる力はない。多分。

「いいからやれ、一番見たいのは俺なんだから。中学生の裸なんて滅多に見られないんだぞ?」

「やっぱあんた口リコンですか、とにかく僕は絶対やりませ……せひやらせて下さい次郎丸さん」

ベーハンの歌は効果抜群だ。

「ふんっ……」

僕は勢いよく声を出した。次郎丸は想像していたよりずいぶん軽かつたが、それでも僕にはつらい。

「よしつーいい感じだぞ、アツシーほり、もつとよせりー。」

「次郎丸さん、首になんか変な感触が……」

次郎丸はほとんど関心がない様子で言った。

「気にはんな、みんな一緒だ」

「いや、でもなんか……気持ち悪いんですけど」

僕の謙虚な反撃。

「誰のが気持ち悪いだ、この野郎!これでも仲間の中では1、2を

争い……

「いいです！もつ言わなくて結構です！！」

僕は壁のほうに近づいた。その時である。次郎丸の重さにいっぱいいっぱいになつていて僕は周りが見えなくなつていた。足もとに落ちていた石鹼に気づかなかつたのだ。

「つおつー」

僕の右足はきれいに石鹼の上へ。限りなくゼロに近い摩擦力。僕はそのまま背中側から・・。

「えー、ちよつ、アツシつー！これ死つー？」

鉄球を床に落としたような音。次郎丸の断末魔は『これ死つ』であった。見事に僕のクッショーンになつた次郎丸。マモルが近付いて言った。

「先生ー！聞こえますか！先生ー！」

僕も続いて言つた。

「次郎丸さん！大丈夫ですか！？」

息はしている。というか、神様は死ぬのだろうか？そこは疑問である。

「つー……アツ……シ」

「何ですか？次郎丸さん…」

苦し紛れに伝える次郎丸。

「お前……死ねつ……」

「先生ええええ…！」

マモルの叫びがこだまする。A班木田も急いでやつてきた。

「くそつ、軍曹がやられるなんて…。一体これから誰がこの隊の指揮を…？」

「やつべ、ちよつとこれ血イ出でんじやねえの？なあ、誰か！後ろ見てくれ、これ」

おもむろに立ち上がる次郎丸。木田が言った。

「え？あ、ちよつと待つて下さい……あー出でます出でます、パックリいります」

「マジで？おいおい、頭から血なんて出たの初めての経験だよ。どうだ？血と一緒に何かもつと大事なものまで垂れ流してねえか？ていうか記憶とかこれどつか行つちやつたんじゃない？アウェイしちゃつたんじゃない？」

しばらく続く沈黙。

「次郎丸さん」

僕は呼びかけた。

「その……何でもないんですか？」

「何でもないんですかって、血イ出てんだろーが、血」

いや、それはそなうなんだが。何というか、何だひつ。『の冷めきつた空氣』は。

「いやだって、頭パツクリいってるんですよ?普通もつと死にかけになるでしょ。そしてそのまま覗きは終了でしょ」

「いや、ほら。俺昔から打たれ強いから。世間の田とかにも」

またも沈黙。もつれ、雰囲気ぶち壊しである。その沈黙の中聞こえてきたのは女子の声。

「ねえ、何かさつさから男子の方騒がしくない?」

「うん、私もそう思つて……あやあ……上に誰かいる……覗きよー!」

僕等が一斉に目をやると、先ほど次郎丸に待機を命じられた一生徒が。

「先生ー見つかりましたー! ていつかなんか色々投げようとしてます! 『つる星や ら』みたいな展開になりそうな感じです! !」

その言葉が合図になつたよつこ、壁の上のなんかあいてる所から大量の物体が投げ込まれた。

だるま、ビリー・バンド、三味線、ティラミス、USBアダプタ、四^ス
星球。シンチュウ

「次郎丸さん！何か女風呂から現場に似つかわしくないものばかり飛んでくるんですけど！」

次郎丸はあたりを見回した。

「くそつー。こっちには手持ちがダウジングロッドしかない……反撃できねえ……」

マモルが言った。

「先生！エビ天がまだちょっと余ります！」

「よし、それだ！」

「それだじゃねーよ……エビ天にどんな期待をかけてるんですか！ どんだけ好きなのエビ天！？」

僕らがエビ天を投げよつとした、まさにその時、男風呂の戸が勢いよく開かれた。

「お前ら、うるさいわああああー！他の客からものすごい苦情の嵐なんですけどー！クレーム係の仕事がいかに大変なのか思い知らされたんですけどー！」

黒光りするムキムキボディに見事な角刈り。体育の『ロドリゲス』こと子持先生だ。この戦争は今終戦への道を歩み始めたのだ。

「ほんとお前らねつ！馬鹿なんじやないの！？」の「時世」で女風呂の覗きするなんてほとんど天然記念物だよ！お前らコウノトリ！？違うよね？お前ら人間だよね？これからも順調に増え続けていく人間だよね？だつたら記念物きどりの行動やめてくんね！？なんかもう腹立たしいわ！どんな気分だった！？見てどんな気分だった！？ていうかどんな感じだった！？反省文にものすごく詳しく図解入りで説明しろ！最近の中学生の成長を教育の一環として私に伝えろ！いいな！？」

僕たち4組の男子はロドリゲスからひびく叱られてしました。次郎丸はベーコンの歌で逃げ延びていたようだが、説教されてしまおになってしまったマモルが言つた。

「はあ～、ロドリゲスの説教つて何かの機能ついてるの？出川の声がする」

「それは機能じゃなくて、末期症状つて言つんだぞ。大丈夫か？」

マモルが幻聴を聞くほどの説教であつたということを皆に理解してほしい。時間はすでに午後10時30分、学校側の決めた就寝時間である。ただ、これを守る者がほんのわずかであるということは、すでに常識である。僕は木田との約束を思い出していた。内容を詳しく聞いていないため、閻鍋気分。モロミン君が言つた。

「アツシ君も木田君に誘ワされましたか？」

「あ、モロミン君も誘われてたんだ。じゃあマモルも？」

マモルは右手の親指を立てちろん、と返事をした。他のみんなも

誘っているとは言つていたが、もしかしたら4組全員を部屋に集めるのかもしれない。18人も部屋に入るのだろうか？

午後11時、約束の時間である。僕らは先生達に見つからないよう細心の注意を払つた。幸い木田の部屋は近かつたので、楽に突破できた。部屋の中には全部で10人。さすがに全員ではないようだ。僕はこの不思議な集まりの主催者である木田に質問した。

「木田、今から何するんだ？」

木田は『ディズニー映画の魔女のような不気味な笑顔で言つた。

「ふふふ、これを見ろー。」

木田の高々と掲げられた右手には……。

「ペ、PAYカード！？」「

こいつ買つてきたのか！PAYカードを。さすがに僕より行動力があるようだ。木田が言つた。

「木田、といふことはまさか……！」

「そう、そのまさかだ」

そ、そ、うか。ついにこの時がやつてきたのか。僕の鼓動は普段の3倍速くなる。鼻高々な木田は溜めて溜めて、言つた。

「じゃあみんな！！早速スーアミ大会だ！！」

そのままかじやなかつたあああああ！… そなのが…汚れているのは僕の心だけなのか！？
僕は煩惱を捨てようと決心した。

そのころ次郎丸は。

「チックショ、なんでこれ1000円戻つてくんだよ。頑張れ漱石！お前なら行けるつて！お前がダメだったらもう紫式部しかいねえんだよ。あいつには任せられねえよ」

エレベーター前でお札と格闘していた。

更にそのころドリゲスは。

「……こいつらほんと、無駄に絵がリアルだな。けしからん。なんだ、こんな感じなのか？本当にこんな感じなのか？」

ドリゲスの部屋のドアが開く。次郎丸である。

「ドリゲス、買つてきたぞ……つてお前、こいつよりその図がいいのか？」

「いや、図が良いとかそんなんじゃないからね。これはあの、教育の一環だから。あなたも保健体育の教師なら勉強しといて損は無いんじゃない？」

次郎丸はP A Yカードをテレビの上の変な機械に入れながら言った。

「いや、俺は今からこっちで大人のお勉強するから」

ゆつくりと何かをかみしめるようにうなずくロドリゲス。彼らはPAYカードをスーファミの為に使うのではない。大人の勉強……いや違う。大人の事情に使うのだった。

昔の偉い人は言いました。

PAYカードはその使い方によつて善にも悪にも姿を変えると。

第5章 最終日だ

曇りない月だった。空には今まで見たことのない無数の光。そこに今まで存在していたんだね！が、僕らの町には届かなかつた光。

今日は林間学校最後の夜である。キャンプファイヤーも終わり後は最後のイベントを残すのみ。案外むなしい、不思議な気持ちだつた。3日間きちんと行事は楽しんだし、毎晩スマーファミ大会にも参加した。こんなに楽しい日が続いたのに、いざ終わろうと云うときにはさつぱりしている。

僕はキャンプファイヤーの片付けに参加していた。ほとんどの男子はサボっているが、ユリちゃんが参加していたからだ。彼女が頬を黒くしながら炭を片付けているのを見ると、なんかもう健気で健気で。

「アシシ、お前何ニヤニヤしてるんだ？」

僕は今ニヤついているらしく。

「いや、何でもない。早く片付け済まそう、マモル」

僕たちが炭を指定された場所に投げ込んでいた間。あの男が男子を集めて何やら話をしている。

「いいか、お前らはまだ中学2年生だ。ひよっこだ。うんこだ。だからこそキチンとした性教育を受けなきゃいけねえ！」

集められた男子生徒の中から一人が挙手して言った。

「先生、うん」は言こすぎです

どうやら性教育を教え込んでいるらしい。まあ、次郎丸は保健体育の教師であるわけだから、ここは羊と触れ合つハイジ見守るおじいさんのような田で見守ることにしよう。

「最近のガキはよお、やれできちやつた婚だ、やれ14歳の母だの、キチンと性教育を受けてねえからこんなことになんだよ。いいか、このプリントをよく読めば、性の何たるかが分かるだらうから」

次郎丸は男子全員にあるプリントを配り始めた。暗くてよく見えないが……！」

「ああああああああ……！」

僕は集団の中に走りこみ、プリントを急いで回収した。その瞬発力はバレーの大会でボールが落ちたところをタオルで拭く人にも劣らない。

「お前、何すんだよ！ 僕の作った（ペー）（ペー）の（ペー）のプリント取んなよ！」

「何言つてんですか！ こんな中学生が見るもんじゃないでしょ！ モザイクいるよ、これ！」

次郎丸は自分の持っているプリントの原版を叩きながら言った。

「お前みてえに性情報を簡単に取り上げようとするから子供たちが反発するんだろうが！ 思春期は天の邪鬼だよ！？ いつもやって教えるところは教えるのが大人の役目だつつの！」

僕も負けじと集めたプリントの束を叩く。

「その性情報がディープすぎるんじゃないでしょうか！！ 何だよこれ！ こんな簡単に深いこと教える大人がいるから子供たちが性衝動駆り立てられてんでしょうが！」

まったく油断も隙もない。こういうお友達は子供たちからは支持されるが、親御さんからは嫌悪されるのだ。

清掃作業が終わり、僕たちは山の中腹、語素露離宿前に集められた。次郎丸が前に出て、メガホン片手に大声で言つた。

「ほんじや、今から林間学校お馴染み、肝試し大会を始める！」

体育座りでずらりと並んでいる生徒の中から一本腕が伸びる。

「先生、今は5月ですよ。時期的におかしくないですか？」

「それはしょうがねえよ。本当はまくら投げでもやろうかと思つてたんだけど、それだと球技大会とかぶるだろ？　が、なんか。作者の考えに考え方だ！」

「先生、今小説内の人物として出してはいけない言葉が聞こえたんですけど」

どうやらこれから本当に肝試しをやるようだ。僕はあまり乗り気ではない。考えてもらいたいが、5月半ば、それも山の夜。寒すぎる。自論だが、肝試しを夏にやる理由はお化け役が寒さに負けないようにするためであろう。

いや待て、これは実はチャンスではないだろ？が。肝試しと言え
ば、「ラブコメなんかでは欠かせないカップル成立行事。これで一氣
に主人公とヒロインが近づくなんていうのはもうお約束である。て
いうが常識である。運よくコリちゃんとペアにでもなつてみる。

「きやあっ、怖い！」

彼女が僕の左手に飛びつく。

「あっはっは。まったく、コリちゃんは怖がりだなあ」

ふふ、ふふふ。

「アッシ、またニヤニヤしてんけど？」

妄想から現実へと引き戻すマモルの言葉。

「えー？ ああ……病気かなあ」

僕は目を隠し取り繕う。次郎丸が言つ。

「そんで、4組！ 僕と一緒にお化け役だから、氣い入れて脅かせ

よー！」

妄想はしょせん妄想。コリちゃんとペアになるとか以前に、参加で
きないなんて。いやいや、だが落ち着いて考えてみろ。コリちゃん
は同じクラスだ。お化け通じでいい感じになつたりするかもしれない
い。

4組全員で山を少しづかり登る。じばらくしてからたくさんの小

道具が並べられた空地に辿り着いた。僕はマモルと一緒に傘お化けになることに。コリちゃんは……なんて可愛らしいお姫さんだ。頭の三角のあれがもうなんか素晴らしい可愛く見える。何枚でも皿を数えて下さい。僕とマモルの元に汚い小豆洗いが。木田である。

「あ、お前らはジー・ザス武田の格好してるんだな」

右手をあげた小豆洗い。

「何そのバブル前後の若手芸人みたいな名前！？ 傘お化けだからね！」

マモルが続く。

「あれ？ 僕はジー・ザス武田のつもりだつたんだけど

「えー？ ちよ、マジで……？」

個性あふれるお化けたちの総大将。神田林次郎丸が前に出る。この男が何かをしゃべる時、決まって静かになる。不思議なパワー。

『王立ちで立つ次郎丸は、体中が粘膜で覆われ、口から出てきたもう一つの口からデロデロと何かが垂れ出ている。そのデロデロは大地を溶かす。かぶり物をした次郎丸は言つ。

「よつしゃー！ みんなお化けの準備出来てんな

「次郎丸さん、あなたはお化けじゃなくてエイリアンです。それだと脅かすというよりも残虐的に誰かを殺してしまいます」

「何を言つてんだ、お前。学校にエイリアンは欠かせないだろうが。

「そのネタを一体何割の人間が理解できるのか考えたことがありますか？」

「大丈夫だよ。もし気になるなら、この辺の草とかで装飾したらいんじやないか？」

次郎丸はエイリアンのかぶり物を取った。

「んだよ、お前だつてジーザス武田なんてわかりづらいお化けじゃねーか」

僕は眼をこれでもかとこうくらいひんむいた。

「わっしきから何なんだよ、ジーザス武田ー！」の容姿のどにジーザス要素が含まれてるのー？」

とにかくにも、肝試しは始まった。配布されたお札を男女2人組で山の頂上にあるお寺に置いてくるといういかにもなルール。僕たち4組はそれを脅かすわけだ。

山の中は思つていたより寒くない。これなら風邪は引かないだろう。僕とマモルのダブルジーザスは2人そろつてゴールである寺の近くに隠れることにした。実はここからこう、上手いこと体を乗り出すとユリウちゃん演じる可愛いお姫さんがあるのだ。

「アツシ……。今になつてジーザス武田じゅインパクト弱い気がしてきたんだけど」

マモルの真剣な顔つき。

「それはダメだって！　ただの傘お化けになるし」

ジーザスの基準というのは想像以上に厳しい」様子。

そんな時であった。肝試し第1組の男女がやつてきたのだ。早速身構える僕とマモル。……の前に、お姉さんの脅かし方を見物させてもらおう。コリちゃんは友達と2人で呼吸を合わせている。口をへの字にして、体を前傾に。草むらから手を延ばし、男子の足首をつかみ、そのままめいいっぱい不気味な表情で叫んだ。

「ひんじゃくものがたりいいいい！」

「ぎゃあああああーー！」

なんて無駄にうまいんだ、コリちゃん。こちから見ていても背筋が震えた。女子の方が、もう怖がりすぎだつて、とケラケラ笑つていて。いやいや、実際足首をつかまれてあれをされたら、嫌でも叫んでしまうだろう。

僕はマモルの肩をこづけて言った。

「僕たちもあれ位やつてやるわ」

マモルは当たり前だと言わんばかりに自分の胸を2回叩いた。最初のペアが近づく。6メートル、5メートル。ペアが僕達に近づくにつれて、僕の鼓動は早くなつた。こんなことで緊張しているのか？いや、これは武者震いというやつだろう。

「まんよひしゅうひひひひひーーー！」

僕たちは2人同時に飛びだした。男女も同時に叫ぶ。

「うわあああああーー！ 傘お化けだああああーー！」

「違えええーー！ ジーザス武田だああああーーーー！」

僕たちは他人には決して理解される」とのない主張を叫んだ。

肝試しが始まりすでに30分が過ぎた。僕たち4組のお化けはなかなか評判がよいらしい。いくつか感想を頂いている。少しばかり紹介しよう。

ペンネーム、サザン大好き！子さんからの感想。お姉さんかわいすがる。

ペンネーム、ミスターはじつにさんからの感想。エイリアンってお化け？

ペンネーム、むつこりもこさんからの感想。お姉さん萌え。等など、たくさんのお岩さんファンが誕生している様子。こいつらはあとで電気アンマ決定だ。ライバルは増やさん。

僕とマモルはこれから48組目のペアを齎かす。これまで、見ててイライラするぐらいイチャイチャしてる奴らや、ちょキモイとか言つて男子に近づかない女子なんかもいた。こういつ時の女は強いものだ。というか、僕は今まで強い男と弱い女は見たことがない。

「おーう、お前ら。何人の男子の小便ちびらせた？」

次郎丸である。彼はエイリアンではなく、巨大ザメのきぐるみを着ている。

「次郎丸さん。エイリアンをやめよつといつその決意は認めますけど、それじゃお化けじゃなくてただの自然の驚異じゃないですか」

次郎丸は僕の元へ近づき、サメの鼻先を僕の額に当たった。

「いやいや、でもすげえ怖いだろ」

「ちょ、距離感！　きぐるみの距離感がつかめてないから鼻先当たつてますって。後、確かに怖いんですけど何かまた意味あい違うから」

次郎丸はきぐるみ越しに頭をかきながらマモルにむかって言つ。

「マモル、連れション行こ」^{うづ}「^ア」

マモルははい、と返事をしてジーザス武田の傘を外した。僕は言った。

「え、ちょっと待つて。それじゃ僕1人じゃないですか」

次郎丸は黒い笑顔を見せた。

「何だお前、1人は怖いつてか？　情けねえなー」

という次郎丸はマモルの右手をしつかり掴んでいる。マモルが不思議そうな顔になる。

「先生、何でそんなに手汗かいてるんですか？」

僕は次郎丸の黒い笑顔に負けない表情に。

「あれ～、次郎丸さん暑いんですか？　どちらかと言えば寒いぐらいですけどね～」

「馬鹿野郎、俺はあれ。新陳代謝がすごいから。サウナとか5秒で脱水症状だから」

次郎丸はそう言つとそのままマモルを連れて行ってしまった。

……それにしても静かだ。これなんか出るよ。僕は今お化けの侮辱みたいなことしてるわけだし。そ、そうだ！「ここからユリちゃんを眺めることでこの恐怖を少しでも和らげるんだ！」

僕は隠れている草むらから身を乗り出した。すると、とんでもないことに気が付いてしまったのだ。なんとユリちゃんも今の僕と同じような状況に陥っていたのだ。一緒にいた友人はどこかに行ってしまっているのだろう。お瓶ちゃん「スプレーのユリちゃんの表情が恐怖と寂しさでなんともいじらしい感じになつていて。これは行くしかあるまい！」というか何か文章にできない状況になるという可能性だつてある！「よし、行こう！」

僕は緩やかな傾斜になつている道を下った。ユリちゃんに体2つ分近づいたところで言つ。

「あ、ユリちゃん」

「……え」

ゆっくり振り返る彼女。すると一瞬でその目に大粒の涙が。

「あああああああー！ジーザス武田ああああーーー！」

彼女はどこからか取り出した音楽ファイルを僕の額に突き刺した。噴き出る△型の血。

「うおおおおーーー！」

彼女ははつとした様子で僕の額に刺さったファイルから手を放した。

「あれ、もしかしてアツシ君！『めんなさい、私本当にお化けが出たのかと思って！』

「いやあ、全然大丈夫だよ。むしろ高血圧氣味だしちょうど良いよ、あつはつはつは」

力いっぱい作つた笑顔のまま、そのファイルを引き抜いた。

「大丈夫つて……。なんか少し前の公園の水飲み場みたいになつてるけど……」

「ああ、あの出が悪い感じ？」

「うん、小枝とかが詰まつて勢いが良くないうな……つて、そんなこと言つてる場合じゃないよ！ 早く手当てしないと…」

彼女はまたまたどこからか救急セットを取り出した。まったくファイルといい、本当に準備が良い。何次元ポケットを持っているんだろ？。

彼女は僕の頭に優しく包帯を巻いてくれた。僕は近くの石の上に座り小さなため息をつく。彼女はじっと下を向いたままこちらを見ようとしない。無意味に流れる時間。何か嫌だな。僕は言った。空気を変えるために。

「あのさ、全然大丈夫だから。普段はあの人のせいでもつとひどい目にあつてるし」

「いや……でも」

まづい。何かむづれじや「コメットイー」として成り立たないよ。暗いもの。暗すぎるんだもの。何だ、どうすればいい？誰か～！誰か来て！

その時であつた。誰もいないはずの僕とマモルがいた草むらからガサゴソと動く何か。背筋が凍る。

「ユ、ユツちゃん……、もう本当平氣一、何て言つか一刻も早くこの場を離れた方が良い氣がするんだよねー！」

「え……何で？」

草むらがガサゴソってなつてゐるから、とは言へないよー。ビビリだと思われるからね！

「何でつて、もづね。ほら、あのーあ、僕何か今熱っぽくてねーー！すげーにフラフラするんだよー！これはいけないなー。もう立つてられないなー。まあ一旦どこかへ行こつか！」

頼む、騙されてくれ！

「え、でも……。あ、じゃあここで待つてて。私先生呼んでくるか
う！」

「えー？　あ……確かにそうするのが一番だよね！　でも、でもねー！」

もづ駄目なのか！　もづ呪い殺されてしまつのか！　すると、全てを解決する声が僕の耳に。

「お～い、アツシ～。ビに行つた～

マモルの声である。来たよ。これでもう大丈夫だよ。

「お～い、アツシ～。うあああああ～」

予想外の事態である。マモルが何かガサゴソ動いていた草むらの中に引きずり込まれていったのだ！ ユリちゃんもそれに気づく。

「え～？ 何今のは、マモル君～？」

僕はとっさに彼女の手を引いた。

「逃げよう～ 呪われる前に～」

彼女は目を大きく見開いてうなづいた。

僕たちはしばらく2人で山を下った。冷静になればかなりおいしい状況なんだろうが、僕はそんなことも考えられないくらい怯えていた。今まで非科学的なものを信じていなかつたためか、僕はこういうポルターガイストというやつが大の苦手なのだ。

「アツシ君、もう大丈夫じゃない？」

僕の理性を引き出したのは大野ユリの言葉であった。

「あ……そ、そうだね」

掴んでいた彼女の手を無意識に離していた。もつたいないことをした。

僕は辺りを見渡す。暗くて分かりづらいが迷ってはいないようだ。

……待てよ、今のこの状況はこれ下手したら……。いやいや、何を考えてるんだ僕は。落ち着け。

「でもびっくりしたなあ。アツシ君、急に走り出しどう。ちゅうと面白かったけど

ああ～、そんな笑顔を向けるんじゃない！ 理性が吹っ飛ぶじゃないか。さつきは理性を取り戻した彼女の言葉も今は理性解体屋ですか？

僕の理性を次に取り戻させたのは、目の前の草むらのやわらかであつた！

「えー？ また！」

逃げるヒマもなく草むらから何かが飛び出した！

「ああああああー！」

彼女と僕の声が重なる。

「あれ、あなた……アツシ？」

僕の目の前に現れた人物、それは……。

「マンカさん！？ あんた何やつてんですかー！」

彼女は不満そうな顔で答えた。

「何つて、追いかけて来たに決まってるじゃない。いくら放置プレイとはいえ、彼の姿を3日も見ないなんて耐えられないの。もう色

々無理なの

「じゃあ何で僕たちを追つてきただんですか」

中万華はため息まじりに言つた。

「道に迷つたから適当に誰か捕まえて彼の居場所を聞いたとしただけよ」

ユリちゃんが僕の裾を掴んで言つた。

「アツシ君、この人は……」

「ああ、この人は中万華さん。ウチに最近居候し始めたんだ

中万華が僕とユリちゃんを交互に見つめる。

「で、アツシは思春期特有の妄想で理性が吹っ飛びそうになつていたところかしら」

「ちょっとおおおー、変な言いがかりは止めて下さいよ！」

何だよ！」って、心理学者か！

「理性解体屋とか意味の分かんないこと考えてたんじゃないの、この思春期は

「んな、何なんですか、その憶測！」

何だよ！」いつ、打率1.0割じゃん！ ヒット量産機じゃん！

「とりあえず戻ろう。肝試しも途中で抜けちゃったし、さつと次郎丸さん怒ってるよ」

僕の提案に笑顔でうなづくマイハイー。中万華は興奮して言った。

「え、怒ってるの？　ふふふ？」

僕たち3人は肝試しの前に集まつた広場へと向かった。そこにはすでに4組の面々が。

「おい、お前らどこ行ってたんだよー。俺の忠告を無視して不純異性交遊ですか、こり」

次郎丸は巨大ザメのきぐるみを脱ぎ、普段のジャージ姿であった。

「違いますよ。ちょっと色々あって、この人のせいです」

僕の後ろからヒョイと顔を出した中万華。目から光を失う次郎丸。開いた口が塞がらないとはまさにこのこと。

「ふふふ、次郎丸さん見つけた」

中万華は次郎丸の目の前に南ちゃんっぽくピヨンと移動した。

「おおい、整美係！　この女を捨ててこい。生ゴミとして処理できるからー。」

頬を赤らめる中万華。

「また私の反応を見て楽しんでるのね、いいわ。好きにしなやこ」

「おおい、保健係！この女の頭を治療してやれ！それが無理なら捨ててここ！」

僕は2人の会話を無視して木田のもとへ向かい言った。

「木田、マモルはどう行ったんだ？」

木田は眉間にしわを寄せた。

「え？ お前らと一緒にやなかつたの？」

「ううう」とだ。あの草むらに入っていたのは中万華ではないのか？……いや、違う。もしそうならマモルを引きずり込む理由がわからない。といふことはマモルは本当に……。その時であった。

「お~い、みんな！ すげいの捕まえたぞ！」

マモルが何かを右手にぶら下げる草むらから出てきたのだ。次郎丸がそれに気づいて叫び。

「お前もう一回行ってたんだよ……ってお前何持つてんだ！？」

4組全員がマモルの右手に注目する。彼の右手に握られていたそれは、猿とアルマジロ足して2で割り、尾を2本つけると出来上がり、みたいな生き物であった。僕は少し声を大きくして言った。

「マモル！ 何だよその生き物！？ 見たことないんだけどー！」

「ん？ 何言つてんだよ、これジーザス武田だわ」

「えええええ！？ これジーザス！？ 僕たちはこれの格好をしていたの！？ お化けじゃなかつたの！？ この世に存在するものだつたの！？」

4組全員からの冷たい目。小声で、え？ 普通じゃね？、あいつ今さら何言つてんの？、それでも日本人かよ、ジーザスつて何だろ？、と約1名を除いて僕を批判している。

「ほら、お前ら。いい加減、宿戻るぞ！」

「せうよー。そして私と次郎丸さんは同じ部屋で、どうつー。」

スナップを利かせた次郎丸のはたき。厳しいな、次郎丸。
語素露離宿の前ではロドリゲスが仁王立ちで待ち構えていた。

「お前らあああ！ 今の今まで何やつてたの！？ 神田林先生！ あなたがついていながら何やつてんですかもーうつ！ ていうかその娘は誰ですかあああ！？ 何ですか？ 神田林先生は生徒ほつぽらかしてそのちょっと口りの入った娘といちゃついてたんですか、ええ！？ どうなんですか！ どんな感じだったんですねか！？ 今度ICレコーダーで音だけ録つて、私に頂けないでしようか！？」

次郎丸は大きくため息をつく。

「おい、みんな。保健体育教師として教えとく。にゅう輩を『むつづりスケベ』といふ」

「ちゅちゅひよ、ちゅつとおおおお！ 何を教えてるんですか、何

を！いや、もとより男という生き物は眞むつりスケベなんではないだろつか！私はそうだと思つね！そして、人間というものは……」

僕たちはロドリゲスを放置して宿に入り、それぞれの部屋に戻った。さあ、今日も元気にスーアーファミ大会だ。

翌朝、僕たちは帰りのバスへと乗り込む。何日かぶりのバスガイドが元気に朝のあいさつをする。

「みんな～ん、おはよ～！」わこま～す！

3日間ですっかり疲れ切っている生徒達。無論、そのあいさつに対する返事はキリンの鳴き声の様。

「みなさん、右手を！」覗くださーい。窓から飛び降りて死ねよ～」

ああ、怒つてる怒つてる。

「おい、兄ちゃん。一人でバイクか？」そのまま海に行くのか？ ドラマの見過ぎじゃねーか？」

窓を開けて隣を走るバイクの兄ちゃんに話しかける次郎丸。

「ちよっと次郎丸さん、迷惑ですよ。やめて下さい。ていうかまだここが高速道路であることを読者に伝えてないんですから、わかりづらいじゃないですか」

今言つたように、現在バスは高速道路の上である。次郎丸は窓際に座り、僕がその隣に座つてゐる。比較的前の方の席。悲しいことに

「お前なあ、きつとこのバイクの兄ちゃんだつて自分の大事な何かを探すためにバイク乗つてんだよ。俺はそんなバイクの兄ちゃんの心の隙間を少しでも埋めてやるうとだな」

「あんたにあのバイクの兄ちゃんの何がわかるんですか」

次郎丸はもう一度バイクの兄ちゃんを見る。そしてこいつへ振り向く。

「なあ、バイクの兄ちゃんってなんか長くね？」

「ああ～そうですね。じゃあいつそのことバイクの兄ちゃんということ……つて何を言わせるんですか！ 今関係ないでしょー！」

バイちゃんはヘルメット越しで聞こえにくい声を一生懸命張り上げて言った。

「あの～すいません！ 僕今からバイトの面接あるんで行つていいですか？」

「ほら、聞きましたか次郎丸さん。大事な何かじやなくて、仕事を探してゐるやうですよ。そつとしてあげないと」

次郎丸は眉間にしわを寄せ、口を尖らせ言つ。

「お前なあ、仕事だつて大事な何かだろうが。なめてんのか？ 仕

事といつものを、存在をなめきつてんのか？」

「なめてませんよ、ただ僕は仕事をとても大事なものには思えないだけです。なんと言っても夢がない」

「バッカ、仕事つづーのは夢のためにするんだろうが。仕事がなくなれば夢なんて見れねえんだよ、なあバイちゃん」「

バイちゃんはバイクのハンドルを強く握りしめた。

「あんたらに夢の何がわかるんだ！ 僕だつてなあ、俺だつてなあ、この拳で世界チャンピオンになるはずだつたんだ！ あいつさえ、あいつさえ居なけりや…」

「あいいいい！ バイちゃんボクサーだつたよー しかも夢半ばで諦めてしまい、これから職を探しに行くといつ一番嫌なタイミングだつたよ！」

「おい、バイちゃん。自分が勝てないのを人のせいにするたあどついつ／＼見だ？」「

ええ！？ 「んな微妙なタイミングでこんな微妙な相手に説教モードですか！？」

「ちよ、次郎丸さん。もつやめまじょ／＼。今高速ですから。そういう場所じゃないですから」「

「バイちゃん、てめえ人と話してんだからヘルメットぐらいはずせよ」「

「ダメですよ！ 道交法にひつかかりますからーー！」

次郎丸がいざ説教を始めようという時であった。電動でしか開かないはずのバスのドアが嫌な音を立てこじ開けられた。

「次郎丸さんの説教ーー！」

田を輝かせたその人物は中万華であった。バスガイドの女性が慌てて言つた。

「ちよ、あなた何をやつてるんですか！ これビリすんのーー？」

「私は次郎丸さんの説教を生で見たいの！ 肌で感じたいのーー！」

次郎丸はそんなことを一切無視して説教を続ける。その後ろではバスガイドが中万華をドアのあつた場所から突き落とそうとしている。車内はどよめき、僕はただ傍観する。僕たちの林間学校に安息の時間は無いのである。そういう運命なのだ。あの男がいる限り。

「先生、何か気持ち悪いんですけど……」

木田が手を上げて言った。次郎丸はめんべく答える。

「うるせえな！ 今バイちゃんの人生が決まるかどうかの瞬間なんだよー！ その辺に吐け！」

「オボロロロロロー！」

その場で勢いよく酸っぱい匂いのものを吐き出す木田。

「おいしいいい！ 木田、瞬間じゃないか！ もうと早めに言えよ！ なんでこんなギリギリで手を挙げたんだよー！」

僕達の林間学校に安息の時間は無い。もう一つ付け加えよう。僕たちの林間学校に、つまらないなんて言葉は存在しない。

第6章 ヒーローだ

「決めた、俺バイトするわ」

朝食中、次郎丸の思いがけない一言。中万華が居間に座ることに違和感を感じなくなつてから、どれくらいに経つだらう。

「何言つてんですか、教師はバイト禁止でしょ」

次郎丸は納豆をかき混ぜる手を止めず、大儀そつと言つた。

「ついつてもよお、教師の給料つてメチャクチャ安いんだよ。バイトでもやらねえとやつてけねえよ」

生活費なんか出したこともないくせに何を言つたか。中万華が右隣のジャーラーから「飯をよそう。

「アッシ、次郎丸さんの意見に口出ししないで。彼は絶対な。裁判官なの」

次郎丸はあぐびまじりに親父に確認する。

「別に問題ねえよな、お父さん」

親父はテレビを見ながら箸を止めている。

「あ～、良いんじゃないですか」

「おいおい、この人次郎丸さんのバイトうんなんよつ、星座占いに

興味しんしんだよ」

次郎丸は満足げに微笑むと、納豆に醤油を撒いた。

「んじゃ、わたくし今日からバイトだな」

親父の星座が第三位だと分かったとこでよつやく彼は「ちりこ」向き直す。

「ふ~、えつと。何の話だつたつけ」

やはり聞いていなかつたのか、ここのバカ親父は、中万華がフオロー。

「次郎丸さんがバイトするかどつかつてこじとですよ、お父さん」

「ええ、バイト!? そんなことパパは許さなぶるうわつはー。」

次郎丸から放たれた正拳、飛び散る鮮血に混じつてきらきらと輝くのはしようつぱい初恋の味。これに關してはあまり触れないでやろ?。

「おおおお! 親父大丈夫か!」

親父は鼻を手で覆いながら言つ。

「あ、ああ。大丈夫だ、ていうか赤は今日のラッキーカラーだからな。何か良いことあるんじやないかこれ」

「いや、もうここの時点ではアンラッキーだから」

次郎丸は混ぜるとここの行為の限界に挑むように納豆をかき混ぜ続け

ている。納豆の原型なんてあつたものじゃない。

「じゃ、アツシ。飯食つたら行くぞ。ていうかこの納豆ピーナッツバターみたいになつてる」

といつことで僕たちは朝から有名ビデオレンタルショップ、MATEYAにやつてきている。自動ドアを抜けると広告だらけの床が伸びている。その先には青い棚がずらり。入口に一番近い棚は新作ゲームコーナーと銘打たれている。休日ということもあり小学生が集団を作っていた。DVDは、新作は大々的に、旧作はひつそりとではあるが、その力を失わぬ輝きを持ちながらそこに存在している。邦画、洋画、ある意味ここは最も安全な多国籍国家と言える。

次郎丸は自動ドアから向かって左にあるレジへと歩いた。そこには店長と思しき人物がゲームコーナーに集まる小学生をただ傍観していた。

「あの〜、ここでバイトとして欲しいんスけど」

「いや、今うちバイトとかとつてないから」

やはり彼は店長で間違いないようだ。光の速さで断られた次郎丸。
「いや、俺大型免許とか持つてますよ」

「いや、大型免許はDVDをレンタルする上で何のメリットも発生しないからね。何にもプラスにならないからね」

「いや、俺それに、前の職場じゃオッポコン作りの風雲児つて呼ばれてたんスよ」

「いや、オッポコソて何だよ。そんな『どうだ』みたいな顔されて
も」

ここまで来れば勘のいい読者なら次郎丸の行動に察しがつくだろう。そつ、ベーハンの歌だ。初対面の人間、ましてこれから働くという店の店長によくそんなことが罪悪感なくできるものだ。この行動力にはいつも度肝を抜かれる。

「じゃ、JJのレジは任せるよ。私は裏で何かじょうじょしてるので
から」

僕と次郎丸はMATEYAの制服に着替え、レジに立つていた。次郎丸がお客様との応対。僕がその補助という形。僕も中学生なので、バイトは禁止されているのだが、次郎丸に任せっきりというのはどうでも恐ろしい。何が起こるか分からぬびっくり玉手箱である。それに、個人的にバイトには興味もあつたし、特に苦にもならない。

僕と次郎丸がレジについてから十分の後、小さい子供づれの男性が一昔前に流行った邦画のDVDを持って僕たちの前に立つた。

「すいません、これ一週間レンタルで。あと、ドラマのガリレオのDVDつてあります？」

僕はレジ内のパソコンでガリレオを検索した。どうやら全て貸し出されているらしい。僕はそのことを次郎丸に小声で伝えた。

「あー、今それ無いみたいっスわ。機関車に顔がついてるのならありますけど」

「いやそれガリレオじゃなくて森本レオでしょ。レオなら何でも良いわけじゃないから

男性は軽く突っ込むと、しばらく空を見つめた。

「あ～、じゃあ救命病棟一二十四時のDVDはあります？」

僕はまたすぐにパソコンを操作した。残念ながらこのDVDも貸し出し中だ。僕は次郎丸に向かって首を横に振った。

「お姫さん、残念だ。これも無いみたいつスよ。どうします？ ジヤックバウアーにします？」

「いや、二十四時間なら良いとかそんなことはないから。病院であることが最も大事だから」

と男性。それを聞いた次郎丸は何かをひらめいたように裏から一枚のDVDを持ってきた。

「病院で二十四時間ならこれが良いんじゃないですか？」

男性はDVDを受け取り少し眺める。

「これ、何のDVDですか？」

「『淫乱ナースのHな二十四時間』です」

カーテンの向いへ、秘密の園からやつてきた亞種。男性は奇声を発しながらDVDをレジに叩きつけた。

「おいいいい！ 見て俺、子供づれ！ まだまだ五歳の純粋な子供連れてんの！ ちょ、もううー！」

不気味な笑顔が怒る男性のズボンを引っ張つた。

「ふふふ。ねえ、パパー。インランナビリコ「う意味なのー？ ふふふ、教えてよお、ねえ」

「おこ、じつじてくれるんだよー。アンタのせいで純粹だとばかり思つてた息子の本性を知つてしまつたよ！ 親としてどう対処すればいいんだよー！」

その時、レジの裏から「ハベー」の窓際に置いてある大人の雑誌を手に店長がやつてきた。

「お密様、何が問題がijやこましたか？」

「お前らの性欲に問題があるわあああー。何なの？」の店の店員は思春期みたいな脳の回転しか出来ないの？

次郎丸と店長はその場にしゃがみijやこと話を始める。

「ちよひと、何であるのお密やさんなんに怒つてんの？ 間は何をしたの？」

「いやいや、今のは店長がそんな失礼な雑誌片手に現れるからでしょ」

「お前ら両方の責任だよー。ていうかそういうのは聞こえないようになつてくれないー？ なんでこんなにイライラしなきゃいけないんだよー！」

「のままでは収集がつかない。僕はすぐさまフォローに入ることにした。

「あ、あのすいません。お子さんの本性以外に関しては謝罪しますから」

「もつ結構です！」「んな店一度と来ません！」

踵を返す男性、その後ろを「ねえパパー、ふふふ、インランつてー？」と半笑いでついて行く少年。自動ドアをぐぐった時の男性の目にには、うつすら涙が溜まっていた。

「まあ今回は最初だから多めにみるけどね。次またこんなことがあつたらちよつと危ないと思つてね」

店長から釘を刺された僕たち。反省の意をこめて、きちんと仕事をしようと思ひ。次郎丸のことは少し心配なのだが、まあ何とかなるだろう。

僕たちがレジについてから一時間が過ぎた。心配していた次郎丸のバイトっぷりだが、意外や意外、結構様になつていた。きちんと仕事は果たしている。失敗もあるが、ただちよつとロバードと間違えて清水焼を渡す程度だ。普段はまがいなりにも教師という職業をやつているわけだから、多少の常識は心得ているようである。

ただ、その平穏も長くは続かなかつた。彼女がやつてきたのである。そう、中万華が。彼女は自動ドアが開くと、楽しげに足を弾ませ入店。どびきりの笑顔でレジの前まで移動。

「うふふ、次郎丸さんつ」

「当店では借りる物もない奴の相手をする暇はありません。即刻帰

つて下わこ

次郎丸は中万華と田線を合わせなによひに並べ。

「大丈夫、借りる物ならあるから」

「だつたらわつと借りてわつと帰つてわつと寝て下わこ。永遠の眠りについて下わこ」

中万華は両手の指を交差させ、もじもじと体を左右に振る。

「それは、あ・な・た」

「もう帰れよ！ 何だよその言い回し、古いんだよ！ しかも俺を借りるつてどういうこと…？ もう卑猥なことしか思いつかないんだけど…？」

ついにはずれたリミッター。次郎丸は覚醒するとツツコミにも転じることが出来るのだ！ というのは冗談で。これは単に中万華に対しての意見。次郎丸はさつきも言つたようにある程度常識は持つている男。元タツツコミ側の人間なのかも知れない。

「もう、次郎丸さんったら本当に頭の中はそんなことばっかり」

「お前だよ！ そんなことばっかりなお前だよ！ うお おお、店長おおおー。頭のおかしい密にはどう対応すればいいんだあああー！」

空を見上げ何かに逃避するように叫ぶ次郎丸。そして裏から我らが店長がものすごい形相でやつてきた。

「だあああー もつるせーよ、さつきからー。周りのお客さん
キヨロシキヨロシこんどうがー。何バイトが営業妨害してんのー！
？」

「違うんです店長ー。この冷凍食品がー。」

「冷凍食品ー？ 何を言つてんの君はー。」

ああ、冷凍食品とか言つちやダメだろ？が。僕はすぐさま大声で言
う。

「あ、店長。あ、あのなんて言つか。彼女の生き様が冷凍食品の様
だといつことですー！」

「はいー？ そんな破天荒な弁明されてもー！」

僕たちは公園のベンチに座っていた。中央に噴水、その向こうにはいくつかの遊具があり、小さな子供たちが楽しそうに笑っている。その隣では彼らの母親である女性たちが世間話。暖かくなつてきた陽光が噴水をより美しく見せる。次郎丸と僕の手の中には温かい缶コーヒー。空を見上げ、雲の流れる姿をただ淡々と見つめる。僕たちはそう、クビになつたのだ。人生において初のクビ、なかなか精神的ダメージが大きい。僕はとりあえず缶のタブを上げ、一口飲む。ん？ これよく見たら紅茶じゃないか。僕は思わず溜息が出た。

「おい、溜息なんかついてんじゃねーよ。」

「ああ、いや。今のはあー紅茶かの溜息です。」

「いやいや、今のはおこおいクビかよの溜息だつたよ

言つてからしばりく静かになる次郎丸。本当に溜息をつきたいのは自分なんだろう。適当な動機ではあつたが、最初はうまくいっていたものが壊れるのは、誰でも悲しいもの。

「わつにえば、マンカさんはどうしたんです？」

「縛つてトラックに放り込んだ」

ま、彼女なら大丈夫だろう。それにしても、これからどうしたものか。

「あなたは、かしわモチモチマンですかー！」

それは突然だつた。ベンチに座る僕たちの目の前に現れた全身白タソツの男。首に『賀』と書かれた赤い垂れをつけている。頭は白く丸いものをかぶつていて、そこから顔だけがひょっこりと飛び出す。股間にはなぜだかミニ鏡餅が。年齢は四十代くらいだろうか。あまりの迫力に恐怖すら覚える。とりあえず僕は返事だけすることに。

「いえ、違います」

「やつぱりね！」

じゃあ何で聞いたんだ。

「私はこの街を陰ながら守るヒーロー、モチ、モチ、ムアンです！」

ヒーロー？ 町内会の町おこしの一環か何かだろうか。

「でも、ヒーローにしては結構お歳を取られたるよ! うな」

「人の人生に口を出さないでいただきたい!」

「あ、ごめんなさい」

反射的に謝罪の言葉が出る僕。

「いや、別にいいよ!」

別にいいのか。もうやだ、何かこの人怖い。次郎丸が珍しい動物を見るような目で頭をかいた。

「で、俺らに何の用が……」

言いかけて次郎丸は口を閉じた。モチモチマンという男の股間を見つめる次郎丸。

「次郎丸さん! 確かにそこの鏡餅は気になるけど……遠巻きに見ればただの変態ですから!」

といふが、本当の変態は目の前の全身白タイツの方なんだろうが。

「私はこの街を陰ながら守るヒーロー、モチ、モチ、ムアンです!」

「……え? いやせつとき皿[皿]紹介したよ! 何の理由があつてのりターンズ! ?」

僕が言うと、モチモチマンの頬からは熱が引き、全身の細胞が死ん

でしまつたのではないかどうかいろいろに真つ青になった。

「おこ、めっちゃがっかりしてるよこの人！　一回自己紹介してしまつた」とに対する嫌悪感が半端ないよ！」

次郎丸はモチモチマンとのやりとりに苛立ちを覚えたのか、一度不機嫌そうに喉を鳴らし、言つた。

「で、結局あんた何しに来てんだよ」

「かしわモチモチマンにならないか？　日給六千円で」

「よつしゃ、その話のつた」

「……え？　僕の耳に間違いがなければ、この男確かに「のつた」などと軽はずみな言葉を。

「ちよ、待つて下さいよ次郎丸さん！　かしわモチモチマンですよ！？」これと同類ですよ！」

僕は一生懸命にモチモチマンを指差す。しかし、次郎丸の目には迷い一つある様子がない。

「あのなあ、アツシ。チャンスの神様は前髪しかないって知ってるか？　つかめるにつかんどかねえと、すぐどつかへ行つちまづんだよ」

次郎丸の言い分が決して分からぬわけではない。仕事に寄り好みする気もない。ただ、ただ、かしわモチモチマンは勘弁して下さいと、心の中で願うばかりだ。どうせ叶いつこない、無謀な願い。

僕たちモチモチ戦隊は公園の入口に立っていた。モチモチマンの左手には町が指定しているゴミ袋が持たれている。次郎丸は腕を組んだまま言つ。

「なるほどな、公園の掃除をしようつてわけか」

「先に人の話を聞きなはれ！ 我々、モチモチ戦隊は正義を守る集団。悪の組織と戦いたいけども、実際そんなのいないよね！ 正義は身近な所から！ よつて、今からこの公園の掃除を実施する！」

「……いやおい、俺合つてんじゃねえか。 お前が俺の話を聞けよ

次郎丸がツツコミに回つてゐるという異常な事態。それほどこの男、モチモチマンは曲者である。だが、その曲者も公園の掃除をしようというまともな提案ができるのだ。これには安心。僕たちは早速公園の掃除に取りかかることにした。

僕たちは中央の噴水を基準に公園を一分して掃除するという計画をたてた。僕が入口から向かつて左側。遊具のある方だ。次郎丸とモチモチマンはその逆、ベンチ側である。比較的後者の方が敷地面積が広い。なので、二人。とはいってもまともに掃除をするのかは非常に不安である。

無駄な心配をして仕方がない。僕はとりあえず自分の場所の掃除を終わらせることにした。遊具にはまだ子供たちが残つている。奥様方もそのまま。ベタな風景であるが故に、妙に不自然にも見える。しばらく公園を見渡したが、正直なところゴミが見当たらない。だが、それは上つの美しさ。ほんの少し草むらの中をのぞけば、破れたビニール袋だの、きれいに整頓されたように置かれた空き缶がちらほら。注意してみれば、目に見えない部分にはかなりのゴミ。人間の悪い部分を垣間見たような気がする。

しばらく掃除を続け、太陽が真南にやつてきたころ。僕はいつも

いになつたゴミ袋を持ち次郎丸たちの元へ向かつた。自分の割り当ては大体終わつた、後は次郎丸とモチモチマンの手伝いをしようと思つたのである、が。噴水の向こう側でしゃがみこむ二人組。

「ちょっと、何してんですか二人とも」

僕が声をかけると、次郎丸は慌てて何かを背中側に入れ込んだ。

「今何を隠したんですか？」

「あ？ 何も隠してねーよ。むしろさらけ出し過ぎてるぐらうだよ

僕は無理やり次郎丸の背中に手を回す。

「あ、ちょ！ や～め～ろ～よ～！」

「いいから見せて下さい！」

モチモチマンが僕の体を更に無理やり次郎丸から引きはがそうとする。

「おま、ちょ！ 次郎丸君嫌がつてんだろ！」

「何かさつきからやりとりが中学生チックなんですけど！ そういう細かいボケはいいから！」

僕は次郎丸の手からある雑誌を奪い取つた。それはまだ真新しい成人向け雑誌。

「あんたら何掃除サボつて工口本読んでるの！？ ていうか今日工

口本ネタ一回田じやん！ どんだけネタに困ってるんだよー。それに何が美少女列伝だ、この口リコン共！

次郎丸は先ほどまでの慌てぶりが嘘のよつた静かなたずまい。

「いや待て、アッシ。美少女列伝って名前だけども、載ってるのは全部年増だぞ」

「どうでもいいよ、そんなの！ 何に対するフオローー！？」

次郎丸は僕のツツ「ミ」を咳ばらいで誤魔化し、ベンチに腰を落とした。

「まあまあ、いいじゃねえか。やることはやつてんだからよ

言われて僕はベンチの隣に置かれた次郎丸たちの「ミ」袋を見た。中にはいっぱいの「ミ」。

「あ、本当だ。なんかすいません。でも周りに子供もいるんですから、そういう本は控えて下せいや

僕はモチモチマンに雑誌を手渡した。モチモチマンは頭のかぶりもの中に雑誌をしまいこむ。かぶりものが浮いて馬鹿みたいなんだが、もうつっこむのが面倒くさい。

僕たちは三人並んでベンチに座った。ちょうど木陰になつていて涼しい。モチモチマンといつよく分からぬ奴の隣で僕はあくびをした。

「そういえば、モチモチマンさんは何でヒーローにならうと思つたんですか？」

何となくだった。モチモチマンを見ていれば、十人の内八人くらいは抱きそうな疑問。モチモチマンは背中に子供でも背負つているよう腰を曲げ、感慨深そうに話し始めた。

「私は……昔いじめられていた。つねに周囲からははずれた存在で、私が触れる全てのものには私の菌がつくりしい」

驚愕。モチモチマンの曲がった背中に乗っているのは、子供なんかじゃないんだ。

「いつだつたか、私はこの公園で石を投げられていた。いつものことだ。私はただ泣いて、ただ耐えていた。だが、何故かその日は私をかばってくれる人がいたんだ。その人は、ただ公園の掃除をしておじいさん。私はお礼に公園の掃除を手伝つた。そしたら、彼は言ったんだ。『君は優しい子だね。普通なら、こんなジジイのことなんて誰も気にはしないよ』と。私は思つたんだ。このおじいさんは一人だつたんだと。このおじいさんは一人で、みんなが汚した公園を掃除していくんだと。それが無性にかっこよくて、憧れた。私もこんな人間になろうと思つた。だが、どうしていいのかも分からず、馬鹿な私にはこうこうことしか思いつかなかつたんだ」

モチモチマンが口を閉じると、しばらくの間風の音が聞こえた。黙つて聞いていた次郎丸は一度舌を鳴らし、モチモチマンの背中をポンと叩く。そして彼はその場で立ち上がって言つ。

「まあ、いいやな。でよおモチモチマン、ほれ

次郎丸は右手を差し出した。それを不思議そうな顔で握るモチモチマン。

「何で握手だよ。いらぬーよそんなもん」

次郎丸は右手の親指と人差し指で輪を作った。

「金だよ、金。日給六千円つて言つてただろ」

「何を言つてるんだ、かしわモチモチマン。我々は正義の味方だぞ。そんなお金なんて、ゴモモモ！」

よく見えなかつたが、恐らく左右左右のワン、ツー、スリー、フォー。モチモチマンはすゞい勢いで頬をとする。

「いや、あの。今はその、お金がなくて」

「だつたら下ろしてこ、その銀行で！ 雇い主がそんなでじつすんだ、ボケ！」

公園前にある銀行を指差しながら言う次郎丸。金の話は相当シビアだ。僕たちのバイト代は半ばカツアゲのようにして手に入るようである。

銀行は涼しかつた。空調は最適な温度に保たれている。僕たちはATMを操作するモチモチマンの背中を見つめながら、並んで銀行のソファーに座つていた。

「何か可哀そうにも思えてきましたよ、モチモチマンさん」

「なんことあるかよ、あいつが言つだしたことだぜ？ それであいつが払わねえだの言つてたら、俺たちは役所に駆け込まなきゃならねえ」

次郎丸の言い分にも納得。まあ、しょうがない。僕はふと銀行のエントランスに目をやつた。黒い大きなワゴン車が止まる。その中からぞろぞろと出てくる黒一色の不思議な格好の人々。顔を隠し、手には黒光りする銃火器つぽいもの。

「次郎丸さん、あの人たちは……」

次郎丸は膝を上下にがくがく震わせている。

「あれだろ、趣味だろ。森の中でモデルガン打ち合う人々だわ、あれ

「いや、あのそれにしてはめちゃくちゃ金属チックというか」

「……」

その場に倒れる次郎丸。

「いや、死んだふりは意味ないからー。」

そう、彼らは銀行強盗である。

僕たちをはじめ、銀行にいた全ての人々がロビーの隅に固められた。強盗たちは銀行員に支持し、カバンに金を詰めさせている。人質の中には、泣きだす者もいれば、それを慰める者もいる。そしてこの街を陰ながら守るヒーローは、というと、体育座りで膝と膝の間に顔を押しあて、静かに黙つているだけである。少し時間がたち、わずかながらに人質の小声が目立つてきた。それに気がついた強盗の一人は天井に向かつてその銃を発砲する。

「うわあ！」ついでに！ 黙つてろ！」

破壊された平穏は、戦慄へとその姿を変える。次郎丸が僕の耳もとで言う。

「うるさいって、自分らが原因なのにな。理不尽な奴らだよ、マジで。体育教師か」

「おい、そこ聞こえてるぞ！ 何だその朝礼の臨む学生みたいな態度は！」

強盗が叫ぶと再びロビー内に静寂が訪れた。このままではまずい。下手を打てば命にも関わる。僕は次郎丸の耳もとで囁いた。

「次郎丸さん、この状況どうにかしましょう」

僕の言葉が届いているのか届いていないのか、次郎丸は何も言わず、ただ体育座りのモチモチマンを見つめている。

「次郎丸さん、あの人は役に立たないですよ。それより次郎丸さんのベーコンの歌で……」

僕が言いかけた時、次郎丸の右足がモチモチマンの小さな背中を蹴つた。

「おい、出番だぞモチモチマン」

次郎丸は再び彼の背中を蹴る。だがモチモチマンはそれに気が付いていないようだ、ただ震えている。

「お前、馬鹿だからこれしかないんじゃねーのか？」

「し、しかし彼らは銃を持っている。勝てはしない……」

ようやく開かれたモチモチマンの口からは、震え、怯えきった声が。

「勝てないだあ？ 戦おつともしてねえ奴が何言つてやがる。お前が憧れのじいさんみたいにただの優しい人間を目指してるとていうなら何も言わねえよ。でもなあ、お前はヒーローを選んだんだ。力がないなら、周りの人間を慰めるぐらいの小さな勇気を見せてみろよ。それを他人に任して、自分は静かにしてりや安全つてか？ 笑えねえんだよ」

次郎丸は三度モチモチマンの背中を蹴る。

「てめえの正義も貫けねえ奴が、ヒーローなんぞ語つてんじやねえぞ！」

強盗が気付いたのか、ちらに銃を向ける。

「おい、何を話して……」

群衆の中、一人の男が立ちあがつた。全身白タイツの変態。顔は涙でグチャグチャで、足だって震えてる。だが、彼は立つた。

「わ、私は……モチ、モチ、ムアンです！」

どんなにひ弱でもいい。彼が立ち上がつたという行為 자체が僕たちの心を癒し、安心させるのだ。人は、自分のために頑張ってくれる人がいるということを理解することで、心の底から歡喜する。

「何でお前は？」

「わ、私はこの街を陰ながら……」

彼の言葉を遮るように、強烈な音が耳をついた。国家の安全を守る、白と黒のカラーリングの正義の車。赤いパトランプが徐々に増えていき、銀行の周りを取り囲んでいた。

公園、先ほどのベンチ。僕を含めたモチモチ戦隊の三人がそこに座る。モチモチマンの手には缶コーヒーとくしゃくしゃの日本銀行券。彼は溜息とともに呟つ。

「結局……何も出来なかつた」

次郎丸はモチモチマンの背中を軽く叩く。

「確かによ、お前は何も出来なかつたかもしねえ。でもなあ、立てたじやねえか。顔は涙でべちやべちやだつたけどな。格好良かつたぜ、お前の背中」

モチモチマンはただ地面とにらみ合ひ、体を震わせていく。そんなモチモチマンの手に自分の持っていた缶コーヒーを持たせると、次郎丸はゆっくり立ち上がった。

「そいつは礼だ。良いもん見せてもらつたんだ。あ、でもこれじゃ足りねえか？ そうだな……缶コーヒーと六千円でどうだ？ なあアツシ！」

僕は笑つてはい、と返事した。僕も自分の持っていた缶コーヒーをモチモチマンに無理やり持たせた。そのまま次郎丸と並んで歩く。

振り返りぎゅう。

「私は！　この街を陰ながら守るヒーロー！　モチ、モチ、マンです！」

背中越しに聞こえたその声はがらがらで、わずかに震えていた。だが、とても勇敢で、凛々しい正義の味方の声だった。

第7章 泥棒だ

朝日を浴びると体に良いんだそうだ。僕は目が覚めると、とりあえずカーテンを開けることにしている。体に良いというのももちろんだが、ただ何となく一日のスタートダッシュがつけられるような気がするからだ。

今日も僕はいつものようにカーテンを開ける。温かい田の光を浴びて、全身の細胞が目を覚ますのがわかる。眩しいな。目に對しては少し荒っぽすぎる起こし方だったか。今度はもっと優しく起こしてやろう。

毎度のことだが、一階にある部屋から階段を使って降りていると、居間の方からきやつときやと声が聞こえだす。この数週間で一人も増えた家族の楽しそうな声。今日騒いでいるのは次郎丸か中万華か。僕はあくびをしながら居間のふすまを開ける。

「だから拙者は柚子胡椒が良いつて言つてるでしょうがああ！」

荒っぽい日の起こし方で、目が反抗でもしているんだろうか。ちやぶ台に座っている男性が麻の着物を纏い、背中にパンパンのミリタリーリュックを背負つた知らない人に見える。いやいや、これ以上家族が増えるなんて家計崩壊だよ。ありえないよ。

「ちょっと利理岡さん！ ウチは柚子胡椒使わない家なんですってば！」

どうやら耳も反抗しているらしい。親父がこの人の名前らしきものを叫んだ気がする。大丈夫か僕？ 悩みもあるんじやないか僕？ 僕が自分を慰めようとしていると、次郎丸が後ろからやってきてポンと僕の肩を叩く。

「アツシ、紹介するよ」

「次郎丸さん、嘘だと書いて下さい」

僕は覚悟を決めて畳に腰を下ろした。右隣には次郎丸。その次郎丸の隣にはパジャマ姿の中万華。次郎丸の左腕に二コ二コしながら抱きついている。次郎丸も慣れきった様子で、どこぞの漫画の主人公のように頬を赤く染めることもせず、目のやり場に困るわけでもなく、ただただ無関心。昔こいつ風船のやつが流行ったような気がする。そして、僕の正面には問題の着物にミリタリーリュックの男。ふちなし眼鏡をかけ、頭は天然パーク。ボサボサでだらしがない。

「えっと、じゃあまづこの人を紹介していただけますか、次郎丸さん」

次郎丸はああ、と眠そうな声で言ひと自分の半裸の写真を取り出し、それを後ろに放り投げる。それに飛びつく中万華。厄介払いか。

「え、と、こいつは俺の同僚で利理岡^{りつおか}権田勇^{たけだゆう}。毘沙門天との小神だ」

なるほど、次郎丸と同じ存在か。小神、最近は忘れかけていたが、次郎丸は次期神候補だつたつて。考えてみれば僕はものすごい奴と同居している。

「拙者、利理岡權田勇でござる。リリーと呼んでください」

「で、利理岡さんは何をしに来たんですか?」

利理岡権田勇は瞬間的に悲しい顔をしたが、すぐに光を取り戻す。

「拙者、次郎丸のもとへ遊びに来たのでござる。それよりも、拙者のことはリリーと呼んでください」

「うやらまた家族が増えるわけではないようだ、安堵。僕は次郎丸に向かつてかるくうなづく。

「わかりました、今日は泊まつていかれるんですか、利理岡さん？」

「あの、うん。そのつもりでござる。ていうかその、何かさつきから失礼なのに気付かないでござるのか」

「ああ、利理岡さんをリリーと呼ばないことがありますか？」

利理岡権田勇はちやぶ台に乗り出しながら僕を指差した。

「それえええ！ 分かつてやつたのでござるか！？ 拙者が恥を捨てて一回も忠告したのにそれを無視したのでござるか！？」

僕はその場で利理岡権田勇を指差す。

「あ、ちやぶ台に乗り出さないで下さい、壊れたらどうするんですか」

「あ、「めんなさい……いや待って、今は拙者が怒ってるわけだから」といふから

利理岡権田勇が言いかけると、彼の右隣りから大きな赤い隕石。そ

の隕石は利理岡権田勇の頬を捉え、めり込みながら嫌な音を立てる。だがその被害者はその場からほんの少しも動かず、衝撃を首の筋肉で押し殺した。どうすればそんな状況になるんだ。神は未知の生き物であるとつづくと思われる。そして、利理岡権田勇の右頬にめり込んだそれはまだ半寸のだるまであった。

「「ひやひやひやひやひや」、ビリー！ 呼ばれ方なんて気にしてんじゃねえ！」

次郎丸である。どうも利理岡権田勇の情けない姿にイライラしたらしい。涙田の利理岡権田勇はだるまを右わきに抱えながら立ち上がる。

「 もう気になるようにわざとなのそれ！ ビリーじゃないで「ざる、リリーで」「ざる！ 拙者どうみてもムキムキの黒人には見えないじやん！」

だるまをぶつけられたことより名前の方が大事なのか。何か思い入れでもあるんだろうか。次郎丸が立ちあがっている利理岡権田勇をふくらはぎを蹴る。

「ていうかお前何訳の分かんねー嘘ついてんだよ。俺に頼みがあるんだろ？ 何が遊びにきただ」

遊びに来たと言つのは嘘だつたのか。確かに嘘をつく必要はなかつたように思つ。

「い、いや、拙者はあの……人の接し方とかよく分からなくて。あ、でも彼女はいるで」「ゐる」

「でもの意味が分からないです。言つ必要ないでしょ、今は

とは言つものの、彼に彼女がいるのは驚きだ。見た目のヲタクっぽさとはかけ離れた現実。人は見かけによらないとはまさにこのこと。

「でもその彼女が引きこもりなんで『ジゼル』……」

「え、どうしたんですか」

利理岡権田勇はくしゃくしゃの天然パー・マを指でいじる。何だか気持ちよさそうだ。

「はあ、何故かパソコンの画面にずっと引きこもってると『ジゼル』

「……ていうかマジで『ヲタク！？ それ違いますよ！』 彼女は彼女でもそれはあなたの心の中だけの存在！ その彼女が語りかけてくれる言葉は全て偽り！」

「嘘でござる！ あやたんは拙者のこと好きって言つてくれるでござるー！」

話を本題に戻すことにしよう。

朝食を食べ終えると、自分が息を切らしていることに気付いた。

先ほどの調子で会話を続けていためだろう。いくら普段からの慣れっことはいえ、朝っぱらからこれでは身が持たない。自分に反省。せつかくの休日にもつたまないと思いつつ、僕たちは利理岡権田勇の話を聞くことにした。ちゃぶ台を端に寄せ、居間の中央に僕たち大平家の面々と利理岡権田勇が円を作る。中万華は相変わらず次郎丸にくつ付いている。背中から腰に腕をまわしてぴったりと。顔面を次郎丸の背中に押し付けていて、傍から見るととも不自然で

ある。息がしづらそうだ。

「次郎丸、折り入つて頼みがあるでござる。……あの、そちらのお嬢さんは何をしているでござるか。下手すりや窒息するでござる」

「大丈夫だよ、こいつ肉まんだから」

何が大丈夫なんだろうか。気になるところだが、今しがたの朝食と言い、一向に話が進まない。ここは僕がいつものように仕切り役になるとしよう。きっと将来合コンなんかで損をするタイプだな、僕は。

「で、利理岡さんは何をお願いしたいんですか？」

「おお、そうでござる。次郎丸」

利理岡は言つと、一直線に次郎丸を見つめる。

「その、大事な物が失くなつたんでござる。それを探すのを手伝つてほしいのでござる」

探し物か。それ位なら自分で探せそうなものだが。次郎丸は鼻をほじりながら答える。

「大事な物つてあれか、まともな感覚か？ 残念だが、そいつは取り戻したくて取り戻せるもんじゃねえぞ」

利理岡権田勇は次郎丸に目線で対抗する。ただ、欠片もダメージもない。

「実は……毘沙門天様の宝塔が盗まれたでござる」

ホウトウ？何だそれ。ただ、とても大事なものだと言うのは分かる。次郎丸の眉がぴくりと動いていた。彼の動搖なんて滅多に見るもんじやない。

「あの、ホウトウって何ですか？」

僕が訪ねると、利理岡権田勇は眼鏡をくいつと上げてからため息をつく。彼は足を崩しながら言った。

「宝塔、財宝の神とされる毘沙門天様の象徴とも言える代物。この世界でも、毘沙門天は左手に宝塔を持つとされていたと思うでござる。そのものに特別な力などはないでござるが、とにかく高価で、皆が欲しがるもの。それが盗まれたでござる」

次郎丸は今日初めての真剣な表情になった。ただ僕には分からなかつた。それ自体に大変な力が無いのなら、宝塔を盗まれたところで困るのはその毘沙門天本人だけ。次郎丸がたつたそれだけのために、まして、自分とは担当の違う神の話を真剣に聞くなんて考えられない。この宝塔が盗まれたことに、もっと重大な何かがあるのだろうか。

「権田勇、夜叉と羅刹はどうしてた？まさかあの二人がやられたなんてこたあ……」

「あ、いや。あの二人はあれでござる。腹をくだしてたでござる」

大きく息をつき、眉間にしわ立たせる次郎丸。

「じゃあ何か？あの一人は宝塔盗まれてる間[ひま]してたのか？」
馬鹿じやねーか、ただの」

「気になることは多けれど、まったく話が見えてこない。僕はその場で挙手をした。

「あの、質問なんんですけど。その宝塔が盗まれて、何がそんなに大変なんですか？」

利理岡権田勇は一度次郎丸の顔をのぞくと、何かを確かめるようにうなづき、僕の方を向いた。

「いいでござるか？ セツキも言つたよつて宝塔は毘沙門天様の象徴でござる。それが盗まれたということは、毘沙門天様の信用に関わるんでござる。信用が無くなつてしまえば、毘沙門天様の天界での地位が危うくなる。そんなことになつて神が交代にでもなつたら、この世界を創つていた者が変わることになるでござる。そうなれば世界の一部が創りなおされる。君の存在だつて無くなるかもしれませんいでござる」

大問題であることを理解。僕は何も口だししない方がいいだらう。世界の存亡なんてスケールが大きすぎて実感も湧かない。

「盗んだのは誰か分かつてんのか？」

「ただのバカでござる。一応田星はついてるでござる」

利理岡権田勇は着物のふとじから一枚の写真を取り出した。そこには色ツヤの良い茶色の毛を生やしたタヌキが木の上でどっしきと構えていた。

「ここの辺りで宝塔に目をつけていたのはこのタヌキぐらいでござるな。変化能力を持つていて、簡単には見つからないんでござるな」

「え？ タヌキが盗んだんですか？」

「動物にも、神という存在はいるでござる。今回はタヌキの下級神の仕業でござる」

なかなか興味深い話だ。こんなこと、人間で知っているのは数少ないんじゃないのか？

「ここのなつたら、小神の中でも指折りの能力を持つ、次郎丸に頼もうとこいつになつたんでござるな」

話の内容よりも、気になる話題が出来てしまつた。次郎丸が小神の中で指折りの能力を持つとかどうとか。僕は一旦その話は置いておこうと思つたが、たまらず言つた。

「あの、次郎丸さんつてそんなすごいんですね？」

僕の言葉に驚いたのか、利理岡権田勇は眼鏡の奥の目をまん丸にする。

「あたりまえでござるー。小神が全員次郎丸みたいな万能能力を持つていたら危険でござるー。次郎丸だからこそ信頼出来るんでござる」

「ああ、そうだな。お前だつたら確実に事件起つしてゐるだろ？ な。児童なんたらとか」

咳払いの道を元に戻す利理岡権田勇。

「とにかく、そんな大変なことになつてはいるでござる。次郎丸の力をどうか貸してほしいでござる」

次郎丸は聞くと、一度舌打ちした。「これは何かムカついてるわけではない。次郎丸が面倒くさいということを演技するときの癖である。演技かどうか定かではないが、大抵この舌打ちの後はいい仕事をする。ような気がする。次郎丸はその場で立ちあがつた。

「謝礼は高えぞ、ヲタ野郎」

といふことで僕と次郎丸、中万華、そして利理岡権田勇というメンツでタヌキの気配を追つて近くのコンビニにやってきた。次郎丸によると、この場所が一番臭うんだそうだ。まるでベテラン刑事のような口ぶりである。僕たちはコンビニの店員に話を聞くことにした。自動ドアを抜けると、目の前にはガンダムフェアの文字。こういつのをコンビニはよくやるな。次郎丸はレジであくびをしていた金髪の女性と面向かつた。肌はきれいとは言えない小麦色。古いたイプのギャルである。

「おい、姉ちゃん。最近レジン中に葉っぱが入つてたことはねえか？」

女性ははあ？ と生意気に言つと、次郎丸にガンたれた。

「おっさん何言つてんの？」

「誰がおつせんだこの野郎。うんこみてえな肌の色しやがって

「うわ、超うざいんですけど、ここに…」

「誰がうざこだこの野郎。クレンザーかけて真っ白にしてやるつか

僕は一人の間に割り込んだ。いつまでたつても話が進まん。

「あ、あの、葉っぱはなかつたんですか？」

女性は息を整える。次郎丸と初めて会話をすると、この上なくイライラするんだよな。何だか懐かしい。

「えつと、なかつたと思つナビ？」

次郎丸は僕の頭一つ上から大声で言つた。

「お前なあ、ちょっと考えてくれよ！　なかつたんなら『ない』でいいじやん！　無駄に行数使いやがつて！　今なあ！　作者も困つてんだよ！　利理岡権田勇が登場するといで行数使いすぎたつて！」

「ちよ、そんな制作裏話はいいから…」この会話も作者困るから…」

僕たちが言い争つていると、後ろから聞き覚えのある声が。

「あれ？ アッシと先生？」

見ると、そこには僕の幼馴染、磯野鮎の姿があった。今日も相変わらず男物のTシャツ。下はジーパン、髪の毛ははねまくつて、女らしさの欠片もない。認めたくはないが、ちょっとかわいい顔。き

ちんとすれば女らしさなんて飛び越えて、モテたりとかするんじゃないだろ？

「うわあ、やっぱそうだ。後なんか知らない人もいるけど、アツシの家だんだん家族多くなつてない？ 何を目指してんの？ ゆくゆくはヴィッセル神戸？」

「いや、なんでヴィッセル限定？ 普通そういうときはサッカーチームとか、何かそんなアバウトな感じでいいから。しかもそれ子供たくさん産んで……みたいな新妻のセリフじゃん」

久々の登場にも関わらず、相変わらずのアコ。彼女は利理岡権田勇を見ると首をかしげる。

「で、あの人は誰なの？」

「え、あの……じ、次郎丸さんの親戚」

とつさに出てくる嘘なんてどれも似たようなもんだ。まあ、どうせ何を言つても磯野鮎には興味が無いだろうから嘘を付く必要もなかつたかもしれない。

「へえ。まあ何でもいいけど」

やつぱり。アコは鼻をかきながら続ける。

「じゃなどこで向してんの？」

僕は神に関する情報だけを伏せ、ほんの少し脚色した話をした。自分でもなかなかうまく話をまとめられたように思う。将来脚本家にな

でもなるつかな。

「へえ、何かおもしろそつ

次郎丸が言つ。

「じゃあお前も付いてくるか?」

「え! いいんですか先生?」

目を輝かせるアユ。おもちゃ屋に入った子供みたい。

ということで、僕たちのパーティにアユが加わった。イメージとしては僕は僧侶、次郎丸は戦士、利理岡権田勇は行商人、アユは格闘家だな。中万華はまあ、マスコットで。

僕たちは歩いた。朝っぱらから歩き通し。これはきっと朝にカーテンを開けることよりも体に良いだろうな。でも普段あまり運動しない僕にとってはあまり適切といえない。

「ね~先生。本当にこの辺に犯人いるの?」

磯野鮎は普段から運動している方なんだが、さすがにダルそうだ。まあ、事の重大さを知らないんだから当然。こちとら世界の存亡がかかってるんだ。次郎丸があくびまじりに答える。

「あ~、何かこの辺から感じるんだけどなあ

「え? 先生、何を感じるの?」

墓穴を掘った次郎丸。まあ何とか自分で処理するだろ。

「え、あのだから……オーラ」

「ええ！？ 先生オーラ見えるの！？」

適當な会話だ、まったく。

太陽がだんだんと高くなり、日差しが強くなってきた。夏も近く、まとわりつくような熱気にいら立ちを覚える。朝の涼しさはどこへやら。宝塔を盗んだ犯人も見つからないまま、時間だけがただただ過ぎてゆく。アコのダルさも時間とともに増していった。ただ、中万華が次郎丸の腕に抱きついているのは変わらない。すさまじく暑そうだ。最近何だかんだで次郎丸も嫌がらなくなってきた。慣れは怖い。利理岡権田勇がミツタリー・リュックから何かを取り出した。

「はあ、あやたん。拙者もう疲れたで！」わいわい

ピンクの髪の女の子と田を合わせる利理岡権田勇。女の子といつても手のひらサイズの合成樹脂かなんかで作られたやつ。

「利理岡さん、フィギュア持参してるんですか……」

「アッシン君、これはフィギュアじゃないじゃある。拙者の嫁じゃある」

全身の血が凍つた。驚きを超えて、そこには恐怖すら生まれる。アコが素晴らしい笑顔で言いつ。

「利理岡さんって夢が大きいんですね。でも夢は寝て見るものですよ」

前から思っていたが、アコは案外毒舌だ。昔は僕もよく馬鹿にされ

たものだ。今の利理岡権田勇のよつてつむこたま歩くのなんてざらだつた。

「いこでいじわる、いこでいじわる。あひとあやたんはどいかで拙者の
帰りを待つていろでいじわる」

起きてみる夢も、寝てみる夢も、人に話すと馬鹿にされるもんだ。
僕が昔アコから学んだ教訓。

「……おー、いたぞー!」

それまでずっと黙っていた次郎丸が、今までのうつぶんを晴らす
かのよくな声で言つた。利理岡権田勇もまた同じように叫ぶ。

「あやたんがいたでいじわるか!」

「違えよー、あやたんはこの先お前の前に現れることはねえよー!
タヌキだタヌキ!」

利理岡権田勇は酢昆布を食べた犬のよつな顔になつた。慰めてやり
たいところだが、タヌキが居たつてこつんだから、それどころじゃ
ない。また後でフォローしてやろ。

次郎丸がタヌキの気配を感じ取つたのは公園。前に僕と次郎丸が
掃除をしたところだ。中央の噴水が印象的。今日も遊具には子供た
ちが集まり、その親と思しき方々がベンチに腰を据えている。

「ねえ、アソシ。いよいよ犯人と対面? 何かテンション上がつて
きちゃつたよ、私!」

先刻までのアコとは打つて変わって元気いっぱいだ。やつぱりこ

つはこっちの方がらしいな。

それはおいとして、ついに宝塔を盗んだ犯人であるタヌキの居場所を掘んだ次郎丸はさらにその位置をしぶりこむために集中する。目をつむり、深く息を吸い込んだ。彼は静かにある場所を指差す。公園の右端、鮮やかな緑の大木。その根元だ。僕たちはすぐにそこへ走った。見ると、大木の根元には小さな穴が。小さいと言つてもタヌキが入るのには十分すぎる大きさだ。

「リリでござるか」

利理岡権田勇はその穴の中へ手を入れる。その瞬間、利理岡権田勇の腕をつたう黒い影。素早い。外に飛び出たそれは写真で見た鮮やかな茶毛。例のタヌキの神だ。こんな小さなナリで神様なんだから、人を見かけで判断してはいけないなとつくづく思う（このタヌキは人ではないけれど）。

「おまんら、何者ぜよ！？」

タヌキがスケバン刑事口調で言った。次郎丸が答える。

「なんだチミはってか。そうです、わたすが変なおじさんです」

「絶対嘘だぜよ、それ！　おまはんは人間年齢27歳の小神っぽいんだぜよ！」

「何で俺の身元割れてんだよ！」

タヌキはつるといわいぜよ、と叫ぶとその場に跳ね上がった。そのままから火の粉がこぼれる。

「芽羅増魔！」

次郎丸に向かつてタヌキから火球が放たれた。ていうか今思いつきリドラ工の呪文が聞こえたようだ。次郎丸に轟々と迫まるドラクの呪文っぽい火球。このままでは次郎丸単体に大ダメージを与えられてしまう。せめて芽羅見くらいなら耐えられるだろうが、芽羅増魔はあれマジで別格だからな。それを悟ったのか次郎丸は体を右へさばく。紙一重で避けられた火球はそのまま吸い込まれるように利理岡権田勇の顔面へ。

「ぶあつー！」

利理岡権田勇は体を浮かせ、そのまま先ほどの大木に衝突した。クシャクシャの天然パーマが触れれば崩れそうな物体に。いわゆるドリフ爆発後ヘアーである。

「あああああ！ 大丈夫ですか利理岡さん！」

右手の親指を立て、自らの無事を伝える利理岡権田勇。

「ねえちょっとアッシ！ あのタヌキ、メラゾーマ出したんだけど！ 何あれ！？」

興奮したアコが言つ。ていうかさつきから何となく誤魔化してたのにこの女メラゾーマって言いやがったよ！

「ちょ、アコ！ 僕の苦労を一瞬でブチ壊したよ！ 不自然かもしれないけど一応……」

僕が言いかけると、それを遮るようにタヌキが大声で言つた。

「さつきからこの緊張感の無さは何なんだよぜよー。 第7章にして
よつやく訪れたバトルシーンが台無しだよぜよー。」

タヌキに続いて次郎丸も大声で主張する。

「「つるせーー！ お前もさつきから微妙に『～ゼよ』の使い方間違つ
てんだよー！ 気イ抜けんだらうがー！」

次郎丸は右手を真上に掲げ、ベーコンの歌をつぶやく。その掌中に
はタヌキの放つたそれとは比にならない超巨大かつ、高出力の火球。
さすがに小神の中でも指折りの能力を持つ奴だ。ゆっくりタヌキに向
かい歩を進める次郎丸。冷や汗ダラダラのタヌキ。

「あ、あの～。それは反則だと思つんだよぜよー」

「「つるせー、嫌なら宝塔返しやがれ」

次郎丸がタヌキの目の前で静止した。徐々に下ろされる次郎丸の右
手。

「やめてー。」

タヌキの隠れていた大木から何者かが叫んだ。高い、子供のような
声。

「三郎ー、出でへるなぜよー。」

宝塔を盗んだタヌキの言葉を無視して、大木の中から現れたのは一
匹の子ダヌキであった。子ダヌキはおぼつかない足取りで次郎丸に

向かつて歩く。

「危ないぜよ、三郎！　いいから隠れてるんだぜよー。」

三郎といつ子ダヌキは状況的に見て、このタヌキの子供だらう。小さい体を震わせながら次郎丸を見上げた。

「父ちゃんは悪くないんだ！　全部俺が悪いんだ！」

次郎丸は子ダヌキの言葉を聞くと、しばらくして火球を消した。彼はその場にじやがみこみ子ダヌキの頭をひと撫でした。

「聞いづじやねえか、お前の父ちゃんの話」

子ダヌキは張り詰めていたものを解き放つようにため息をついた。よほど怖かったんだろう。次郎丸の態度に安堵したようだ。子ダヌキはもう一度ため息をついてから口を開いた。

「俺、友達にいじめられてんだ。バカだ、ノロマだつて。そしたらさ、あいつら今度は父ちゃんまで悪く言つたもんだから……。俺くやしくて、父ちゃんはすごいんだって言い返したんだ。だつたら証明してみろよって、あいつらが言つから……。俺父ちゃんに無理なこと言つちやつて」

「なんて言つたんだ？」

「神様の持つてるものを一つ取つてくれつて……」

で、あのタヌキは宝塔を盗んだわけか。最初はただの子供の喧嘩だったものが、こんな大事にまで発展するなんて。分からぬ世の中。

次郎丸はもつて一度子ダヌキの頭を撫でた。

「お父さんよお。親バカは悪い」とじやねえが、犯罪に手を染めるつてのは納得できねえなあ」

タヌキは隠すよつて顔を前足で覆う。

「分かってんせよお、自分がいかに馬鹿なことしてんかくらいは。でも、でもねえ……」

声が震えていた。タヌキは背を向けて続ける。

「子供の前くらいい、格好つけたかっただんせよ……。子供が、私が悪く言われたのに反論してくれたんだぜよ? こんな嬉しいこと、他にないぜよ。だから私も、その期待に答えたかった……」

「馬鹿、違つだらお父さん」

タヌキの言い切る前に次郎丸が口をはさんだ。

「お前はよお、子供に教えないきやいけねえことが一つある。まずはいじめられたら自分でやり返すこと。父ちゃんを巻きこむなってな。自分のことぐらい自分で解決しな。一つ目は、父ちゃんの背中を見ることがある。父ちゃんがどんだけ頑張つてるか、どんだけ苦労してるか、背中を見てりやわかるもんよ」

次郎丸は子ダヌキを抱き抱えると、すく立ち上がる。

「そんでな、父ちゃんはただどつしり構えてりやいいんだ。背中だけ見せてりやいいんだ。それだけで伝えられるほど、立派に生きり

やいいんだ。子供の前で格好つけるなんてなあ、それこそ格好悪いお父さんだぜ？ 一生懸命な姿見せりや、自然とガキも一生懸命にならあ

次郎丸は子ダヌキの耳もとで何かをつぶやいた。子ダヌキは次郎丸の胸から飛び降りると、大木に向かつて走り出した。先ほどの穴に素早く潜り込むと、金色に輝く宝塔を咥えて、再び次郎丸の元へ。

「こいつは返してもいいぜ？」

「あの、私はどう罪を償えば……」

タヌキが言うと、次郎丸は微笑み、タヌキの背中をポンと叩いた。

「てめえの償いは、このガキに見せられるような立派な背中を持つことだ。今度はこんな馬鹿なことすんじゃねえ。ガキが真っ直ぐ育つような、真っ直ぐな背中を持てよ、お父さん！」

次郎丸はタヌキの涙を背に僕たちの元へ。黒くこげた顔を拭いながら利理岡権田勇が立ちあがつた。利理岡権田勇は次郎丸と対面。

「お前らしいでござるな、次郎丸。でも、情けをかけすぎると、今度は自分が不幸になるでござる。あの時だつて……」

「ふんっ」

あの時？ 一体何の話だうか。僕は少し気になつたが、問うのをやめた。というか、何か雰囲気的に聞けなかつたというのが本音だ。中万華が再び次郎丸の腕に抱きつく。今回の件はこれで終了だ。僕は何となくアユを見た。こんな滅茶苦茶な光景を見せてしまつたん

だ。何かしら動搖してるかもしれない。ところが、アユは動搖するどころか、タヌキの親子に対して微笑んでいた。

「ん、アユ？」

「良いお父さんだったね」

僕はああと相槌を打つた。普段よりアユがおしゃかに見えた。こんな奴だったか？ とにかく、僕たちの長い朝はこうして終わりを告げた。

利理岡権田勇はその日のうちに毘沙門天のところへ帰った。泊まるとかなんとか言っていたが、あれも適当に答えていた様子。

「次郎丸さん、あのタヌキの親子どうなったんですかね？」

僕は夕食をつまみながら言った。左腕に中万華を装備した次郎丸は大きくあぐびをする。

「あなた。でもよ、俺のことは尊敬してくれるみたいだぜ？」

「どういう意味ですか？」

「そのうち分かる」

その夜、我が家の玄関にはたくさん木の実が盛られていた。

未完成なものでも美しいものは存在する。ミロのヴィーナスなんてのはその代表。あれは腕が無いからこそ芸術なのだ。もしも腕が存在していたら、あの像の美術的価値は今とは大違いだろう、悪い意味で。時に作品は完成しない方が良いこともあるのである。身近なところで例えるなら、写生会を思い出してほしい。下書きの段階なら納得出来ていても、色を塗ると自分が嫌になることがあるだろう。ああいうのは本当に勘弁してほしい。

僕は朝から第一美術室の片隅で本を眺めていた。並べられた石膏の目線を横目に、ただ眺めている。読んでいるわけじゃない。何故かと言えば、今日は我が中学校の伝統行事、美術祭だからだ。これは、その日一日を生徒、又は教師の芸術作品創作に費やそうというもの。最近の子供は創作意欲だのなんだのが欠如しているそうで。前校長が提案したそうだ。生徒の身分としては授業がなくて万々歳なのだが、普通こういうのは秋にやるべきじゃなかろうか。現在、時系列的には夏休み前という設定なのだが……。作者は「私立」というのを魔法の言葉か何かと勘違いしている様子。

まあそういうわけで、僕は朝から真面目に作品づくりに勤しんでいるわけだ。とは言つても、何を作ろうかも決まらず、ただいたずらに時間が過ぎていくだけである。このままでは何も作品が出来ないだろう。僕は魔が差し、もといアイデアを求め、他のみんなの状況をうかがうことになった。これが後の後悔の原因になるとも知らず。僕はまず四組に向かうこととした。あそこなら誰かがいるだろう。僕は四組のドアを静かに引いた。教室では生徒が黙々と作業している。個人でひたすら作業に没頭する者もいれば、何人かで集まっておしゃべりだけ楽しむ者もいる。そんな中、教室中央には人の熱気を感じなかつた。そこにあるのは黒い塊。僕はゆっくりとそれに近づいた。表面はざらついているように見える。そして気が付いたのだ。

それはおやじく、う ジヤんであると。

「おーいいー。まさかの一発田からの下ネタ！？ リアルすぎるよー。」

そう、そこに存在するひ じはやりや もうリアルであった。色合い、質感、形、どれをとってもまるで健康児のひ じである。

「おー、アツシ。俺の作品に田を止めたみてえだな」

巨大なひ じの陰から身を乗り出したのは居候、神田林次郎丸であった。

「あんたが、これ作つたの！ 何で朝っぱらからこんな下ネタに走るかなあ、本当！」

次郎丸ははあ？ と頭をボリボリかいた。

「誰の作品が下ネタだつて？ これが？ 俺の作ったこれがう こに見えたのか？ おいおい、アツシ、マジだつたらちょっと引くんだけど。お前小学生？」

「え、あ、違うんですか？」

「違うんですかって、当たり前だる、これ。俺もう結構おっさんだよ？ う こなんか作るわけねえだろ」

どうやら恥ずかしい間違いをしてしまったようだ。確かに次郎丸もいい大人。う ことこののはあまりに馬鹿馬鹿しそう。

「えつと、じゃあこれ何なんですか？」

次郎丸は胸を一回叩くと、白邊げに答えた。

「あれだよ、暗黒物質『モーモンカラーテルヤツライト』鉱石だよ
おい待てえ！ 今明らかに肛門からでるやつって言つたよー。何
だよ『モーモンカラーテルヤツライト』鉱石つて！ ちょっとマカライト
鉱石チックに言つなよ！」

次郎丸はまたまたはあ？ と頭をかいた。

「お前知らねえの？ まあ暗黒物質だしな、知らなくて当然かもな。
まああれだよ、この作品のタイトル見ればお前も理解するだろ？」

「え、タイトル？ 何なんですか、一体？」

タイトルだけで理解できるとは思わないのだが、一応聞いてみると。

「じゃ、発表しまーす。タイトルは……『今朝』だ」

「あんたそれ今朝のう こでじょうがあああ！ ああ理解したよ
！ その物体が完全にう こであるということで僕の意見がまとま
つたよ！」

次郎丸は聞くと、不満げに口を細めた。そして何か思いついたよう
に口を開く。

「お前、俺の作品をビウヒウヒ前に他の奴のを見てみろよ。愛の

かけらもねえじゃねーか

「次郎丸さんの作品にも愛は感じませんよ。むしろ田頃のストレスをぶつけていくようにしか見えないです。みんなはもつとまともな作つてますしね」

次郎丸は腕を組み、目を細めた。まるで悪だくみをする悪人のようなツラ。

「ほら、そこまで言つたら見て回りうじやねえか。他の奴の作品をよ?」

次郎丸の一言により、僕のこれから予定が決まった。次郎丸と共に、僕の言葉の真偽のほどを確かめようツアーだ。どうせ周りの作品を見て回るつもりだつたし、誰と一緒に問題はない。

ということで僕たちは一階廊下を歩いている。普段ならこの廊下は上級生の私有地のように扱われているが、美術祭に限つては公共の場へとその姿を変えていた。僕と次郎丸は学校中で自由に創作活動をする生徒達を見て回っていた。

「ほら、次郎丸さん見て下さいよ。みんな真面目でしょ?」

「う……まあ確かにそうかもな」

今回は僕の言い分が正しいようで、久しぶりに次郎丸を言い負かした。何となく優越感。

「次郎丸さんつー!」

と、いきなり僕たちの田の前に飛び出るセーラー服。驚きに田を焼

かれながらも、必死に相手を確認する。そこに立っていたのは肉まんの精霊、中万華であった。

「ちょ、マンカさん！ ウチの制服着て何をしてるんですか！」

そう、中万華の来ているセーラー服は我が中学校のもの。普段スカートを履いてるのを見たことが無かつたから目新しい。

「何してるって、私もこの美術祭に参加してるんじゃない

してるんじゃない、などという事を言われても僕の頭の中はwhyy?でいっぱいである。

「へ~。で、何作ってんだ？」

次郎丸が聞くと彼女は頬を赤らめ恥じらいながらカメラを取り出した。

「一応、写真なんだけど。だから次郎丸さん、脱いでっぷは！」

次郎丸は一瞬何かの恐怖を感じたのか中万華の額に掌底。その場で彼女は息を荒げている。

「いや、意味分かんねーよ。今の接続詞はおかしいだろ。ていうか俺に攻撃されて息を荒げるな」

「ふふふ、荒げるなんだなんて。そんな風に言って私の反応を見て楽しんでるのね。いいわ、存分に楽しんで。むしろもつと言つて！」

僕たちは中万華を放置することにした。

「おい、アツシ。あいつはどうなるんだ？　あれはまともな作品、いや、まともな神経なのか？」

「あ、あの人は前から変ですから、例外です」

僕たちが次にやつてきたのは宿直室である。次郎丸に、同じ教師の作品を見てもらおうと思い立つての選択。本当はマモルの作品でも見せたいんだが、マモルはあいにく野球の試合が重なり今日はいい。なので教師。誰が今日の宿直なのはわからぬが、いくら最近の教師が犯罪よく起こしてると言つても、基本的には真面目な人間の職業のはずだ。きっと眞面目な作品をつくっていることだろう。僕は宿直室のドアを失礼しますの一言を添えてゆっくり引いた。

「あ、神田林先生と大平君。悪いけど先生今から美術鑑賞だからね、邪魔しないでくれる？」

と、宿直室であぐらをかき、DVD数枚とにらめっこしていたのは体育教師子持先生、通称ロドリゲス。ガタイの良さより顔の大きさの方が気になる、一般女子生徒から気持ち悪いと言われるタイプだ。

「あ、すいません。何のDVDですか、それ」

「え？　何つてこれほら。あれ、芸術作品。もうそれ以外の何ものでもない」

次郎丸はずかずかと宿直室にあがり、ロドリゲスの持つていたDVDを覗きこむ。

「お、これ新作じゃん」

僕は宿直室の入口から次郎丸に問いかけた。

「何の新作ですか?」

「『お隣さんは痴女シリーズ』の新作

お隣さんは痴女? それってただの……。

「大人のDVDでしょうがああ! 何が芸術鑑賞…?」

「いや、待て大平君! 先生は決して卑猥な気持ちで見ようとしたんじゃないぞー! 本当もう、芸術として見るから。先生の中じやんそれは芸術だからね!」

「いや、お隣さんが痴女であることを芸術という概念の枠組みに放り込んでいることがもう卑猥ですよ! ていうか朝からなんかこんなネタばっかだよ! 作者の意図が分からん!」

僕は正直つらかった。僕の周りにはこんなのしかいないのかと。

「ねえ、次郎丸さん! やっぱり私放置プレイは耐えられない!」

僕の後ろから頭を突き出すのは中万華。別に放置プレイをしてたわけではないんだが。自分自身で放置プレイだと思いこみ、それに耐えられずやつてくる。自分をいじめているのか楽しんでいるのか、自分自身に嘘を付いているのか、なんなのか。謎は深まるばかりである。

「おう、ちょっと待つて。今行くから。それとロドリゲス、宿直

「室の使い方をもう一度よく考えた方がいいぞ？ 結構人来んだから、場所考えろよ」

「ちょ、私はマジそんなんじゃないからね！ お隣さんになんて何の期待もしてないからね！」

叫ぶロドリゲスを背に、僕たちは宿直室を後にした。

新たに中万華を加え、再び他人の作品を鑑賞しようツアーハ始まつた。先ほどからただのツツコミツアーハなつていてるが、本番はこれからである。今度こそまたもな作品を鑑賞するのだ。その決意を胸に次にやつてきたのは一組の教室。我が四組から一つ教室をまたいだ所。日当たりが他の教室よりも良いので、休み時間になるとたくさんの生徒がここに集まる。明かりを求めるのは人間の本能なのだ。

ふと教室中央を見ると、留学生モロミン君が紙に何かを熱心に書いていた。モロミン君はおかしいところもあるが、基本的にピュアで真面目な子である。モロミン君の作品を見せれば、次郎丸との対立も収まるだろ？

「モロミン君、何書いてるの？」

僕は次郎丸と中万華よりも一步前に出て言った。モロミン君は顔を上げ、真っ赤になつた眼で僕を見つめる。

「ワタシは今戦地の父ニ送ル手紙を書いてイマス」

……お、重い！ 重すぎる！ 何で泣いてるのモロミン君ー…？ お父さんに何があつたのー…？

「で、モロミン。その手紙の横に描いてるのはなんだ？」

次郎丸が手紙の端を指差した。モロミン君はほんの少し微笑む。

「コレは……、父の似顔絵テス。下手ナシショウ?」

モロミン君んんんん！ やめて！ 微笑まないで！ その眼にたまたま涙を気にしながら微笑まないで！

「そ、そつか。じゃあ、頑張つて書いてね。行きましょう、次郎丸さん、マンカさん」

「あ？ まだ他の奴の見てねーだろ？が」

「いいから、早く！」

僕は次郎丸の手を引いて一組のドアを引いた。

「はあ、なんかさつきから一向にまともな美術作品作つてる人がいない……」

僕たちは三階廊下を歩いていた。僕は愚痴とため息を同時に漏す。

「やっぱお前、いねーんだつて。みんな思春期だから。頭ん中じやなんやかんやでいっぱいなんだよ」

「やうよ、現にここに次郎丸さんとなんやかんやすることで頭がいっぱいの女がいるわ」

お前はだまつてろと言わんばかりに中万華の側頭部にげんこつを押し付ける次郎丸。微笑む中万華。

「でも、きっとここのならいるはずです。僕は信じています」

僕が立ち止まつたのは美術室。最終手段ではあるがここにまともな作品を作つてゐる者がいなければ、もうこの学校には光が無いと言つても過言ではない。そもそも、普通ならこんなところに来る必要さえないはずなのだ。

「じゃ、行きますよ」

僕が振り返ると、じくじくうなづく次郎丸と中万華。僕は背筋を伸ばし、ドアを開けた。

「あ、次郎丸。おはようござります」

藍色の着物にミリタリーリュック、そしてフチなし眼鏡。美術室の中央に座つていたのは次郎丸と同じ小神、利理岡権田勇だ。

「利理岡さん！？ 何やつてんですか、こんなところで…」

「なにして、美術祭に参加してただけじゃある。それ以外になにか理由が必要でござるのか？」

「いや、参加してゐる理由は結構必要だと思ひます」

利理岡権田勇はしばらく考へるフリをして頭をかいた。

「それはそうと、一体何の用でござるか。拙者は作品づくりで忙しいでござる」

「悪いな、ちよいと他の奴のを見て回つてよ。お前は何作つてんだ？」

次郎丸が問いかけると、利理岡権田勇は不敵な笑みを浮かべ持つていた筆を僕らの方へ向けた。

「ふつふつふ、拙者の作品は並大抵の人間には理解できないでござるよ」

そして利理岡権田勇は右手に持つた自らの作品を僕らの前にかざした。

「そ、それは……」

ひらひらとした質感を損なわぬよう丁寧に削られたビニル樹脂製のセーラー服。実際じやあまずお目にかかることがない短すぎるスカート、そして太ももまであるハイソックス。どんなモデルでも得ることのできない抜群のスタイル。最も着眼される点はその瞳の大きさ。顔面の三分の一はある。そしてこれら的情報から導き出される答えは。

「校内で美少女フィギュアを制作！？」

利理岡権田勇は満面の笑みで胸を張る。

「どうでござれるか、このリアリティ。まさに拙者の嫁としてふさわしいでござるん！」

次郎丸が無言で額チヨップ。

「うわ、次郎丸さんいきなりですね」

「いや、何かめっちゃビックリした。友人ながらめっちゃビックリした」

利理岡権田勇はダメージを受けた額に手を当て、半泣きで言った。

「ちょっと…何で…いるか、美少女フィギュアを作る」とがそんなにいけないで…いるのか！ 「畠とくで…いる… 全てのヲタクに対する畠とくで…いる…」

「こや、別に悪いことは言わねえよ。でもほり、ビックリしたから」

次郎丸の言つ通り、悪いことではない。趣味に没頭することはいいことである。だが、校内で美少女フィギュアを作るとこう行為はマネしないでね。

「でも次郎丸さん、私は彼と同じ恋に生きる人間として共感できる部分はあるわ」

「わーお、マンガちゃんは優しい…」

「ちょ、やめて。セクハラだから」

「ええ… 話しかけることがセクハラ…？ 挿者の存在ってなんなの…？ あやたくん、みんながいじめるで…いる…」

お手製のフィギュアに話しかける利理岡権田勇。もつ彼のことは放つておいてここを離れようと思つたが、読者の皆さんに異論はないだろうか。ていうか、もう離れることにする。

僕は思う。この学校にはもつまともな作品づくりをしている人間などいないのではないか。しばらく次郎丸、中万華と校内を歩き回つたのだが、中学生らしい行動をしている奴なんて一人もいないのだ。

保健室に行けば、木田が吉川さんの写真（盗撮）を花で飾り付け、木工室へ行けば具府君や歯岸君がガンダムのジオラマを制作。アコに至っては校舎裏で気の棒を振り回し、「月牙天衝！」と叫ぶ始末。出ると思つてゐるのか、おい。

僕たちは歩いた。最後の希望に賭けて。この小説のキャラはもうほぼ出揃つてゐる。残るは一人。そう、ユリちゃんだ。

「きつとユリちゃんなら大丈夫です。きつとまともなのを作つてます」

僕は廊下を歩きながら言つた。次郎丸は少し疲れたようで、溜息まじりにこゝ返す。

「お前よお、ちょっとユリを美化しそぎじゃねえか？　いざ何かあつたとき幻滅するぞ」

「大丈夫です。僕の妄想の中のユリちゃんはドジっ子ですから」

「何が大丈夫なんだよ。少なくともお前の頭は全然大丈夫じゃねえよ」

次郎丸の言葉にわずかに傷つきながらも、僕は真っ直ぐ歩を進めた。見据えるのは屋上への階段。ユリちゃんが友達と屋上に出ているらしいという情報を手に入れたからだ。階段を上の時間が非常に長く感じられる。きつと大丈夫だという保証はどこにもない。これはあ

くまで僕の願い。もしかしたら……。そんな矛盾した思いが僕の胸を突き刺す。

屋上へ出るドアの前で一旦足を止めた。何が起きたか驚かないようには準備が必要である。僕はゆっくりとドアノブへ手をかけた。そこには確かにコリちゃんの姿があった。何をしているのだろうか。コリちゃんの友達が本体を抑え、コリちゃん本人がドライバーでその……。僕は何も言わずドアを閉める。

「おい、アツシどうしたんだよ。コリはいたのか？」

「そうよ、いきなり閉めるなんて。顔を合わせるのも恥ずかしいの、この思春期は」

次郎丸達は後ろからよく見えなかつたようだ。いやいや、僕だってよく見えなかつた。でも明らかにおかしい光景ではあつたのだ。まづコリちゃんが美術祭でドライバーを持ち出してゐることがもうおかしこのである。

「いや、もう今日はやめにしません？ なんていうか、ほら。もう僕が悪かつたってことで良いですから」

「いやでもコリが何してゐるのか気になるじゃねえか」

「だつてあの。ほら、女の子には知られたくなことの一つや二つあるだらつ」

中万華が間に入る。

「私は次郎丸さんに何を知られてもいいわ。ちなみに今日は私の子の日なの」

「」ちが知りたくねーよ、そんなこと」

次郎丸は中万華にツツ「ミを入れると、僕の体を押しのけ無理やりドアノブに手をかけた。

「あ、ちょー、ダメ！」

僕が声をかけるも虚しく、すでに薄暗い階段にはドアから漏れた一筋の光が伸びていた。

「あ、先生にアツシ君。マンカさんも」

「何をやつてんだ、お前ら」

コリナちゃん達はドライバー片手に掃除機を分解していた。

「えっと、田立のサイクロン掃除機はどんな構造になってるのかなあって」

「で、分解してたのか」

「はー、分解してました」

天使のような笑顔から放たれる強烈な言葉。ロングコートチワワ型テポドン発射装置と比喩させて頂く。

「あれ、みんなに言つてなかつたつけ。私ね、電化製品が好きなの」

覚悟は決まった。そんな一面も含めて、僕は彼女を好きにならう。

個性を認めずして何が人間か。ていうかこの小説で普通の人間を求めることが自体間違っているのだ。そう、これはきっと萌え要素だ。そうに違いない。あれ？ 何か熱いものが頬をつたつてる。

「あ、あのコリちゃん。邪魔してごめんね。存分に掃除機を分解していいから」

次郎丸が不思議そうな顔で僕を見る。

「おい、アツシ。どうしたんだよ、こんな絶好のツツコミタイミングを見逃すなんて。お前らしくないぞ。いつもなら『ビニのヤマダ電気職員！？』とか言つてるぞ？」

中万華も続く。

「そりゃ。アツシの唯一の取り柄でしょ。これがなかつたらあなたの存在価値なんて無に等しいのよ？」

存在価値がない。十四年間生きてきて、初めて言われた台詞かもしれない。

「うるせえええ！ 何だよそれ！ 僕の存在の主成分ツツコミ！？ 僕つて一体何なんだよ！ あと次郎丸さんは僕のモノマネ下手！」

ツツコミの最中、僕は思った。そうだ、僕は変態になるんだ。変態はこの程度で幻滅したりしない。むしろ興奮してもおかしくないくらいだ、と。

「それで、コリちゃん……」

僕は彼女の目を見る。そして、一つの壁を超える。

「ど！」のヤマダ電気職員んんん！？

ここに川平慈衛がいたならば間違いなく大声で実況するだろう。僕、大平アツシという人間が、始めて好きな女の子にツッコミを入れたのだから。そうだ、今回の事を機に、これから僕は彼女にツッコミを入れていこう。それこそが、今の僕が出来る精一杯の愛情表現なのだ。

「アツシ君……」

少しどスをきかせたような声でユリちゃんが言つ。さり気にツッコミしていこう作戦は失敗だつたか？ ちよ、もうやだ！ 今こじで嫌われるのとかすごい嫌だ！

「日立のサイクロン掃除機はヤマダ電気以外でも売ってるんだから！ そんな風に言つたらヤマダ電気の専売特許みたいになるよ！」

「あ、ごめんなさい！」

なんか大丈夫みたいだが、思わず謝ってしまった。だがツッコミといふのは端的にボケを指摘するものであるからして、そういうことを言わせてしまうとどうしようもないんだが。ていうかユリちゃんつて実はものすごいツッコミどころ満載なんじゃないか？ 今の今までそれが、ユリちゃんというだけでツッコミはしなかつた。だが、これは間違っていたのかもしれない。そう、僕はこの世界に欠かすことの出来ないツッコミ。その役割をまつとうするのに、誰がボケであろうと関係はないのだ。僕の頭に少し大きい手が乗った。

「やつと、気付いたみてえだな」

次郎丸の目は、優しさ、許容、その他もうもう色んなものが混じつた優しい光を放っていた。

「次郎丸さん……。僕、頑張ります！」

僕はまた一つ大人の階段を上った。

僕たちは四組の教室へ戻っていた。何だか一向に事態が好転する気配がないからだ。頼みの綱、コリちゃんでさえあれだもの。驚いたもの。僕たちはそれぞれ椅子に座つて向かい合つた。次郎丸は椅子の前後を逆にして座っている。

「とりあえず今日の結果だけよお。俺の勝ちだろ」

次郎丸の言葉に僕は何も言い返せなかつた。全員真面目は真面目なんだろう。それは分かる。ただそこに常識といつものが抜け落ちていただけ。この小説に常識を求めるのは駄目だつたのかもしれない。僕はため息をついてから言つ。

「……そうかもしませんね」

今回は次郎丸の言い分が正しいわけで。他の学校なら分からぬが、うちにはこうなんだ。ふと窓から校庭を見る。モチモチマンが餅をついている。ああ、ボケて待つてたんだな。なんか悪い気がするが、もう疲れたから行かないぞ。

「これからどうします？」

僕は座つたまま背伸びをする。今日は一日シツコヒツぱなしだつた

から肩が凝った。次郎丸と中万華が唸る。すると、ふいに開く教室のドア。

「おっす、アツシ。先生

そこに立っていたのは野球の試合に行っているはずのマモル。

「あれ？ 何でここにいるんだ、マモル？」

僕はすぐに疑問を言葉に乗せた。マモルはああ、と相槌をうつ。

「思つたより試合が早く終わつたからさ、学校に寄つたんだ。一応今日は美術祭だし」

マモルは言つと教室の隅にある次郎丸の作品、『今朝』に目を止めた。

「あれ？ これ「モンカラデルヤツライト鉱石じゃないですか。
すぐークオリティ」

「ええ！？ 現存するのその物体！？ 誰が命名したんだよ、その
暗黒物質！」

次郎丸は力の抜けた声で言つ。

「説明してねーもんな。あれだよ、それはな。かの有名なジーザス
武田の肛門から出るといわれる暗黒物質なんだよ」

「またジーザス！？ ていうか肛門から出る時点ではぱりそれは
う こだよー 暗黒物質でも何でもないよ！」

マモルが「一モンカラーテルヤツライト鉱石の上に手を置いた。

「でもさ、アツシ。これ石油に代わる新エネルギーとして注目されてるんだぞ」

「こんな汚いものに未来がかかってるの!? 汚物で救われるのなんて嫌だよ! 抵抗感じるつて!」

マモルは少し笑うと、辺りを見回した。

「どうした、マモル」

「いや、アツシはどれ作ったのかなって」

「どれを作った? 僕が? さて、一体何を作ったんだったか。思い出せない。ていうか僕作ったか? あれ? そもそも何でみんなの作品を見て回ったんだ。自分の参考にするためだつたじゃないか!」

「やばい! 忘れてた!」

「おいおい、どうするんだよ美術の点数! いや、待て。落ちついて考える。マモルのように美術祭に参加していない生徒だつているんだ。もしかしたらこれ美術の点数に入らないんじゃない……。」

「あ、マモルはどうするの? 作品作らないの?」

「いや、野球部は後日でいいって言われてるから。これ結構、配点高いらしいよ」

わずかな希望消滅！ どうしたらいいんだ、もう時間が無い。僕は頭を抱えて悩んだ。だが何も考えつかない。ほんの少しの時間で作りあげられる作品。何を作ればいいんだ。僕が諦めかけたその時、頭に再び置かれた大きめの手。

「分けてやろうか？ 僕の作品を」

次郎丸の手には本体からちぎり取られたコーモンカラデルヤツライト鉱石。僕は無意識に手を差し出していた。

コーモンカラデルヤツライト鉱石は、決して汚くなんかない。本当に汚いのは僕の心だったんだ。

未完成なものでも美しいものは存在する。ミロのヴィーナスなんてのはその代表。あれは腕が無いからこそ芸術なのだ。もしも腕が存在していたら、あの像の美術的価値は今とは大違うだろう、悪い意味で。時に作品は完成しない方が良いこともあるのである。

今回の冒頭、これに準ずるのが僕の作品。『コーモンカラデルヤツライト鉱石の欠片』。未完成なフォルム。人として未完成な作者。全てが未完成。だが、それが芸術。僕の作品は金賞を取った。

第9章 神の世界だ

七月一十日、終わりの日であり、始まりの日でもある」の日。僕達一年四組はイライラの中、文句も言わず列をなしていた。イライラの原因は様々だ。体にスライムの様にまとわりつく熱気。校長の永遠とも思える程長い話。中にはそれに耐えられない奴もいたりする。さつきも普段は目立たない奴が、学校中の注目を集めながら保健室へ抱えられて行つた。こんな極限状態の中、思春期の少年少女が校歌なんてまともに歌うわけないだろ。学校側も勉強するべきだ。

ようやく終わった形式だけの終業式。いつもと対して変わらない通知簿ももらつたし、後は担任の言葉を待つだけである。最中先生は「ホン」と一瞬の間を置き、汗のにじむ額を腕で拭いながら口を開いた。

「じゃ、みんな夏休み明けにな

その瞬間訪れる歓喜。絶頂。ただ教室の中は静かだ。みんな心の中でその嬉しさを噛みしめる。委員長のやる気のない号令と共に、いつもより五時間も早く学校が終わった。

僕は暑さにやられた居候と帰路についていた。本当はみんなと帰りたかったのだが、部活やら塾やらが重なつてたまたま僕たち一人だけになつたのだ。セミの鳴き声がより体感温度を増長させる中、次郎丸が言った。

「そういうや言つてなかつたんだけだ。俺この夏休みに一回帰らな
きやいけねえんだわ

「帰るって、どこです?」

答えに何となく田畠はついている。いぐら暑くてしんどくとも、相槌を忘れてはいけないものだ。

「そりやお前、あれだろ」

次郎丸は空に向かつて指をむす。

「あ～、あれですか。天界とか、そんな感じですか」

次郎丸は眉間にしわを寄せ、意味が分からぬといった表情で首を傾げる。

「あ、天界？　ああ、そーいやこちではそんな呼び方もあつたな
あ」

僕は察した。僕たちの想像する神の世界には、キチンとした呼び名が存在しているという事を。前に利理岡権田勇が『天界』という言葉を使っていたように思つが、恐らく僕に分かりやすく説明しようとしていたのだろう。

「呼び方違うんですね。なんて言つんですか？」

僕が言つと次郎丸は腕を組み、少し考えるような態度で「ひ返した。

「普通はオーサ・ダハルだけどな」

「王貞治……ですか？　あの野球選手の」

「は？　違えよ。偶然だろ、どつせ」

世界は不思議がいっぱいである。僕たちが今まで天界とか、神の社、なんて認識していた神様の世界の名前が偉大な野球選手の名前と同じだつたなんて。これは将来合コンなんかで使うことにしよう。次郎丸は続ける。

「まあ別名がいくつかあつてなあ。例えばカズシゲ・ノ・チチとか」

「いやいや、それは違うでしょ。それは長嶋茂雄じゃないですか」

「知らねーよ、そんなもん。偶然だらうが。他にはラーメン・ツケメン・ボク・イケメンとか」

「ええ！？ 今までの野球偉人シリーズはどこに行つてしまつたんですか！」

といふ僕のツッコミも無下に扱われ、その後僕と次郎丸はただオーサ・ダハルへと向かう予定を立てたのである。

夏休みという夢の一ヶ月と十日間が始まつて、早くも太陽が東から西へと三回移動した。僕と次郎丸は空っぽの旅行カバンを居間に置き、向かい合つて話をする。

「えーと、向こうには何をしに戻るんですか？」

僕はもつと早いうちに聞いておくべきだつた質問をほんの少し後悔しながら問つた。

「うちに来てからの報告だな。他にも色々ちよいと顔出しひ」

言いながら旅行カバンに手錠と鞭とロウソクを詰める次郎丸。

「いやいや、どこにちよいと顔を出しに行くつもりだよ。次郎丸さん、いかがわしい感丸出しじゃないですか」

「はあ？ 違えよ、丸出しにするのは俺じゃなくて相手のぼ……」

「ああ！ わたしと準備をしましょうか！」

僕は、ダイソーとジャスコで揃えた旅行セットを片つ端からカバンに詰め込んだ。そこそこ親父がやってきて言った。

「そうか～、旅行か～。お父さん楽しみだよ、本当。それもカズシゲ・ノ・チチに行けるなんてもう、神主としては夢だよ～。天使とかってかわいらしいのかなあ」

「何かかわいいじやなくて、かわいらしうといふところが何とか口リコンを思わせるぞ、親父」

元々は僕と次郎丸だけで行く予定だった次郎丸の里帰り。中万華は次郎丸と離れたくないというし、親父は神主として一度はカズシゲ・ノ・チチに行きたいということで、結局は家族旅行ということになった。家族で神様の世界に行くなんてウチだけだろうな。

で、次の日である。展開の早さについていけない読者はいつたん紅茶を飲んで気を静めて頂きたい。コーヒーでも可。

僕たち大平家プラスよく分かんない二人は少なめの荷物を持つて市内で一番大きい橋の下にやってきていた。腰まである高い草が生い茂っている。橋のちょうど真下は草が無く、開けた空地になっていた。隣で流れる川の音を尻目に、次郎丸が言った。

「橋の下ってのはな、異世界につながってんだ。靈なんかもこつか

ら成仏する。今から俺があっちへの道を開けつから、ちょっと待つてろよ」

次郎丸は荷物をその場に置くと大きく深呼吸をした。呪文を唱えて道を出すようだ。案外ベタである。

「開け、オチン チン！」

「ええ！？ 呪文、かつこ悪！ ていつか伏せ字の意味ねーよー！」

思わずつっこみでしまった僕。ていうかこのネタはさすがに読者引くんじやないだろうか。次郎丸のためらいの無さに拍手である。次郎丸の唱えた卑猥な呪文で橋の下に一メーター四方ほどの異空間への入口が開いた。覗くと、中は目が痛くなるような鮮やかな世界であつた。赤ともいえる、黄色ともいえる、緑ともいえる。そんな色彩の美しい通り道。それは永遠に続いているように見える。

「ほんじゃ、行くか。ここを進めばすぐだからよ」

その後、光の道を通りた記憶はほとんどない。

オーサ・ダハル。神の住む世界。天国、地獄に通じる唯一のターミナル。次郎丸の説明ではそういうことらしかつた。僕は正直不安であった。異世界ということは、常識も、生活も、すべてがオリジナル。僕たちの世界とは全くの別物。僕は外国へ行くことに足踏みするタイプなんだ。

ところがどっこい。オーサ・ダハルの入口に立った僕は思わずこう言つた。

「何か……浅草？」

そうなのだ。オーサ・ダハルは何かこう、どこか浅草っぽかつたのだ。僕たち家族は次郎丸を先頭に大きな道を歩いた。人通りが多い道だ。道の両端には活気あふれる店が立ち並ぶ。地面はきつちり舗装されているし、ここはメインストリートか何かかもしれない。気温に関してはここも僕たちの世界と同じように暑かつた。ただ、日本の蒸し暑さとは違う、からつとした暑さだ。

「あれ？ 次郎丸さん帰つてきてたのかい？」

突然声をかけてきたのはどこの店の主人であった。次郎丸と知り合いのようだ。

「おう、久しぶりだな。ちょっと聞きたいんだけどよ、最近こっちであれは起きたか？」

店の主人は何故か僕の方をちらりと見た。すると両手を広げ顔の横に。

「全然だねえ。逆に不気味なくらいだよ」

「そうか、分かった。サンキューな」

次郎丸はそう言って簡単に別れをすませると、また大通りを歩き始めた。一体何の話をしていたのだろうか。少々気になつたが、何となく聞かないでいた。

しばらく歩いて、先ほどの大通りの突き当たりに、僕たちは見た。それは巨大な城。周りを掘りに囲まれ、高い壁が並ぶ。城自体の大きさはまず僕たちの世界ではお目にかかることのないサイズ。雲を突き刺す天守閣なんて見たことが無い。初めて六本木ヒルズに訪れた時の感動に似た気分だ。

「ここはオーサ・ダハルの最高機関、『神政会』だ。上級の神がここでオーサ・ダハル、天国、地獄、あと現世のバランスを保つてる」

「バランスを保つ？」

僕は首を傾げながら言つた。次郎丸はああ、と一呼吸入れる。

「四つの世界のどれが力を持ち過ぎてもいけねえんだ。俺たち神の仕事つてのは政治じゃねえ。バランス取りなんだよ」

次郎丸の言葉で長年考えていた僕の疑問が解けた。何故次郎丸のような神が事実存在していながら、僕たちの世界では戦争や貧困、エネルギー不足なんかの問題がなくならないのか、という疑問だ。バランスを取るために存在である神はそこまで干渉しないのである。

「何か初めて次郎丸さんを神様なんだなあつて思いました」

「あ？ そうか？」

頬を赤らめた中万華が恥じらいながら続く。

「私は前々から、次郎丸さんのことと運命の人なんだなあつて思つてました」

「どうか、俺は前々からお前のこと怖いなあつて思つてたよ

何かに耐えきれなくなつたのか、勢いよく次郎丸の左手にからみつく中万華。人になついた猫みたい。そしてそれに無反応な次郎丸。なんだかんだで仲は良いのだ、この二人。次郎丸がどう想つている

のかは、誰も知らない。

次郎丸が門兵に小声で何かを告げると、神政会の持つ巨大な門が重苦しい音をたてながらゆっくり開いた。

「悪いが、ここからは俺とアツシだけだ。マンカとお父さんはこの門兵について行ってくれ」

何故か僕だけはこの大きなお城に入るようだ。嫌がる中万華の耳もとに次郎丸が優しく息を吹きかけると、彼女はよだれをたらしながら気を失った。その中万華を支えながら親父を誘導する門兵に軽く手を振り、僕と次郎丸は神政会に足を踏み入れた。

中は空調設備が整っているのか、ひんやりと涼しい適度な温度。急激な温度変化に、大気の壁というかなんというか、そういうものを実感する。僕は次郎丸と長い廊下を歩いていた。

「あの、何で僕だけは入れるんですか？」

このオーサ・ダハルへ来る前に次郎丸から聞いていたのだ。ここでは一時的に僕と次郎丸の契約は解消されるということを。それに関わらず僕は次郎丸といふ。変な話だ。僕が質問をすると、次郎丸は実に不機嫌そうに頭をかいた。何となくだが、僕はそれを見てもう聞かないでおくことを決めた。

しばらく歩くと、目の前に大きな門が現れた。室内にこれほど大きな門がある理由は気になるが、何故かオーサ・ダハルにやつて来てから不機嫌そうな次郎丸には何も聞くことが出来ない。僕は結構な小心者なのだ。次郎丸は門を片手で力強く押した。開かなかつたので今度は引いた。僕はそこに神を見ることになる。

広い畳部屋。その奥には段違いで、十センチほど高くなつた、お偉いさんの座る場所があつた。大河ドラマなんかのシーンを思い出していただければ容易に想像できると思う。そこにはあぐらをかき、

類づえをついた豪華な衣装に身を包む大きな男。耳の下からあごまでしの字を描くように生えた鬚。口周りに生えたそれときれいに繋がり、まったく汚さは感じない。顔の堀が深く、ダンディーな良い男といったイメージだ。男は次郎丸を突き上げるように睨むと、その場に立ちあがり両手を大きく広げた。

「お帰り、次郎丸ちゃん！」

無理に喉から絞り出した甲高い声で鬚の男が言い、次郎丸に向かって駆け出した。それを冷静に右の蹴りで制圧する次郎丸。鬚の男は空中で顔面に次郎丸の足をめり込ませる。

「気持ち悪いんだよ、じじい。ていうか抱きつく圧力が半端ねーだろうが。そんな殺傷力抜群のハグ見たことねーよ」

次郎丸の蹴りによつて顔面を腫れあがらせた鬚の男。

「じじいなんて呼ばないで。私には恵比寿という美しい名前が……」

「そんな汚ねえ顔面でそういうこと言わないでくれる？」

僕は啞然とした。目の前でいきなり繰り広げられた野獣VS野獣。恵比寿と名乗る謎のおっさん。僕の頭の中で疑問がぐるぐると駆け巡る。

「あの、次郎丸さん。こちらの方は……？」

次郎丸は顔だけこちらを向き、ひょうひょうとした態度で答えた。

「ここのじじいは恵比寿。俺の担当する神で、性同一性障害のおっさ

んだ」

僕はまたも啞然とした。

僕と次郎丸はその場に並んで座った。僕は正座、次郎丸はあぐらである。その前にはびっしりと構える恵比寿。恵比寿は僕をまじまじと見つめる。

「へえ、この子が大平アッシン。なかなかかわいい顔をしているわ」

鳥肌、立つ。

「まあ、これが今回の報告だ」

次郎丸は座つたまま言つた。何の資料や会話もしていないのに報告？ 僕は不思議に思つたが、神様のことなど何も分からないので、きっとお互にだけ通じる何かをしたのだろうと勝手に納得した。

「うん、まだ大丈夫みたいね。本当、今回のことがなければ食べちゃいたいわ」

僕に向かつてウインクをする恵比寿。冷や汗、たれる。次郎丸はそんな恵比寿の髪に右手を伸ばし、髪掴みにする。

「だまれ、じじい。そんな感想いらぬーんだよ

「ちょ、じろ、次郎丸！ 怖いつ！ 胸倉を掴まれるとかより数倍怖いつ！」

次郎丸は怯えきつた恵比寿の言葉をゴミ箱にポイするよつこ、掴んだ髪を引きちぎつた。アイターッと叫びその場に倒れこむ恵比寿。

彼の口元がわなわな震えている。

「ちよ、ちよ、ちよっとおおおー。私のチャームポイントを何でそんな惜しげもなく引きあわることができるのー?」

「痛つ。髪が指に刺さつた。どうしてくれんだよ」

「いやいや、こっちのセリフよ! どうしてくれんの、私のチャームポイント! キャラ付けが今のところ髪と性同一性障害であること以外なにもないのよ! 早くもキャラが薄くなるようなことしてんじやないわよ!」

次郎丸はこっちでも何も変わらないんだな。僕は一部髪の欠けてしまった恵比寿と次郎丸のやりとりに自分と似たものを感じた。そして、何だかすごい居心地の悪さも感じていた。たまらなくやるせないんだが。

「あ、あの次郎丸さん。僕がここにいる必要つてあつたんですかね……?」

今聞くべきではないんだろうが、ついつい空気に耐えられなかつたのだ。ご勘弁。次郎丸は顔はこちりに向けるものの、目は僕と合わせようとしない。

「あ? いや、別になかったかもな……」

僕は腹が立つた。今日の次郎丸はいつもと違つ。こんな伏し目がちなおつさんは、次郎丸じゃない。

「何なんですか、それは! ていうか今日次郎丸さん、何かおかし

いですよ！ 僕なんか怒らせることじましたか！？

「何言つてんだよ。別に変じやねーよ、俺は」

そう言つてゐる間も次郎丸は僕と田を合わせることはなかつた。

良い天氣だつた。ここに来てすぐには気がつかなかつたが、ここは空がきれいだ。見つめているとなんだか吸い込まれそになる。僕らの住む世界の濁つた空なんかとは比べモノにならない。

僕は神政会という大きな城の周りを一人で散歩している。

いつもなら隣にブーマのジャージを着た男がいるのだけれど、不思議と違和感はない。元々一人が好きだつた男だ。今さら、といった感じである。で、そのジャージ男はといふと。僕に、もう用は済んだから好きにしていい、と言つて城の中で昼寝を始めてしまつた。それを見て、僕はただ一人になりたいと思つたのだ。そして現在に至る。

ほとんど同じようなことを考えながら歩き、気がつけば僕は城を離れ、薄暗い森の前にやつてきていた。振り返ると、先ほど通つたメインストリートが百メートルほど先に見える。これは日本でいう郊外のような所なのだろうか。僕は気分と興味の一いつの力で、森の中へと足を踏み入れた。

森の中は先ほどまでのからつとした暑さとは無縁の、冷たく、じめじめとした世界だつた。すべての生氣はその鼓動を止め、ただ大氣の流れにその身を任せている。僕は神の世界にもこういふところがあるのだと知り、思わず感嘆の声を漏らした。そんな仮死状態の世界をしばらく進むと、僕は大きな洞窟を発見した。

洞窟を見て、僕はなんだか気分が高揚した。小さい頃にこんな秘密の場所みたいなを見つけると嬉しいと思う。今でもこんなに楽しい気分なんだ。間違いない。すぐに落ち着く僕の感情に気付いた。僕は上つ面だけは楽しそうに、自分に嘘をついているのかもしけない。もう、帰ろう。そう思い立ち、僕はその場で踵を返した。

すると、どこからか僕の耳に届く不思議な口笛の音。聞いたことのないメロディだが、何故だかとても懐かしく、僕は思わず歩を止めた。

「お前、この歌を知ってるのか？」

知らない声だった。僕は声の主を探し、その場をきょろきょろと見渡す。

「ここだ」

声は洞窟の中からだった。光が少なく、陰に埋もれて姿が確認できない。声のトーンから男であることだけが推測される。

「お前、もしかして大平アツシか？」

「え……そうですけど」

僕は頭をフル回転させた。その男は僕を知っている。ならば僕も彼を知っているのか？ 確かに懐かしさを感じるのだ。あの口笛に。だが、何故僕の知り合いがここにいる。分からぬ。彼は誰だ。

「悩んでるみたいだが、お前は俺のことを知らない。それは確実だ」

僕はただ黙つて聞いた。じめじめとした空気が僕と服の密着度を高め、とても不愉快な気分だ。

「神田林次郎丸が、お前と契約を結んだよな？」

「どうしてそれを」

「神になるためとか、そんな感じの理由か？」

「僕はまた黙ることにした。」この男は何を知っている。僕の何を。

「一つだけ教えといてやるよ。それ、嘘だ。奴は神にはなれねえ、絶対にな。真の理由は別にある」

次郎丸が、神になれない？ 真の理由？ 何を言つてるんだ、この男は。僕に何を伝えようとしているんだ。僕は思わず声を出した。

「何ですか、それ。真の理由って……」

ほんの少し間が空いた。僕は何となく、彼が笑つていることを悟つた。

「簡単に言えばそうだなあ。お前が危険な存在だから。お前という存在が災厄であるからって感じか」

「災厄……？」

「血つてのは、案外正直なもんなんだよ」

言葉の節々に感じる力。誰かに似ていると思った。それが誰ともわからず、僕の胸の中で彼の言つた言葉が反響を続ける。男がもう一言、何かを言おうとした、そのとき。

「アツシー！ 誰と話してんだ！」

僕が振り向くと、そこには走つてこちらへやってくる次郎丸がいた。

息を切らしながら、僕の肩に手を置く。

「あ、いや何か、そこの洞窟の中にいる人と」

僕は言いながら気がついた。洞窟の中に、先ほどまであった気配が消えていることに。

「何を、何を話したんだ?」

次郎丸はいつになく真剣な眼差しだった。この時、初めて手のひらに大量の汗をかいていたことを知る。

「あ、あの。別に、何も……」

僕は彼の目を見ることが出来なかつた。

僕は次郎丸に連れられて、というよりは、後ろをついて行き最初にやつてきたメインストリートへとやつてきた。そこに一つ、古い造りのカフェが。長い月日で薄汚れた木造建築。その正面には大きなガラス窓があり、中の様子がうかがえる。親父と不機嫌そうな中万華が一人で氣まずそうにコーヒーを飲んでいる姿が見えた。二人の会話が窓越しに聞こえる。

「あ、あのマンカちゃん。そんなに氣を落とさないで。神田林さんだつて好きでこうしてゐるわけじゃないんだから」

親父が、次郎丸に放つておかれた中万華をなだめている。

「前なら、放置プレイだと思って楽しめたわ。でもね、お父さん。最近気がついたんだけど、私はいじめられるのが好きで、放置されることはあまり好きじゃないみたいなの」

「ひらひら、マンカちゃん。年頃の女の子が公共の場でいじめられるのが好きとか言わないの。お父さんはそういうの厳しくいくから」

何だか本物の親子みたいだ。僕と次郎丸がカフェに入ると、それに気付いた中万華が勢いよく立ち上がる。

「次郎丸さんっ！ あ……ひ、ひどいじゃない！ あたしを氣絶させてまで遠ざけたかったの！？ あたしは邪魔な存在なの！？」

次郎丸は中万華の言葉を聞くと、彼女の頭にポンと手を置き、言った。

「ああ、いや悪かったよ。今度は目が覚めないくらいに氣絶させるから」

「ちょ、そんな言い方って……。どれだけ私のツボを心得ているのよ！ 興奮するじゃない！」

相変わらずだった。僕の家族はいつも通りで、安心した。あの男の言っていたことはどういう意味だったのか。僕はこれから、どうすればいいのか。そんな悩みが、家族を見ていると、ほんの少しだけどすつきりする。僕の家族には他人が一人まじつ正在するが、僕らは確かに何かでつながっていて、僕らは確かに家族なんだ。次郎丸がこちらを向き、中万華と同じように僕の頭に手を置いた。

「今日機嫌が悪かったのは謝るよ。後、お前が何を言われたのか、もう聞かねえ。でもよ、これだけは信じてくれ」

今日初めて次郎丸と目が合った。

「俺は、お前の味方だから」

自分の目頭が熱くなるのを感じた。不安や疑問が全て吹き飛んだ。不純なものが消え去つた僕の頭の中には、その代わりに温かいものが生まれていた。それはひどく大きく、重いが、不思議と嫌な気はない。そうだ、僕はもうあんな言葉に振り回されない。次郎丸は次郎丸で、僕は僕だ。

「あれ、どうしたアッシ。目が赤いぞ」

親父が僕を見て言つ。僕はほんの少し微笑んで、目にゴミが入ったと返した。

オーサ・ダハル滞在二日目である。今日は家族で観光。案内役は次郎丸だ。僕たちは昨日通つたメインストリートを次郎丸を先頭に練り歩いている。

「昨日は言つてなかつたけどな。この大通りはオーサ・ダハル最大の繁華街になつてる。名前は『フイリップ・トルシエ』だ」

「今度はサッカーですか。何かもう神様の世界ふざけてるとしか思えないんですけど」

次郎丸はいきなりその歩みを止め、僕たちの方を向いた。

「そうだ、こっちでは日曜日の朝に必ずやる儀式があるんだけどよ。今日はちゅうじ日曜日だし、やつとくか

神様の世界の儀式。とても興味深い。好奇心が跳ね回る。親父が次郎丸に質問する。

「その儀式つていうのはどういったことをするんですか、神田林さん」

「おう、ちょっとついてきてくれ

次郎丸に連れられてやってきたのは怪しい、怪しい洋館。黒を基調としたカラーリングで不気味な雰囲気をかもし出している。入口の両側には明かりの点いた灯籠。洋館なのに、灯籠。そこから何か嗅いだことのない匂いがする。決して悪い匂いではないものの、不気味でしょうがない。

「次郎丸さん。ここでやるんですか？」

「そうだ」

僕たち大平家はゆっくりとそのドアを開けた。中は暗く、いくつか部屋がある。それぞれの部屋のドアに、『使用中』又は、『空き部屋』と書かれたプレートが。次郎丸は空き部屋の中から適当に一部屋選んでドアを開けた。僕たちが全員入ったことを確認すると、次郎丸はドアを閉めた。

「暗いですね……。こんなとこでどんな儀式をするんですか

僕は少し不安げに聞いた。

「おう。儀式の名は『モウ・ヤメテクダサイ』。ここでな、家族の長なる者がパンツ一丁になつて手錠をつけた状態で、家族が鞭と口ウソクでいたぶるんだ」

「おーいい！ 何だそれ、深夜の歌舞伎町！？ あの荷物はこの

ためだつたのかよ！ ていうかその名前単なる感想じやねーか！
何なんだよオーサ・ダハル！ ただの変態ワールド！？

親父が内ももすり合わせながら、体をビクつかせる。

「ちよちよちよ、ちよっとおおお。家族の長つて私だよね？ 本当に、本当に？」

中万華が拳手する。

「待つて！ 私立候補します！ いたぶつて下さい！」

僕は大声でこの空氣を断ち切りにかかりた。

「ちょっと待つて大平家！ おかしいから！ 冷静に考えよう！
これは所詮オーサ・ダハルのしきたりなわけだから！ 僕たちが絶
対にやらなければいけないかって言つたら違うよ！？」

親父が僕の肩に手を置いた。親父の震えが僕の肩を通して伝わる。

「ま、待てアツシ。これやっぱ私たちはオーサ・ダハルに来ている
わけだし。郷に入つては郷に従えという言葉もあるわけだし」

「それこそ待つて親父！ 真面目なのは分かるけど、誇りを捨てる
ことはやめて！ 一番悲しむのは実の息子である僕だから！」

中万華が次郎丸の右手を両手で握りこみ、懇願する。

「次郎丸さんお願ひ！ 私にチャンスを！」

「いや、でもこれがしきたりだからなあ。なあ、お父さん」

僕の肩に乗っていた手に力が入る。

「アッシ、きつと死んだ母さんは応援してると思つただ

「いやいやいやー、ほほ確實に母さんはアンチだよー、アンチモウ・ヤメテクダサイだよ、きつとー、次郎丸さんも親父を誘導するのはやめてー!」

親父が真剣な顔つきで僕を見つめる。

「アッシ……部屋の外に出ていなセー」

「ちよつとおおおー、覚悟決めちやつたよ、この人ー!」

親父は僕を力づくで部屋の外に押し出さうとする。必死で抵抗するものの、親父の体重は僕の倍以上ある。僕の体は徐々に引きずられ、ついに部屋の外へ。

「お、親父いいー!」

「アッシ、お父さんは負けん」

そう小声で僕に伝えると、僕を突き飛ばし部屋のドアを勢いよく閉めた。力チャリという鍵のかかる音。僕は少しの間放心状態に陥つた。一分程間をあけ、ドア越しに聞こえた。

「あ、ちよつと熱つー、もう、きやつー、いつ、これー、変なものに田代めそつー!」

僕は耳をふさいで大声で『翼をく、ださい』を歌つた。

僕たちのオーサ・ダハルの旅はこうして幕を閉じた。今回はゆっくり出来なかつたので、また時間を作つてオーサ・ダハルへ来ることを次郎丸と約束し、僕たちは光の道を通る。次郎丸はもう恵比寿に別れは言つてあるとのこと。

僕はここで、次郎丸の話を聞いた。ただ、今の僕にはその意味が分からぬ。いつかその時が来た時に、僕はもう一度彼の言葉を思い出すのだ。そして次郎丸に確かめる。親父の醜態は忘れる。僕はこの一つを胸に、現世へと帰還した。

海である。心地の良い波音に聞き入りながら、僕たちは浜辺で海と戯れている。次郎丸や中万華はもちろん、マモル、ユリちゃん、アユも一緒だ。木田は旅行に行つたんだとか。まあ、どうでもいいけど。

さて、冒頭からいきなり海であるといわれたところで、読者の方々を置いてけぼりにするだけだろう。まずはそのいきさつを聞いてほしい。

暑い。『オーサ・ダハル』から帰つてから、僕や次郎丸は存外平凡な日常を過ごしていた。神様や精霊と共に生活をしていても、非凡な毎日が送れるかといえばそうではない。僕が今まで体験した出来事なんて、普通の生活に少しスペースを利かせた程度のものなのだ。とかく、今回に至つてはそのスペースもない、無味乾燥な感じなのだが。

宿題は終わらせた。あとは遊ぶだけ。そのはずなのに、どうも良い計画が浮かばない。いつもテレビの前でうなだれるだけだ。それは次郎丸にも言えること。彼は朝から夏休みアニメ劇場内で再放送される人気幼稚園児アニメを見て、そのまま昼までグータラする。中万華はそんな次郎丸の横でにこにこ笑いながら体育座りである。彼女は彼の隣にいるだけで満足なようだ。

ある日の昼。僕は家族で昼食を食べていた。地味に納豆が好きな次郎丸はいつものようにそれを百回かきませている。一日三パックは常人からしては多い。だがキャラクターの個性としては激しく微妙な量である。

「何かよう、最近俺ら何もしてねーよな

次郎丸がため息まじりにそう言った。納豆をかきませる手は止まつてゐる。

「確かにそうですねえ。何だか家にこもりつきりつて感じで」

僕も昼食の箸を止める。次郎丸も僕と同じように退屈を感じていたようだ。中万華はホカホカと湯気の上がるカレーマンを一口ほおばつた。

「私は次郎丸さんの隣にいるだけで幸せ

膨らんだ頬が赤みをおびる。次郎丸が言つ。

「ていうかマンカ。それは肉まんの精霊としてどうなんだ? 共食いみたいな感じか?」

「何言つてるの次郎丸さんつ。これはカレーまんよ? 何の問題もないわ」

「当たり前でしょ、という空氣をかもす中万華。そういうえば精霊の話をまだあまり聞いたことが無い。また今度聞いてみるとしよう。家に引きこもるものもどうかと思いますし」

僕は特にアウトドア派というわけではないが、やはり何日も外に出なければ外の空気が吸いたい、くらいは感じる。次郎丸は唸りながら納豆にたれを入れた。

「やつぱあれだよな。肝試しは早々とやつちまつたし。他に夏らし
いのつて言つたら……」

中万華が言つ。

「夏と言えば……ヤハニ。ヤハニ園なんて夏らしい氣がするー。」

「いやこいやマンカさん。そこでハッスル出来る自信はありますか?」

僕が言つとこちうに分かるよつに大きく舌打ち。本当もつ何か泣き
そう。次郎丸も続く。

「お前、ヤハニなんてつるさいだけだろつが。裏側キモイし。ハッス
ルするならソープランドしかねえだろ」

「どんなハッスルをする氣ですか! しかも夏関係ないしー。」

次郎丸は腕を組み、上からをものを言つ。

「俺のハートが夏の暑さのよつに燃え上がる」

「知らねーよ、あなたの胸の高ぶりなんてー。」

僕が言つと次郎丸はテレビに目をやつた。その右手では納豆を無意
識にかき混ぜているようだ。段々と早くなる箸の回転速度。彼は何
かをひらめいたのか、その箸に急ブレーキをかけた。

「そうだ、海行こう! ていうかなんか臭つー今まで気にも止め
なかつたのに納豆が不意に臭つー」

いきなり騒ぎだした次郎丸に対して、親父は味噌汁をすすりながらなだめるように左手を差し出した。何故だか声の震える親父。

「ま、まあ落ち着いて下さい神田林さん。海ですか、それもいいけれど、やつぱりソ、ソープランドでいいんじゃないだろつか」

「いや、行きたかったのかよ親父！　ていうか声震えるほど恥ずかしいなら意見するなよ！　息子の前でそんなみだらな部分見せるなよー！」

次郎丸は僕と親父のやりとりを冷然と眺め、納豆を一口食べた。

「まあ、それはそれとしてだな。良いじやねえか海。最近体もなまつてんだ。泳いで、水着の女を見て、その辺鍛え直さねえとな

「いや、水着の女の子を見ることで鍛えられるものって何なんですか。それただの心の黒い部分でしょうが」

「まあまあ、いいじゃねえか。何と言おうとも俺は海に行くぞ」

次郎丸の行くところ僕在り、といった感じ。彼には結局のところビルコンの歌というものがあるわけで、僕の意見なんて参考ていどにしかしないわけで。

僕はみんなに連絡をした。海に行くのに誰も誘わないなんて、遊び盛りの中学生には不可能な話なのだ。

さあ、海である。ここは去年の夏、アユが見つけた人のいない、いわばプライベートビーチだ。波に反射した太陽の光がゆらゆらと何度も姿を変えている。海岸の周りを腰の高さ程度の崖に囲まれて

いて、そこには草木が生い茂る。大人に見つからない最高の遊び場だ。

さて、ここからは僕の独断と偏見の入り混じった水着審査と行こう。

女子チームの水着姿で一際大きな輝きを放つコリちゃん。白いフリルのついたセパレート。その姿はまさに天使。背中に大きな翼でもあれば絵になる。いつもより呼吸が深くなる僕。とりあえず心の中でガツツポーズだ。アユは何だか子供っぽい柄もの一体型。可憐とかいうよりは、元気いっぱいな感じである。中万華は何故だかスクール水着だ。正直僕自身こっちの趣味はないのであまり触れないでおく。あえて一つ言つなら、若干引いた。男子チームはというと……。僕とマモルは普通のひざ丈海パン。次郎丸はそこにTシャツを着ている。そのTシャツには大きく『海の男』と書かれていて、今日ぐらいしか着るときが無いんだろうなと思わされる。水着審査、優勝は有無も言わさずコリちゃん。はじめから分かりきつたことなんだろうが、一応だ。

「心地良い、潮風。涼やかなメロディを奏でる波の音。ほらな、やっぱ海に来て正解じゃねえか」

と次郎丸は女子グループを凝視する。

「そんなポエミーな言い訳いいですから。やっぱり次郎丸さんは口リコンだつたんですね」

「何を言つてんだアッシ。男は皆その生涯をかけて運命の女に愛を語るポエマーなんだよ」

「いや、もう本当にううのいいから。次郎丸さんは自分を一体どうしたいんですか。どうこうキャラを田指してるんですか」

僕たちはビーチボールをしたり、水を掛け合つたりとなんだかんだ楽しく過ごしていた。久しぶりにみんなとはしゃぐのはやはり良いものだ。そして何より、僕はユリちゃんを眺めてるだけで結構嬉しいのだけど。あ～やばい、何かテンション上がってきた。

一時間程経つて、少し疲れたのでしばらく浜辺でぴちゃぴちゃとじゃれていると、次郎丸が不意に言つた。

「よし、男子チームで泳ぎ勝負すつか。あのブイにタッチして先に戻つてきた奴が勝ちだ」

「あ、それおもしろそうですね、先生」

次郎丸の提案にマモルは賛成した。僕も同様だ。女子チームの黄色い応援を背に、僕たちは海に足を入れる。中万華のよーいどんとうかけ声で僕たちは一斉にスタートした。

結果 一位 マモル。二位 アツシ。三位 次郎丸。

少しの時間、誰も言葉を発さなかつた。次郎丸は一人沖の方を向いて体育座り。その背中にあるのは哀愁なんて格好良いものじゃない。僕は次郎丸の背中越しに言つた。

「あ、あの……次郎丸さん」

「え？ 何？ 別に俺泣いてないけど。言いだしつペガビリとか最悪、みたいなこと一切思つてないし」

「いや、すさま方がすごいや。大丈夫ですから、そんな高かが遊びで」

次郎丸がえらく小さく見える。

「ううせーな、まつとけよ。マモルはともかくお前にまで負けたんだぞ。もう絶対笑われてるわ。もう氣とか使わないでいいから、高笑いしろよ。甲高い声でみじめな俺を笑えよ。ハーハツハツハ！」

「うう、己で高笑いはやめましょ。自分を否定しちゃ駄目」

氣を使つたのか、次郎丸の周りにみんながやつてきた。

「で、でも先生も速かつたですよー。」

「すういなあ！ 私はあんなに速く泳げないよー。」

「先生つてマジで格好良いから泳ぎとか不要だよねー。」

「そんなギャップが更にそそるわー！」

「……でも、空氣を乱した」

次郎丸が勢いよく立ちあがりこちりに向き直つた。目と鼻にかけて何となく赤みが。

「今なんか本音言つた奴がいたあああー やっぱもう俺ダメじゃん！ 誰だよー 今俺を力オスヘと導いたのはどこのどいつだよー！」

私、と声が聞こえた。次郎丸がきょろきょろと辺りを見回す。僕たちもつられてそうしたが、ビートル姿が見当たらぬ。

「うう」

僕はその声を追つて、次郎丸の足元を見た。そこには、身長が彼の腰ほどにしかない幼い少女が立っていた。

「はじめまして。私、ヒナタ」

「…………お子さん？」

ヒナタと名乗った少女は何かに不服そうな面構えだった。というか、金銭面に不服がありそうだ。彼女はどこかの小学校の指定ジャージを身にまとっている。カーキ色のそれに、同色のひざ丈すらな半ズボン。胸には大きく『3・2』と書かれた白いワッペンが。ジャージのサイズが少し大きいらしく、袖からは指がほんの少しのぞく程度しか出でていない。腰まである長い髪は、無造作にはねまくつてゐる。ひどく痛んでいるようで、光が当たると赤く反射した。前髪はもう目にかかりそうだ。で、その目は何だか眠たげな感じ。実際には大きい目なんだろうけど、それを半分しか開いていないのだ。やる気がないのか、何なのか。靴も履いていない裸足スタイル。とにかく、一回落ちぶれてしまつた感が抜群の少女だったのだ。

「えつと……ヒナタちゃん。お父さんやお母さんはどうしたのかな？」

ユリちゃんはしゃがんで、少女と目線を合わせると優しい笑顔で言った。少女は表情を一切くずすことなく答える。

「……両親は、いない。でもお兄ちゃんがいる」

とにかく不思議な子だ。その真実だけを伝える淡々とした口調。子供ならもう少し感情的になつてもおかしくはないと思うのだが。僕はコリナちゃんと同じよつてヒナタちゃんと田線を合わせた。

「じゃあそのお兄さんはどうこるの？」

「私が怖いから、ビーチに行っちゃった」

「怖い？ こんな小さい女の子を放つておいてなんてまだ。次郎丸が頭をぽりぽりとかく。」

「迷子か。しゃあねえ。おい、ヒナタ。お前の兄貴探してやるよ。んで、俺達んとこに一度と来んな。これ以上俺の傷口を広げるな」

「分かった、北島康介さん」

「……おい、何かこの子氣い使つてくれてるんだけど。何か自分がすこべ大人げないんだけど」

次郎丸の提案により、僕たちはこの子のお兄さんを探すこととなつた。まあ、ただ遊ぶよりはおもしろいかな。

僕たちはヒナタちゃんの歩く速さに合わせて、ゆっくりと砂浜に足跡をつけていった。履いていたビーチサンダルの中に嫌な感触の砂が入りこむ。そういえば、ヒナタちゃんは裸足だったつけ。

「ヒナタちゃん、足、何も履かなくていいの？」

僕は彼女の少し前から首だけ振り返つて言つた。彼女はしばらく僕の目をじっと見つめ、口を開く。その時も彼女が表情を変えることはない。

「私は裸足が好き」

何だかあつたりとした回答だと思つた。彼女はそう言ってから一度地面を見て、こつ続ける。

「……だって、大地からのオーラを直接受け取れるから」

何だか電波を放つてゐる回答だと思つた。

「オ、オーラ？ ヒナタちゃんはオーラを受け取つてるの？」

ヒナタちゃんの顔に暗い影が浮かび、ひそりと口元をゆらす。

「私だけじゃない。あなたも、他の人も。みんな色んなものからオーラを受け取つてる」

どうしよう。何だかこの子が怖くなつてきた。僕は何も聞かなかつたことにして前だけ向くことにした。ヒナタちゃんのお兄さんが早く見つかりますように。

「おー、ヒナタ」

僕が前を向くことだけ決めた時、次郎丸がヒナタちゃんを見下げながら言つた。

「何？ マイケル・フェルペスさん」

「うん、何かそんな純粋な優しさに触れたら俺泣きそうになるから。いや、そうじやなくてな。何でまた兄貴がお前のことを怖いなんて

「言つてんだ？」

次郎丸が率直に聞く。何となく怖い理由というのが分かつてしまつ自分がいるのだが、といふか現在進行形で僕自身彼女に恐怖を抱いているのだが。

「私が……変な力を持つてるから」

彼女は小さな歩幅で歩きながらそう答えた。『変な力』と呼ばれる力には今までに触れたことがある。次郎丸のパソコンの歌なんかがそうだ。だから、もう変な力なんて聞いても驚かない。次郎丸のように全知全能な能力以上のそれがあるとは思えないからだ。

「で、どんな力なんだ？」

と次郎丸。あくび混じりに放たれたその問いかけに、ヒナタちゃんはまたも一切表情を変えることはない。

「……人間の心が読める」

僕と次郎丸以外のみんなは絶句していた。アコに関しては次郎丸が特殊な能力を持つてていることを知つてはいるはずなのだが、馴染みの薄さということなんだろうか。とはいえ、次郎丸のように神ではないこのヒナタちゃんに、本当にそんな力があるのか疑問である。マモルが困った表情でヒナタちゃんに目を向ける。

「そ、それってどうしたこと？　どうやって心なんか読むの？」

ヒナタちゃんはその歩みを一向に止める気配が無い。

「……日本にいる人の考へてることが分かるの」

ヒナタちゃんの述べるその口調は子供にしてはあまりに単調で、嘘をついているように見えなかつた。いや、そんなことより……。

「日本にいる人！？ 範囲広つ！ ヒナタちゃん、それは嘘だよね！？ いくらなんでもそんな広域プライベート流出事件はありえないよね！？」

僕は全開でシャウトした。ヒナタちゃんはそれにまったく動じない。

「間違えた。全部は分からぬ。私が嘘んだ人の心が分かる」

次郎丸がサンダルにたまつた砂を落としながら言つ。

「嘘んだ人？ つーことは、もしヒナタがアツシを嘘んだら、アツシの考へてることが分かるのか」

「分かる」

そこまで聞くと、次郎丸は僕の方を見てほくそ笑んだ。嫌な笑顔だ。

「い、いやちよつと。僕は嫌ですよ。そんな、心を読まれるなんて……」

「何だ？ お前はつねにいかがわしいこと考へてるってことか？ まあ、そなうなら仕方ねえけどよお～」

なんてムカつく笑顔なんだ。今すぐぶん殴りたい。あんな万年いかがわしいことで頭がいっぱいの男にこんなことを言われるなんて。

「……分かりましたよ。噛まれりやいいんでしょ、噛まれりや」

次郎丸はヒナタちゃんに僕の心を読むように説明する。他のみんなはそんな様子をサークルでも見るよう意気揚揚と眺めるだけだ。マモルくらいは止めてくれるかと思ったんだが。みんな心が読めるところだと自体を信用していないみたいだ。子供の遊びに付き合つて僕を、暖かく見守つているということか。

「よし、いこよヒナタちゃん」

僕はしゃがんで、右腕を彼女の眼前に突き出した。彼女は僕の右腕をまじまじと見つめる。そして、人差し指だけを選び、それをくわえるように噛みついた。傍から見ると最低の口利き野郎に見えたりするかもしない。断言しておぐが、僕はどうらかと言えば年上好きだ。

「わひやつひや」

僕の人差し指をくわえたまま、ヒナタちゃんは言った。そのセリフが『分かった』と言つていたといふことに、少しづつから気がつく。

「で、アツシは何を考えてたんだ?」

次郎丸は今にも吹き出しそうな笑いをこらえている。ヒナタちゃんは口を僕の指から離した。

「Jの人は……年上好きで、髪フチ。あと、芸能人では伊東美咲が好きで、少しマゾ」

何でことだ、当たつてこる。当たつているナビ。

「何で性癖限定いいい！？ 心を読むつて言つかそれ僕の性癖を
言つてたてるだけじゃん！ 何これ！ ものつすごい恥ずかしいん
だけどー！」

僕を中心に爆笑が巻き起つた（主に次郎丸と中万華）。中万華が
ヒナタちゃんの肩に両手を乗せて叫ぶ。

「ねえ、ヒナタちゃん。今度は私を噛んで。出来るだけ強く

「いや、あんたは口のマゾ欲を満たしたいだけでしょうが！ てい
うかマンカさんの性癖なんて誰でも知ってるよー。今さらだよー。」

中万華が僕を勢いよく指さした。

「何よ！ あんたも同じマゾヒストとして共感しなさいよー。」

「何ヒナタちゃんから得たデータをもとにデーターベースしてるのでー？
僕とあんたじや格が違うからねー！ 悪い意味でー！」

中万華の攻撃に小さな勇気で対抗する僕。何とも器の小さい戦いだ
こと。もうこの件については触れないでおこう、そう考えてた時で
あつた。僕の性癖診断を見て、コリちゃんやアコ、マモルがヒナタ
ちゃんの正面に列をなして並んでいるのだ。順番待ちとは、えらい
人気の性癖診断である。いや、それはどうでもいい。まずはアコが
ヒナタちゃんに右手を差し出した。

「あ、歯んで歯んで。もつぱつちつぱつちつぱつでー！」

ヒナタちゃんは聞くと、無言でアコの人差し指に噛みついた。やつ
くつと口を指から離し、彼女は言つ。

「あなたは筋肉が好き。自分にも欲しいと思つてゐへりー」

「わ、当たつてるよ。おいねヒナタちゃん。その白い歯は清潔感
たつぱりだよ」

「……そこを褒められたのは初めて」

続いてヒナタちゃんはマモルの指を噛んだ。だが、彼にはまだ性癖
というものが存在していなようで、見えない、の一言で片づいてし
まつた。正真正銘のピュアボーイである。で、次は気になるユリち
ゃんの番。僕は目線だけをそこにやり、腕を組んで、え？ 別に興
味ありませんけど？ 的な態度で立っていた。僕の神経という神経
は全て彼女に向いている。

「ヒナタちゃん、お願ひ」

ユリちゃんはそう言って右手を出す。いくつとうつなづいて、彼女の
指に噛みつくヒナタちゃん。僕は心に何が来ても破れない、強固な
壁を作っていた。どんな砲撃にも耐えてみせる、むしろ受け止めよ
う。わあ、来ー！

「何でだらり……アラム式洗濯機しか分からない」

音をたて崩れ落ちる壁。ユリちゃんは皿をまる丸くしてつぶやく。

「……やつぱりー」

「待つてコリちゃん！ 何でちょっと納得してるので、ドラム式洗濯機だよ！？ それが性癖なんだよ！？」

壁の残骸はツツ「ミミ」その姿を変えて僕の口から射出された。

「うん……でもねアッシュ君。私は家電製品好きだし。あり得るよ」

僕は「口」もつてしまつた。そんな真顔であり得るよなんて言われてしまつたら何も言えないじゃないか。黙り込んだ僕の周りでは、そんな僕とは正反対にわいわいと楽しそうな声をあげて居る。何だから居心地が良くない。

「あ、あの、僕ちょっとトイレ行つてきます。みんなはヒナタちゃんのお兄さんを探してあげて下さー」

僕は次郎丸にそう言つと、彼の返事も聞かないまま海岸を囲む森へと駆けた。

僕はもともと下の話が好きではない。教室の隅で固まつて国語辞典を開いている男子なんかを見るとため息さえ出るのだ。そんな僕の周りで始まつてしまつた性癖談義。荷が重いつたらしうがない。ただ、楽しんでいるみんなの空気を乱すのも嫌だ。だからトイレなどという嘘をついた。方便として捉えて頂けると有難い。

僕はしばらく木陰に身を隠すこととした。潮風で葉の育ちが悪い、小さな木だ。僕がこいつしている間に話の流れが変わつてることを祈る。僕は安堵だか、何だかでため息をついた。すると、何故だかそのため息が一重になつて聞こえてきた。僕はとっさに近くに人がいることを悟つたのだ。そして、その気配は僕のもたれかかるこの小さい木の反対側にあることが感じ取れた。僕はほんの少し的好奇心に身を任せ、木の裏を覗きこむ。

「はあはあ、ヒナタあ。なんて愛らしいんだヒナタあ」

ほんの少し的好奇心は、大きな恐怖へと姿を変えた。

「変態だあああ！」

僕はいつものクセでついつい大きな声を出してしまった。僕の指さす先には、ヒナタちゃんの写った写真を見て鳥を荒げる男がいた。その姿は、ブリーフ一丁に、上は学ランという場合によつては、否。場合によらなくとも即逮捕されるような格好であったのである。

「え？ ちよ、誰が変態なの！ 吾輩！？」

「うわああ。一人称が吾輩なんて変態以外の何者でもないよ絶対！」

「き、君！ 落ち着きたまえ！ 吾輩という一人称が変態ならば、テーモン小暮さんはどうなるんだ！ あの人は見た目はあんなだけど、相撲協会の重役だぞ！」

僕は彼の言葉で正氣を取り戻した。何より、テーモン小暮さんを否定してしまった自分を反省である。

「す、すいません。普段は滅多なことでは驚かないんですけど、その格好に第一声があんなのだつたんで」

今思つたが、僕が変態だと叫んだことは間違いではなかつたんじやないだろうか。彼の服装は変態と呼ぶにふさわしいものだと感じるし、息を荒げながらなんて愛らしいんだヒナタ、なんて言つていれば、僕でなくても驚くはずである。ん？ ヒナタ？

「あ、あのすいません。もしかしてあなた、ヒナタちゃんのお知り合いですか？」

ブリーフ学ラン男は満面の笑みで答えた。

「ええ！ 爺輩、ヒナタの兄、三車院太陽さんじゅういんたいようと申します！」

名前も容姿も、僕に喧嘩を売っているんだと思った。

僕は目の前に現れたヒナタちゃんの兄を名乗る男に困惑していた。何が彼をこうさせたのだろう。僕は額に浮き出る汗に不快感を覚える中、彼に話を聞くことにした。

「あ、あの。あなたがヒナタちゃんのお兄さんとして、どうして彼女のところへ行つてあげないんですか？ ていうか何があつたらそんな格好になつてしまふんでしょうか」

三車院太陽は先ほどまでの笑みを消し、うつむいた。何やら暗いオーラを身にまとい、全身から反省の念をかもしだしている。

「吾輩たち兄妹は、ほんの少し前まで日本三大財閥が一つ、三車院家の跡取りとして幸せな生活を送つていた」

僕は驚愕した。そう言えば、テレビなんかで何度か聞いたことがあったのだ。日本三大財閥、現代日本において国内の総資産の約十分の一を保持するとされる三家。その力は絶大であり、裏社会のまとめ役とも言われている。その一つ、三車院家。

「ちょっと待つて下さいーー 信用できないですよ、そんなこと急に言われたって」

彼は学ランのポケットから紙切れを取り出した。新聞の切り抜きのようである。そこには、『日本三大財閥 三車院家没する』という見出しに、一枚の家族写真が載っていた。そこに[写つ]ているのは、今よりも随分と着飾られたヒナタちゃんと、目の前の男、そしてその両親と思しき人物である。僕は信用せざるを得なかつた。

「吾輩たちの家は、日本二大財閥である王志楊家おーしゃやと、真雲天家まうんてんにハメられた。彼らは吾輩たちが邪魔だつたんだ。詳しい事情は聞かれていなけれどね」

僕はただ聞いていただけだつた。彼の言葉から憎しみは感じない。

「両親は失踪、残された吾輩とヒナタは家をなくしてしまつた。いわゆるホームレスというやつだ」

頭の中で合点がいった。ヒナタちゃんや、この男の服装なんかのことだ。

「一か月前、そんな吾輩たちの前に不思議な奴が現れた。何でも、プレーンヨーグルトの精霊とかいう奴で、そいつはヒナタに一つの能力を与えた。それが、あの他人の性癖を読み取る能力だ」

精霊という言葉に僕は驚いたが、顔には出さず、そのまま話を聞いた。

「あの、能力が吾輩たちの生活を狂わせたのだ。それまではまがいなりにも、この海岸で楽しく過ごしていた。だがいつか、私が実はヒナタのことが大好きで、ていうかもう好きすぎてヒナタの下着をなんやかんやしているのがバレてしまつんじやないか、そんな恐怖に囚われて……」

「おい待てえええ！」

僕は今まで黙つていた分を一気に爆発させた。

「今まで素直に聞いてやつてたのに何だそれ！ 精霊とか聞き流してやつたのに何だそれ！」

「い、いやだつて！ 吾輩嫌われたくないしー 妹のこと超好きだしー！」

自分のシスコンがたたつて、妹に近づけなくなるとは。何とも馬鹿馬鹿しい状況である。滑稽といつ言葉がよく似合ひ。

「そりゃあ、吾輩だつてヒナタのギュッてしたいよ。でも前々からヒナタには噛み癖があつたから、いつ噛まれるか分かつたものじゃないんだ。もし噛まれでもしたら、吾輩は兄としてどう接すれば…」

僕は彼の言葉を聞くうちに、静かな怒りが込み上げていいくのが分かつた。妹が怖いから近づけない。噛めたらどうする。ふざけるな。

「三車院さん。あんたは兄貴失格だ」

「え？」

「あんたは自分がかわいいだけだ。本当にヒナタちゃんのことを思つてるなら、自分が嫌われたつて彼女を救おうとします。家族が崩壊した今、ヒナタちゃんにはあんたしか頼れる人がいないんだ。唯一の光が、太陽が顔を出さないで、どこに日向が生まれるんですか。

あんな小さい子を一人放つておいて、兄貴面なんてしないで下さい！」

僕が言うと、彼は眼を泳がせながら僕の両肩を掴んだ。

「そ、そんなことはない！ 吾輩はヒナタを愛してるんだ。これから的人生で、兄である吾輩がヒナタを護る。吾輩はヒナタのことを本当に大事に思つている！」

「……だつたら、もうあなたには答えが見えてるはずだ。これから、兄としてどうするべきなのか」

三車院太陽は僕の言葉をしばらく理解できない様子で立ちつくし、やがてその目に涙を浮かべた。その場にくずれ落ち、頭を抱える。僕は三車院太陽に肩を貸した。

僕のいない間も、次郎丸達はひたすらにヒナタちゃんの兄を探しているようだつた。僕が彼らの後ろ姿を見つけたのは、もといた場所から十分ほど歩いたところだ。僕は手を振りながら大声で彼らを振り向かせた。僕の隣にいるブリーフ学ラン男に驚きながらも、ゆっくりと僕の方へ近づいてきた。

「おい、アツシ。誰だそいつ？ 電話するか、警察？」

「ひつりは、ヒナタちゃんのお兄さんで、三車院太陽さんです」

マモルがこれでもかといつぶらつに驚き、言つ。

「ええ！？ 三車院つて確か……」

「うん、説明する」

僕は三車院太陽とヒナタちゃんに「起つた出来事を簡潔に伝えた。ただ、三車院太陽がヒナタちゃんのことを怖がつていてとか、そういうのは抜きにして。

「ヒナタ、『めんな。お兄ちゃんはぐれかけって』

「別に怒つてない……」

そういうヒナタちゃんの頬はかすかに赤づいていた。静かな表情の裏で、喜びをあふれさせているのが良く分かる。三車院太陽は、しやがみこみヒナタちゃんを優しく抱いた。

「ヒナタ……お兄ちゃんが何考えてるか分かるか?」

ヒナタちゃんが小さくうなづいた。今の三車院太陽の思いは、ヒナタちゃんが囁みつくなんてことをしなくとも、誰もが理解できたのだ。『ヒナタを愛してる』僕たちが思いを伝えるのに、心を読む力なんものは必要ない。ただ、強くそう思えば、それは確かに相手に伝わるのだ。僕たちはそんな一人をはにかみながら眺めていた。

第1-1章 狩りだ

人は狩りをする生き物だ。男女問わず、昔から本能でそう定められている。それは批判、もちろん否定も出来ない。絶対の自然。だからこそ、某オンラインゲームの人気があるのだ。狩りには僕たちの心を、底から高ぶらせる何かがあるんだと思う。

コンビニエンスとは、便利なものとか、好都合なんて意味がある。コンビニエンスストアーという名前を考えたのはどこの誰なんだろう。なんて絶妙なネーミングだと感心する。二十四時間営業、おいしいお弁当、たまにいる可愛い店員さん。ここは僕のようなお金がない中学生にとつての憩いの場なのである。

「アツシ。からあげちゃん買おつぜ、からあげちゃん

僕がレジで精算をしていると、背中から次郎丸が言った。

「今次郎丸さんの「ロッケを買つてるのに、感謝の言葉より先に何故追加注文が出るのか不思議でしうがないんですけど。駄目です、僕だってお金ないのに」

今日は八月三十一日。明日から学校という何とも憂鬱な日だ。次郎丸も給料日直前の金欠状態でかなり憂鬱なご様子。僕にコンビニでおやつをねだるほどに、だ。

「すいませ～ん、ポイントカード使えますか？ 私と次郎丸さんとの恋のポイントはもう溜まりきってるんですけど」

と、店員に意味不明な質問をするのは中万華。最近思うが、彼女はいつも笑顔で楽しそうだ。好きな人と一緒にいることというのがどう

「それにしても、明日から学校で何か変な気分ですよね」

「なんに幸せなことなのか、分からぬでもないけれど。

コンビニから出て、僕はまずそつ言つた。店舗のすぐ横に移動し、次郎丸にコロッケを渡す。彼は笑顔で受け取ると、それを一口かじつた。

「だよな、俺も昨日から何か無性にムラムラして……」

「いや、そつちの変な気分じゃないですからね。もつと中学生らしい気分ですかね」

いつものように次郎丸の腕に飛びついた中万華。彼の腕の感触を充分に楽しみながら言つ。

「きつとあれよ、次郎丸さん。クイズミリオネアで、五十万円に挑戦するも微妙にドロップアウトもしたいかな、みたいな気分つ」

「いやいや、分かりにくいでしょ。ていうかそんだけ出来てりゃ僕なら満足だよ。もつと満ち足りてるよ」

僕は自分のやけに美しいキューティクルを指でいじりながら、頭の中を整理した。

「何か、今年の夏休みは色々ありましたからね。神様の世界にいつたり、性癖暴かれたり」

割り込む次郎丸。

「一次元萌えを開拓したり」

「開拓してないですよ、ねつ造しないで！……ええ、まあ色々あつたじゃないですか。だから、それが終わるっていうのが何か、寂しいような、よく分かんないんですけど」

そう、不思議な気分だつたのだ。お祭りが終わった後なんかに似ている。暗闇の中に一人だけポツンと残されてしまつたような。温かいものが知らないところへ行つてしまつよくな。

「本当良く分かんねー奴だな。ま、思春期なんてそういう意味の分かんねえ悩みの塊みたいなもんだからな」

次郎丸がコロッケを食べ終える。さてこれからどうじょうか、という時。不意にコンビニの自動ドアが開く。

見覚えのある顔、といつか姿であった。中から現れたのは全身白タイツ。股間にそびえるミニ鏡餅。そう、モチモチマンだ。

「おお、かしわモチモチマン久しぶりー！ わたすは、モチ、モチ、ムアンです！」

僕達に向かつて仁王立ちでそう言つ姿は、いつかの姿と同じだつた。先ほどまで同じコンビニに居たのにまったく気がつかなかつた。トイレにでも入つていたのだろうか。

「ねえ、この変態誰なの？」

中万華が不思議そうに尋ねた。そういえば、彼女はモチモチマンと面識がない。

「えっと、この人はモチモチマンなんつていつて、町内を守つてゐるらしいですよ。一度一緒に公園の掃除をしたことがあるんです。でも、僕たちはかしわモチモチマンといつぱりない称号を貰はれたわけです」「えられたわけ

「ハツ橋マン達！ こんなところで金つなんて奇遇だなあ、ハツ橋マン達！」

「相変わらずセリフ回しが滅茶苦茶ですね。あとかしわモチモチマンの称号を頼らなつて言つた途端、称号を変えないでトキマニが呆れ氣味にそう言つと、またも自動ドアが開く。そこから伸びる手は何故だかモチモチマンの肩を叩いた。

「お姫さん、お金払つてないよね？」

何故だか一つもビックリしなかったのは、モチモチマンの格好がなんとなくそれっぽかつたからだ。

暗い個室である。中央に置かれた長机と、両端のロッカーで狭く感じる。その長机を挟むように座るモチモチマンとコンビニ店員。そして、何故だかそれを見守つている僕たち大平さん一家。何ともシユールな画である。

「これで取つたもの全部です」

モチモチマンは長机にみたらし団子と三色団子を置いた。

「また、君はそんな格好なのにお餅は取らないんだね。中途半端に団子を取つたんだね」

「コンビニ店員は静かにため息をついた。何故僕たちがここにいるかといえばだ。モチモチマンがこの個室に連行される際に、助けてかしわモチモチマン達等と戯言を発したせいである。ああ保護者さんですか、なんて誤解をするコンビニ側も問題ありなのだが。次郎丸が近くにパイプ椅子に座る。

「モチモチマン、お前よお。てめえでヒーローを語つといて万引きするなんざ、ヒーローなめてるとしか思えねえよ、おい」

モチモチマンは困り果てた表情で、頭を白いかぶり物の上からさすつた。

「いや、いや。私も何故こんなことをしたんだか。何故だか、心が『欲しいものは己で狩り取れ』という謎の言葉を発したのだ。……そうだ！ 店員さん、私はその狩り精神を貫き通しただけなのだ！ 罪は無い！」

「いや、ぱっちり有罪だよ！ 何その狩り精神つて！？ 狩り精神を貫き通す前に商品をレジに通せよ！ 馬鹿だろ、あんた！」

店員が机に乗り出しながらそう叫ぶと、背後のドアが静かに開く。そしてメガネをかけた弱々しそうな男が部屋に入った。どうやらこのコンビニの店長のようだ。

「どう、バイト君。万引き犯の人は」

「あ、店長聞いて下さいよ。この人なんか狩り精神を貫き通したとかわけの分かんない事言つてるんです。狩り精神貫き通す前に、商品をレジに通せって話ですよねえ」

「ああ、君さつきもそれ言つてたでしょ。大きい声だから聞こえてたよ。何？自分でうまいとか思つちゃったんだ。気に入つて、ついつも一回言つちやつたんだ」

「え？ ……ちょ、恥ずかしつ！ 万引き犯を問い合わせただけなのに恥ずかしつ！」

僕は何だか口をあんぐりと開けていたい氣分だった。たまたま遭遇した万引き事件。それもその犯人が知り合いだったのだ。僕には驚き以外の感情を持ち合わせられない。

「まあ、いいか。じゃ、もう警察に連絡するからね」

店長はそう言つと、自分の携帯を取り出して電話をかけようとした。その時である。

「その電話、待たれい！」

再び開かれた薄いドア。そこに立つていたのは白衣を身にまとった男。丸眼鏡に白ひげを蓄え、漫画なんかに出てくる科学者みたいな風貌だ。その男は現れるなり、モチモチマンの背中に回る。彼の背中をさすると、その男は眉間にしわを寄せた。

「やつぱりか……」

僕は急激な速さで訪れる展開についていくのをやつとの想いだつた。普段もなかなかの急展開な人生を送っているが、今回は特にそうだ。

「あ、あの……すいません。僕たちはそこの変態の知り合いなんですかけど、あなたは一体……」

白ひげの男はもう一度モチモチマンの背中を眺め、そしてゆっくり頷いた。

「すまない、紹介が遅れたね。私は世界のキノコを研究している、
木野きの小次郎こじろうという者だ」

「で、そのキノコの研究してるおっさんが何でこんなところにいるんだよ」

パイプ椅子に大きく足を開いて座っている次郎丸が言った。木野小次郎と名乗った男はその白衣をなびかせながら部屋の中をぐるぐると歩く。

「さっきも言つたように、私はキノコの研究をしている。君たちは、
冬虫夏草とうちゅうかしゃという種類のキノコを知つていいかな？」

聞いたことがある。確か蛾の幼虫に寄生して、その養分を利用して成長するキノコだ。

「はい、何となく知つてます。何か、虫に寄生するみたいな……」

「そのとおり。冬虫夏草とは文字通り、冬は虫の姿、夏には草を生やすというキノコだ。実は、今その冬虫夏草の新種が日本の。いや、世界中で増殖している。そのキノコは虫ではなく、人に寄生するのだ。そして、寄生した人間のある感情を異常なまでに高ぶらせる」

「ある感情？ それって一体」

木野小次郎は立ち止まり、静かに息を吐いた。

「狩る、という本能だよ」

僕は理解した。モチモチマンの謎の行動。それは全てそのキノコのせいだった、ということか。

「（）数日でそれは世界中に広まっている。報道規制によつてあまり知られてはいないがね」

「あれ？ そんな報道規制になつている」と、僕達に簡単に言つていいんですか？」

僕が訪ねると、木野小次郎は微笑み、次郎丸の方を見る。

「君たちに、といづよりは、そこの神田林君に伝えているんだがね」
次郎丸は一瞬限界までその眼光を鋭くした。そして、何かに気づいたように目を閉じる。

「なるほどな。てめえは……」

次郎丸はそこまで言つとゆつくり立ち上がる。僕と中万華に目で合図を送り、部屋のドアを開けた。

「行くぞお前ら。キノコ狩りだ」

僕たちはモチモチマンをコンビニに残し、一度家に帰つていた。
もちろん、木野小次郎も一緒だ。僕は彼を居間に案内した。次郎丸と木野小次郎が向かい合わせに座り、僕と中万華もその隣へ。

「で、どこのどいつが犯人だ？」

次郎丸が唐突に話しかけた。まったく意味が分からぬ。

「現世の人間にここまで技術があるとは思えない。私は、地獄、もしくはオーサ・ダハルの誰かだと踏んでいた」

木野小次郎の口から飛び出た地獄やらオーサ・ダハル発言に僕は耳を疑つた。彼はそんな僕に気付いた様子だったが、気にせず続ける。「まあ、あの男の可能性がないとは言えない。だから君に頼みたいんだ」

「あいつ……か」

次郎丸が遠くを見ながらつぶやいた。

「ちょ、ちょっと待つて下さい！　まったく事態が飲み込めないんですけど！」

僕はその場で拳手。次郎丸が静かに口を開いた。

「こいつ、木野小次郎はよ。神政会の役人だ」
しんせかい

その一言で僕は、全てを理解した。神政会といえば、以前訪れた三つの世界のバランスを保つ機関である。現世、天国、地獄の補正役。その役人である木野小次郎の発言。

「それってつまり、今回のキノコ事件が現世以外の人の仕業で、こ

の世界を滅茶苦茶にしようとしていることがありますか?」

木野小次郎が頷く。

「物分かりが良いじゃないか。私は馬鹿は嫌いだが、そうやつて飲み込みの早い人間は大好きだ」

次郎丸は木野小次郎の方へ向き直り、言つ。

「つーかよお、キノコ博士。んなもんどうやつて犯人捜すんだよ。このキノコは放つときや勝手に広まつてくれんだろ? だつたらもうわざわざ姿さらすわけねえじゃねえか」

「大丈夫だ。私はすでにこのキノコに対する抗剤を精製している。君たちがキノコを狩つていけば、犯人は自分たちの行動を邪魔する奴を見逃さないだろう。必ず君たちと間接的にでも接触してくる」

何だからともない話である。つまりは、次郎丸に人間に寄生するキノコを根絶やしにして欲しいわけだ。ということは、必然的に僕は彼について行くことになる。中万華も次郎丸から離れないだろう。僕たち三人に現世を守れど、そう言つているのだ、この男は。

「待つて下さいキノコさん! 何で僕たち三人だけなんですか! ? そんな大変なことなら、もつとたくさんの人手を……」

「君は知らないだろうけどね。今回のようなケースは稀ではない。別世界を攻撃してその主導権を奪おうとする輩は少なくないのだ。神政会に参加する者全ては、日夜何かの任務に身を投じている。今回、この事件の担当がたまたま神田林君になつただけの話だ」

木野小次郎はそう言つと、人差し指で空間に切れ目を作り、そこから金属製のスチールケースを取り出した。

「この中に抗剤が入つてゐる。これをこの町の中心で散布してほしい」

次郎丸はスチールケースを受け取ると、小さくため息をついた。

「分かつた。あとは任せてくれ」

「うん、健闘を祈るよ。神田林次郎丸君」

木野小次郎はそう言葉を残し、先ほど開いた空間の中へと飛び込んでしまつた。居間にほんの少しの沈黙が続いた。

「えつと、じゃあ早く行きましょう。町の中心って言つたらどうになるんですかね？」

僕は沈黙に耐えきれず、早口でそう言つた。次郎丸はスチールケースを肩に背負つようにして持ち、氣だるそうに立ち上がる。

「俺達の学校だよ」

僕たちは普段の通学路を歩いていた。いつも見なれた風景も、目的が変われば何か世界が違う色に見える。今日の色は決していいものじゃない。いつの間にか小さくなつたセミの鳴き声は、晩夏における気温の高さと反比例。今年は特にそれが顕著だ。確かに暑いのに、夏という雰囲気は薄れている。

「何か今日やけに静かじゃないですか?」

僕はそう言つて、辺りを見回した。今日は何故だか人の気配がない。中万華が次郎丸の体の影から顔だけひょっこり現わして言つ。

「あれじゃない? 夏休みも終わりだし、みんな家で一人晩夏の句でも詠んでるんでしょう」

「すばらしいことだけど、全員が全員それだとさすがにこの町の将来が心配になりますよ」

次郎丸も続く。

「じゃあ答えは一つだ。みんな家で一人初秋の句を詠んでるんだろうよ」

「いや何でさつきから俳句限定なんだよ! みんなもつとやね」とあるよ! いつからそんな文学を大事にする設定が付いたの! ? 聞いてないよ!」

「へべりあざける お前のツツ ハハハ 長すぎだ」

「五・七・五でシッ ハハハのダメだしすんな! 何か腹立つ!」

僕たちがいつものボケツツ ハハハを繰り広げていると、いつのまにか先ほどのコンビニのすぐ近くにやって来ていた。すると、そこから自動ドアを走り抜ける青年の姿が。それを追つて店員も走る。

「待て、万引き犯!」

「違つんだ、俺は狩り精神を貫き通しただけだ！」

「狩り精神貫き通す前に商品をレジに通せ」の野郎…」

「ひつやらキノコの被害は思った以上に広がっているようだ。そしてあの店員はまだあの言い回しを気に入ってるようだ。そして

「次郎丸さん、急いだ方がよさそうですね」

「みてえだな」

僕たちは、急ぐと言つても気持ち早足になる程度で、そこまでの緊張感を持つていなかつた。笑顔さえこぼれるほどだ。ほんの五分までは。

僕たちは走つていた。余裕ぶつっていたのもつかの間、キノコは異常なまでの繁殖を繰り返し、街全体は僕たちの敵になつていたのである。

「次郎丸さああん！ もう無理！ 中学生の体力ではもう無理！
これ以上走れない！」

「甘えてんじやねえよ、馬鹿！ 後ろ見てみろ、少しばかり元気になら
あー！」

僕は振り返る。そこには老若男女、様々な狩人。道幅を覆い尽くし、雪崩のように僕たちに向かってくる人の塊。どの人々もどこぞにキノコを生やしている。

「もう嫌だこんな現実！ 何このリアルバイオ・ハザード…」

中万華は息をはずませながら囁く。

「ねえ、こんな時に何だけれど……興奮するわー。」

「いや、本当に何だよー。どこまでマゾ体質!? ていうかもう息をはずませながら、のとこで予想ついてたよー。そんな感じの事言だらうなあつて!」

次郎丸は細い脇道を指差し、大声で叫ぶ。

「学校から遠くなつけど、あそこに逃げ込むぞ!」

僕と中万華は頷き、その脇道に飛び込んだ。背中のキノコゾンビ達はその多さゆえに、その入口でつかえてその連携が崩落した。どたどたと音をたてて崩れる人の山を僕は見届けることなく走り抜けた。

休息の意味で、僕たちはそのまま路地裏の暗いところに身を潜めていた。夏といふこともあり生臭いのが気になるが、今は文句も言つてられない。わずかに注ぐ日光に目を細めながら、僕は息を整える。

「」「これ大丈夫なんですかね？ 生きて帰れるんですかね？」

「馬鹿、じついう時の一番の敵は己の弱き心なんだよ。強い心を持つて、お前は強者だ。霸王を名乗れ」

僕は次郎丸の言葉を頭の中で何度も復唱しする。僕は霸王だ、僕は霸王だ。

「つかよお、マン力でめえ生きてんのか?」

と次郎丸。中万華を見てみると、ぼろ雑巾のように横たわっていた。やはり女の子だし、一番体力が無いのかもしれない。彼女の荒い息遣いだけが狭い空間に響き渡る。すると、彼女は身を引きずるようにして次郎丸の元へ。右手を次郎丸の足に置くと、真っ赤な顔をあげた。

「じ、次郎丸さん……私は、もう」

言つて次郎丸のジャージのファスナーを下げ始める。

「ええ！？ ちょ、待つ……」

しばらくあたふたした後、身を任せ次郎丸。

「いや駄目でしょおおおお！」

僕は叫びながら中万華にとび蹴り。体を浮かせて吹き飛ぶ中万華。

「何してんですか次郎丸さん！ 何で今わずかに受け入れたの！」

目をまん丸にした次郎丸が首を横に振りながら言つ。

「い、いや。何か今までと違う感じだったから。いつもより積極的だつたから」

「あんた案外勢いに流されやすいタイプだな。見たことないくらいテンパつてますよ」

僕は言つて、吹き飛んだ中万華を恐る恐る見る。そして気付いたの

だ。彼女の腰の辺りに生える小さいキノコだ。

「次郎丸さん、マンカさんの腰のところ見て下さい…」

「え？ うつわ、お前なんて事してんだよ！ あんな思いつきで蹴るから、あいつの体から大事な何かが飛び出てるじゃねーか」

「違いますよ！ キノコだよ、あれ！ そう簡単に大事な何かは飛び出ねーよー！」

ゆっくりと、体をふらつかせながら立ち上がる中万華。漏れた日差しが彼女を照らし、色の白いその肌を艶めかせ、鋭い狂気を立ち上らせる。その瞳はまさに狩る者の目。こちらが目を離す事が出来ない程の威圧感、今までに出会ったキノコゾンビのそれとは明らかに違う。僕は手のひらがじわりじわりと湿っていくのに合わせて、ゆっくりと後ずさり。

「わ、私は狩人。……そう、愛の狩人！」

愛の狩人、中万華はそう叫ぶと、ただ自らの獲物（次郎丸）だけに照準を定め走りこむ。いや、正確には獲物の股間へ。

「いやちよつと待て！ やっぱ心の準備つて必要だと思つ…」

「いや、リアルな返答しなくてもいいよ！ 何でもいいから早く逃げましょー！」

恐らく普段から愛の狩人として次郎丸を慕っている中万華にキノコが寄生したことで、その効果が通常の何倍にも膨れ上がったのだろう。愛の狩人としての中万華の戦闘能力はスカウターが壊れるほど

だ。

僕たちは再び逃げ惑っていた。もつ苦しいとも言つていられない。逃げなければやられるのだ。学校まで行けば。僕と次郎丸の目にはもうそれしか映っていない。ただ、町中が僕たちの敵となつた今、学校まで登校するのさえもままならない状況である。

「次郎丸さん！　あの角を曲がれば学校の目の前ですよ！」

僕は五十メートルほど先に見える曲がり角を指差し、興奮気味に言った。

「油断すんなよ、いつまたゾンビが来るか……」

次郎丸が言いかけると、僕の指さす曲がり角から現れるキノコゾンビ。

「おおい！　何だよ、何でマジで出てくんんだよ！　俺ももつ、これはいけたな、とか思つてたのに…」

ピチピチの白い清潔感ある服を身にまとい、ハゲ頭の男が一いちらへやつてくる。その右手には電動バリカンが。

「うおおおおー！　男は角刈りにしろおおー！」

僕たちは全速力のダッシュから急ブレーキをかける。そして、予定より一つ手前の路地へと入つた。それを追つてくるハゲ頭。

「男なら丸刈りか、角刈りにしろおおー！　アシンメトリーって何だああー！」

「次郎丸さん！ どうやらあの人は理髪店の人らしいです！ 最近の流行についていけなくて、結果お密さんの年齢層が上がってきてしまった感じです！」

「お前なあ、おっさんの日常を詮索してやるなよ！ おっさんも頑張つてんの！ 若かりしどきにとつたハサミはまだ衰えちやいねーの！ ただ時代があっさんを認めないだけで……」

ハゲ頭は叫び続ける。

「ひつとらアシンメトリーにするほど髪なんてねーんだよ！ ふつさふつさの髪のモスプレーで固めてみてーよ、チクシヨー！ みんな角刈りでいーじyan！ みんなで角刈りになろうよー！」

「次郎丸さん！ ただのひがみでした！ 他人の髪の毛を羨んでいただけでした！」

「お前なあ、例え心にはなくともこりう時は時代の責任にしてやれ！ おっさんは悪くないんだよと、慰めてやれ！ そうしどきや大体のおっさんは良い気分になるからー！」

次郎丸が言い終わつたところで、ハゲ頭は足元のごみ箱を引っかけて頭頂部から勢いよくコンクリートの地面に打ちつけた。勢いのままに擦り切れる彼の頭のわずかな希望。

「おっさんー、俺はあんたみたいな人生間違つてないと思うー。」

次郎丸はおっさんの一層寂しくなつた頭に向かつて叫んだ。僕たちは辿り着いた。幾多の困難を乗り越え、その眼で学校を確認できるところまで、ついにやってきたのだ。僕たちは立ち止まり、

息を整える。やつと見えた「ゴールを前に、はやる気持ちを落ち着けているのだ。

「やつですね、次郎丸さん」

「ああ、もうこんなのは勘弁だ」

僕と次郎丸は対面し、お互い頷いた。ここまでの大歎を称えあおう。僕は正面に向き直る。田の前を通り過ぎる人影。デジカメを山ほど抱えていい笑顔で走るコリちゃん。あれ？ 何か涙出てきた。

「次郎丸さん、本当頑張りましょうね」

「うん。ていうか気持ちは分かるけど泣くな、本当に悲しむのはあいつの親なんだから」

僕たちは走る、学校に向け全速力で。後ろからやつてくる大量のキノゴゾンビにひむことなく、だ。校門前には中万華が亀甲縛りで待ち構えている。

「次郎丸さん、自分で出来たよ！ 好きだしょー！」

「いらっしゃーよ、んな配慮！ ていうかそれ自分でやったんだ！ 何か尊敬する！」

言つて次郎丸は閉まっている校門を軽々と飛び越える。僕もそれに続いて飛び越え……られない！ ええ、ちょっと待つて！

「うおおおー 次郎丸さあああん！」

「アツシ！ アディオス！」

僕の上にのしかかる大量のキノゴゾンビ。鼻をさす汗のにおい、身ぐるみを剥がされる僕。いよいよ生まれたままの姿になつたとき、僕は見た。スージースから取り出した光を、構える次郎丸。地面に叩きつけられたそれはまばゆい輝きを放ち、それは僕たちの世界を覆う。光は空、大地、全てを包み込んだ。

まばゆい光に目を焼かれた僕は、しばらくそれを開くことが出来なかつた。しばらくして、ゆっくりと世界が生まれていく。次郎丸が校庭に一人ポツンと立つてゐる。僕を囲むようにして倒れてゐる人々は、すでにキノコから解放されたようだ。僕は校門をゆつくりとよじ登り、次郎丸の元へ走つた。

「次郎丸さん、もう大丈夫なんですか？」

「ああ、多分な……。ついかお前何で裸なの？」

僕はとつさに隠すべきところを手で覆う。

「いや、あの、僕もよく分かんないうちに脱がされてたんですけど……。本当何で僕だけ脱がされるの？ みんな何を狩るつもりだつたの？」

僕と次郎丸が鼻息まじりに言つていると、後ろから何やら聞き覚えのある声が。

「おっほほ、次郎丸、アツシ君う！」

もじやもじや頭にフチなし眼鏡。着物にミリタリーリュックというアンバランススタイル、そう、利理岡権田勇である。次郎丸がそれ

「てめ、何しに来たんだよ。今さらじやねーか」

を見てああ？ としゃくりを入れる。

利理岡権田勇は大きな声で笑いながら言ひ。

「いやあ、拙者もびっくりで『じぞる～』。まさか自分で作った特製栄養ドリンクをこぼしたら、みんなが襲ってくるんで『じぞるよ』。半端なくあせつたで『じぞる～』」

しばらく理解できぬいでいた。そして、僕は次郎丸と顔を合わせ、お互いの感情を一つにする。

「あのお、利理岡さん。それっていつとあれですか、今回の件は利理岡さんの栄養ドリンクのせいだと」

「ま、そういうことで『じぞるな～』まさかこんな薬が出来上がるなんてビックリで『じぞる』。ま、大きい事件にならなくて本当良かつたで『じぞるばなむるゆつけ！』

僕と次郎丸は利理岡権田勇を狩った。

人は狩りをする生き物である。それと同時に、何かを護る生き物である。護るべきものない狩りは、本能とはいわない。物欲のそれと同じである。人は狩ることで満足する。これは二次的欲求であり、自我の目覚めた僕たちに存在する、歪みともいえる感情。そんな気持ちをコントロールできることが、僕たちが大人になるための第一歩なのだ。

というような文章を書きくわえて、僕の今年の課題作文は完成した。

まだまだ夏の終わりというにはほど遠く、じわりと垂れる汗をぬぐいながら僕は一ヶ月半ぶりに登校していた。夏休みにまだ未練は残るもの、重たい足を義務であるかのように運ぶ。実際半分は義務のようなものだ。この歳になつて学校なんて行きたくない、とは言えないし。

何だか色素が薄くなつたように見える町並みは、夏休み前と何も変わらない。キノコ騒動から一夜明けた世界には、その余韻を一切残さないこたぎの良さがある。まあ、逆に何の余韻もないって言うのははどうなんだろうか。多少騒ぐところだと僕は思つ。

「うわあ、もうめつた学校めんどくせーよ。誤魔化し、誤魔化しで夏休み一回も通勤してねーのに」

で、僕の隣で未練たらたらな男は小神、神田林次郎丸。今日もいつものようにスマーマジヤージを身にまとい、氣だるそつた態度で文句を垂らしている。

「日本人は働き過ぎだとが言われてますけど、次郎丸さんはもう少し働いて下さい。ひどすぎますよ、その勤務態度は」

「いや、俺はあれだから。○型だから」

「いや全国の○型の方々に失礼ですよ。何その出来悪い血液型占い」

次郎丸は手をうちわ代わりにして、パタパタと仰ぎながら言つ。

「違ーよ。俺が言つてる○型つてのは、あれだよ。○（大人になり

たくない)型」

「次郎丸さん四百年以上生きてて、ピーターパンシンンドローム！？人間出来てないにもほどがあるよ、田を背けちゃいけないものつてあるからね！」

と、一学期も僕と次郎丸の関係は変わらないようだ。僕たちは学校の校門で別れ、次郎丸は職員室へ、僕は教室へとそれぞれ向かつた。久しぶりに開く教室のドアはやけに神秘的に見えた。少し顔を伏せるようにして、黒板側のドアを引く。教室は今まで歩いてきた廊下なんかよりも、ずいぶんと熱気がこもっていた。温かい日の光がいっぱいに注ぎ込まれている。後ろの連絡版に貼られた一学期の頃の自己紹介カードなんでものを見るのもずいぶんと久しい。教室の中央で一つの机を囲んで話をする数人のうち、マモルと田が合った。

「あ、アッショウ。」

右手を軽くあげてそう言つマモル。マモルと話をしていたのは木田とモロミン君のようだ。マモルのそれに反応してか、彼らも同じよううに手をあげる。

「おはよう。三人で集まつて何してんの？」

僕は三人の輪の中に顔をつっこんだ。机の上にはよく分からぬ記号と五十音、アルファベットの書かれた紙、そして十円玉が一枚。僕は少しばかり名前を忘れていたが、すぐさま思い出す。

「これって……じつくじさん？」

僕が言うと、それに気付いたのか教室のみんなが何だ、何だと集ま

つてきた。野次馬気分でやつてきた一年四組の面々に囲まれながら、木田が司会を始める。

「よーし、せつかくだからみんなでやろ。呪われたつて当局は一切の責任を負いません」

まずマモルとモロミン君が十円玉の上にそれぞれの人差し指を置いた。「人は声をそろえて言つ。

「うへつせん、うへつせん。この教室の担任は誰ですか？」

十円玉がゆっくりと動き出す。

迷いなく、も、に向かうそれを見て、僕は何だか冷めきった感情だった。じついうのは靈的なものでも何でもない、そんなことを皆薄々理解しているにも関わらず騒ぐ感じが、僕にはいまいち理解できなかつたからだ。担任の名前はもなか最中先生。この教室の人間なら誰でも分かるわけだし、マモルたちを疑うわけではないけれど、どうも信用に欠ける。

そのまま十円玉は動き続け、順に読み上げられる。「う、だ、し、」。

「ええ！？ 何だよモロモロ出しつて！ 最中先生でしょ、これえ！」

木田が叫ぶ。

「何かわ、わつきかひりのうへつせん微妙に間違つてんだよね

「いや、微妙とか言ひづべるじゃないだら、これ！ うへつせんは何なの！？ ウチの担任を単なる露出狂だと思つてんの！？」

その様子を見ていた女子の一人が、私もやつてみたいと手を挙げた。恥ずかしそうにする友達の手を引いて、輪の中心に。マモルとモロミン君が席を譲り、二人は定位位置へ着く。先ほど手を挙げた方の女子が言う。

「こいつらさん、こいつらさん。この女の子が好きな男の子の今欲しいものは何ですか？」

「どうやらもう一方の女の子には好きな男子がいるようだ。その子に一体どんなプレゼントを贈るうか、そんなことをこいつらさんに尋ねたいらしい。十円玉が存外あつたりとそれを示す。「び、じょ、の、ぱ、ん、てい」。

「ウーロンじゃねーかああああ！ 好きな男の子じゃなくて、ウーロンの欲しいもんだろうが、これ！ ていうか結構早い段階でウーロン手に入れたよ！ もういいんだよ！」

女の子が涙を浮かべて立ち上がる。

「……！ モロミン君がそんな男の子だつたなんてえええ！」

そして好きな男の子つてモロミン君かよ！ そのまま彼女は教室のドアを勢いよく開け、どこかへ走り去つてしまふ。

「わよ、モロミン君ー、どうすんなのあの子ー。」

椅子に座っていたモロミン君は少し微笑みながらゆっくり腰をあげた。

「ふ、まっタク。世話のヤケル子猫ちゃんだ」

やつ置いて彼女を追うモロソン君。みんなぽかんとしていたが、しばらくして心の整理が済んだらしい。

「つ、次が誰がやる?」

木田が希望者を募つてこると、モロソン君が開けていたドアから一人の男が面倒くさいにやつてきて、僕たちに言った。

「おーい、お前らもうすぐ始業式始まるぞ……って、何やってんだお前ら!」

次郎丸だ。両手をズボンに直接つこんで、何ともない表情をしている。

「こや、じつはせんやつてたんですけど」

僕は代表してそつ答えた。それを聞いた次郎丸はとんでもなく良い笑顔を見せた後、楽しげにこちらに近づいてきた。

「やつこいつことを俺無しでやつてんじゃねえ。混ざら

「ちょっと、始業式はどうすんですか。もう始まるんでしょ」

僕は一応真面目に捕獲する。何となく無駄なのは分かつているが。

「いいんだよ、そんなもん。人間なあ、スタートってのは人それぞれなの。始業式なんてやんなくてみんな走り出すときや走り出すもんや」

と、よく分からぬ言い分で我を通し、彼はこつくりさんに参加するため席に着いた。そして、誰とこつくりさんをしようか品定めをしている時である。激しいガラスの割れる音と共に一人の少女が教室へと飛び込んできた。彼女はくるりと前回り受身をとると、その力強い瞳をこつちらに向ける。

「どうぞ私と一緒にプレイを！」

セーラー服姿の中万華がそこに居た。そんな彼女を見て、女子生徒が挙手。

「先生、不法侵入者です」

中万華が次郎丸に近づいてゆく。

「ちょっと待つて。今不法侵入って言ったでしょ？ でもね、あなたも私と次郎丸さんの間に割り込んだ、愛の不法侵入者なのよ！」

「いやいや、だとしても法的に裁かれるのはあんただよ！ 何してんのマンカさん！？ 窓とか滅茶苦茶じやないですか！」

中万華は僕の言葉をふふん、といつも慢げな笑顔ではね返し、特に動じる様子もない次郎丸の隣に座る。

「私は運命に従っているだけ。私と次郎丸さんはつねに赤い糸で結ばれているのよ」

と、中万華は額から流れる血を指差す。

「それただの流血でしづが！ タッキ窓からつりこんで切れたん

でしょ！」

「もういいでしょ別に、そつこいつのせ。さ、次郎丸さんつ。」ハハハ
リプレイを

次郎丸の手をとり、十円硬貨の上に指を乗せる中万華。

「お前、これ終わったら帰れよ。窓のことは何とかしどくから」

念を押す次郎丸に体を擦りつけながら中万華は頷いた。彼女はこつくりさん、こつくりさんと唱える。

「私の一番大事な人は誰ですか！」

中万華の元気な問いかけに対し、ひぐりとも動かなし十円。 しばら
く沈黙が続く。

「あ、あれ？ サツキまではまがいなりにも動いてたんですけど…

僕は中万華の顔を覗きこんだ。顔を真っ赤にし、うつろな目をする彼女。

「……ちょ、まさか！」ハーツさんに焦らしプレイをされるなんて

もつ」今まで来るといつも氣も失せるものである。じつくりさん
なんて居るわけはない、と信じたいのだが、あくまでこれは希望。
家に神様と精霊が住み着いている僕としては、これ以上自分の積み
上げた常識を覆されたくないという小さな意地のようなものが存在
するのだ。

「マンガさん、別に焦らしかうこうこうじゃないですか。多分、こつくりさんなんてただの都市伝説なんですよ。今までのを信じる方が不自然に感じるし」

そう、別に最中先生は露出狂ではないはずだし、モロミン君だって確実にウーロンではない。これはこつくりさんというよりは、誰かのいたずら、もしくはこつくりさんをやつた当人達のおふざけがまたま続いた、と考えた方が自然だ。

「お前、夢のないこと言ひてんじゃねーよ。中学一年生だろ？　こいつの大好きなはずだろ？」

次郎丸が僕のつまらない反応に片田を細めながら言つた。全国の中学生一年生を何だと思つていいんだこいつは。

「もういいじゃないです、始業式も始まるし。こつくりさんが本当かそりじやないか考えるのもいいと思いますけど」

「は？　本當かそりじやないかつて……居るじゃねーか

次郎丸は僕の背後を指差していた。彼の言葉にほんの少しの恐怖を感じた僕は、自分の呼吸と心拍が荒くなるのを理解しながらゆっくりと振り向く。

笑顔でその小さな手を振る白い着物の少女が、若干宙に浮いていた。

「塩だ、塩をかけるよおお！」

木田が叫ぶ。その瞬間イエッサーと言わんばかりに皆は懐から台所

なんかにある食塩を取り出した。着物の少女を取り囲み、鬼の形相でそれを振りかける。

「ちょ、痛つ、しみる！ やめて！ 何でこんな用意周到なの、これは陰陽師養成学校！？」

顔をしわくぢやにして言つ少女をかばつたのは、意外や意外。スマジヤージの男であった。

「こり、落ち着けお前ら。こりこり不思議な存在には優しくすんのがフィクションつてもんだ」

『コカミはフィクションです。実際の人物・団体等は一切関係ありません』なのである。皆は妙に納得した様子で、食塩をします。次郎丸は引き続き、着物の少女に言った。

「で、お前はやつぱあれが。こりくじさんなのか？ それともただ宙に浮くエキストラさんか？」

塩を振りかけられすぎて瀕死の状態にある少女は耳から血をたれ流し、目の焦点をぶるぶる震わせている。

「え、何？ 鼓膜破れて聞こえない……」

僕たち一年四組一同は、始業式があることも忘れたフリをし、瀕死のこりくじさんを保護することにした。とはいっても、実体のないこりくじさんを僕たちは特にどうすることも出来ず、彼女を中心取り巻きを作つて見守ることが精一杯であった。

「あの、あなたは本物のこりくじさんなんですか？」

木田が恐る恐るひづ尋ねる。ひづさんは驚異的回復力を持つようでもう充分話が出来るほどになっていた。

「まあ、似たようなもんね。幽霊だし」

皆は驚きを隠せない様子で、お互に顔を見合わせる。普段から神様に保健体育を教えてもらっていたと知つたらどんな顔をするのだろうか。興味は湧く。

「ていうかあんたらねえ」

ひづさんが誰かの机に座り、先の方が透けている足を組んだ。眉間にしわを寄せ、睨みをきかせる。

「ひづさんこものを尋ねよつていうのに、捧げものが何もないってどうこいつなの。あんたらあたしが微妙に間違つてるとか言つけどもね、こっちだつてお人好じじゃないんだから。何の対価もなしに、口クな答えが得られるなんて甘っちょろいこと考えてんじゃないわよ」

何だからもつともである。神社に参拝する人だつてお賽錢を払うわけだから、ひづさんに無償で占つてもらおうなんて甘い話だ。僕は一步前に出て、軽く頭を下した。

「あ、何かすいませんでした。そうですよね、今度から気をつけます」

「本当よ。今度は何かほら。お米とか、お醤油とか。あ、カツブ麺でもいいや

「何か一人暮らしの女性的意見ですね」

「何よそれ、あたしは幽霊よ？ そんなものよりもっと高尚な存在なの。まあ今度からはそういうのを仕送り……捧げなさい」

もう仕送りって言つちゃつてるこのじゅくうさんは、見た目は同い年くらいなのにずいぶんと強い女性に見えた。癒し系なんかとは真逆。言葉の節々に何か自信みたいなものを感じ、見た目も綺麗だし、女性に好かれる女性といった感じである。そんなことを考えていると、耳元にある悪友の声が。

「な、なあアッシ。あのこいつくつさん良くな？ 何かもう、大人の雰囲気つていうか」

木田である。こいつは以前図書委員の吉川さんが好きだと言つていたと記憶しているのだが。

「お前、吉川さんはどうするんだよ」

「アッシ、恋は突然訪れるもんだって先生が授業で言つてただろ」

そういうえば次郎丸がいつかの授業で言つていたような気がする。いつもこんな意味不明なことしか教えないのだ。そして、そんな意味不明なことを素直に受け止める木田もまた良く分からぬ男だ。

「いや、まあ別にいいけど」

僕はユリちゃん一筋だ。こいつ姉さんは足を組んだままさらりと続ける。

「あ、そうだ。せつかくだから今練習してみましょ。」
「はい、捧げものとかのセンス見るから」

自分で良いことを思いついたうなづく。姉さん。木田はそれを聞いて、すごい勢いで飛び跳ねた。

「はい！　じゃあ俺やります！」

「うん、じゃあ何を捧げてくれるの？」

木田は自分のカバンをこそぞと漁り始め、しばらくしてから実際に笑顔でイワシの切り身を差し出した。

「どうですか、新鮮ですよ！」

「ちょ、臭つ。なんでカバンにイワシの切り身入ってんのよ、あんた。イワシ単体ならオッケーだけど、その普段からカバンに入ってるって感じがキモイからアウトよ、それ。失格！」

木田はイワシをギュウッと抱きしめ、タリと笑みを浮かべる。

「もつと重つて下せ……」

「え、何こいつ…？　そういう感じの人なの…？　嫌だ、マジでキモイ…　ちょ、もうあんた近づかないでね…」

その罵倒に更に快樂の扉を開く木田を僕は後ろから捕まえ、じつくり姉さんの前から退けた。

「おー、木田！　お前の恋愛の仕方はどうか怪んでるぞ！　何で初対面でいきなりマヌケと化してんだよー！」

「いや、昔おばあちゃんが、好きな人には素の自分をむき出しながらこつて」

「とんだおばあちゃん子だな、お前！　おばあちゃん泣いてるよ..」
ほんの少し青ざめた表情のヒツヘリ姉さんは、一度深呼吸で息を落ち着ける。

「ほ、他にはないの？」

すると、一本の腕が並んで伸びた。見ると、具府君と歯岸君のガンダムコングビである。

「で、あなた達は何を捧げてくれるの？」

「あのー、正直これを渡すって言ひのつけようと抵抗あるんですけどねー。いやでもやっぱりせっかくヒツヘリ姉さんに捧げるものなわけだし~」

歯岸君はそう言って体をくねくねさせてくる。とんでもなく気持ち悪い。

「うふ。で、何くれるの？」

具府君は一冊の本を彼女に手渡し、囁く。

「これは、僕たちが描いたガンダムの同人誌なんだけども」

「うわ、至極いらぬー。ていうか良くな所で披露できたわね、あんた達。ちよつとビビリの抵抗じゃないでしょ、もつと抵抗しなさいよ」

歯岸君も続く。

「でもね、これ女性向ナに描いたからさういひくつとも楽しむと思ひ」

「女性向ナって、本当に良べ披露出来たなあんた達。その度胸をもつと別で活かしなさいよ。レスラーになりなさいよ」

「ひくつ姉さんがそつまつた瞬間、不意に教室のドアが開く。

「今度は私が挑戦シマーす」

そこには、先ほど女子を追いかけていったモロミン君。その女子の首につないだ鎖を右手に悠々とした態度で立っている。

「いや、この短時間でどんな調教してんだよー」

しばらくシジミをひくつ姉さんに任せっきりだった僕も思わず声を出しちゃった。モロミン君は絶えず爽やかな笑顔を振りまいっている。

「アツシ君、私は彼女ノ幸せにイチ早ク気付イタだけでース。私は何もシテいません」

と言つ彼の左手には鞭が握られている。

「明らかに何かしてんだろ？　ああああ！　何だよそれ！　そんなもん持つといて何でそんな堂々と何もしてないって言えるんだよー。」

「ハ、コレは……父ノ形見でース」

「嘘をつけえええ！　今日はいくらなんでもそのノリ無理があるから！」

と、僕が力いっぱい叫んでいたときであった。全速力で走ってきたのであるが、汗だくで荒息をたてる黒光りマッチョの男が教室のドアから飛び込んできた。

「おおお、お前らああああ！　何をやつてんの、始業式！　一年四組の列だけポカンと空いてるんですけど！　校長涙田なんですけど！」

むつり体育教師、ロドリゲスである。ビーチやらこになつても始業式に現れない僕たちを呼びに来たようだ。木田が彼に向つて叫ぶ。「すんまつそーん、すぐ行きます！」

その言葉で火ぶたを切られたように、一斉に勢いよく移動を始める一年四組。ロドリゲスが口をとんがらせて叫ぶ。

「ちよ、お前、もうひつひつと怒りせてー。何でーじただけそんなに素直なのー。」

「すんまつそーん！」

「さつきから何なの、そのすんまつそーん！　すいに腹立つんですけど！」

「らぶつそーん！」

「誰だ、今流暢な発音でラブソングって言つたの…？　もづ謝つてすらないじゃん！」

何とも振り回される運命にあるようだ、あの体育教師は。神様も残酷な運命を背負わせるもんだ、アーメン。僕もすんまつそーん部隊に参加し、教室を出ようとする。が、後ろから何者かに引かれた右手にそれを阻止されてしまった。僕は瞬間に沸騰する細胞に胸をしめられ、ゆっくりと掴まれた腕の先を確認する。

「な、何するんですか次郎丸さん。本当にびっくりしたじゃないですか」

僕の足を止めたのはジャージ小神だった。一瞬の驚きに何となく恥ずかしさを感じながら、僕はやけに優しい目つきの次郎丸の左隣に立つた。右側には中万華が立つ。次郎丸が言つ。

「なあおい、こつくり姉さん。この後どうすんだ、お前成仏したくても出来ねーんだろ？」

「そうね、何がいけなかつたのかはよく分からぬけど。あたしは成仏つてことが出来ないみたい」

うつむいた彼女の口元はわずかに微笑みながらも、目は笑つていなかつた。

「あたしはね、やつぱりこの世界にあっちゃいけない身なのよ。人間にも交われない、かといって成仏することも出来ない。どちらにも属せないの。自分が何なのか、自分で理解することも出来ない。自分が進む道さえ見つけることが出来ない。知らない場所を意味なく飛び回るだけで、止まり木を見つけることも出来ない。あたしはただふわふわ浮いているだけなの。あたしはただそこにあるだけなの」

そういう彼女の瞳はやけに曇っていて、そこから密かに小さな雨粒を落としているように見えた。人の熱気がなくなつた教室のカーテンが、割れた窓のすきま風でふわりと揺れる。日は厚い積乱雲に飲み込まれ、教室にはもうほとんど日は差していなかつた。しばらく静かな時が流れ、不意に次郎丸が話し始めた。

「なあ、こつくり姉さん。俺が何だか分かるか？」

「何だか……？　何つて、普通の先生じゃないの」

「そう、俺は先生だ。ただ、普通つて部分がちょっと間違つてる。俺はな、てめーが成仏する予定だつた極楽浄土の管理人、神様だ」

「え？　何を言つてるの」

雲の隙間から差した柔らかな光が、次郎丸の顔を照らす。

「てめえはどこにも属せねえって言つた。んじや聞くが、それは誰に決められたんだ？　そんなもん、最初つから自分を小さく見て、立ち止まつてるだけじゃねえか。居場所なんてのはそこに用意されてるもんじやねえ。自分で作るもんだ。そりゃあとんでもなく難しいことかもしけねーけど、仕方ねーんだ。現に俺は人間じやねーけ

び、ここにこうしている。毎日楽しくやつてる。自分で無理だつて思つてる奴に、誰も居場所なんざ提供してくれねーぞ」

「つくり姉さんは目をまん丸にして、しばらく動かなかつた。太陽を覆つっていた積乱雲が流れて、また強い日差しが教室に差し込んだ時、彼女はつぶやいた。

「あたし……居場所が欲しい。またここに……来てもいい？」

次郎丸はその場でくるりと背を向け、歩き出す。

「週五で来い。とりあえず今から始業式だ」

この後すぐ、一年四組にはある都市伝説が生まれる。四十人の生徒しかいないはずのこのクラスに、自己紹介カードが四十一枚存在しているということが、色んなクラスで噂され始めるのだ。確かに、一年四組には生徒は四十人しか存在しない。ただ最近、一人仲間が増えたのだ。僕に次いでツツコミ上手な女の子が。

今日も一年四組は、楽しい時間を過ごしてゐる。

時はさかのぼり二年前。

『お父さんの仕事』 五年一組 大平敦

ぼくのお父さんは神社の神主をしています。神社の庭を掃除したり、参拝客の人何だか神社特有のよく分からぬものを売ったりします。そして、一ヶ月に一度、深夜に神様の使いが来て何やら仕事をしています。その神様の使いはいつも女人です。警察官の格好だつたり、看護婦さんの格好だつたりします。お父さんはその神様の使いに、「チエンジ」と言つと、その神様の使いは帰つて行きます。それから別の神様の使いがやってきます。お父さんがその時どんな仕事をしているのかは分からぬけど、ぼくはお父さんを尊敬しています。

昨日、この作文を参観日で発表すると、親父は涙目で「氣絶したい！」と言いながらロツカーカーの角に頭を何度もぶつけていた。

僕の名前は大平アシシ、十一歳。何ともない公立小学校に通うごく普通の少年だ。小説やドラマなんかだと、自分でごく普通なんていふ奴に限つて普通じゃなかつたりするけれど、僕の場合は信用してほしい。少し人と違うのは、ツツコミのテンションが高いこと。通知簿の所見欄なんかには、担任にツツコミが素晴らしいなんて書かれるほどだ。自分ではあまり意識していないんだけど、人から褒められるのに悪い気はしない。

今日はうちの家族三人と、友達の瀬田マモルの家族と一緒に隣町の小学校で開かれるフリーマーケットに出かける予定だ。朝からきちんと着替えをして、洗面台で顔を洗う。鏡に写る一つの寝ぐせもない髪を見て、前々から少しねたんでいた自分の髪質も、こういう

時はラッキーだなと感じる。

僕は母にも羨ましがられるというからアーチーを持つているのだ。髪は結構短く切っているのに、へたんとなってしまつ。なんとも歯がゆい。中学生になつたらもう少し髪を伸ばそうと思つ。

さて、僕の容姿の話などはどうでもいい。どうせ気にかける読者などいないだろう。

僕は家族より一足早く靴を玄関に出ていた。家族で出かけるのは久しぶりだつたし、マモルのことは一番の友達だと思っているからだ。楽しみでしようがない。

しばらく外でそわそわしていると、両親がゆっくりとやつて來た。父は少し太つていて大柄だが、その眼はいやにキラキラとしている純粋な人だ。髪の量は年々減つてきているが、その眼の輝きは増している。普通の親父に、少女漫画の瞳を組み合わせるとこんな感じだろう。

で、母である。僕は息子ながらにいつの母親はなかなか綺麗だと思つてゐる。たまにマザコンを疑われたりするが、断じて違う。客観的に見て確かにそうなのだ。僕の遺伝の原因となつた艶めく長い髪を上部でまとめ、化粧も忘れない。元が綺麗といふか、綺麗にしていると言つた方が正しいだろう。普段から二コ二コ笑顔を絶やさない人だ。だが、生活の中でその笑顔が崩れる瞬間がある。

「ママ～私の帽子どう、これ？似合つてる、これ？この前ジャスコで買つたんだけども

と親父は頭に活きタコを絡ませながら言つ。

「パパああああ！何でジャスコの海産物コーナーへ!? 帽子コナーに行かなきゃ駄目じゃない！ ていうかまだ全然元気なタコじゃないの！ 田をパチクリさせてるじゃないの！」

母が後ずさりしながらシャウトした。庭でちゅんちゅんと鳴いていた小鳥が一斉に飛び立つ。

「いや、ママ。これ店員さんの勧められたの。髪の毛が増えたよ
うに見えるんだって」

「タコス!! よそれ、黒いのタコス!!」。もう顔面からダラダラ垂れてる! 髪の毛が増えたようにって言うか、ただの化け物にしか見えないわよ!」

僕が受け継いだのはサラサラヘアーだけではないらしい。

僕たち家族は、マモル達との待ち合わせ場所であるコンビニに向かっていた。このコンビニを境に、僕とマモルの家は等距離にあるのである。

「シヒでしょりく待つて」など、瀬田さん一家が小走りでせってきた。

「すいません、待ちましたか？」

マモルのお父さんが白い歯をちらつかせながら、爽やかな汗を流す。瀬田さん一家三人は皆、爽やかを絵に描いたような家族なのだ。

「あ、いや全然待つてないですよ」

母さんがいつものように笑顔で優しく返した。親父も続く。

「ええ、本当十五分二十秒しか待つてませんよ」

「パパ！ 何その余計な添付ファイル！ 何で秒単位で計測してるの！？ 妻でありながら恐怖を覚えるわ！」

瀬田夫婦は顔を見合わせくすぐると笑う。

「相変わらずですね、お一人は。ウチなんてもう、そんな会話が乏しくて」

にんまりと微笑みながらマモルのお父さんが言った。この家族はウチの様にボケツツコミでコヨニケーションをとっているのではないか。多分家族で体を動かすことが、彼らの絆を深めているんじゃないだろ？ と推測する。マモルのお母さんが、旦那である瀬田勝の名前を呼び、後に続いた。

「あら、勝さん。私たちいつも語り合つてるじゃない。拳で」

「いや、思った以上にハードなコヨニケーションとつてたあああー！ スポーツ好きだとは聞いてましたけど、何で夫婦で格闘技！？ 悟空とチチでもそんな生活送らないよ！」

僕はいつも癖で自然にツツコんでいた。母から受け継いだ性。しばらくやつとりを見つめていたマモルが言つ。

「そりなんだよ。いつもお母さんが勝つてんの。お父さんはいつもベッドの上で顔を真っ赤にしてお尻を蹴られ……」

「やめてマモルううううーー違つよ、あれはー、あれは亀作戦だからー。相手のスタミナが無くなるのを待つてただけだからー。」

マモルの父、瀬田勝は全力で叫ぶ。そんな彼の肩に僕の父はトンと手を置き、笑顔＆ウインク。

「うふ、やめて下さい！ その安心じゅよ、みたいな感じやめて下さい。 ものつそい恥ずかしい！」

母は場の空氣を取り繕つよう^よに大きくハンドジョスチャーを交えながら言ひ。

「せ、せ、もう！」の話は終わってしまった。 フリーマーケット始まつたやつ。 マさんも元氣出して！」

「今あなた『マ』でまわるって読んだらしょおおおお… 明らかに元氣出でせる氣ないですよね！？ もう私を陥れることしか考えてないですね！？」

「え、いや… そんなことないですよ… 私はマさんのことなんとも思つてないですから」

「こや、もうマジヒストって言つてる… 剥き出し… オブラー^{マジヒスト}トどつかこいつがちつている…」

マモルのお父さんは半泣きで叫んでいた。 僕とマモルは会話の内容についていけず、一人先頭を切る形でフリーマーケットに向かつた。後ろからついてくる大人たちには大変そうだなあという感想を送る。フリーマーケットは隣町の小学校で開かれる。そここの児童や、その親が出店しているのだ。この行事に参加するのは初めてで、僕もマモルも楽しみにしていた。

さて、普段1話完結の形をとっているわけだが、あまりに作者の筆が進まないので今回はここまでなのである。呪うなら作者を呪つてほしい。では、続きます。

マモルと話しながらじらじら歩くと、綺麗な煉瓦造りの校門が見えてきた。隣町の小学校は、比較的新しい小学校で、校舎のデザインもどこかの有名デザイナーがしたらしい。詳しくは知らないけれど。

ただ、何だか特別な学校なんだろうなというのは、僕にもよくわかる。校庭が芝に覆われていて、そこに様々な家族がシートを敷き、多種多様の商品を並べる。そこに溢れる活気は、普通の学校のそれは根本から違うのだ。

「この学校は小中高一貫の私立校だから、何だか普通とは違うんだよなあ」「

僕の心の声を聞いていたかのように親父が言った。同調とかいう表現で合ってるんだろうか。不思議な感覚だ。母さんが付け足すよう言つ。

「アツシは学校の成績的に、先生に勧められてるんでしょう？　この学校の中等部

「マモルもだよ。でも僕は正直受験してまで入るのはどうかなって思つんだ。そこまでして将来どうするのかって言われたら何も言えないし。何せお金もかかるから」

「マセた考え方ね、アツシ。小五の発言とは思えないわよ

「何言つてんだよ。僕は正真正銘小学五年生だよ。決して以前の中学生のノリを作者が捨てていないとこういふことではないよ

そうである。決してそんなことはないのである。

僕とマモルの家族、合わせて六人で芝生に足を入れる。何だかピクニックにでも来た気分だ。

フリーマーケットは校庭だけで行われており、混雑を避けるため通路指定がされていた。特に何が欲しい、というのもなかつたので、とりあえず順に見ていくことにした。

校庭に入つてすぐ、右を見ると東南アジア系の父子がブルーシートの上に大量の木彫りの何かを置いていた。この学校にはこんな外国人さんもいるのか。

「あの～すいません。その木彫りは……お守りか何かですか？」

マモルの父、Mさんは言つた。^{まさる}もとい、勝さんは言つた。何だか不可思議な紋様が掘られたそれは、どこかで見たことがあるようないょうだ。東南アジア系の父子のうち、子供の方が何となしに答えた。

「オーう、コレはお守りではアリマセーン。嫌イナ相手を睨い殺すタメの道具を入れるタッパー的なアレでース」

「うん、絶対需要ないですよね、その商品！ しかも何ですかそのアバウトな商品説明！ タッパー的なアレって売る気ないですよね、それ！」

瀬田勝は先ほどから見せてている見事なツツコミをここでも發揮した。東南アジア系父子の、今度は父親の方があつはつと笑いながら大きな身振り手振りで言つ。

「まったく、ジョークが好きダナあ、モロミンは！ パパのツボ心得テルなあ、お前は！ 本当はコレあれだろウ？ 取れタテのホウ

レンソウ入れるタッパー的なアレだろう?」

「アツハツは! パーパのジョークも最高だヨー!」

「いやいや、親子でネタがぶつてますから! 結局タッパー的なアレで収まっちゃつてますから! 何で内輪だけで楽しんでるんですか! 結局何なんですかこれ!」

何だ、この親子。この学校は私立だからもつとこいつ、頭の良さやうな雰囲気を予想していたんだが。と、僕はここで気がついた。彼らの売っているものが一体何なのか。

「あの、ごめん。」れつてもしかして……昔つるたけしがウルトマンダナに変身するときに使つてたあれ? 「..」

僕が問い合わせると、父親の方が少し驚いたように答える。

「オーう、パパの趣味心得テルなあ、君は! そりテース! コレはあのう、ウルトマンに変身スル時使つテイタタッパー的なアレテース!」

「アツははは! またタッパー! 出たヨ、パーパのカブセ芸!」

「いやもう、あんたら面倒くさいな! かぶせ芸なんて言葉どこで覚えたんだよ! ていうか何でウルトマンのアレを木彫り! ? どっちにしろ需要ねーよー 何の目的でフリマ参加してんだよー!」

僕の限界いっぱいのシャウトに母さんが待つたをかける。

「落ち着いて、アツシ! 何だか本当に母さんの鏡のようで怖い! 」

「ここは退きましょう！ まだあなたの手に負えるボケではないわ
！ 二年後くらいにまた挑戦しましょ！」

まるで未来を見据えられたような母さんの意見につづりすら納得し、
僕は深呼吸。気を落ちつけた。瀬田夫婦が言つ。

「そ、もう先に行こう。他に何か素敵な買い物をしよう？」

「うね、スポーツ用品とかあるかもしれないし…」

全員の意見が一致、僕らは東南アジア父子のもとから去ることにした。いつか彼らのボケに完璧なまでのツッコミをしてやる」と決心を固めて。

何だかフリーマーケットに参加してすぐにヒットポイントを大幅に消費してしまった僕は、強い日差しと相まってかぬつたりとした足取りで歩く。そんな様子に気づいたのか、母さんが言つた。

「アツシ大丈夫？ 少し日陰にでも入つたら？」

大丈夫だと答えるよりも思つたが、実際ひどく疲れていたので少しだけ日陰という名のオアシスに心惹かれた。

「じゃあ……少しだけ日陰に入つてくるよ。みんなはフリマ見てて。
すぐ行くから」

「一人で大丈夫？」

母さんが心配そうに尋ねてきた。僕も小学五年生。地域の皆様からは、「神社のしつかりした子」で名が通つている。この小学校の地理をまったく知らないわけではないし、子供ながら小さな自信が

あつた。

「大丈夫だよ。校舎の裏側に回れば涼しいよね。ちょっと行つてく
る」

僕は母さんの気をつけてねといつ言葉を脳にこれまたぬつたりとし
た足取りで歩いた。

迷つた。行数にして一行とかからず迷つた。小学校だとたかをく
くつていた僕なわけだが、さすが私立の新設校である。校舎裏に回
つただけなのに、まるでドーアーガの塔のごとく複雑に入り組んだ
その道に僕は方向感覚を破壊され、今も日の当らない場所でおろお
ろしているのだ。こうして冷静に自分の状況を綴つてているわけだけ
ども、これは僕のどうしようもないという時にやつてくる冷静さで
あつて、何か希望があつての冷静さとかではないのだ。

もう何か自分で何を言つてるのかわからなくなってきた。すで
にそれくらい追い詰められているということなのだ。

とにかく僕は歩いてみることにした。迷子になつたらその場で動
かない方が良いとはよく聞くけれど、母親に大丈夫だと言つてしま
つた以上、プライドというものがいる。さつきから何度も迷つた迷
つたと言つているが、実際まだ僕は迷子だと誰かに言われたわけで
もない。もしかしたらただちょっとそう、ゆっくり帰つているだけ
かもしれない。無意識に。

この学校の校舎裏は自然に溢れていた。新しい、近未来的デザイン
の校舎とは違う世界のように、樹木が立ち並び、木漏れ日が大地
に降り注ぐ。澄んだ空気にさわやかな風。とっても気分は良いんだ
けれど、この危機的状況が僕に余裕を失わせる。僕はどうなるんだ
らうか。

とにかくにも、僕は「神社のしつかりした子」として、何とか
フリーマーケットに復帰しようと考えた。ありきたりな戦法ながら、
人に道を尋ねるというのが一番の近道だろうと思う。

僕は辺りを見渡す。葉の擦れる音が世界を覆つ中、一か所だけ、空気の違つところがあつた。

後ろ姿でも十分彼女は美しいんだと理解できた。

長い黒髪をなびかせながら木漏れ日を浴びるその姿に田を奪われる。凛とたたずむその少女に、僕はなぜだかゆっくりとした足取りで近づいた。

「あの、すいません……」

声をかけると、彼女は少し驚いた様子でこちらに振り返つた。大きな黒目がちの瞳に吸い込まれるように、僕は彼女を見つめていた。

「えっと、『ごめん。道を、聞きたくて』

声が裏返つていなかつただろうか。田の前の少女に不覚にも緊張している。多分同じ年くらいなんだらうけど、自分の周りにいる女子とは一線をかくす容姿だった。

僕には幼馴染のアコつて女の子がいるんだけど、あいつにしても、その周りの友達にしても、ここまで完成された存在を見たことがない。

田の前の少女はこつこつとほほ笑んだ。

「あ、うん。どこに行きたいの？」

多分いきなり声をかけられて驚いたろう、ただそれを悟られまいと柔らかな笑顔で応対するこの少女に、何だか母と似たものを感じた。

「えっと、フリマの会場に……いや、ここは校舎裏なんだから回ればいいっていうのは分かつてゐるんだけど、何だか通路みたいなのに

沿つて歩いてたらよく分かんなくなっちゃつたつていづが

僕は何故だか早口で弁明し、彼女からとつと田をさらした。

「ああ、こいつて何だか変に入り組んで分かりにくいよね。あのね、そっちの遊具の方に行つて……」

彼女の丁寧な説明に、僕は耳を傾けた。いや、というよりは、彼女の声を聞いていたのかもしれない。何だかすごく落ち着く声だったのだ。

「あ、ありがとうございます。これで戻れそうだよ。あの、えっと……」

僕は少しだけ勇気を絞る。

「名前、教えてくれる?..」

彼女はまたにつっこつとほほ笑んだ。風が流れ、木漏れ日が揺れる。

「大野、大野ユリ」

「僕は、大平アツシっていうんだ。この学校なの?..」

「うん、五年生」

「あ、じゃあ僕と一緒にだ。僕も五年生」

しばらく立ち尽くした。ただお互い、何かを確かめ合つよう、立ち尽くした。

何故だか後ろにさがろうとする足を無理やり引き止めながら、僕

は言った。

「あの、ありがとう」

彼女が頷いたのを確認して、僕は逃げるようにその場を離れた。

彼女に教えられた通りに歩いていると、いつの間にか太陽の下にいた。バザーの指定通路を追っていくと、大平、瀬田一家を発見。僕は安堵のため息をつき、小走りで家族のもとへ駆け寄った。

「アッシ遅かつたなあ。パパとつても心配してたんだぞ～」

とこっ親父の両手はフリーマーケットの買い物袋でいっぱいだった。

「うん、親父ばっかり楽しんでるよな。心配してたんじゃないのかよ～」

「その心配をはねのけるくらい、良いものがいっぱい売ってたんだよ～」

「はねのけりれちや駄田じゅん！ それはつまり心配してないじゃん！」

迷子から生還し、すぐさまボケに対応する。何だか自分のプロ根性を感じてしまう。別にプロを語ってるわけじゃないけど。

「あれ、アッシ何か顔赤くないか？ 熱もあるんじゃないのか？」

「えつ……」

とつたに頭に浮かんだ黒髪の少女を、むりやりどこにしまこう。

「別に何でもないよ」

そこからフリーマーケットを楽しんだわけなんだけど、今思い出せば、校舎裏の出来事しか印象に残っていない。

その夜。本日の戦利品を居間に広げ、一つ一つにコメントをつけしていく親父と母さん。何だかすごく幸せそうだ。

「ほらひママ、見てこれ。神社のおみくじをいれるタッパー的なアレだよ」

「ちょ、結局タッパー的なアレ買ったの！？ ていつかおみくじをタッパー的なアレに入れるのってどうなの！？」

「あと、ほら。これはお刺身を入れるタッパー的なアレで」

「パパ、もうジャスコにタッパーを買いに行きましょ。タッパー的なアレじゃなくて、リアルタッパーを買いましょ」

見てて恥ずかしいなまったく。

僕は自分の部屋で布団の上に横になっていた。天井を見つめながら、一つの決心をしていたのだ。実に単純で、馬鹿らしく、それでいて大きな決心だ。目をつむったり開いたり、口を開じたり開いたり、つねに顔の表情を変化させながら。決心していた。

「アソシ、ちょっとといい？」

母さんの声だった。障子越しに聞こえたそれに、僕は簡単にうんとう返事をする。そして、ゆっくりと障子が開いた。

「どうかした？」

「うそ、何だか今日のアシシは変だったなって。何かあった？」

母をさせやつぱつ僕の母をなんのだと思つた。

「いやあ、なんていうか。その……。中学校なんだだけやれ」

「ああ、私立受験？ したら良こんじやない？」

「ああ、したら良こううだ。」

「……え！？ 何これ？ 僕の決意がどうとかこうだりが驚くほど無意味に！」

「無意味って。そんなことはないでしょ」

母をさせやつぱつと笑つて、畳の上に座る。

「あのね、母やんは思うの。よくアリマなんかで、親の敷いたレールがどうたらこうたらみたいなのアコジやない

「ああ、ううかな」

「私はね。レールをの上を進む必要はもうひん無いと思つて、それ以上に、レールを敷く意味が分からぬいの。だから、行き先を示す」とはあるナビ、そこまでの道のりなんてどうだつてこと細つ

「じゃあ母やんは、僕に示したい行き先つてこつのがあるの？」

母さんはじばりへ吟つて、何かを見つけたように頷く。

「やうだな、とりあえず楽しく生きてほしいから。『樂しく』って、いつのが母さんの示す行き先かな。最終そこに行き着いてくれたら、途中のことは好きにして」

僕は思わず噴き出して、『らえながら言ひ。

「何だよそれ。結構無責任だなあ」

「子供はね、自分の生き方を考えた時、親のことを気にしちゃいけない。親に顔向けできない、とか考えなくていいの。とりあえず夢があるなら追えばいいし、それをやめるならやめたらいい。ただ、やめる理由に親を出さないでほしいな。私はあなたが親に変に振り回される人生送つてほしくないし」

分かるような分からないような。完璧な正解じゃない、でも間違つてはいない考え方だと思った。

「でも母さん、僕が中学受験したい理由はまじめなものじゃないよ。お金だつてかかるのに、そういうのつて」

「ほら、お金かかるつてまた親のこと考えてる。いって言つてるでしょ。それにね、動機なんものは何でもいいの。会社の面接なんかではね、何でこの会社を選んだんですかって理由をよく聞かれるものなの。知つてるかな？ で、これつて動機の内容を聞きたいわけじゃないと思うの。これは、もう聞かれるつて分かつてることだから、半分会社からの宿題なわけ。実際にそう思つてなくとも、いかにきちんと動機を話せるか、それに対しての質問に答えられるかっていうのが大事だと思うの」

「まあ、やうなのかな」

「だから、理由がまじめじゃないなんて考へなくていい。理由なんてどうであれ、進みたいなら進めばいいと思つ。別に母さんは会社の面接してゐるわけじゃないから、私にはきちんとした理由なんていらないよ」

母さんの笑顔を見ていると、何だかとても心が和らいだ。僕のやったことを何でもやらせてくれるそうだ。僕が性格が悪くて、性根が腐つてゐる最低の人間だったらどうするんだ、まったく。そんな理論はあんたに育てられた僕にしか通用しない。

「母さん、ありがと」

「うん、パパにも言つとくね」

母さんは立ち上がり、ふすまを開く。そして、廊下に一步踏み出してから言つ。

「アツシ、『樂しく』生きるつゝいわれちゃ駄目よ。これだけ守れば、後は好きにしていい」

母さんが振り向き、またやわらかく笑顔を見せる。僕もつられて笑顔に。

「息子が素直な良い子でよかつたね。その考え方ば、息子に引きこもりでもOKって言つてるようなもんだよ」

「あれ？ そーカナ？ それは母さん困るなあ」

「大丈夫。僕は僕なりに、自分の人生『楽しく』生活してみるから」「本当しつかりした子で母さん嬉しい。本当小学五年生とは思えな
いわ」

「だから中学生のノリが捨ててきれない、なんてことはないからね」

「母さんは何だか嬉しそうにふすまを開めた。

「この会話から一週間後、母さんは交通事故でこの世を去った。

線香の匂いが辺りを埋め尽くす。心に巡る様々な記憶をまとめながら、僕は一枚の遺影に手を合わせる。今日は母の三回忌だった。三年前の母との約束。それを忘れたことはない。

「アッシ、お前さ、自分の母ちゃんと会いたいって思つた事ねえか。俺はそういうことに関しては結構役に立てるかもしけねえよ?」

僕の隣で神様がそつおつしゃつてこる。僕は小さく首を横に振つた。
「僕が無理言つて母さんごめつのは、何だか母さんも望んでない氣
がするんで」

「そうか。まあ、間違つちゃいねえかもな。なんか遺言とかはあん
のか?」

「そうですねえ。……まあ、良いじゃないですか。今日は学校忌引
きしきやつたし、勉強しないと」

「おーおー、結構ドライな！」と叫びながらねーかお前。母ひかるの三回遊びだらへ。」

僕はついすり涙れる足を持ち上げ、遺影を一度ひきつと見る。

「次郎丸さん、これからもよろしくお願ひします」

「あ？ なんだよいきなり。分けわかんねー奴だな」

母さん、僕はそれなりに『楽しく』過ごせそうです。

第14章 船の旅だ（前書き）

4ヶ月間の沈黙をついに破りました、一次関数です。

放置していたわけでは無かつたんですが、本当に小説にあてるこのできる時間が減つてきています。

何だか知らぬ間に小説家になろうともリーコーワルされていりし。驚きを通り越してもう、恐怖でした。「僕の知ってる小説家になろうじゃない！」って思いました。

これからも不定期更新で読者様には申し訳ないのですが、気が向いた時にちょろつとのぞいていただける、そんな小説を目指したいと思います。

第14章 船の旅だ

人は夢を追う。大なり小なり、人は夢を追う。

そして僕は今、夢を掴むためその神経を全てそれに注ぐ。汗ばむ手で取つてを握りしめ、期待と緊張に胸膨らませ、僕は歓喜の瞬間を待つ。夢への架け橋は回り出し、僕らに「**える夢**を選別。そして、夢の一つが、光を浴びる。

「一等賞うつづづづー 豪華クルーザーの旅、家族でご招待です！」

僕の両親が天を仰いだ。

「で、お前は福引でお船の旅行をゲットしたわけだな」

夕食も終わり、いざ家族での団らんという午後八時。居間で神様兼居候である神田林次郎丸がもの珍しそうに、僕が福引で手に入れたチケットを眺める。僕がたまたま頼まれた買い物を終え、たまたま手に入れた福引券。そのたまたまが、更に金の玉々を生んだのだ。何といったまたまたマテーであろうか。

「お船の旅行つて言うと何かちゃちいですけど……。まあそうなんですよ！ ガラガラから金の玉が出てきたときのあの興奮、みんなにも見せたかつたですよ。道行く人から拍手とかもらっちゃつたりして」

「まあ、あんたが拍手もらつたつていうよりは、金玉が出たことに対しての拍手でしょ、それ」

肉まんの精霊、中万華がいつものように次郎丸の腕に抱きつきながら

「うーん。

「こや、マンカさん。何か冷める」と言わないでトモことよ。後、女
の子が金玉とか言つちやダメ」

台所からプロトンをつけた親父が、洗い物を終えてやつてくれる。

「いやでも奥かつたよ、アツシ。クルーザーの旅なんて滅多にい
けるもんじやないよ、これ？」アツシの金玉最高だよ、本当。パパ
テンション上がっちゃうな~」

「いや、だから親父もやめて。アツシの金玉とか言ひのやめて。ア
ツシの金玉でテンション上がらないで」

次郎丸が氣だるそうな態度で続く。

「いやいや、つってもアツシの金玉は立派だよ。家族旅行に招待
するなんてよ。数年前からは考えられねえ成長つぶり。おみそれし
ましたわ。これが成長期つてやつなのかねえ」

「いや、もう次郎丸さん途中からリアルアツシの金玉の話してると
ね？ おみそれしましたとか滅茶苦茶ムカつくんですけど。何であ
んたが数年前のアツシの金玉知つてんだよ。いい加減にしろよ。ア
ツシの金玉じやないから。アツシが出した金玉だから」

お食事中の読者の方々には全力で謝罪しそうと思つ。

学校は一学期が始まり、もうすぐ体育祭ということで盛り上がり
を見せている。そんな中手に入れてしまつた豪華クルーザーの旅。
タイミングの良いのやら悪いのや。

今回手に入れたのは、『ラフオオウウ号』で行く、三日間のドキド

キツァー』という、発音が難しそうのクルーザーの旅である。この時世に『キドキツァー』というネーミング。本当に『豪華』『クルーザー』の旅なのが怪しいところ。

体育祭の準備で忙しいだろうが、まあ三日間ぐらいい僕がいなくても何の支障もないだろう。僕は対してクラスに貢献していないし。次郎丸の場合、居れば居るだけ「応援旗が中一臭い」だの、「リレー系は全部マモル任せよう」だの、「やる気だけで勝てるわけねえだろ、本当に勝ちたいなら精神と時の部屋で修業してこい」だの、面倒くさいこと極まりないので学校側もラッキーだと思う。

一応マモルにもこのことは連絡しておいたし、これで何の気兼ねもなく家族旅行を楽しめるというのだ。旅行は明後日。今から準備でもするといこう。

で、出発の朝である。電光石火のような展開だがこれがコカミステータスなのだ。よく晴れた旅行日和、港に勢ぞろいした大平一家。目の前にはゴジラの三倍はありそうなラフオオウウ号である。ちなみに昭和ゴジラである。

僕たち以外のトラベラーも集結し、ラフオオウウ号の扉が開くのを今か今かと待っている。すると、クルーザーの艦長と思しき渋いおじさん（こゝ大塚明夫）がデッキに出てきた。そして、僕らに向かって一礼。拡声器を使ってあいさつを始める。

「ええこの度は、ラホ。……ラフォフオ。……ラフオオウウ号のドキドキツァーにして参加頂き誠にありがとうございます。めっちゃ噛む！ 何この船の名前！ 誰だよ名前つけた奴！」 こういう奴が自分の子供にすごい名前つけんだよ、もう！ 洒亞仁^{シャーノ}居とかつけんだよ、もう！ ……誠にありがとうございます。まもなく出航ということになりますので、どうか皆様足元に気をつけで乗船ください

この船旅がとんでもなく不安なのは僕だけだろうか。とりあえず足元に気をつけて乗船することにした。

帳簿に名前を書き終えると、まず僕たちは「これから三日間過ごすことになる部屋に案内された。オートロック式のドアを開くと、優雅できらびやかな内装が視界に咲き乱れる。開いた口を閉じることさえ忘れてしまふほどだ。部屋の中央には華美な装飾が施されたテレビブル、ソファ。その隣には何かもう飾り付けりや良いと思つてんの？」と感想を漏らしてしまいそうなベッドが三つ。

「何かす」「」です、これ。商店街は福引にどんだけ賭けてるんでしちゃうか

僕が呆気にとられて「」と、場にそぐわないジャージ姿の次郎丸が顔をゆがめた。

「おこ、ちよっと待てよ。ビックリ」と? 何でベッド三つ? うちちは四人のはずだろ」「

そういえばそうである。僕、次郎丸、中万華、親父。うちちは四人家族なわけで、ベッドが一つ足りない。中万華が顔を真っ赤にして、両手を頬に。

「そつかあ~。ベッド一つ足りないんだあ~。じゃあこの中で一人が同じベッドを使わないと……」

「アッシ、大至急ベッドを用意するよ」言つてきてくれ。もしくは猛獸用の檻だ。繁殖期のモンスターでも簡単に動きを封じられるようなやつを

「そ、そんな次郎丸さん。監禁プレイだなんて……」

「アツシ、大至急獵銃を用意するよう言つてきてくれ。古龍種でも一撃で倒せるようなヘビイボウガンを」

とりあえず僕は普通にベッドを用意してもらつことにした。

僕は一人クルーザー内の通路を歩き、係員を探していた。もう次郎丸と二十四時間一緒にいるとかいう制約は曖昧なものになってしまっている。最近は割と自由だ。一度このまましばらく離れているとどうなつてしまふのか実験してみたいものである。

家族三人を部屋に残し、ベッドを用意してもらつに頼みに行く十四歳の中学生。何だか自分でもすごく不自然だと思う。と、僕が考えてみると、慣性の法則に従つて僕の体がぐらりと芯から揺れた。どうやらクルーザーが出航したようだ。

「あれ？ 今ちょっと揺れなかつた？ え？ マジ出発しちやつた！？ ちよ、吾輩達帰れないじゃん！」

聞き覚えのある声が響いてきた。もう一人称が吾輩なんて僕の知り合いで一人しかいわけだけど、一応僕は声のする方へ足を進める。

動力施設のドアの前に、確かにあの兄妹がいた。過去、日本三大財閥の一つであつた三車院家の子息であり、現在元気にホームレス生活を送る三車院太陽、そしてヒナタちゃんである。その場にうづくまつて頭を抱える兄、太陽と、その隣でいつものように目を半開かせている妹、ヒナタちゃん。

「まさかもしや何か食糧にありつけるんじやないかと潜り込んだクルーザーで迷い、拳句出航してしまつて無断乗船が確定してしまうなんてー！ 吾輩達立派な犯罪者になつてしまつたー！」

やけに説明口調で三車院太陽が叫ぶ。相変わらずの学ランブリーフ、以前より全体的に小汚くなっていた。ブリーフも何か黄色くなっている。関わり合いにならざるを得ないのだろうか。というか、そうなる運命なのだろう。そういう星の下に僕は生れたのだ。

「あの、何やつてんですか」

少々あきれ氣味に聞いた。演技なんじやないかと疑いたくなるリアクションで驚く兄と、僕の存在に閉じていた口をナノサイズに開くという電子顕微鏡でもなければ感じ取ることができないリアクションで驚く妹。でかいリアクションの方が言つ。

「どひやーー も、君はアツシ君！ 以前吾輩達と戯れ、そして吾輩と妹に真の愛を気づかせてくれたアツシ君じやないか！」

「さつきから何でそんな説明口調なんですか。新規の読者に向けて媚売るのやめてもらえませんかね」

続いて小さいアクション。

「……お久しぶりです、九歳の私にこきなり海で声をかけてきたアツシさん」

「いやヒナタちゃんは説明不足だから。法廷でそこまでの証言なら僕は裁かれるから」

「…………めんなさい、でもそれ以外ならソフトマットことしが印象が

僕のガラスのハートはビキビキである。

「ていうか、何をしてるんですか本当に。……まあ、大体事情は聞こえましたけど」

三車院兄妹はいつもこんなことをしているんだらうか。だとしたら一刻も早く縁を切つてしまいたい。

「いやほや、やつちまつたなあだよ。畠鞆もびつくつ。本当反省してる」

「反省の色が見えないんですよ。色づいていたとしても限りなく白に近いベージュですよ」

「お、ひなたちゃん鞆の履いてるブリーフみたいな色だね！」

「いえ、あなたのブリーフは限りなく黄色に近いウニ色です」

と言つ僕の服の裾を掴み、存在をアピールするヒナタちゃん。

「……私も黄色」

「ヒナタちゃんんんー。お兄ちゃんに感化されてるよ、もひー。羞恥心を大切にしてー！」

三車院太陽は頬を染めて、全身で喜びを表現するようにヒナタちゃんのもとに飛び寄り、僕の顔をにっこりとした表情で見る。

「アツシ君、アツシ君。……奇跡のペアルック！」

「うむせーよー！ 奇跡でも何でもねーよ、悲劇だよー。あなたの妹

があんたと同じ道に進もうとしたんだぞー。」

「いじかいでアツシ君。兄として妹の進む道を否定する」とは罪なの
だよ」

「その道創ったのはあんたでしょうがー。あんたの存在が罪でしょ
うがー。」

「さつせつせ、どうおいつがヒナタの選んだ道だから。ほら、
ヒナタ。良き機会だ、ペアルック姿を見せてやる。」

そつまつてヒナタちゃんにズボン脱いじゃえとこつH口課長的なノ
リを見せる三車院太陽。一いつ本当に駄目だ。

「あ……でも私……」

何だか恥ずかじがるとは違ひ罪悪感につぱーの顔を見せるヒナタ
ちゃん。普段無表情だから余計に気になつた。

「ま、まさかヒナタちゃん……ー。」

僕は気づいてしまつたのだ。ヒナタちゃんのパンツは黄色に近いウ
ニ色なんかではなく……。

「お兄ちゃんに氣を使つて嘘をー。」

三車院太陽がとたんにじぶんもどりこなる。

「え? 何を言つてるんだ、アツシ君、君は。ヒナタが……」

ヒナタちゃんがいつもの無表情に戻つて淡々と言つ。

「私は……私のパンツは黄色いよ」

すく良い子だああああ！ ごめんね、羞恥心がどつとか言つて…。
思いやりが僕たちの心を豊かにするよ！
などと一人の少女の成長に感動していくうちに、ビニからともなく人の駆けてくる足音が。

「ややつ、誰か来る！ アッシ君、悪いが吾輩達は一度トンズラを
せていただくよ！」

「あなたは七十年代のアニメのキャラクターか何かですか。まあ、
いいです。早く逃げた方が良いですよ」

「すまないね、では…」

「私のパンツは……黄色だから」

と、三車院兄妹は早足で駆けて行つた。なんとも対照的な一人である。

「あの、申し訳ありませんがお客さま」

後ろから声をかけられた。振り向くと、そこには先ほどまで僕が探していたこのクルーザーの男性乗員が。なぜか剣呑な目つきで僕をじっと見ていた。

「あ、はい何ですか？」

「お電話で『部屋の外からパンツが黄色いと叫ぶ奴がいる』と申されるお客様がいたのですが」

「え！？ あ、いや！ 違うんです！ それはその……」

一瞬三車院兄妹の顔が頭に浮かんだが、彼らの名前を出すわけにはいかない。一応知り合いではあるし、無断乗船の旨を伝えては二人が大ピンチである。

「えっと……僕のパンツ……黄色いんですね」

僕はなんて良い奴なんだろうと思つた。

僕は一人重い足取りで部屋に戻つていた。何故だかわからないが、ほんの数分で僕のパンツが黄色いという噂がクルーザー中に広まり、出会う人出会う人、若干僕を避けている。ここでの情報伝達率は中学校以上だ。三車院兄妹と出会つたばかりに僕の豪華クルーザーの旅が、僕の福引での輝かしい成績が、見るも無残に崩れ去つていく。泣きそうである。

そもそも、考えてみればベッドを用意してほしいのだつてルームサービスの電話で済ませればよかつたのだ。僕は何のためにあんなことをしたのだろう。何のためにパンツが黄色い噂を立てられねばならないのだろう。

もう一つ言つなら、今さつきの僕が黄色いパンツを履いていると思つてゐる彼に伝えればよかつた。もうそれ以上に一旦、一人になりましたのが本音なのだけど。僕の心は弱い。

砕け散つたガラスのハートを丁寧に拾い集めながら、僕は部屋へと戻る。

すると、何だか部屋から賑わしい声が。……といつか悲鳴？

「ちょ、どうしたんですか？」

僕は言いながらあわててドアを開けた。

「おお、アツシ！ ようやく戻ってきたか！」

と何故だか鼻がテカテカの次郎丸がこちらに振り向き言った。

「えっと……状況が全く理解できないんですけど」

「アツシ！ 神田林さん大変だったんだぞ～」

親父がほつと胸をなでおろすように言っている。何故僕のせい、みたいな口調なのだ。僕は今まで一人でベッドを……一人で？ まさか僕と次郎丸が長時間離れていたせいで何かのペナルティを受けていたとしても言うのだろうか。何で今更なんだ。

「いや、俺もまさかこんなことになるとは思わなかつたんだけどよお」

次郎丸がティッシュで鼻をこすりながら言う。緊張で手汗がにじむ。あそこまで悲鳴をあげるほどだ、きっと何か大変なことが。

「俺さあ、お前と長時間離れてると、鼻の脂がすごいことになるみたいなんだわ」

「……しょぼ！ ペナルティしょぼ！ 何だよその女子高生にはダメージのペナルティ！ あんたおっさんでしょ！？ ペナルティでも何でもないわ、そんなもん！ 前々から思つてたけど神様って頭おかしい集団なんですか！？」

「いや、お前なめてるって。今まで鼻の脂が滴り落ちてる様子を見たことあんのか？」

「滴り落ちる！？ 恐っ！ 正直なめました、すんません！ ていうか、そんなことが浅香あき恵さん以外で可能なんですか！？」

中万華が次郎丸の丸めたティッシュを受け取り、自分のポケットにしまいこむ。

「次郎丸さん、あれは滴り落ちるなんてレベルじゃなかつたわ。噴き出してたわ。レーザービームのようだつたわ」

「レーザービーム！？ 何なんですか、それ！ もうホラーじゃん！ ハメディの域越えてるじゃん！」

「ええ、私もあまりに興奮して、ついシャワーのように浴びてしまつたわ」

「いや何してんだよ！ 浴びてしまつたわ、じゃないよ！ 良く見たら顔テラッテラじゃないですか！ あと何つつすらティッシュをポケットに忍ばせてんだよ！ 見てたからなー 本当どんだけ守備範囲広いんですかあんたは、往年の谷選手かー！」

と叫ぶ僕に親父がまあまあとなだめる形で僕の肩に手を置く。

「もう解決したからいいじゃないか。マンカちゃんのこれは分かり切つてることだし

そんなことを言われては、もう僕のシックハリという役割が意味をなさないような。親父はその辺りを理解しているのだろうが。

「それよりも、アツシ。ベッドの」とせぬってきたのかあ？」

「あ、いやそれなんだけども。考えてみたら部屋に電話があるじゃないかって……」

思つたのだが。そこには、妙にテラッテラの電話が。脂が滴り落ちており、もう電話として意味を成し得るのか非常に難しいところである。

「……次郎丸さん、一緒にベッドのことを言こに行きましょ！」

「あ？ 何で俺も行かなきやなんねーんだよ」

「これ以上部屋を脂まみれにしたくないからです」

「……何かこんなに罪悪感につぱいなの初めてだよ」

僕と次郎丸は脂まみれになつた部屋の掃除を親父と中万華に任せ、とりあえず部屋を後にしたのであつた。

何だか豪華クルーザーの旅と銘打ちながらも、未だにベッドがある、ないという話しかしていいない僕たちつてどうなんだろうか。メタフィクション的発言で申し訳ないのだが、全編通しての展開の早さと比べて、こういうどうでもいいところの展開が遅すぎやしないだろうか。というか、ぐどすぎやしないだろうか。いい加減、クルーザーからの景色だと、そういうものを読者に伝えたいのだけど。

いや、そんなちょっと真剣な悩みを読者に打ちあけてもしちゃがないと思う。ごめんねっ！

話を戻し、僕と次郎丸はとりあえず誰かが必ずいるであろう、帳

簿に名前を書いた部屋を田指す。その途中に誰かがいればそれでいいだろう、そんな軽い感じで田指す。

ところがどっこい（僕も三車院太陽のベタリアクションに影響されてしまつたのだろうか、ところがどっこいつて……）、さつきからこの船内でまったく乗員を見かけない。一体どうなつてているのだ。本当に色々適当なんだよな、この豪華クルーザーの旅。

「やべー、もう何かこれから俺どう家族と接すればいいんだよ。大平さん一家はこれから俺の鼻の脂ビームの恐怖と闘いながら生活するのかよ」

次郎丸が嘆く。何だかどうしようもない気がするのだけど、一応フローレーくらい入れておいてやろう。

「大丈夫ですよ、僕と離れなきゃいいだけだし」

今までどうなら問題ないですよ、と僕は続けた。

「ちつくしょ、何だこの気持ち。何かお前にフォローを入れられるとは思わなかつたぜ」

次郎丸の皮肉まじりの言葉に僕は、はいはいと頷いた。最近次郎丸の常識外れ的な行動が少なくなつたので、どうも彼にツッコミを入れる機会が減つているように思う。次郎丸もこちらの生活になじんだということだ。

僕と次郎丸が歩きに歩いて、いつの間にやら操舵室のドアの前までやつてきていた。本当どこまで人件費を削つてゐるんだ、このクルーザーは。何人で運航してゐるんだよ。

「まあ、操舵室には誰かいるでしょ」

「黒田アーサーとか？」

「こぬわけないでしょ」

軽くつっこんで操舵室のドアに手をかけたその時である。

クルーザーがとんでもなく大きな音を立て、ロデオマシーンの如く揺れ始めたのだ。倒れないよう体のバランスを保つことに必死になる。次郎丸も同様だ。しばらくして揺れが収ると、僕は次郎丸と何かを確認するように領きあい、操舵室のドアを開けた。

「ちよちよちよちよ！ 何なの今のは！ びっくりして漏らしそうになつたんだけど！」

旅の初めにグダグダなさいさつをしていたこの船の艦長らしき男が叫ぶ。船の運転を任せていたクルーがそれに応じて大声で返事する。

「艦長！ 予定航路上に巨大な氷山を発見しました！ なので航路を変更したのです！」

「IJの日本近海に氷山！？ IJの小説の地域設定どつたんの！？ いやいや、それについても独断で航路変更するつてどうなの！？ 艦長に何一つ意見を求めるなってどうなの！？」

「我々クルーは艦長をただのウジ虫程度にしか認識していません！」

「え……ちょ！ びっくりしたあ！ 信頼しきつていたクルーに手のひり返されたあ！」

いやいや、そんなやりとりを繰り広げている場合なのだろうか。氷山で船の航路を変更？ これって結構大変なことなんじゃないのか。僕は何だかうまく状況がつかめず、困惑をそのまま吐き出した。

「あ、あの……航路変更って大丈夫なんですか？」

「あ、お客様！ ビリヒーんなとヒルー。」

ウジ虫艦長が田をまんまるにして言った。まあ、もつともな意見である。次郎丸が言つ。

「すんません、iji本当に黒田アーサーいないんすか？」

全然、もつともでない意見である。

次郎丸の発言は無視することにして、僕はそのままウジ虫艦長に言ひ。

「いやあの、ちょっと乗員の方を探していたらここにたどり着いたといつか。ていうか、氷山って大丈夫なんですか？」

「ああ、まあ一応航路は変更したようだし」

とウジ虫艦長が言つと、クルーが答える。

「艦長のパンツはもう手遅れですけどね」

「おいおい、儂のパンツがいつ手遅れになつたつて？ 漏らしそうになつただけだから、微塵もパンツ汚れてな……。あ、いやちょっとしか汚れてないから。ちょっとだけだから。全部出そうになつたのを引っ込んだときにさきっちょが少しだけヒットアンドアウェイ

しただけだから

「え？ マジで汚れてんの艦隊。おーい、みんな！ 糞豚野郎が文字通り糞漏らしてんぞー！」

「ちよ、やめて！ 正直に言つた儀、馬鹿みたい！ ていつか普段儀のこと糞豚野郎って呼んでるの！？ もつきまでの微妙な敬意がまったく失われてるし！」

僕のパンツ黄色い疑惑が艦長になすりつけられそうである。とか、艦長のパンツは確かに黄色くなってしまったのだけど。

「いやあの、大丈夫ならそれでいいんですけど。ていうか、他のお客様さんにこのこと報告しなくていいんですか？ いろいろ予定も狂つてくれるでしょう」

僕が言つと艦長はお見苦しことこ見せてしまつたとでも言つたげに、かぶつっていた帽子を深くする。

「ああ、すぐに連絡しますよ。おこ君」

「何だ、ウジ虫」

「よーし、後でハツ裂きにしてやる。お客様にルート変更と氷山の旨を伝えるんだ」

「なるほど。氷山に衝突したので、今すぐ非難するよつて伝えればいいわけですね」

「何を言つてるんだ。氷山はもう避けたんだろ？？」

「航路を変更したとは言いましたが、衝突を避けたとは言つていません」

場の空気が凍りついた。それはもう氷山の如く。

ラフオオウウ号沈没のピンチである！ どうやら避けそこなつた氷山が船底に穴を開けたらしい。僕は艦長達と協力し、乗客に避難するよう訴えた。何故だかラフオオウウ号のすぐそばを救助船が走つており、九死に一生といった感じである。

「よかつたですね、艦長。救助船がすぐそばにいて

「いやあ、自信ないからずつと後ひこついててもうりつたんだが、まさか本当に救助されることになるとはな

「自信なかつたんですか！？ 自転車の練習気分で救助船使うなよ！」

とはいえ、艦長の自信のなさが乗客の皆さんを救つたのだ。すでに乗客の九割は救助船に乗り込んでいる。僕は次郎丸とラフオオオウ号からその様子を確認しつつ、自分たちの順番を待っているのだ。

「まさか豪華クルーザーの旅がこんなことになるなんて

「まあ気にすんなよ。いくらお前の金玉のせいで巻き込まれたからつてお前が責任感じる必要はねえんだからよ。それにしてもなかなかしおぼい金玉だったな。金玉のくせに。アツシの金玉なんてしょせんこんなもんなんだな」

「勘弁してください。男としての自信をなくしそうです」

まあ、今日はグッドエンドというわけじゃなさそうだけど、誰も犠牲者が出なかつたのだから良かつたではないか。何か忘れているような気がするのだけれど、何かベッドがどうとか、そんなことだらう。もう僕は家に帰つてすぐに眠りたい。たつた一時間のクルーザーの旅だったけれど、その密度はこれ以上ないほど濃い。

僕は疲れと何か達成感のようなものを感じつつ、空を見上げる。すぐそばの海に負け地を取らず、真っ青な空間が僕らを覆っていた。雲一つない、まさに蒼。ああ、太陽が眩しい。太陽が……。太陽？

「ああああ！」

僕は目をひんむいて叫んだ。すっかり忘れていたのだ。考えてみればこのクルーザーに乗つっていた三車院兄妹、名簿に名前がないわけだから、確実に忘れられているでは無いか。あの兄のことだ、きっとこの船のどこかで大きいリアクションをとつてているに違いない。あの一人が器用に乗船に紛れ込んで、この船から脱出できるわけがないのだ。間違いない。

「どうしたんだよ、アツシ。急に叫びやがつて、お前はジエローモカ」

「いや、いやあのですね。あんまり大きい声じゃいえないんですけど……」

僕は三車院兄妹のことを次郎丸に説明する。

「おいおい、何か馬鹿らしそうだ。色々と」

とこう次郎丸の気持ちは痛いほどよく分かるのだけど、だからと言

つて彼らを見殺しにするわけにはいかない。

僕と次郎丸は救助船に十分間その場で留まつてもううよつ説得、うまくいかなかつたのでベーコンの歌。僕たちは徐々に海に飲み込まれるクルーザーに戻つた。

僕たちは通路を並んで走つた。三車院太陽、そしてヒナタちゃんの名前を叫びながらだ。

「何か次郎丸さんのベーコンの歌使つたの久しぶりでしたね」

「まあ、何でもありなようで案外制約も多いからな。現世以外じゃ使えねーし」

何だかさり気な大事な設定が飛び出したような気がした。それについて、僕がもう少し踏み込んだ質問をしようとした、その時である。動力室と書かれたプレートが貼つてあるとても頑丈そうなドア。そのドア越しに聞こえたのだ。一人の男の叫び声が。本当はもう一名、幼い女の子の声も聞こえなきやいけないのだけど、あの子に大声で助けを求めるなんて無理なんだろうな。

「次郎丸さん、ここです！　きつとこの中に一人が

言いながら僕はその重いドアを引いた。
悲惨な現状であった。

氷山が衝突したのはおそらくこの部屋だつたのだろう。
すでに大部分が浸水しており、動力室の半分は、そこが元々海であつたように海水で埋め尽くされている。奥を見ると、今も水が大量に噴き出している衝突跡があつた。で、その浸水が生み出した小さな海のど真ん中に彼はいた。崩れた動力室の外壁が、孤島のごとく浮かび、その上で涙と鼻水をぐちゃぐちゃにする三車院太陽。そして、ぎりぎり浸水から逃れた部屋の一角で直立不動のヒナタちゃん。

「へーい！ ヘルプ!!」—— そのままじや母輩は海水で肌が荒れてしまつ。」

「……お兄ちゃん、頑張れ。私も助け……呼んでるから。誰かー。助けてー」

「ヒナタ！ もうと氣合を入れないと、トーン一切変わつてない！ 軽く死を受け入れたが」ときトーンの低さ。」

やつぱり助けるのが馬鹿馬鹿しくなつてきてしまつ。本当に危ない状況なのに。僕が悪いのだろうか。僕がただ非情なだけなのだろうか。

「おいこり馬鹿兄妹！ ていうか馬鹿兄！ おい馬鹿兄！ 助けに来たぞ！」

次郎丸が叫んだ。とたん日を輝かす三車院太陽、そして特に日の輝きが変わらないヒナタちゃん。

「おお！ 君は確か次郎丸君じゃないか！ 良かつた！ もう母輩死ぬかと思つてた！ 考えてみたら友達、君等だけだし！ 他に助けてくれる人いないし！」

「ていうか、そこから泳げるんじゃないんですか？ 十メートルくらいでしょ？」

僕は言った。いくら氷山近くで海の水が冷たいとはいえ、その方が明らかに生還率は高まるだろ？』。

「いやいや、アツシ君。驚くかもしれないが、見てくれ。そこにクラゲの群れ、シャチ、巨大ザメ、大王イカ、ズゴッグ、ポセイドンがいるんだ」

「海の脅威大集合してる！ 何だよその状況！ 何でそんなに引き寄せるんだよ！ あんた実は海の神様なんじゃないだろうな！」

「え！？ 吾輩は海の神様だつたのか！ 太陽なのに！ ぶふつ、面白い！ アツシ君うまい！」

「うるせーよ！ 対してうまいこと言つてないでしょが僕！ 何かそこまでツボにハマられると逆に恥ずかしくなつてくるわ！」

とにかくこの状況を何とかしなければならない。僕は周辺をざっと見渡した。彼を助けるのに有効だと思われるものは……ない！ 本當にない！ どうしようつー！

「おい、アツシ」

何だか意地の悪そうな声が聞こえた。半分真剣で、もう半分はおもしろがつてるような。そんな意地の悪そうな声だ。振り向くと、十メートルほど僕から距離をとつてアキレス腱をのばす神田林次郎丸がいた。次郎丸はそのままクラウチングスタートの態勢をとる。こいつ、まさか。

「ジャンプ台に、なりきつてろ」

その一言をスタートの合図に、次郎丸は僕に向かつて全速力で駆けだした。

「ええ！？ ジャンプ台！？ 無茶でしょ、それは！ ちゅぢゅちよ！」

田の前が真っ暗になつた。直前の映像はこうだ。

走る次郎丸。跳ぶ次郎丸。僕の顔面を踏みつける次郎丸。気がつくと、僕は空を見上げていた。蒼い蒼い空だ。いや、蒼井そらじやなくて。上体をゆっくり起こし、ここが救助船の上であることを悟つた。何とか、助かつたんだろうか。そういうえば三車院兄妹はどうなつたのだろう。家族が僕の復活を「おはよう」と一言で済ませ、何事もなかつたかのように救助船は日本へ向かう。

で、後日談である。三車院兄妹はあの後、次郎丸によつて救助船のロッカーに無理やり詰め込まれ事なきを得たらしい。その辺はベーロンの歌を使用できる次郎丸の十八番だ。そもそも、僕をジャンプ台にしたあとどう助かつたかといえばだ。次郎丸によると、三車院太陽を浸水の及んでいないところへ石ころのように投げ飛ばし、自分は海の脅威達に闘いを挑んだらしい。多分海の脅威に闘いを挑んだのは嘘だと思うが、それ以外に何も語らないのでもう聞かないことにした。まったく面倒な男である。

えらく短い旅行になつてしまつたわけで、僕は結局体育祭の準備に付き合わされる羽目になつた。雑用ならお手の物、と胸を張つて言える。

もうすぐ体育祭である。

第15章 体育祭、午前の部だ（前書き）

お久しぶりです。1年ぶりです。

受験を終え帰つてまいりました、一次関数です。

今後どのくらいのペースで更新出来るか分かりませんが、楽しい小説を提供できるよう頑張りたいと思います。

よろしくお願いします。

晴天である。空には太陽光を邪魔するものは何もなく、水色のドームに大きな照明が一つぶら下がっている印象だ。もう九月も後半なのだけれど、太陽も夏休み気分が抜けきらないのか、今日も彼は燐々と輝く。そろそろ季節は秋なんだと、誰か教えてやってくれ空の住人。

今日は我が中学校の体育祭である。先ほど開会式で『第百四十回』と銘打たれているのを聞いた。なかなか深い歴史ある体育祭だ、と僕は感心してしまう。

去年、僕が中学一年生であつた時はそれほど体育祭を楽しもうとした記憶はないのだけど、今回は違う。僕は今年の体育祭には嫌と言つ程準備に携わったのだ。

理由の一つが、友達が中学一年の後半から増えたこと。もう三学期になつていただろうか。それまで昔からの親友と初恋の相手ぐらゐしか話さなかつたのだが何故だか三学期、僕は木田というクラスのお調子者と遠足の班を組み、そこでその木田を通して友人の輪が広がつたのである。

そしてもう一つの理由。それは僕の予定表が真っ白になつっていたことだ。色々と予定が詰まつていたはずなのだけれど、新聞の一面になるようなトラブルに巻き込まれ、予定が逃げ出してしまつたのである。マスコミに取材されるのは、予定さんも勘弁らしい。

僕は自分のクラスの応援席で、テントの陰に感謝していた。ブルーシートの上に体育座りして、自分の出る競技の順番を待つている僕。今日は一段と日差しが強い。日射病には気をつけなければ。

「アツシイ、水」

氣だるそうな声で、眉間にしわを寄せた小神が言つた。青ざめた顔、

死にかけの目で僕を見つめ、腕をじんじんと伸ばしてい
る。実は昨日、彼は体育祭前哨戦だ、と言い全身の水分がアルコー
ルに取つて代わるのではないかという程酒びたしになつたのである。
僕はそれを傍観し、親父はそれに付き合い、中万華は酒を注ぎ彼の
勢いを助長した。

「次郎丸さん、一応あなたは先生なんですから。体育祭はもつとこ
う万全の体調で臨むべきだと思うんですけど」

「うるせー、後の祭りだ馬鹿野郎。過去を振り返る暇があつたらど
うやって未来を生きるか考えろ」

どこかで聞いたことがあるような台詞。しわくちゃのジャージが余
計に彼から生氣を奪つていて見える。まあ彼はそこまで体育
祭を楽しみにしていたわけではないのだけれど。次郎丸は何かが懸
かっている時は本氣を見せるが、それ以外だとからつきしやる気を
見せないので。僕は足元の水筒を次郎丸に手渡した。

「お茶ですけど、いいですか?」

「おう、アルコール抜けりや何でもいい。もう本当気分悪い。魂抜
けそう」

「アルコール抜いてもいいですけど、魂は抜けないで下さいね」

ここまで元氣のない次郎丸を僕はかつて見たことが無い。何だか少
し心配になってきた。

と、ここで校舎のスピーカーからキーンという耳鳴り音が聞こえ
たかと思うと、続けて我がクラス一のお調子者が喋り始めた。木田
は放送部に所属しているのだ。

「えへ、プログラム一番、開会式が終了しました。続きまして、プログラム二番、クラス対抗女子選抜コスプレリレーです」

次郎丸が元気になった。

僕はこのコスプレリレーなる我が校の伝統行事にあまり興味がない。僕にコスプレ趣味はないし、どちらかと言えば年上好きの僕にとって、中学生のコスプレなんぞ見る価値はないに等しいのである。まあ、それでも一応入場行進ぐらいは見ておいてやろう。大人のマナーとしてそれぐらいは当然である。別に彼女たちのコスプレを見たって何にも思ないけど。本当、何にも思わないけど。一切の期待もしてないけど。

木田のアナウンスが響く。

「では入場して頂きましょう。まず一年一組坂田さん、カツパのコスプレです」

「何でだああああ！ カツパってお前、ふざんけんなよ！ 期待してた全ての人々に謝れバツキヤロー！」

気が付いたら叫んでいた。ふざけているのも、期待していたのも、バツキヤローも、僕だった。

次郎丸が僕の肩に手を置いた。

「気持ちちは、分かるぜ」

やっぱり次郎丸は大人である。こういう場面でまったく取り乱さないのだから。ふと、彼の手元を見る。デジカメがこれでもかというくらいフラッシュをたいていた。

「全然気持ち分かってねーだろ、あんた！　ていうかカツパも守備範囲！？　次郎丸さん、マンカさんのこと馬鹿に出来無いじゃん！」

あんたも十分変態性癖の持ち主だよ…」

「馬鹿か、てめーは。カツパなんぞじつでもいい。俺は中学生が公衆の面前でカツパの格好をしているところの事実を楽しんでるだけだろ？」「うが」

「いや、当たり前のよう言つてますけど、結果得たものあんたがやつぱり口リコンだつたといつ事実だけだからね！　もう知り合つて半年になるけど、ようやくその疑念に確信が持てただけだからね！　もへ、何だよあんた！　一日酔いで寝てろよ…」

「まあやつ言ひてやるなで！」^{アツシ君}アツシ君

もう一人の小神、利理岡権田勇が当たり前のよう僕らのテントに陣取つて、当たり前のよう一眼レフを構えていた。傍らには寝袋と十分な食料。

「何で前乗りしてんだああああ！　ていうかあんたは一次元にしか興味なかつたんじゃないんですか！？　そういう設定だつたじゃないですか！」

「アツシ君、拙者もその設定を受け入れる気だつたんで！」^{アツシ君}アツシ君もいざ明日、中学生の体育祭があります、と聞かされて動かない男なんていないんで！」^{アツシ君}アツシ君

「なるほど、これがキャラクターが作者の手を離れて勝手に動き出すつてやつか！　なんてマイナス方向に動いてんですか、あんた！　ていうか体育祭と聞いても動かない男いつぱいいるよ！　普通は

興味も湧かねーよ！

何だ、神様というのはみんな変態なのか。変態が神様になれるのか。あながち間違つていらないような気がするけども、深く考えないでおり。そういうえば、一つ気になる点がある。

「あれ？ ていうか利理岡さん、前乗りするにしたってどうやって学校に入ったんですか？ この学校はセキュリティがしつかりしてから、忍び込むなんて出来ないはずじゃ」

「あ、その辺は大丈夫でござる。この学校には同志がいたでござる」

と利理岡権田勇は役員席の方を指さす。努力・友情・勝利ではなく、黒光りマツチヨ・むつつりスケベ・体育教師の三本柱を掲げるロドリゲスが、その焼けた肌と綺麗な対比になつてている白い歯を見せる。小さなガツツポーズをしているようだ。そうだ、よくよく考えてみれば、僕の身の回りにはまともな大人なんていないじゃないか。変態が神様になれるとか、そういうことじやない。僕の知り合いがみんな変態だったのだ。

何だか自分の将来が心配になつてきた。そんなことを考えていると、ふいに後ろから声が聞こえた。

「体育祭、楽しんでる？」

振り返ると、そこには白装束の幽霊が。こつくり姉さんだ。いつの間にかこの学校、というか、うちのクラスに住み着いたお化け。見た目は僕たちと遜色ないくらいの幼さなのだけど、纏うオーラは頼りになるお姉さんだ。僕の後ろでふわふわと宙に浮いている。

「いっくり姉さん、おはようございます。これから楽しみたいって

感じですかね。競技自体は今からが本番ですし

僕は普段学校で会う時と同じようにあいさつした。とは言つても、学校で二つくり姉さんは会うのがなかなか珍しいことである。

「あら、そう。あたしはもうね、さすがにこいつの楽しむ歳でもないし。こう見えてあんた達の何倍も生きてるよ。何か正直疲れりつてこいつか。こういうのつて若子が楽しむものだしね」

と、二つくり姉さんはナイキのHマークスの紐を丹念に結ぶ。

「いや、二つくり姉さん走る気満々じゃないですか。Hマークスつって。今の子分かるんですか」

「いや、違うから。あたしこれ、普段から履いてるじこの靴。白装束にHマークスつてもうトレンドなんだから、二つくりの世界では

は

それがトレンドなら、もう僕は世の中の流行なんて一切気にしないぞ。

何だか競技前から疲れてしまっているのだけれど、だらけているわけにはいかない。クラス対抗の体育祭、我が一年四組は一致団結して優勝を取ろうとする気に満ち溢れているのである。とにかく、自分の競技までは時間があるのでし、他のみんなを応援することにしよう。

コスプレリレーでの一年四組の成績は全体で四位。何気に元気な奴らが集まっているだけのことはある。小学生の頃はバレーやってました、みたいな女子が多いからな、つづきのクラスは。

「でまたも木田のアナウンスが響く。

「以上、コスプレリレーでした。続いてプログラム三番、クラス対抗男子リレー予選です」

僕には縁のない競技、男子リレー。我が中学校では午前中の予選で午後から本選出場する六クラスをしぶるのだ。うちのクラスからは言わずもがな、マモルを筆頭とした六人のちょいモテ男子が出場する。マモルが出場しているといつものアツシも、応援しないわけにはいかない。

「アツシ、ちょっとといい？」

不意だつた。意識が完全に男子リレーに向いていたから、というのももちろんだ。いやそれより何より、まさかこいつから僕に、それもこんな普通の女の子みたいな口調と態度で話しかけてくるなんてことは僕の十四年の人生において初めてだつたからだ。不意を突かれた。藪から棒。こんな空気は初めてだつた。

「ど、どひしたんだよ、アゴ」

半そで半パン、いつでも走れます、跳べます、投げれます状態の磯野アコがそこにいた。思わず声が震えてしまつた理由は僕にもよく分からぬ。

「いや、あのさ。アツシに聞きたいことがあつて」

「何だよ」

「子供は男の子と女の子、どひちがいい？」

「こきなり何だよ、新妻かお前は」

「どーせ女の子だよね」

「どーせって何だ、どーせって！ 幼馴染の僕を何だと思つてるんだ！」

まったく理解できない。いや、ついていけないのは前からなのだけど。いきなりの訳の分からぬ質問、正直戸惑つてしまふ。……あれ？ まさかこれ、あれ？

よく漫画を読む。バトル漫画、スポーツ漫画、ラブコメ。ジャンル問わず、僕はよく漫画を読む。そして、そんな漫画の主人公にありがちなのが幼馴染の女の子だ。彼女達は例外なく美人で、そして多くの場合主人公に好意を寄せる。幼馴染、友達として仲良く接してきたが、いつの間にかそれが恋愛感情に発展していた、というパターンである。

まさかそれなのか。僕らの日常において適當、粗雑に扱われてきた恋愛要素というものが、ここにきて動き出そうとこうのか。

初めてアユを女性として認識する。まずい、ドキドキしてきた。僕はユリちゃん一筋であつて、そういうところは自分でもきっちりしようという信念がある。とは言え、目の前の女の子が自分に好意を寄せているのではないか、という疑念を抱いてしまつたら最後。多少のブレはどうすることもできない。

黙つていれば可愛い、というのが一般男子によるアユへの認知であつて、僕もそれには納得している。こいつは言動で損をしている。何だか『つたく、こいつの面倒は幼馴染である僕しか見れないよな』みたいな感情が芽生え始めている。何故上から目線だ、僕！ 何故モテ男気どりだ、僕！

僕の心の葛藤を無視して、アユは話を続ける。

「あのや、アツシなら大丈夫かなあつて思つたんだけど

アコが視線を落とし何かを促すようにほり、と呟いた。

頭をぐるぐる回っていた思考の嵐がぶつんと途切れた。今までの憶測を全て覆し、新規の憶測が生まれる。

「誰だよ、その子」

これしかない、といつ台詞だった。少女は言つ。

「黙れ、無個性！」

何故か怒られた。しかも刺殺される勢いの鋭い一言で。

今までアコの背中で控えていたのだろう、彼女の合図でその少女は僕にその姿を見せた。アコの体を盾にするようにして、ひょいと頭をのぞかせる。眩い太陽光を負けじと反射し艶めく、肩まで伸びた黒髪。それと対比されるような白い肌の少女。年齢はちょうどヒナタちゃんくらいだろうか。ただ小学生くらいの女の子は年齢判断が難しいので、はつきりとは分からない。ただ確実に小学生であることは間違いない。この女の子の来ている制服が、うちの中学校の小等部のものだつたからだ。そして、この少女。これは僕の勘違いかも知れないが、何だかどこかで会つてているような気がする。知り合いか、もしくはデジヤヴか。

いやそんなことよりも開口一番『黙れ、無個性！』と罵られて、少女の容姿を冷静に分析している自分の今後が心配だ！ 周囲の影響が大きいとしか考えられない！

「何この人の傷口をピンポイントで貫く精度！？ 連載当初から気にしているのに！」

「だったら目立つ髪型とか、武器とか、服装とか、何でもいいから

努力すればいいじゃん！ 語り部だろ！ お前の個性はお前が作れ
！」

「うおおおお的を得た意見だチクショーチクショーチクショーチク
シヨー！」

アユは僕と少女の会話の流れを無視してマイペースに話し続ける。

「アツシ、この子の面倒見てあげてくれない？ ユリに頼まれちゃ
つた」

はっと我に帰る。が、アユの言つことがよく理解できない。むしろ
この流れ全体が把握しかねる。体育祭、小等部の少女、面倒を見る、
ユリの頼み、繋がるようで繋がらない僕の思考回路。

「ユリって……ユリちゃん？ 何でユリちゃんがそんなことを頼む
……あ

引っかかりがあった。いや、見つけた。思い出したのだ、もうつい
ぶんと前の話を。ユリちゃんが僕の家にやつて来たあの日、彼女が
言つていたことを。そしてそれが概ね確信に変わる。絶妙のタイミ
ングでアユから答え合わせ。

「この子ね、ユリの妹で大野紅葉ちゃんおおのもみじ

大野紅葉、彼女の憎たらしげで攻撃的な視線に、僕は苦笑いで答えた。

大野由利、僕の初恋の相手にして可憐・清楚・快活・善美・艶麗
のステータスを持つ少女である。電化製品への異常なこだわりを除
けば、ひたすらに完璧な彼女。出会えたことに感謝する。

そんなユリちゃんには妹がいる。ということを僕は本人から聞いていた。正直なところその瞬間、僕はユリちゃんとお話をしているという状況下に興奮しきっていたために聞き流していたのだが、今こうして彼女の妹と対面して何故この件について深く言及しなかつたのかと激しく後悔している。

「…………」

大野紅葉は無言。僕、大平敦に対しても見知りしているとか、大野紅葉自身がクールビューティーな個性を發揮しているわけではない。敵意、警戒である。

僕と言つ人間に警戒し、睨みをきかせているのである。理由は分からぬ。ユリちゃんをそのまま幼くしたような彼女の威圧的視線に若干のニヤケ面をする僕に対して、何故警戒を抱く必要があるだろうか。

「いや、そりや警戒するに決まつてんじゃねーカ。むしろ変質者に対する警戒する良く出来たガキだる」

次郎丸は言つた。

「次郎丸さん、地の文を読みとらないで下さいよ」

僕は紅葉ちゃんを一年四組の応援テントに招き入れていた。この強い日差しの下に女の子を放置するわけにはいかない。アユは男子リレーのあとに続く女子リレーへ出場するためそちらへ向かった。アユが言つにはこうだ。

「あのさ、さつきユリと紅葉ちゃんが一緒にいて、そんでユリが校舎に忘れ物取りに行きたかつたらしくてお守りを任せられたんだけど」

「女子リレーがあることを忘れてすぐ行かなきゃいけないから、次は僕にお願いしよう」とか?」

「そうこうだとしたら?」

「あ、何だここいつらいとする?」

と、そんなやつとりがあつて、今現在こうしているわけである。知らぬ間に男子リレーは終わっていて、うちのクラスは予選を突破したらしい。そして何故だか分からないが次の競技の準備やら何やらが奇跡の重複を見せ、一年四組のテントには僕と次郎丸、そして不法侵入者の利理岡権田勇といつおおよそ子供の世話には向いていないであろう輩が大野紅葉と時間を共にしてこる。そして先ほどの場面へ続く。

「さつきからじろじろ見るな! 気持ち悪い!」

大野紅葉は耐えかねたように叫んだ。さつきからどうも嫌われてしまっている。完全に僕のことを見事とみなした目つきである。爪を立て、牙をちらつかせながら威嚇する猫のようだ。触れたら怪我をしそう。

「あの、紅葉ちゃん。じろじろ見てたことはないめんね、だけど安心してほしいんだ。僕は君のお姉さんのコロちゃんの友達だから」

「友達やめろ! 今すぐやめろ! 殺すぞ!」

「そんなやめろって……こやいやいや今殺すぞって言わなかつた! ? そんなことより殺すぞって言わなかつた今! ?」

「お姉ちゃんは私の憧れ！ 完璧な美の象徴！ お前は近づくな、無個性が移る！ 刺すぞ」

「あ、も、ちよ…… 反論したいのに最後の一言が強烈すぎて触れられない！ 無個性が移るわけないとか、そんなことより刺すぞが気になる！」

「やつからひるといー！ 自分のツッコミに酔つてゐるのかー。やつだろー 落とすぞ」

「どいにー？」

「私の魅力に」

「小学生に軽く落とせる宣言されたあああ！ もう立ち直れないかもー。」

ただユリちゃんとこの少女、大野紅葉は余りに顔の造形が似通つてゐるので、落とされるわけがないとも断言し難い。何と言つ意思の弱さだ、僕。

ブルーシートの上で胡座をかいた次郎丸がこちらを向く。

「お前相変わらず子供になめられる性格してんや。大平さん一家の恥だぞ、まつたく」

「別に大平さん一家は代々子供に好かれる家系でもなんでもないんですから、恥ではないでしょ恥では」

「何言つてんだよ、お父さんなら子供になめられたらベロベロ舐め

返すくらこの度胸を持つてゐるぜ?」

「持つてねーよー。あんたいい加減に親父がロリコンだつていう共通認識持たせようとするのやめろよ! それガセだから! もとはと言えばあなたのせいだから!」

紅葉ちゃんがこの流れに乗る。

「ロリコンの息子なのかお前! 絶対近づくな! 千切るぞ!」

「いやいや紅葉ちゃん、僕の親父は別にロリコンじゃ……ああくそ! やっぱり最後が気になる! 何を千切られるつていうんだ、僕はー やばいよ、ここアウェーにもほどがあるよ!」

一旦深呼吸をさせて頂きたい。このままでは今章、僕がひたすら罵られ終わる可能性がある。冷静に、沈着に。紅葉ちゃんととの接し方を考えなければならない。

と、僕の心を読んだのかなんなのか、次郎丸が唐突に紅葉ちゃんに話しかけた。

「つかよお、お前は何でそんなにアシンを毛嫌いしてんだ?」

紅葉ちゃんは不機嫌そうな顔で一旦僕を睨みつけると、すぐに目をそらし答えた。

「……お姉ちゃんは私の自慢なの。それなのに、こいつが。」いつの話が……、ああもう本当ムカつー! いい加減いつ死ぬのかはつきりしないー!」

「死期を自分で定めるなんて暴挙できるわけないじゃん! 紅葉ち

やん、本当に何でそんなに僕のこと……」「

「ハハハ……お前が嫌いなんだから嫌いなんだ！」

本当に訳が分からぬ。何か理由がありそうな感じではあったのだけれど。

お姉ちゃんは私の白黙……。

何かユリちゃんに、関係があること？ 僕のユリちゃんととの関係？ その関係性は。

「あつはっは、アツシ君は子供に嫌われるんでござるなあ！ アツシ君、見ていいでござる」

と言つて利理岡権田勇は、普段から背負つているミコタリーーリュックのチャックを開け、中を漁りだした。中から一體の美少女フィギュアを取り出す。

ミコタリーーリュックなんだから、もつとミコタリーなもの入れるよ。

「アツシ君、女の子といつのはお人形遊びが好きなものでござる。このようにつねに遊び道具を持ち歩くというのが、子供に好かれる第一歩でござるよ。では、紅葉ちゃんとやら、拙者が唯の役で、君が澪の役を」

紅葉ちゃんはそこまで聞くと近くにあつた水筒（誰かが忘れて行つたのだろう）を手に取り素早く外蓋、内蓋を外すと、その中身を利理岡権田勇の顔面に無言でぶつけた。レモンの良い香り。どうやら水筒にはレモンティーが入っていたみたいだ。冷や汗と涙とレモンティーが利理岡権田勇の頬をぬらす。

「拙者まで嫌われているでござるのか。ていうか最近拙者こんなのがばつかり、もうやだ」

大野紅葉は依然としてこちらに心を開く気配がない。ただこれまでの素振りから、この警戒心には何らかの理由があるのは間違いなさそうだ。今まで彼女の存在さえ頭の片隅に追いやっていたというのに、僕が何をしたと言つんだろうか。結構な理不尽さである。いや、だからこそなのだろうか。

「あ、紅葉！」

口内によだれが溢れた。

聞き覚えのある。聞きがいのある。聞けば嬉々とする。大野由利の、柔らかくも僕を驚撃む声が。僕の背後をそつと包んだ。

「あ、ユリちゃん！」

僕はキヤスター付きの椅子に座っているかのように、その場でぐるりと体を回転させた。

その瞬間。

脳が揺れた。視界がにじむ。そして理解する。後頭部を強く殴打されたのだ。とっさに視線を頭ごと上げる。ユリちゃんを目標に綺麗なフォームで宙を舞う大野紅葉が、紅葉のような赤みを頬に帯びた大野紅葉が、この衝撃の正体。以前にもこんなことがあった気がする。僕は、ジャンプ台にされたのだ。

「おひねいすあまああああ！」

じゃれる子猫のように、大野紅葉は姉の胸に飛び込んだ。

「寂しかったですか姉さまああああ！ 言いつけを守つて良い子にしてました！ 撫でて下さい！ 犯めて下さい！ なじつて下さい！ もうあれです！ 脱ぎます！ 今！」と脱ぎます！」

「いや、あの。分かつた、撫でるから。それはするかい。あとのは無しね」

姉としての微笑みを浮かべたユリちゃんが、大野紅葉の頭を優しく撫でた。

映像無しでは伝えきれない衝撃である。

「ゆ、ユリちゃん……。あの、えっと……。その、紅葉ちゃん……」

「アコから聞いたよアツシ君。妹の面倒見てくれてたんだよね。ありがとう」

「あの、うん。それは別にいいんだ。全然気にしてないし」

そつまつたぐ気にはしていない。いくら罵声を浴びせられたところではそれは子供のしたことであるし、僕も人生の先輩としてそれを寛大に受け止めるべきであろう。

「お姉様～、もう会えないかと思いました～。またこうしてお姉様と同じ空気を感じ、パンツの色を予想できるだなんて感無量ですっ」

「パンツの色は予想しないでね、紅葉」

どんなに口が悪いとしても、それはこれから大野紅葉といつ少女が成長する過程で洗練されていくものである。ユリちゃんほどとは言わないが、きっと素敵な女性になってくれるだらう。

「せひ、ちやんと面倒見てくれてたアッシ君や先生にお礼言つて

「アッシさん、私のよつな不肖な者に優しく接して頂いて誠にありがとうございました。この『J恩は一生を賭けてでもお返し致し……』

「誰だ、この子をおおおーー！」

僕は叫んだ。

この短い時間ではあるが接してきた僕の知る大野紅葉は、姉のステータスを可憐・清楚・快活・善美・艶麗とするなら、可憐・残虐・暴言・嫌忌・厚顔のステータスである（可愛いのは認める）。しかし、世の中には僕らが信じがたいような超常現象といつものが存在する。大野紅葉を、シスコン・シスコン・シスコン・シスコンのステータスに。変えてしまつよ。もはや別人である。

「ギャップなんてもんぢやないよ、これ！ 訳分かんねーよー！」

そんな僕の叫びに、うふふとセレブ的な笑みを浮かべた大野紅葉。

「何をおっしゃつてこるのやつをいつぱつです、アッシさん。うふふ」
かけるべ。あ、間違えた

「いや結構早い段階でちよつと本性出たよー 意外とおっしゃる
よいだよ、この子ーー！」

僕はそこでコリちゃんの様子を即座に確認した。すると、彼女は大野紅葉の問題発言に気づいていないようで、胸に抱えた白い円盤型の何かに集中していた。

「え、あれ？ ニコちゃん？ えっと、その持つてるの……何？」

「あ、これね！ 教室に忘れてたんだけどね、さっそく取ってきたの
！ 自動掃除機ロボットのルンバ！」

「あちやーー 恐れてたことが、あちやーー！」

もうビビりからどうシッコんでいいのか分からなくなってきた。仕事
が多すぎる。タスク処理が間に合わない。

「お、マジかヨリ。俺それすぐー気になつてたんだよ。ちゅうと触
らせてくれ」

と、横になっていた次郎丸がむづくと立ち上がる。ニコちゃんがい
いですよ、とルンバを差し出し、彼は物珍しそうにルンバを眺めた。

「これすぐーな、本当に自動で『ノミ』取ってくれんのか？ おれの『
ノミ』みてーな過去の失敗も全部掃除してくれんのか？」

「動かしてみましょーか」

と、コリちゃんはルンバの電源を入れた。ブルーシートの上をまる
で生きてこるよに動き回るルンバ。

「あ、やつベーな、ルンバ。俺ボーナスで買おうかな、ルンバ」

しばらく動き回った後、ルンバを一瞬動きを止めた。そして獲物を見つけたかの如く急激のそのスピードをあげる。利理岡権田勇、彼の足もとにぶつかっては退き、ぶつかっては退きを繰り返した。鈍い衝突音が響く。

「いやルンバ完全に拙者の」と「」扱いしてゐるがどうもおかしい。
！ やつぱり最近拙者の扱いこんなんばつか！」

もういい。面倒くさい。利理岡権田勇に關してもうひつこいつ境遇
でいい。

話の中心はそつ、大野姉妹である。

姉、大野由利の登場によつて完全にキャラを一変させた妹、大野
紅葉。ユリちゃんの慣れたあしらひ方を見るに、姉の前ではいつも
こうなのであるうか。だとすると彼女は稀代のトランسفォーマー
である。

「ねえねえアシシさん、ちょっとひっかかって」

と、僕を手招く大野紅葉。刹那の躊躇、僕は思い切つてしゃがみこ
み、彼女の囁きに耳を傾ける。

「……ぱりしたひ、埋めるぞ」

体育祭、午前の部の出来事である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6275d/>

コカミ

2011年8月16日00時11分発行